
ROG(real online game)

近衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ROG (real online game)

【ZINE】

Z8801-T

【作者名】

近衛

【あらすじ】

マジックサイエンティスト、アハリ教授が生み出した新しい通信網『仮想空間』。

そこで起きる現象は、もはやただのゲームとしての意味に留まらず現実さえも飲み込んで侵食していく。この技術革新は米帝のアルゴリズムによる支配おも搖るがしかねない可能性を秘め、そこで巻き起こる戦闘はあたかもオンラインゲームの様相を呈していた。

時は未来、仮想空間と呼ばれる新しい通信技術は、その内部に組

み込まれたプログラム『GENESIS』によってその位置づけが大きく変更される。当初は意識没入型の新しい通信技術というだけであったが、『GENESIS』というゲームをベースとしたプログラムによって相手を倒すとそのデータを物理的に強奪できるということから、一気に仮想空間は無法地帯となる。そんな中で仮想空間にとらわれた天宮水月を助けるために、新城明の戦いは今日も繰り返される。（1・0～1・4までの内容）

なんとか水月を救出した明と元クラスメートの神代鏡かみしろかがみ。今度は三人でAIが主催する『GENESIS』の大会に出場することになる。彼らは仮想で繰り広げられる戦争の縮図に巻き込まれることになる。憎しみの連鎖、力には聖も邪もなく、神の愛は全てに対して平等だつた。明もまた、その一部であり、争いの中へと踏み込むことになるだろう。（2・1～2・5）

用語解説とかはこちら <http://ncode.syose.tu.com/n9041t/>

追記。

この作者、かなり変な更新の仕方してます。とりあえず更新編集さらに編集 次話投稿 次話部分が前話と統合とか平然とやります。話の整合性が取れてないなどと思つたら前の話をみるとよいと思います。前書きやあとがきで補完しているつもりですが、間が空くと変だなとか感じることがあるかもしれません。そういう変なやり方が合わない、と感じる方は読まないことをお勧めします。

1 - 0 Crossroad (前書き)

ささいな偶然が交錯する。
積み重なった糸は、奇跡を紡ぎだす。

1 - 0 Crossroad

00 Crossroad

2031年12月

巨大なドーム状の構造体に一群の人の群れがみえる。ドームの透明な天蓋に青い空が透かしてみえるが、光の偏光加減でオーロラのようにも映る。それは、あらゆるもののが並列して存在しうる仮想空間という場所の特性をよく示しているようにも思えた。

「諸君、今日はAAでの戦闘訓練を行う。死罰のないアリーナでの戦闘だからといって気を抜かないようにしてろ。訓練中にできないことが、実戦で使い物になる訳がないんだからな」

ブラウンのスーツを着た男性、黒木智樹講師の声がドームに響く。昨今では、一般にまで広く普及しつつあるネットの代替物、仮想空間。

『PITT』と呼ばれる携帯端末を経由して自身の意識を没入させて使用する都合上、肉体へのフィードバック現象による現実的な危険を伴う。しかし、PITT持つていれば誰でもどこでも、さらには無料で使えるというのが爆発的な普及の背景にあるだろう。

「まずは、見本を示したい。誰か、私の相手をしてくれないだらうか」

恭しく黒木が目の前に整列する生徒達に語りかける。

AAと呼ばれる仮想空間でのロボット型戦闘ツールを使用した戦闘はで大人気のはずであるが拳手をする人間はいない。無論、生徒と教師という理由もあるが、それを差し引いても黒木が強過ぎて誰も相手をしたくないからだ。それは、単に黒木講師が大人気ないともいえるのだが。

「困ったな。では、新城明君、相手をしてくれないか」

その言葉とは裏腹に、表情には笑顔さえ浮かべる黒木。

彼に呼ばれた新城という少年は、やれやれといふといった表情で彼の隣に進む。

気に入られているのか、実技科目の優秀さから手^{いじり}うだと判断されているのかは定かではなかつたが、こつして相手に選ばれることが多かつた。そして、彼は自分が負けず嫌いであることも自覚していた。

「手を抜かないでくださいよ。勝つたときの言い訳はされたくな

い

「訓練だからといって手は抜かないよ、明君」

しかし、明は勝つつもりでいた。

絶対に諦めない、根性論にも似たしづとさが彼の売りだつた。対して、黒木は最初から真剣勝負をするつもりでいた。何時如何なるとき、どんな相手でも手を抜かないのは眞面目過ぎる性格の所為だろう。

二人はグラウンドに向けて飛び降り、そして、強く思考する。

『Translation』（記号変換）

オペレーティングソフトの『The Book』のメニューを開いてログラムを起動することもできるのだが、こつやつて直接起動した方が手つ取り早かつた。

教師と生徒、正確にはそれを模したアヴァターと呼ばれる仮想空間上で肉体だったものは、デジタルのデータとなり分解されると同時に上書きされていく。

二人の姿はモザイクが掛かつたようにぶれ、直後に巨大な人型の戦闘兵器『AA』へとその姿を変える。直後に彼らの間にビジュアルエフェクトが表示されシステムアナウンスが挿入される。

【MISSION START（任務開始）】

「さあ、戦闘開始といこうじゃないか」

「いや、尋常に

「勝負！」

二人の声が重なりオープン回線上で響き渡る。

ただのスポーツをするには広大すぎるアリーナのグラウンドに白い翼をまとった機械の天使、羽を広げた青い機械の妖精がそれぞれの得物を手に対面する。フェアリーと呼ばれる青いAAに明が姿を変えたものであり、対面しているケルビムと呼ばれる機体は黒木が記号変換したものだ。

そして、闘技場で向き合つた両者が取る行動は一つだつた。地面からわずかに浮かんだフェアリーとケルビムは、武器を手に正面からぶつかり合う。真正面から振り下ろされた大剣を明は一本の細身の剣、ミスリルソードを交差させて受け止める。

後手に回つた感は否めないが右手で受け流し左手で斬り付ける。それを火蓋ひぶたとして左右の剣でラッショウを仕掛けるが、絶妙な間合いの取り方と身のこなし、わずかに届きそうな攻撃は全て防がれる結果に終わる。

傍目には実力は拮抗きつこうしているように見えるかもしれないが、明の主觀はそうではない。むしろ、焦つてすらいた。手数、攻撃速度のいずれでも勝つていてるのに攻撃が当たらないと言うことは、両者の間に明確な実力の差があるということの証左でしかない。

そして、それは明が攻撃し続けているのではなく、攻撃を止めた瞬間に仕留められるということを意味していた。

フェアリーは両手に持つたミスリルソードを上段や下段からの袈裟掛け、逆袈裟、切り上げ、薙ぎ払う。しかし、一見ランダムに見える攻撃も全体としてみれば次の攻撃に繋がるようにパターン化されたものであり、見切ることは不可能ではない。見誤れば致命傷を受けるが、それは見えてさえいれば攻撃は当たらないということである。

「また、腕を上げたようだ。やはり若いというのは素晴らしい」

上から目線の言葉であるが、馬鹿にしているというわけではなくこれが黒木の素の言葉だった。相手が黒木でなければ大人でも一蹴いつしゅうできる程に彼は強いのだ。

「あなたを超えたくて研鑽けんさんを重ねたが、やはり正面からは分が悪いようだ」

そういうと明はバックステップしつつ地表面を剣でこすり砂塵をまき散らす。煙の中からの奇襲を警戒したのかケルビムは即座に空中へと逃れる。スマーケの中からの攻撃は黒木が直前にいた場所を通過する。

そして、煙の背後を迂回した明は右手にミスリルソードを、左手にはリニアライフルを構え斬り掛かる。正面からの射撃、側面からの奇襲にも完全に反応して鍔迫り合いの形になるが、腕のばねを利^{うがい}用して後退しつつ弾丸を撃ち込む。

機械の天使はブリッジのように体を逸らすことでこれを交わす。この間に明は左腕部に内蔵されたアンカーを地面に打ち込んで降下しつつ、強引に前進して黒木の真下から斬り付ける。

「はあっ！」

裂帛れっぱくの気合と共に放たれた一撃。

「惜しい。だが、まだ足りない」

完全な虚を突いた一撃にさえ反応し、後ろ手に構えた大剣でこれを防ぐ黒木。

反転し二人は中空で見上げ見下ろす状態でしばし向き合^ひつ。

ケルビムの上段に構えた刀身が赤く灼熱しゃくねつする。

その姿の前に陽炎かげろうが見えた次の瞬間に肉薄される。

反射的に突き出したリニアライフルは、弾が放たれるよりも先に爆散する。斬られたという事実を認識した瞬間には巻き取るように剣をいなされる。擦りあわされた剣が火花を散らす姿は死へのカウントダウンのように映る。

喉元のどもとに赤々と燃え立つ大剣が伸び、迫る白刃。

「これでチエックメイトかな？ 新城君」

こんな言葉でさえどこか飄々（ひょうひょう）としている黒木。彼はどんなに追い詰めても切り返していくという状況を楽しんでいた。

「いえ、生憎と諦めが悪いんで」

明は体を逸らし首筋に迫る白刃をわずかに先延ばしする。時間稼ぎにもならないような短い紅余ハヤだつたが伸びきった腕ではもう一步の踏み込みが必要だ。そして、払われた手に持っていた剣を投げ捨てホルスターに右腕を運ぶ。

そして、止めをさされる恐怖よりも敵の攻撃よりも、ひたすらに繰り返してきた動きが先んじた。無意識に明はリニアライフルをホルスターに入れたまま銃口を向けて放つ。

「俺は、諦めないっ！」

銃声が鳴り響き、眼前で放たれたマズルフラッシュで視界が消える。

【THE END（戦闘終了）】

AAが破壊されると同時にシステムアナウンスがエフェクトと共に響く。

「肉を切らせて骨を絶つ、ってね。危ない危ない」

そこには片腕を犠牲にして攻撃を防いだケルビムの姿と敗北が決定しポリゴンとなって霧散するフェアリーの姿があつた。それは、大剣による斬撃をとつさに投擲とうてきへと切り替えた黒木が辛くも勝利したことを見ていた。

「惜しかつたな。明」

「結果が全てだよ。俺は負けた、それだけだ」

学校指定の紺のブレザー姿で少年が一人、廊下を歩く。一人は先程の講義の際に仮想空間で黒木講師と激しい戦闘を繰り広げていた少年こと新城明。その隣に並んで歩くもう一人はその友人である三み島平治しまへいじだった。

少々だらしなく伸びる黒髪の明と短く活動的に刈り込まれたスポーツ狩りの彼が並んで歩くのは少々異色であるが、二人は入学当初から妙に気が合つた。

「クールぶっちゃつて。本当は悔しいくせに」

「悔しいからこそ、足あが掻いて努力して見苦しくても勝とうとする

んだよ。俺は、誰よりも負けず嫌いだからな

「君は元気そうで、なによりだ」

長い黒髪とふくよかな胸を揺らしながら後ろから合流してきた少女は、かみしるかがみ神代鏡かがみ。成績も優秀で容姿もいいのだが性格の問題なのか女子の友人があまりいないという変わった人物もある。少しゆるめに作られている制服も彼女が着るとどこか引き締まって見えるのは少し鋭い目付きと高身長のせいかもしれない。

「お前の目は節穴か？ 俺は現在進行形で落ち込んでいるんだぞ」「君は素直に励まして欲しいというような殊勝な性格でもあるまいし、それにそんなこと望んではいないのだろう？」

「まあ、少なくともお前にだけは頼まないな、神代」

「ならばいいだろう。それに三島も励ますならおごりむへりいしてやればいいだろうに」

「神代さんもさりげなく俺をけしかけないで欲しいね」

「何も出でこないもんね」

間延びした声を出すのは神代のやや後ろから現れた彼女の数少ない友人の一人、天宮水月あまみやみづき。女子としては高身長の神代と、対して少し低め身長であるの彼女が並ぶどこか姉妹のようにも映る。栗色で少しカールのかかった髪が特徴で、胸は少し控えめ、性格については本人が否定しているが周囲の多数意見は天然という結論だった。そんな彼女たちは少々ずれた感性の人間同士気が合うのかもしれない。

「てか、なんで俺のお財布事情知っているわけ。天富さん」

「だつて、平治君は万年金欠でしょ。豊かだつたことが無いよ」

「ぐ」

「まあまあ、彼だつて好きで金欠しているわけではないのだから、許してあげようではないか。なあ、水月」

「ぐぐぐ」

何かに耐えるようにうつむき平治がうなる。

「いつの間にか許される立場になつてているな、平治」

「お、お、俺にはなあ、玉の輿^{こし}という希望が残されているんだよ。だから、だからなあ、別に悔しくなんかないんだからなああつ」微妙な捨て台詞を残し、涙ながらに平治はどうとかへと駆け出して言った。

「玉の輿は、希望ではなく欲望だぞ平治」とは明。

「外出なら、おみやげよろしくね、平治君」とどいかとぼけたようすの水月。

「さすが元運動部、足が速い」と全く氣にも掛けない鏡。いつものことなので気にすることも無く三者三様に見送る明たちであった。

そして、放課後。

喫茶店『止まり木』のカウンター席にて。

「結局、おみやげくれなかつたね、平治君」

「お前はあいつが金欠と認めながらも、物を買つてみると期待していたのか」

「ナチュラルに鬼だね、水月は

今時珍しい文明の利器がほとんど無いアンティーク風喫茶店『止まり木』で話す三人。そして、ぼけるのは基本的に水月一人なので突っ込み役には事欠かない。三年生進路も決めた彼らは放課後の暇をだべることで潰していた。

「平治君いい人だから。期待には応えてくれると思つて」

「もはや俺は何も言つまい」

「マスター、コーヒーお代わり」

わが道を行く鏡は、会話そつちのけで注文をすると無愛想なヒゲ面の男ことマスターがカップを受け取り代わりのブラックコーヒーをカップに注ぐ。ちなみに、彼らがいつも通っているこの店はコーヒーと紅茶がお代わり自由なので学生である彼らのお財布には非常に優しかった。

「あいよ

ぼそりとつぶやきマスターがコーヒーをカウンター席に置く。エプロン姿が妙に似合うマスターだが、眞実の愛とか世界平和などといつた意味不明な漢字が大きく書かれたものによく着用していた。そのセンスから生体に至るまで全ては謎に包まれていた。ちなみに、今日は世界平和とデカデカと書かれている。

「どうも、マスター」

礼を言つ鏡のことなど見向きもせずにグラスを拭き始めるマスター。この店に通つて大分立つ彼らだが、未だにマスターの本名を知つている者はいなかつた。

「今日も弾いてもいいですか？ マスター」

水月の唐突な申し出に無言で首だけうなずき、カウンター席の脇にあるグランドピアノをみやるマスター。文句を言つ客がないからなのか、はたまた彼女の腕前を認めているからなのかは解からないが彼女が気まぐれにピアノを弾くことを許していた。

「今日は何を弾くんだい？ 水月」

「少し指が動くままに任せて弾いた後に、思いついた曲を弾こうかな。強いて言うなら、諦めないこと教えてくれた君に送る曲『席からゆっくりと立ち上がり、脇へと移動する水月』。こういった動作が少し様になっているように映るのは、彼女が多くのコンクールで入賞していることとも無関係ではないのかもしれない。」

「なんだそりゃ」

呆れる明、マイペースにコーヒーを飲む鏡。その耳には、おだやかな音が届く。

楽譜も無く、ただ彼女の白く美しい指が遊ぶままに奏でられるタイトルの無いその曲はどこか優しく包み込まれるような感覚になる。わずかな光だけが届く深海のようだつた店内はその音が響くと風に揺られる水面のようににわかに活氣付く。

別段、店内がにぎやかになつた訳ではないのだが普段は仏頂面のマスターの顔さえどこか楽しげに映る。耳に心地よく響き聞いている人間の心を穏やかにしてくれる、そんな曲だと明は思った。

会話するでもなく、静かに流れる音の海に身を任せてどれだけの時間が経つただろう。明と鏡のカップの中はとっくに空になっていた。窓から差し込む夕日に照らし出された水月の横顔はどこか現実離れしていく引き込まれるような美しさを放っていた。

そして、演奏が終了すると奥の席から拍手が聞こえる。

「お見事。天宮君にこんな特技があるとは知らなかつたよ」

一体何時からいたのだろうか、そこには黒木講師が座つていた。

「つて、黒木先生。恐縮です」

「今はただの喫茶店の客だよ、僕は。そんなにかしこまらなくてもいい」

スース姿よりも白衣で教鞭を取つている姿の方が似合つ彼だが、眼鏡を掛けてコーヒーを飲む姿は教師といつよりはサラリーマンだった。

「本日は、「指導ありがとうございました。黒木師」

「おつと、君もいたのかい新城明君。指導なんて大それたものではないが、訓練ならば何時でも相手になるう。それと武道は礼に始まり礼に終わる。だから、こちらこそありがとうございました明君」

真面目すぎるきらいがある黒木講師だったが、明は彼を素直に尊敬していた。強く正しく誠実な彼は、少しクールぶつて斜に構えている明が認める数少ない人物だった。

「先生の指導の賜物ですよ」

「さて、あちらの男二人は放つておいて次の曲を弾いてくれないか、水月」

「そうですね、少し情熱的な曲を奏でるとしまじょうか。ふふ」

何時の間にか注文したのか大きなパフェをほおばりながら鏡が話す。そんな店内の様子をうかがい、笑顔を浮かべた水月が栗色の髪を揺らし楽しげな音を奏でていく。いつもして穏やかな時が流れていったのであった。

木造の洋館のテラスに少女が一人。

木製のラウンドテーブルで物憂げに紅茶を口に運ぶ。ぼんやりと外を眺める彼女は、どこか達観しているようでもありあるいは諦観しているようにもみえた。プラタナスの木漏れ日の加減が、それとも礼服のよ^{はかな}うな白いドレスに身を包んでいるからか、彼女の存在自体がどこか^{はかな}倦^{はかな}げにも映る。

草原から風が吹き抜け、肩口まである茶色がかつた巻き毛がふわりと揺れると、樹木の葉っぱがこする音がどこか涼しげに聞こえる。さわやかな香りが鼻腔^{びこう}をくすぐるティーカップをソーサーに置き、彼女は話す。

「この景色も、ダージリンの香りも、風に揺れる木々も、小鳥のさえずりでさえも作られた紛い物。ここにあるものは全てがにせものでしかないのかな」

しかし、彼女の前に話し相手はいなかつた。

どこか自分自身に言い聞かせるように話す少女、水月。日時の感覚は曖昧で、あの日からどれだけ時間が経ったのかよく解からなかつた。自分が取り残されて、彼らはどうなつてしまつたのだろう。

自分のことよりもそんなことばかりが気掛かりだった。そんなことを考えながら、彼女は日課となつた散策を開始する。何もせずに過ごすよりは幾分ましだろうと始めた朝の森林浴だつたが、思いのほか気晴らしになつていた。建物の中にピアノもあつたが、聞かせる相手もないのに演奏するのは気分が暗くなるだけと思い弾かなかつた。

巨大な湖を眺めながら歩く道は、花々で彩られ豊かな色彩を帶びていて、ただ見ているだけで暗く沈んだ気持ちも紛らわすことができた。彼女が特に気に入っているのは、小高い丘になつている場所だつた。

吹き抜ける風が心地よいし、湖面の広範囲を見渡すことができるからだ。

今日は霧も無く、水面はどこまでも透き通っていた。

「きれいな景色だけど、これも偽物か」

溜め息をつくよに、つぶやく水月。

遠めに眺めることは何度もあった、注視してみたのは気まぐれだつた。だから、それに気付いたのは偶然だつた。見下ろす水面の先に見える懐かしい姿。夢か幻か、はたまたホームシックが生み出した妄想か。それが現実の物であるかそうでないのかはどうでも良かったのかもしない。

(夢なら覚めないで)

それは、切実な願いだった。

彼女にとつての幻想は、ほんの少し手を伸ばせば届く距離に見える。おそらくここが境界なのだろう。彼女は仮想での小さな発見を素直に嬉しいと思った。けれども、一握りの喜びは直後に寂しさへと変わり、嫉妬へとその姿を変えた。

(……なぜ、あそこにいるのが自分ではないの?)
岸から手を伸ばしても、空を切るだけのこの手は何もつかめないでいる。

(……なんで、彼女が彼の隣にいるの?)

そんなことは解かり切つているのだが、その事実を認めたくない自分がいた。手の平から零れ落ちる水滴が、自分の無力さが悔しい。こんなに近くにいるのに、触れることすらできないでいる自分に涙が流れる。自分のことを必死に探してくれる親友にさえ、嫉妬してしまう自分が悲しかつた。

(……するくて、自分勝手で、嫌になる)

それでも、思わずにはいられない。

この声が、届くな。

この手が、触れるなら。

この想いが、叶うのなら。

もう、何も惜しくは無いとさえ思つ。

透明な障壁を隔てた先に、『愛しい人』がいるのだ。

彼らは、自分のために命を賭けて闘っている。
だから、彼女は泣いてなんかいられなかつた。
少女の目の前で、大剣が振るわれ、彼らの敵を両断する。
そうして、彼女は再び見まみえることとなる。
彼女にとつて『親しい人』と。

1 - 0 Crossroad (後書き)

連載してみました。あれですね、もつやけです。一気に投稿することにしましたので面白いと思った方は一気にどうぞ。あえて言います、点数や感想をくれると激しく喜びます。しりを叩かれた馬のようにモチベーションが増加します。それと、つたない作品を読んでくれてありがとうございました。（9月8日修正）

1 - 1 Heart (前書き)

「……心が、わからないよ」

それは、自身の想いなのか、誰かの答えなのか。鏡に映る自分自身の姿すら曖昧だった。

1 - 1 Heart

01 Heart

今や第一の現実となつたヴァーチャルネットワーク。その実態は、現実にできない欲求を仮想で満たすことであった。現実とは分離した空間であるが、そこで現実の情報がやり取りされる以上、そこで起こりうることは現実と相違無い道理だ。むしろ、現実では不可能な行動ができる分、現実以上に厄介な存在もある。

現実は虚構によって上書きされていき、不正コピー やスラング、ポルノにヴァーチャルドラッグ、仮想空間上の擬似性行為、裏取引などの悪徳が栄えるのは旧来のインターネット世代とほぼ同様と言えるだろう。

現実を急速に侵食していく、ヴァーチャルリアリティ。そして、その火付け役となつたのが『GENESIS』という仮想ハードウェア用のOS『The Book』内にプリインストールされているプログラムだった。通常に起動すれば、ただのリアルなオンラインロボットアクションゲームであつたはずだが、それがサイバースペース上で使える唯一のハッキングツールであるという側面を持つていたことで、その意義が娯楽から離れるのにそう時間は掛からなかつた。

マーケットとしては、世界中の富の半分以上を仮想空間でやり取りする昨年。

馬鹿げた海賊行為が横行するのは、時間の問題だったのかもしれない。現金輸送車を一人で制圧することが誰にでもできるのなら、襲わない方がおかしい。そして、その方法が馬鹿げていた。文字通り、襲うのだ。

擬似ハッキングツール『GENESIS』は、仮想空間上でプログ

ラミングではなく、戦闘という方法で物理的に強盗行為を可能にした。

鋼鉄の巨人が瞬間的に音速を超えて空を飛び交い、広大な空間を高速で切り合い、撃ち合うといったレトロゲームのような戦闘を誰が現実の物として創造したのだろう。まるで旧世紀のアニメに描かれていたような世界が、現実の一部として再構築されるなど誰が本気で信じていただろうか。

そして、そこで行われている行為は、オンラインゲーム上で起きていたPK^{プレイヤーキラー}と呼ばれるプレイヤーを標的にした殺傷行動やRMT^{リアルマネートレード}と呼ばれるネット上の物品を現実の金品に変換する行為よりももつと直接的な行為であった。あるいは、ゲームとしてではなく、現実の一部として同様の行為が発生していると言う方が正しいだろう。結局のところは、彼らは現実のリソースの奪い合いをしているわけなのだから。

過去のゲームを模したプログラムが、今の現実を侵食し、その方法が戦闘による奪い合いなどとは、人類は一体どれだけ過去に逆行すれば気が済むのだろうか。否、誰しもが平等に力を手に入れることができ、なおかつ日々の糧を得ることを可能にしたこの場所は正しく『樂園』なのかもしれない。

たとえ、その方法が相手を殺すことであったとしても。

青く光り輝く剣が振られ、弾丸が飛び交い、金属が爆ぜる。

火花を散らしながら、ソルジャーと呼ばれる黒い機械の兵隊の体が両断される。

レーダー上のソルジャーのマークーが消滅し、敵対勢力のAA(^{アバターズ} avatars agent 意識体代理人)の破壊を確認する。黄昏時の戦場では、鋼の身体と蝶^{チョウ}のような淡い光の羽根を持った機械の妖精が再び空を舞う。

相手はヘッジホッグと呼ばれる灰色の重武装タイプのAA。^{過剰思}えるほどに武装された砲塔が、あたかもハリネズミのようなのでこ

ういつた名称にされているそうだ。

(前衛のソルジャータイプは始末した。あとは、後衛のあいつを仕留めるだけだ)

数分前まではオフィス街といった街並みだったこの場所も、激しい銃火器の応酬で廃墟と化してすっかり見晴らしが良くなっていた。

「あんたで最後だ、無駄な抵抗は止める」

フェアリーの操縦者である新城明は、無駄だと解かりつつもいつものようにオープン回線越しに警告する。そして、仮想空間上で青白い機械の妖精がヘッジホッグにリニアライフルの銃口を向ける。

「言われて止める馬鹿がいる訳ねえだろ！ クソ野郎が！」

怒鳴りつけるようにヘッジホッグのプレイヤーが叫び、文字通り死に物狂いで攻撃する。彼は、複数の弾頭に分離する多弾頭ミサイル、高い追尾性能を持つホーミングミサイルやらガトリングガンを滅茶苦茶に撃ちまくる。

「だろうな」

くすりと笑う声に呼応するように、仮想空間でフェアリーが淡い燐光を纏い宙に浮き、ヘッジホッグに向けて加速する。自身に迫る無数の弾丸は、正面、左右、背後とありとあらゆる方向から押し寄せる。

しかし、彼は絶望的な火力の差にも慌てることなく、アシストプログラムを起動し弾道の予測軌道を瞬時に割り出す。予測射線が自身の視界を真っ赤に覆いつぶすが、明は気にすることなくそのデータを参照に機体の航行をマニュアルからオートへと変更。

自身の軌道に重なる攻撃は、左腕に持つリニアライフルで迎撃する。幾重にも重なり合つ赤い予測射線は、大きな波を作り出すパイプラインのようにも映る。その隙間を抜けるように、機体の速度を上昇させていく。

ゆるりとした空気の壁を抜ける感覚に、自身の機体の速度が一瞬で音速を超えたことを知覚する。視界に映るのは、赤く黒く明滅する光。

耳に届くのは、実際の映像よりも僅かに遅れて響く爆発音。

カミカゼアタックにも似た、

彼の狂気染みた操作にヘッジホッグの操縦者は恐怖して、

絶望し、

絶叫する。

「死ね死ね死ね、死ぬ、死ぬ、死ぬ。いやだ、死にたくない、死にたくない」

付けっぱなしのオープン回線越しに相手の取り乱す声が聞こえる。こうなると、まともにこちらを狙っている攻撃は皆無かいいむだった。

しかし、めちゃくちやに放たれる攻撃は無秩序で正面から相手にしあくは無い。瞬時に自身の進行ルートを変更、軌道を脳内に思い浮かべると、そのイメージをトレースするかのように機体が連動する。サイバースペース上で、フェアリーが螺旋らせんを描くように旋回しながら加速する。前後左右のあらゆる方向から迫る弾丸を、舞い踊るかのような動きで回避していく。

そして、眼前に迫るミサイルを迎撃げいげきしてついにヘッジホッグに肉薄さよのきにする。

迎撃したミサイルの爆炎を抜けると同時に右腕に握るミスリルソードを構え、振りぬく。

「……あばよ」

目の前の黒い巨体とすれ違う刹那に振り抜かれた剣が機械の動物の胴体を両断した。

センサー上でマーク一が白から黒へと変わり、突き抜けた後ろで爆発が起こる。

徐々に減速して行くうちに残響さよきようのように爆発音が耳に届く。それは、改めて機体の速度が音速を遥かに凌駕りょうがしていたことを改めて知覚させ。そして、ソニックブームを受けて黒煙を巻き上げる街並みには生々しい破壊の傷跡を残すこの場所はまさに戦場だった。

そんな空虚な瓦礫くつきよ がれきの山を機械の妖精の無機質な視線が見下ろしていた。

【THE END（戦闘終了）】

戦闘終了を告げるシステムアナウンスが彼の脳に響く。

「傭兵家業の末路なんかそんなものさ。いや、海賊といった方が正しいのかな」

黒煙を上げていた金属片が、ポリゴンになり霧散する。さつきまで明が相手にしていたのは、この近辺を根城にしていた仮想空間上で『海賊』と蔑称される手合い。敵を破壊すると仮想ハードウェア内部のデータバンクにある相手の武装、電子マネー、個人情報などを含む無数の情報が自動で統合されるというロジックを利用して、待ち伏せして無差別殺人の後、結果的に金品を強奪する最悪な連中だ。

とはいっても、受け渡されるデータに罪はない。元の所有者がどうあれ有効利用はさせてもらつつもりだつた。自動で統合されたデータに選別アルゴリズムを通してふるいをかけ、不要な情報を取り除く。

「いつもいつも、すまないねえ」

明の耳に、戦場には似つかわしくない明るい声が響く。声の主は、今回の彼の雇い主であるヘイフオン。名前からすると中国人なのかもとも思うが国籍は不明だつた。

「仕事だからな。不満はない」

「それは重複。^{ちよつじょう}末の長い付き合いになればいいと思つてゐるよ」

「俺としても、あんたとは敵対したくない」

付き合いはそこそこだが、この男にはどこか得体の知れないところがあつた。昔の仲間を殺したくはない、といつより敵に回したいない相手というのが明の本心だ。

すっと静かにヘイフオンの操る黒いフレームのソルジャーが廃墟の影から現れる。危険を顧みずにこんな場所でやり取りをするには、それなりの理由があつた。

まずは、そこでやり取りされる情報の秘匿性^{ひときせき}の高さ。これは実際に筒抜けであるのだが、情報を管理するサーバーの所在地が宇宙であり、いざれも政府の管理下に無くそこでやり取りされる全ての情

報をA.I.が管理していて、そこで行われている何もかもが治外法権的な扱いになるからである。

また、旧来のインターネットや電話回線などの通信回線も依然として存在しているが、それら全てが政府のアルゴリズムの管理下において不正な取引や犯罪をするか、ほのめかす行動を取れば超高確率で捕まってしまうためだ。つまり、仮想空間は現在の法律の抜け穴であり、堂々と裏取引や違法行為ができることから多くの『合法的犯罪者』に利用されていた。

くすくすと笑い、ヘイフオンが答える。

「それは喜ばしいことです。あなたくらいの凄腕の『傭兵』^{マーセナリー}は貴重な人材ですか？」

「お世辞はいらない、とっととゲートまで移動するぞ」

「仕事熱心なことで」

「逆さ、仕事を早く終わらせたいから急かす。仕事熱心なら営業トークでも差し挟んでいるぞ」

「ごもっとも。では、行くとしましょう」

A.Aと呼ばれる彼らの機体は、ハッキングツールの側面と護身用の武器の側面を併せ持っていた。加えて仮想空間での『死』は、あらゆるデータを失うといった社会的な死という意味を持つ。

そして、その性質上自身の意識を没入した状態で行われるために現実的な意味での脳死の危険を内包していることを考慮すれば、この程度の武装は当然のことといえる。

自身が先行し、護衛と斥候を兼ねる布陣でゲートに向けて進行する。

護衛を専門に請け負う『護衛』^{エスクート}に人数を割かないのは、彼自身が強いからだと明は踏んでいた。単に高額な報酬を複数名に払いたくないからとも考えられるが、それでも彼一人だけというのは少なくない人数だ。それに明はヘイフオンという人物が戦闘の余波を受けてダメージを受けているところを今まで一度もみたことが無かつた。廃墟と化した街を抜け、荒野を飛ばす二人。

日本国内のエリアから中国エリアへのゲートは、荒野を突き抜けた

先のポートエリアにある。チャイナブロックへ向かうゲートが一つとは限らないが今のところ彼らが開拓したルートはこれだけである。そのルートにしても、命懸けでガーディアンと戦闘して何とかパスコードを入手してやつと安全に通過できるようになつたばかりだつた。

「ここを通ると、あの戦闘を思い出しますねえ」

「昔のことだ」

「彼女は、どうしているんでしょうね」

「あいつには、あいつの事情があるんだろ」

フリーの傭兵をやつていた学生時代の明にも、短いながらチームを組んでいる時期があつた。今思えば先駆的な集団だつた。ガーディアンを少数精銳で撃破するという、最新の攻略法と同じやり方でチャイナブロックのガーディアンを攻略したのだから。

当時はギルドと呼ばれる一個中隊ないし一個大隊並みの戦力で一気に攻撃をして倒すやり方が主流であつた。

しかし、これはギルドを率いる雇用者としてはコストが掛かってしようがないし、被害が出るときは数十名以上の規模でメンバーが犠牲になる。そして何より、有能な人材を多数集めることと、それを完璧に統率することの難しさが廃れた原因だろう。

「それはそうですが、あそこにいるのは彼女ではないのですか?」「ソルジャーのAAが指差した先で戦闘しているのは、ウイザードと呼ばれる魔法使いを抽象化したようなAAで、彼女が使用していたものと同系統の機体だつた。遠めに眺めているので詳細は不明であるが、どうやらガーディアンと交戦中らしい。

「そんな偶然があるわけないだろ」

『GENESIS』は、基本的にはバーチャルロボットアクションゲームである。同系統で、カラーリングが一致している程度の偶然はいくらでも起こりことだらう。不自然な偶然に、明は思わず否定の言葉を口にする。

「でも、もしも本人だつたら寝覚めが悪いでしょう。追加料金を

払いますから、あのAAに助太刀してくれませんか？」

「追加料金は、いらない。というより、わかっていて言つているんだろう？ 本当に抜け目の無い人だよ、あんたは」

彼に言われるよりも早く、明はすでに動き出していた。

皮肉げに言葉を言いつつも、損な性格であると自覚はしていた。前方に加速して天使系統のガーディアンと交戦するウイザードタイプの戦闘に割つて入る。両者の戦闘圏内に自分自身の『エリア』が重なった瞬間にシステムアナウンスが脳に直接響く。

【REINFORCEMENT（援軍）】

援軍として、戦闘に乱入する際に表示されるエフェクトが視界に浮かぶ。

エメラルドグリーンの燐光に包まれた直後、天使と魔道師が交戦する異様な荒野に機械の妖精が舞い降りる。目の前では、高速で飛び交う一体のAA。それらの後方に映るのは、チャイナブロックの高層ビルが乱立する。そんな摩天楼を背景に砂塵^{さじん}が吹き抜け薄ら赤い荒野で対立する両者。

白い四翼に剣と盾を携えたエンジェルシリーズの一種である純白のアーケンジェル。対するのは、とんがり帽子^{ふつぼ}のようなヘッドパッチと赤いロープをまとった魔法使いを思わせる風貌^{ふうめい}が特徴の真紅のウイザードタイプ。

さながら決闘といった風情で、一人は切り合い、往なし、剣戟^{けんげき}を重ねる。金属と金属が触れ合うたびに、火花が散り、澄んだ音が響き、土煙が巻き上がる。わずか十数秒の間に両者は一休幾度切り結んだのだろうか。手数ではウイザードが上回り常に攻勢側に立っているが、対するアーケンジェルも攻撃を一撃も浴びていない。

互角に見えた戦いにも、変化が訪れる一瞬が現れる。ウイザードの細身の剣による横薙^{よこな}ぎを盾で受けそこからの唐竹割^{からたけわ}の一撃を剣で大きく薙ぎ払うアーケンジェル。息も付かせぬ連撃の空白を衝いた強引な一撃は、相手を体ごと吹き飛ばす。

ウイザードは受け流していたが、それでも殺しきれなかつた勢いを

足で抑える。砂塵さじんを撒き散らしながら引きずられる様に大きく後ろに下がつたウイザードに、アーケンジエールは追撃をすることなく構えを整える。

「援護のつもりなら、手出し無用よ。違うのならまとめて相手になるわ」

オープン回線越しに、ウイザードのプレイヤーが話しかけてくる。音声には、フィルター処理が掛けられておりその声色はどこか機械染みていた。

「手出しさ、しないでおくれ」

「……礼は言わないわ」

要件はそれだけだと言わんばかりに、オープン回線による通信を切斷される。仕切りなおしなつた戦いは、さらにヒートアップしていく。

明は戦闘する両者と適度に距離を保ちながら様子を見守る。アーケンジエールは盾を前に剣をその側面に構える。ウイザードは、体を半身にしつつ両の手で剣を構える。両者は遠い間合いを取りつつ隙すきを衝かんとし、しばしの沈黙が空間を支配する。

一陣の風が吹く。

舞う砂に合わせ、ウイザードが地を駆ける。

迎え撃つべく、天使が半歩下がり剣を引く。

一歩の間合い、ウイザードが乾燥した地面を薙ぎ払う。

砂埃すなぼけいが飛び散り、両者の姿は土煙の中へとの消える。

消えた視界の中で金属を強く叩く音に続き一振りの剣が弾け飛ぶ。スマートを突き破つて弾けた剣が地面に落下する。

徐々に開けていく視界の中で、神業的な速度でフェアリーは腰に携えたリニアライフルを抜き放つ。それは、クイックドロウと呼ばれる速射技術だった。

そして、彼が状況とターゲットを認識しホルスターに手を掛け引き金を引くまでには半秒と掛からなかつた。落下していた剣が地面に突き刺さると同時に、フェアリーの放つた弾丸がアーケンジエール

の胸部装甲を貫通する。

【THE END（戦闘終了）】

敵対するAAを破壊すると同時にシステムアナウンスがエフェクトと共に響き、リザルトと並行してデータバンクの自動統合が開始される。

巻き起こる土煙の中で、ウイザードタイプのAAが地面に突き刺された剣を引き抜き明に向けてくる。『GENESIS』においては、止めを刺したAAにデータの統合が行われることを考えれば当然の反応だろう。

「これは、お礼を言つべきなのかしら？　それとも、私の獲物を勝手に仕留めたと怒るところのかしら？」

フィルター越しの声がオープン回線越しに響く。

そして、明瞭になった視界には淡い緑の燐光を放つ幾何学模様にも似た複数の方陣に包まれるウイザードの姿が見える。その周囲にはウイザード本体を守るかのように数十本のルビーの輝きを放つ赤く透き通った剣が浮いている。

「行動に至る経緯はどうあれ、結果的にいいところ取りになってしまったことは認めるよ」

「ずいぶんとあつさり認めるのね。食つて掛かつてくるようなら徹底抗戦しようと思つていたのだけど、そんな気も失せたわ」

今度は、フィルター越しではない本人の声がオープン回線越しに響く。そういうと、彼女の周囲に周回していた複数の剣がウイザードのロープへと収束する。あちらも元チームメイトと一緒に戦うつもりは無いようだ。

「久しぶりね、明」

「半年振りだつたか、鏡。積もる話はリアルでするとしないか？」

「そうね、場所は『いつも』の喫茶店で。『Return』（帰^{リターン}）

一瞬の沈黙の後に返答した鏡は、現実へと帰るリターンを口頭で入力する。直後にウイザードの体の輪郭がぼやけ、リターンコマン

ドの認証が開始される。

「俺は仕事の残りを片付けたら向かうとしよう。すまんが、少し待ついてくれ」

「委細^{いさい}了解したわ」

返答すると同時に、ぼやけていた彼女の体は完全にサイバースペースから消滅した。

「まさか、本当に彼女でしたとは。世間は狭いものですね」会話が終わると廃墟^{はいきょ}の影から黒いソルジャーが現れる。

「正体が解かつていたのか？」

「なんとなくですがね。扱いの少々難しいウィザードタイプを使う人間は少ないですし、カラーリングや動きが記憶と非常に似ていましたから」

「細かいところまでよく見ているなヘイフオン。観察眼の鋭さは一級品だよ」

「私は商人ですからね。さて、事情は聞きましたし仕事はここで切り上げとしましょう。それに田地は田と鼻の先ですし」

「今回は、ご好意に甘えるとしよう」「いいえ、どうかお気になさらずに。最後の方だけですが、盗み聞きしてしまったこともありますしね」

「これで失礼する。『Return』（リターン 帰還）」

「料金は、いつもの口座に振り込んでおきますよ。それでは、旧友との再会を楽しんできてください」「心遣い、感謝する」

「何、ただの社交辞令ですよ」

コマンドの入力を受けてリターンプロセスが開始され、ぼやけた意識の中で最後に聞こえたヘイフォンの言葉はいつにも増して樂しげに響いた。

白い部屋、といつても過言ではないくらいにその部屋には色が無かった。実際には色が無いわけがないのだが、きれいに片付けられ

ている生活感が欠片も感じられないその部屋では、全てが空虚に映つてしまつ。

そんな場所に、青年が一人椅子に座つていた。

少し長めの黒い髪に黒いスースを着てゐるためか、この部屋ではより以上にその存在がはつきりと対比されているように見える。そこにはいる青年、新城明は目の前の女性に話しかける。その顔にうつすらと憂いが見て取れるのは、窓から差し込む夕日の所為だけではないのだろう。

「今日は、少し懐かしい奴に会つたよ。水月も知つてゐる奴だ」

目の前にいる天宮水月から返事はない。

当然だらう、ここは意識の戻らない患者が安置される病室だ。もう何度もこんなことを繰り返しているが、この行為自体が意識のある者の自己満足でしかないのかも知れない。

「今日も答えは、ないか。しかし、お前も大変だよな。そつちも好きで悲劇のヒロインやつてゐるわけでもないのに、俺みたいな男が愚痴言いながら目を覚ますのを待つてゐるなんてさ」

色白だった肌は、長期間に渡り日光を浴びていいためか病的な白さを持ち、白い服装とあいまつてどこか儂げに見える。肩口までしかなかつたその髪も今では肋骨の辺りまで伸びてしまつていた。

「鏡とこれから会つてくる。それで事態が進展してくれればいいんだが」

愚痴ともつかない言葉を吐き出し、彼女の横に生けられた花を見る明。少し季節には早いためか小ぶりな向日葵^{ひまわり}が生けられていた。

「あいつも、ここに寄つたのか？ 僕が持つてきたのとは別の花が飾つてあるな」

実際には、看護師の方^{かんごし}が古くなつた花を片付けて、別のものを生けただけなのかもしれないのだが、なんとなくそんなことを考えてしまう。

「ふう、それじゃ僕は行くとするよ。いつまでも一人で話してゐると、危ない人になっちゃうからな。またくるよ」

明はゆっくりと立ち上がり、パイプ椅子を部屋の隅に片付ける。空調の音以外は、何も聞こえないそこでは、彼女の規則正しい呼吸がやけに大きく聞こえる。

「今度は、伝えられるかな」

去り際に水月を見るとなんとなくそんな言葉が零れた。^{いは}視線を少し横にすらし彼女の枕元に置かれている時計を見ると午後六時を指している。

鏡を待たせていることを思い出し、足早に病室を後にした。

「ずいぶんと遅かったわね」

明が喫茶店についてからの初めて聞いた声はそれだった。カウンター席に座り、グレーの薄手のスーツを羽織つている女性が少し不機嫌そうに彼に話しかける。アンティークな装飾のこの店には似つかない、少しあどけなさの残る顔で明をにらむ。

「待たせる、とは言つておいたはずだが」

「相変わらず、君は口が減らない」

「ご挨拶だな、久しぶりに旧友と再会したと言つのに

「君が来るまでにコーヒーを三杯も飲んだ」

そんな言葉が気に食わないのか、顔をしかめて彼女が言つ。

「すまないな、ここでの代金は俺が持とう」

「ここがコーヒー お変わり自由とわかつていて言つていいんだろ

う？ 本当にけちくさい男だな、君は」

「つたぐ。おじると言つて、けちくさいと言われるのは思わなかつたよ。マスター、アイスミルクティーとハムサンドを一つお願ひする」

「マスター、私にも一番高いメニューとコーヒーを

二人は、カウンター席に座っているために追加注文はスムーズだつた。

「ご注文承つた」

接客する気が全く無い態度で短く答えるとマスターと呼ばれた男

はカウンターの置ぐに引つ込んでいった。接客がいまいちなこの店がつぶれないのは、一重に彼の作るものがどれもおいしく安いからだろう。

「……あてつけかよ。お前だつてやることがせこじだわ」

「うるさいわね、女の子がパフェ食べても何もおかしくないでしょ」

「それもそうか。すまんな」

「まあ、いいわ。そもそも、この店を選んだ時点でたいして集れないし。それじゃあ、本題に入るわね」

「そうだな、それが今回集まつた目的だった」

今思い出した、といった様子でうなずく明。

「忘れっぽいのは相変わらずね。ほんと、いい性格しているわ」呆れるように息を吐き出し、鏡が話し出す。

「单刀直入に言つわ、水月の居場所がわかつたの。彼女のアヴァターのいる場所は、国内ブロックのSUS 511よ」

「そこは、とっくの昔に俺たちが既に捜索した場所のはずだぞ？」

本当なのか？」「

疑惑の眼差しで彼女に問い合わせる。そもそも、そこは彼女と再会したつい先ほどまで自分たちがいた戦場である。

「早まらないで、場所は同じだけど階層が違うのよ

「階層があるなんて話は、都市伝説やコシップの類じやなかつたのか？」「

「命懸けで戦つてないと忘れてしちまうわよね、これが『GENESIS』というゲームの一部でもあるとここと。普通のゲームのようなエンディングは無いのかも知れないけど、先に進むという突破口セスは確実に存在するのよ」

「でも、なんだつてそのことが他のプレイヤー間で全く知られていないんだ？ おかしいだろ」

当然の疑問を彼女にぶつけると鏡は待つていましたとばかりに返答する。

「強力なNPCであるガーディアンから奪えるアイテムはアトラ
ンダムで倒したプレイヤーしか入手できず、通行証のパスがその方
法でしか手に入らない。そして、仮想空間上で情報のやり取りは
限定的で閉鎖的、さらに言うなら情報もアビリティも独占するのが
ベストだもの」

明がパスコードを持ったアークエンジェルを倒しパスコードを入
手できたのはアイテムをドロップしてくれる相手を見抜いた上で鏡
が戦闘していたからであり、良くも悪くも偶然であった。

過去にあつた生命の安全が保証されたオンラインゲームとは完全
に事情が違い、殺し殺されるという状況が絡んでくる以上、敵とな
る可能性のある連中に必要以上に情報は与えないのが常識だ。

そして、明や鏡のように何度も命懸けでガーディアンとの戦闘を経
験していく、単身で倒せるレベルの凄腕のプレイヤーはヘイフオン
の言つように貴重だった。

ただ金を稼ぐだけならば『海賊』連中のように待ち伏せしてプレ
イヤーを殺して奪う方がはるかに安全で効率がいい。無理に強力な
アビリティや役に立つかわからないパスを手に入れる必要は無いの
だ。

「数パーセントのプレイヤーだけが事実に気付いていて、そして
実行できるのがさらに少しつてことか」

「仮に気付いて先に行けたプレイヤーがいたとしても、その先で
死んでしまったら結局情報は伝わらないのだから、それよりも少な
いはずだわ。私みたいにアビリティで確認するプレイヤーはそこま
で多くないはずだし」

「アビリティの『神の（ド）眼』だったか。前に聞いた話だと敵
性機体の詳細情報や位置関係なんかが解かるって話だったが、それ
以外の情報も解かるものだったのか」

「ええ。だから、情報自体はあのときに掴んでいたわ。ただ、意味
はなかつたけど」

「意味がないって、どういうことだよ？ 僕たちの目的は同じだ

つたはずだろ」

少し怒氣を孕んだ口調で明が話す。過ぎたことだったとしても、もしかしたらという可能性を考えてしまう彼だった。

「場所がわかつても、そこに行く手段が無かつたの。そして、そこに行くためのバスを誰が持っているか解からないという状況は変わらなかつた。さつきまでは」

「さつき倒した、アークエンジェルが持っていたってことか？」

「そうよ。だから、君は特定のゲートに行けば水用のところへ行けるはずよ」

「なんというか、本当に手柄だけ横取りした感じだな。すまん」

偶然にも漁夫の利を得る形になつてバツが悪くなつたのか謝る明。「いいのよ、目的は同じでしょ。事情があつたとはいえ、なんの説明もなしにいきなりいなくなつた私も悪かつたことだし」

「それでそれは、戦友の俺にも言えない事情だつたのか？」

自分でも、ずるい言い方だと理解しつつも明は言つ。そんな言葉に、鏡は少し驚いたような表情を浮かべて一瞬言葉に詰まる。

「ふふ、あなただから言えなかつた、とだけは説明しておくれ。それにあなたに場所を教えたら近辺だけ重点的に探すでしょ。どうせ探すなら広域が探したかつたし、言つてしまつたら重荷になつてしまつと思つて」

しゅんとしながら鏡は話す。実際のところ、その判断は正しかつたのだろう。

明自身、精神が磨り減つているのを自覚していた。いつ終わるとも解からない作業で、常に最悪の自体が起きる可能性が付きまとう状況。まともな神経ならば疲労しない方がおかしいのだ。そして、何も知らない状態ですらそつであるならば、知つていて何もできないと言つ状態はその状況に拍車を掛ける結果にしかならなかつたろう。

「こんな言い方するいよな。謝りはしないが、ありがとう」

「お互い、嫌な大人になつたわね」

一人そろつて苦笑する。

何の打算も無しに会話していた学生時代が懐かしいとさえ思える。

「……注文の品だ」

ぼそりといつマスターの声が聞こえ、狙い済ましたかのよつなタイミングで先ほど注文したメニューが一人の前に置かれる。明の前にアイスミルクティーとハムサンドが置かれる。そして、鏡の前に巨大なパフェとコーヒーが置かれた。

「……でかいな」

呆れ半分で明がつぶやく。

「乙女の嗜みよ」
「たしなみよ」

明の驚いた様子を特に気にとめること無く、鏡は手元から顔の高さほどまである巨大なパフェをスプーンでつづいていく。

「俺には、女性というものがよくわからなくなつたよ」

「でも、少しくらいミステリアスな方が魅力的に見えるものよ」

「ま、相手のことを何もかも解かりきっているよりは、そっちの方が楽しいか。頭の片隅に置いておくよ」

「そう、知らない方がいいこともあるのよ」

ぼそりと鏡が言つが、小さすぎて明の耳には届かなかつた。

彼女は黙々とパフェを食べるのをみて、明も目の前に置かれたハムサンドに手をつけることにした。しばしの沈黙、耳には店内に流れる穏やかなクラシックだけが響いていた。

明がハムサンドをちゅうど食べ終えたタイミングで、胸に付けた十字架型のPIT（Portable Information Terminal）を介し脳に直接アラームが響く。

人間自体を生体端末として人間の意識と仮想空間を接続するこの機械は、旧世代のマシンであるパソコンや携帯電話といった機器としての役割を果たしていた。そして、意識を完全に仮想空間内に没入させなくても、自分自身を媒介に拡張現実という形でほとんどの機能を利用することができます。

盲田投影される画像に、旧世代のマシンで言つていつのマウスや

もうせくとうえい

キーボードの役割を果たす思考デバイスを通じて文字通り思い通りに操作する。

円形のモニターとその外周をツリー状に広がる独特のインターフェースを操作し目的の機能へと辿り着く。ファイルを確認すると、ヘイフオンからの振込みの確認メールと定期的に行われる情報の受け渡しだった。前半部分は、いつもと同じように事務的な内容しか書かれていなかつたが、後半部分に明は驚愕する。

『ジャパンブロック、SCS 511』

その座標は、先ほどカガミから伝えられた情報と全く同じだつた。

『A R A u g m e n t e d R e a l i t y 』（^{アーバル}拡張現実）機能でも使つているの？ 心ここにあらずつて感じよ

「メールチェックしていたら、お得意先の情報屋の報酬を一桁ほど見間違えたのさ。普段は百万のところが一億じや驚きもするさ」

「ふふ、疲れているの？」

覗き込むような上目遣いで鏡が明の様子を伺つ。

「かも知れない。今日は、帰つたらゆっくり休むとするよ」

「帰つたら、これでも舐めて元気になつて」

そういうて、鏡が大きめのキャンディをいくつか渡してくる。なんだかんだで、世話好きなところは昔から変わつていないようだ。

「ありがとう。心遣い、痛み入るよ」

これは社交辞令ではなく、本心だつた。

「どう致しまして。それと、ご馳走様でした」

「つて、早えよ！ といつも、その小さな体のどこにある巨太パフェが入るんだ」

「乙女の嗜みよ」

紙ナプキンで口元を拭いつつ、鏡が答える。

「……左様でござりますか。つたぐ」

呆れるように明が苦笑ながら言つ。

「やつと、素面になつたわね。水月に会つときもその顔でいなさいよ。じゃないと、彼女がかわいそうだもの」

柔軟な笑顔を浮かべて、たしなめるように鏡がいう。

「そうだな。必死なのは、助け出すまでだ。すぐに助け出してやるからな」

助け出せると、彼が信じる根拠は一つあった。

水月が仮想空間上で突然消失したあの日、それ以降も彼女が現実に生きていると言う事実が一つ目。肉体が生命活動を停止していないということは、人間の本体ともいうべき意識が仮想空間上で生存している可能性が高いということを示していた。

二つ目の根拠は、鏡が明の前から去ったときに放った「彼女は生きている」という言葉が根拠だった。そして、その日以来、鏡は鏡の前から距離を置くようになりこうして再会することとなつた。

「多分、彼女はあなたが助けてくれるのを望んでいるわ」

「彼女の望みがどうあれ、俺は水月を助けたい。なんとしても力強く明が言う。

その言葉には、強い決意が宿り、これまで無茶なことを続けてきたからこそ、最後の最後でつまらないミスはしたくないと思っていた。「だから、俺には鏡が必要だ」

そういうて、彼女に向かつて明は手を差し出す。

少し間を置いて、微笑む鏡。

「ほんと、ずるいよね。君は」

そして、少し呆れるように笑い鏡はその手を取るのだった。

深夜零時。

マンションの一室で神代鏡はソファに座り、ブラックコーヒーを口に運びながら物思いにふけっていた。当初の彼女のプランでは、新城明にはもともと一緒に来てもらうつもりであつた。

「あの日以来だよ。変わってなかつたなあ」

別れた半年前と同じ、どうあっても助け出すという覚悟。執着や執念といつてもいいほどの意志の強さ。そして、それは結果的に自分たちの人間関係を心理的にも物理的にも分断することとなる。

きつかけは些細な偶然だった。

まだ学生であり友人だった三人の関係が、

恋人一人とその友人に変わるかも知れなかつたあの日。

「本当に、不意打ちだつたなあ」

なんとなく、そのままの日常が繰り返していくのだと思つていたあの頃。

今日も明日も、友人であると言つことが当然のように続いていくのだと信じていた。

しかし、それは叶わない願いであつた。水月が明に告白したあの日に、彼女は仮想空間で消えた。

「なんで、あのタイミングだつたのかな」

もつと違うタイミングで、違う形であれば、彼女の友として祝福してあげることができたのかもしれない。追想しながら鏡は、ティーカップを持ちベランダへ向かう。

カーテンを開ける、ガラス戸を開くと夜氣が肌に心地よい。

「……心が、わからないよ」

明が返答をする前に彼女は、消えてしまった。

しかし、どんな思いなのかは明に聞けばすぐに解かることだつた。だけど、一度聞いてしまえばそれが真実になつてしまつのが怖くて彼とは距離を置くようにしていた。そして、こんな状況で一緒にいれば互いに好きになつてしまつと解かつてからこそあえて自分から別行動を取つてきた。それに水月が何もできない状況で、自分が行動するという卑怯な真似はしたくなかったし、こんな状況を利用するズルイ女にもなりたくは無かつた。

「……臆病者おくびょうしゃなのかな、私は」

消えてしまいそうな声でつぶやき、窓越しに星を見上げる鏡の目には暗く澄んだ夜空が映る。

「それでも、必ず助けるからね」

自身を奮い立たせるように言い放ち、胸に付けた銀の十字架を強く握る。

深夜の星空は、淡く儚い輝きを放っていた。

1 - 1 Heart (後書き)

編集しました。一部加筆しましたが、内容的には大きな変化はありません。（9月8日最終更新）

1 - 2 A պահ (前書き)

望んでいた相手との再会、望まない相手との再会。それは偶然であるのか必然であるのかはわからないが、相対する両者が取る行動は一つだった。

「もとより問答するつもりはない。ここに踏み込んだ以上、私が自ら殺すまでだ」

「それが本性というのなら、あなたを越えてみせる。今日、ここで」

02 Again

それは、半年前の記憶だった。

白い服を着た少女がこちらを向いて微笑んでいる。明にはそれが夢であると言うことがわかつていて。なぜなら、今はここにいない彼女の姿がそれを自覚させるからだ。こちらを向いて微笑んだ直後に彼女は音も無く消えていき、それを見送っているのは紛れも無く明自身だった。

そして、その瞬間だけが繰り返され、今も彼の目の前で一人の少女が音もなく消えていくというあつけないもの。

(引き止めろよ)

直後に視界が暗く染まり、再び光が見えると彼とその少女が親しげに話している場面が繰り返される。巻き戻った世界で結末の決まつた未来へと時が流れしていく。

不幸な偶然で強盗に殺されるなら犯人を恨めばいいだろう。酔っ払いに事故で殺されたなら、そいつなり飲ませた奴なりを恨めばいい。

恨む対象すら見つけられずに死という事実だけを繰り返され、何度も愛しい人の笑顔を見せられるのは、少なくとも当人にとっては悪夢以外の何といえばいいのだろう。

彼には、自分に向けられる笑顔さえ自身を責めるように映る。いつそ夢の中でくらい憎んでくれる方がずっと気が楽だった。彼に背中を向けて少女が歩き出す。

夢を見ている自分の意識が叫ぶ、行くなど。

夢の中の自分が、見送る。

(もう見たくない)

そのたびに、何もできないでいる自分が悔しい。
そして、しばしの別れは永久への別れになり。

(なんで笑つていられるんだよ！)

彼女の後ろ姿が消えてゆく。

彼の目の前で、残酷な未来へと時が流れる。

一人の少女の破滅。

そして、光が視界を包みそれが何度も繰り返されていく。
何度目かになる光のまぶしさに意識が覚醒する。

「いくなつ！」

熱病にうなされるような意識を振り払い、明は体を起こす。トンネルを抜けた直後のような感覚の誤差が引き起こす僅かな違和感を味わう。その感覚にここが現実の世界であると改めて認識させられる。そうして、今日も朝がやつてくる。

「久しぶりだな、この夢を見るのは」

先日、懐かしい相手と再会したのが原因かもしない。
嘆息し、着替えを済ませ仕事場に向かうのだった。

「おはよう、平治」

「おはようさん、明」

『電腦技術研究所』、略称を電研とする部署の扉を開け薄暗いデスクに座っているぼさぼさ頭の友人にあいさつをかわす。そして、この部署はこんな名前ではあるが、国の直属の機関であり士官学校のような側面を持っていた。明の正面で明るい口調で話すのは同期の三島平治、仲間内での通称を三等兵オサムとする人物だった。

「朝早くから精が出るな」

「見習え、崇めろ、そして、俺に何かおこれ」

「なんだよ、金欠か？　ここ給金はかなりいいはずだろ」

通常の給料に加えて命懸けの仕事が多いためか手当でが別個に付くし、それぞれがこなした仕事の報酬はさらに別勘定で加算される。若くして、年収数千万の人間はここではざらにいた。

「お前には、妻と子供もと親父と母親とその借金を背負う俺の気持
ちなど解かるまい」

「まあ、本当に困ついたら少しぐらいは貸してやるよ。俺は金を
使う時間が無いから、たまる一方だからな」

学生時代に言つていった玉の輿こしという夢を見事に実現した三島だつた
が、その希望が実現した直後に奥さんの会社倒産し借金を背負うこ
とになった。ある意味では一番劇的な人生を歩んでいるのは彼だつ
た。

「マジで、困つたら頼むかもしれん。……俺の家族を」

「はあ、お前が言つと冗談に聞こえない。勘弁してくれ」

朝から色々と重過ぎる話に嘆息し、自分のデスクに座りながら明が
答える。

「くく、三等兵が一階級特進して一等兵になつたときは、頼むぜ。
相棒」

部屋 자체が少し薄暗いためか、彼の顔にはより一層の悲壮感が漂つ。仕事柄、スラングやブラックジョークには慣れているとはいえ笑うに笑えない明だつた。ちなみに、一階級特進とは、兵隊が死んだときに行われる措置だつた。

「お前は、比較的安全な中東ブロックを担当しているだろうが。現実の中東と違つて仮想のあちらはやばい奴なんてそんなにいないんだろ」

「石油が枯渇こかつしかけて文明的に後退しているからな。つつても、最近はP.I.Tの普及の所為でそれなりにはやばい奴もいるさ」

とはいへ、あちらの方では裏取引などもアナログなやり方がまだまだ現役らしく、それに伴う情報のやり取りも仮想ではあまり行われていないのが現状だつた。単純に使用している人口が少ないために、広大なブロックの中でイカレタ連中と出会う可能性は低い。

「それなりに、ならいいじゃないか。こつちは、日常的にサイコ野郎に会うんだぜ」

呆れるように明は少々大きめに両手を肩の辺りで広げる。

「昨日もドンパチやつていたもんな。血の氣の多いことで、先日の戦闘も『海賊』崩れのバトルマニアとのものだつた。初めはただの聞き込み調査のはずだつたのだが、ヴァーチャルドラッグをきめている奴らが仲間に何人かいたらしくいきなり戦闘に巻き込まれる形となつたのだつた。

「好きでやつている訳じやないさ。合法だらうが正当防衛だらうが殺しなんて後味のいいものじやない」

殺しどいても、破壊したからといって確實に死ぬわけではないし運がよければ手持ちの金を失うだけですむ。とはいえ、それだけでは自分が殺していないとは言い切れないでの常に嫌な感覚がつきまとつ事になる。

「そう思えるうちは、俺たちはまだ大丈夫さ。ところで、明。面白い情報があるんだが聞いてみるかい？」

おどけるように両手を胸の辺りで広げ、平治が言う。

「勿体付けるなよ。そうだな、本当に面白かつたら飯をおじつてやろう」

「約束だぜ。俺たちが使つてゐる、この仮想空間やP-I-Tの製作であるアハリ・カフリ氏が現在行方不明なのは知つてゐるよな？」
約束だぜといふところをやたらと強調して平治が話し始める。案外、彼のお財布事情は深刻なのかもしぬなかつた。

「そりや、俺たちのような仕事をしてゐる連中なら誰でも知つてゐるだろ。アハリ教授を知らない人間を探す方が難しいさ」

「そう、関連する技術を軒並み一人で作り出した彼がいなくなつた所為で仮想に関する技術は現代にありながらロストテクノロジー化してしまつた。ここまで、一般常識の範囲だが、実は『GENE SIS』に関しては別の人間が作成してゐるんだ」

「たいした技術者がいたもんだな」

「しかも、何と半世紀近くも昔の奴らしい」

「それは、どういうことだ？」

仮想に関連する技術のほとんどはアハリ教授が生み出したものであ

り、ここ数年で出てきたものだった。単純に考えれば、そんなに昔の時点で存在しているのはありえないことだった。

「あれが仮想での戦闘ツールって側面ばかり見ているとそう思うのは当然だが、仮想が普及して初期の頃はただのゲームだったんだぜ？ そのベースになるソフトが昔に発売されていてもおかしくは無いだろ？」

「それもそうか。続けてくれ」

一瞬の間を置いて沈黙し、冷静になつてから返答する明。平治はそれを見てニヤリと笑い続きを話し出す。

「研究者として成功していたアハリ氏は、このゲームがかなり好きだつたそうでな。今の水準から見れば化石同然のレトロゲームだつたこともあって、権利ごと格安で買い取つたらしい。それを転用したもののが、俺たちが使つてているヴァージョンって訳だ」

「確かに、興味深い話だつたな。わかつた、飯はおじつてやる」

「やりい、メシ確保。ついでに言つと当時販売されたゲームの説明を少し調べてみたんだが、どうやらこいつは基本的なストーリーとしては天使の連中と悪魔やいわゆる被造物^{ひぞうぶつ}が戦闘する話らしい。Aの種類が豊富なのは、天使対その他つて構図だかららしいな」

明の返答に心底嬉しそうな表情で語る平治。

「ストーリーが存在するつて事は、シナリオが進行するつてことか？」

先日の話が、明の脳裏をよぎる。過去に実際にあつたゲームであるなら、その攻略方法を見つけられれば特効薬的効果も期待できる。

「おそらくは、な。つつても、単純に移植版なのかどうかははつきりしていない。何十年も前に発売されたマイナーゲームの詳細なんか調べたつてできやしねえよ」

「権利もアハリ氏が独占しているわけだしな。詳細を調べるのは無理か？」

「そういうことだ。さて、互いに仕事を開始するとしようか」

「時間が。『Access』（接続）」

後半部分の言葉は、明が実際に口にしたわけではなく、十字架のアクセサリーを握り強く思考する。

PITを介して口頭でも入力は可能だが、現実では余り口頭での入力はないのが『電腦技術研究所』の方針だった。指の神経を通じ、自分自身が機械の一部であるかのように脳にイメージを浮かべると、十字架型の端末から電気信号が衛星回線を通じて衛星サーバー上に転送される。

「俺も、お仕事するとしますか。『Access』（接続）」

そうして、今日もいつものように仕事が開始されたのだつた。

『Permission』（許可）

合成音声によるシステムアナウンスが響き、水の中に入り込むかのよつな浸透感^{しんとうかん}が全身をすり抜けると意識がヴァーチャルへと進入する。瞬間に、現実のオフィスは広大な電腦の都市へと姿を変える。視界に映る景色が現実のモノからサイバースペース上の模倣物へと変わり、現実の自分の肉体を再現したアヴァターが仮想空間上に出現する。思考デバイスを操作すると自身のアヴァターの近くにウインドウパネルが自動で複数立ち上がり、ローディングの終了と同時に追加でコマンドを送りつける。

『Translation』（記号変換）

コマンドが実行され、サイバースペース上で自分自身を構成するアヴァターのプログラムロジックが変換されていく。現実に存在しないものが書き換えられているだけであるはずだが、あたかも自分自身が変身するかのようにさえ感じ人間の肉体を模したアヴァターは青白い機械の妖精へと姿を変えた。

無法地帯である仮想空間を駆け回るにはこちらの方が安全であるし、人の姿をして動き回るには広すぎるのだ。ここでは瞬間移動である転送が使えないのは不便なことこの上ないのだが、瞬間に敵に包囲されることがないと考えれば都合がいいとさえ思える。

ワールドマップをARで展開しつつ目的地を設定し移動を開始する。

AAの背部にある赤く輝くフライトコニシットを展開して飛行しつつ自身AAのステータスの再チェックを済ませる。

先日手に入れた情報は不確定要素が多いが、他に頼るものもないのも事実だった。それに名目上は、情報屋から情報を頼りに仮想空間を探索する任務であり、私情であることを気にする必要もない。目的地までの灰色の空を徐々に速度を上昇させて飛行する。そこで感じられたのは、雲を構築する水滴の一滴一滴、吹き抜ける風の温度、頭上に広がる青々とした大気までもが近くに思え、圧倒的な美しさに目を奪われる。

それはこれが現実のものであるのかと疑いたくなってしまうほどにリアルで美しい。水平線に日が沈み、視界に映る映像がその色を変えていく。音速を遙かに超えて移動するので、国内エリアであればどこに行くのも大して時間は掛からなかつた。

そして、高速で変化する視界に飛び込んできたのは、戦場という名の地獄だつた。

しかし、それが彼にとつては見慣れた日常でもあり、狂氣であると自覚もしていた。自身AAに設定された円形の交戦『エリア』が戦場に重なり同時に複数のウインドウパネルが立ち上がり戦場の勢力図が表示される。

示されたのは、複数の信号不明機と一体の友軍機が交戦中という情報。敵の詳細な位置関係はジャミングが展開されていて不明だが、敵対勢力の構成は二体のヘッジホッギタイプと八体のソルジャーをイフだつた。

「あの馬鹿。なんだつて、こんなことに」
舌打ちし、援軍として友軍の勢力に加入する。

【REINFORCEMENT（援軍）】

援軍として、戦闘に乱入する際に表示されるエフェクトが視界に浮かぶ。エメラルドグリーンの燐光に包まれた直後、一対十という戦力差の中で孤軍奮闘する鏡のウイザードの姿があつた。

「援護するぞ、鏡」

オープントークン回線越しに話し掛けながら、空中から戦闘に乱入する。

俯瞰ふかんして見えるフィールドは、ビルディングの乱立するオフィス街。複数の敵に追われながらも全ての攻撃を捌きつつ迎撃むかはするウイザードの機動は見事としかいえないが、相手が多過ぎるためにいまいち責め切れていない。ましてや、敵対勢力は情報戦もこなせるソルジャーータイプ。ジャミングを展開しながらの市街戦は相手の得意分野だ。

「……邪魔にならないように、端つこの敵でも倒しておいて。巻き込むから」

ノイズ交じりの音声で早口に一方的にまくし立てる鏡。実際、武装となる無数の水晶剣を展開した彼女のウイザードは、あらゆるものを見破する巨大な回転のこぎりなので近付くべきではないのだろう。

「解かつた。だが、死ぬなよ」

「……冗談？ こんな『ミくず』に負けるわけが……」

「はは、色々と違いない」

ぶつ切りの音声を聞きながら会話をしつつ、明もミスリルソードを振るい有視界で捉えたソルジャーを一体撃墜する。ここにいる連中は、複数の情報屋などを介して流された情報に群がってきた海賊連中が大半だろう。

ヘッジホッグもソルジャーも彼らの専売特許と言う訳ではないが、待ち伏せに最適で扱いやすいこの一つのAAは、彼らが好んで使うからだ。

「一体目発見、と」

支援砲撃しえんぼうげきに特化したタイプなのか、大型のライフルを持ち、高層ビルの上で伏せ撃ちの狙撃姿勢そげきしせいを取つていったソルジャー・タイプを背後からプラズマライフルで撃ち抜く。航空戦力を想定していなかつたのか、何もできぬままに爆散して消えていく。

こちらの攻撃に対して反応すらできなかつたのは、複数の勢力が互いにジャミングを掛け合いレーダーが完全に沈黙しているからだろう。

ゲームのシステムとしてレーダーがジャミングに対して優先されることはいえ、パラメータの振り分け方によつては盲目状態だ。

上空から街の中心部に向けて近付くと、下方から幾重もの銃火が瞬く。弾道予測と同時に射線上の先に重なるように射撃をしつつ高速旋回して回避運動を取る。

直後に空中で複数の爆発と、地上の何もなかつた場所に火柱が上がる。

視界から完全に消えるソルジャー・タイプの最大の売りである『透過迷彩』^{ルス}のアビリティなのだが、明は経験でどんな場所に敵が潜んでいるか検討が付いていたし、銃火から瞬時に位置を割り出すという驚異的な反応を以つてこれに対処した。

これで、四体のソルジャーと一緒にヘッジホッジが撃墜された。自身の近くには敵がいなくなつたようなので轟音^{じゅうおん}が鳴り響く方へと加速する。

眼下には、倒壊するビル群と赤い暴風が吹き荒ぶ。回転する無数の刃でビルを破壊しながら突き進むのは、海賊連中にとっては赤い死神。

そして、海賊の連中と鏡のウイザードの相性は最悪だ。

彼女はアビリティの『神の（ド）眼』^{ゴッドアイ}によって、ジャミングを無効にできるし遠距離武装のほとんどを自身の武装で打ち落として無効化できるからだ。

「問題なさそうだな、適当に観戦させてもいいとしようか」

明は周囲に警戒しつつ、鏡の戦闘を見守ることにした。

敵の数が減りジャミングは既にほとんど効果を為さないレベルまで低下し、レーダーも回復した現在なら危険は少ない。むしろ、下手に介入して味方の攻撃に巻き込まれる方がよほど危険だった。

「あいつ、戦闘になると結構見境ないしな。怖い怖い

「聞こえてるわよ、後で覚えておきなさい」

独り言をしていたつもりが、即座に返答される。この分だと、彼女の方にも余裕ができたのだろう。

狩獵

における、狩る側と狩られる側で言えば海賊連中が狩る側であり、ウイザードの方が狩られる獣といったところだろうか。数の優位性や地形と合わせたフォーメーションを展開する海賊連中だったが、実質的な立ち位置は完全に逆転している。

「と、とにかく包囲だ、引き付けて一斉射撃で仕留めるしかない」「ビルの陰に回れ、発射タイミングだけ合わせて打ちまくれ。跡形も残すな」

元の所属がばらばらだったのか、通信が漏れているのもお構いなしでオープン回線越しに会話する敵対勢力。悪魔染みた強さを誇るウイザードを倒すという共通の目的に対し一時的に協力しているのだろう。

そんな中をどこ吹く風と悠々（ゆうゆう）と歩くウイザード。

そして、敵対勢力の中央まで進んだ瞬間に鏡が凜とした声で言い放つ。

「リリース
解放！」

解き放たれたように、水晶の剣が空を駆ける。

包囲された円の中心部から放射状に、無数の剣が敵に向けて飛来する。

その動きに対して僅かに遅れて敵の混成勢力が火器を放つが間に合うわけもない。

丁度彼らは、武道などで言うところの先の先を衝かれた形だった。自身が動くと思った瞬間にはもう攻撃されている状態となつた彼らに待つているのは、ただただ死ぬことだけだった。

廃墟になつた市街地で、断末魔の叫びを上げる間も無く彼らは散つていった。戦闘の余波を受けて巻き上がりついた土煙が搔き消え、視界がクリアになっていく。飛ばした武装を回収するウイザードの上から、飛び掛る人影が見える。

白兵戦用のナイフの武装を手に、背後からの奇襲だった。

レーダーは性能に関らず、至近距離で複数の敵が存在していると判別不能になるという欠点を利用した作戦だ。

「馬鹿、油断するな！」

空を一條の矢となつて駆けるフエアリー。戦闘継続時間に応じて速度が上昇するアビリティ『累進加速』の効果で、今のフエアリーの速度は弾丸すらも凌駕する。刹那の加速と同時に迷彩カラーのソルジャー・タイプに肉薄して、敵を一刀の元に両断する。

「こんなところで死ぬ気か！」

一瞬、呆けたような間を置いて鏡が返答する。

「……援護するつて言つていたから」

一呼吸の間を置いて、少し拗ねたような口調で鏡が言つ。

【THE END（戦闘終了）】

短い沈黙をかき消すように、システムアナウンスがフィールドに響き渡る。

「信頼の裏返しと受け取つて置こう。だが、無理はしないでくれ」「はあ、はあ。でも、無理をしなくちゃできなことやつているのはお互い様だよ」

呼吸を乱しながら鏡が言つ。仮想空間上で体が疲れるということがないのだが、精神の疲労が肉体に反映されているのだろう。

「それで、一体いつからこんなことをやつてるんだ？」

「朝から、かな。百人切り、達成しちゃつた」

「お前、待ち伏せされていいつてわかつていてるならなんで俺を呼ばなかつた！ それに無理にそんな時間から戦闘なんてしなくて、しばらく待つていれば奴ら同士討ちしたかもしれないだろ！」

「最初は、君の露払いのつもりだつた。でも、ありえないかも知れないけど、あいつら全員が同じ場所に向かつて水月のところに行つて捕まつたら、きっと酷いことされるから」

途切れ途切れの言葉が、明の胸に響く。

「それでも、……お前が死んだら意味ないだろ」

彼女を怒る気持ちなど、明の中からはとうに無くなつていた。そして、自分ることは棚に上げているとは思つていなかつた。

「少し、疲れちゃつた。先に行つて」

「お前は、もう休め」

「そうさせてもうわ。『Translation』（記号変換）」
巨大な戦闘用のAAから、現実の肉体を模したアヴァターへと姿を
変える鏡。

この状態でいれば、戦闘の余波に巻き込まれることはあっても、エ
リアが重なつて敵性機体とエンカウントすることはない。周囲の敵
が全滅した今現状なら、当面の間は安全だろつと明は踏んだ。

「行つてくる」

「行つてくるといい。だが、君が死ぬと悲しむ人がいることを忘る

瓦礫に寄りかかり、少しかすれた声で鏡が言つ。
な

「ああ、生きて帰つてくるよ」

そういうつて、明は街の外れにあるゲートへと加速する。彼がパスコ
ードを使用してゲートを開くのを見送り鏡が立ち上がる。足取りは
覚束ないが、明確な意思を持つて目指す場所へと歩む。

一見すると何も無い場所でしかないことは、彼女にとつては意味を
持つ。

『GENESIS』の中で手に入れたアビリティは仮想空間上でも
適用され、『神の（ド）眼』を持つ彼女にはここに同時に存在する
彼女の姿が見えていた。現実世界とは異なつたロジックで構成され
た仮想空間では、同じ座標に多数の物体が存在するという状況があ
り得るのだ。ただし、特定のアビリティを持たないプレイヤーはそ
こに存在するものを認識することができない。

「水月、久しぶりだね」

位相が違うためか声は届かないのだろう。鏡は、呆けた顔をする水
月に微笑んで手を振つてみた。鏡の眼に映るのは、穏やかな景色の
中に佇む白装束をまとつた水月の姿。水月の眼が映すのは、廃墟と
なつた街で微笑む黒衣の鏡の姿。

鏡写しのように対照的な景色が互いの眼に映し出されていた。

二人はしばし呆然と見つめ合い、水月の呆けた顔は驚きへと変わり、

次に笑顔になり、最後に涙に濡れた。

「こんなことなら、もつと早くに会いにくれればよかつたのかな」
目の前で口を開く相手の声は聞こえない、嬉しいとか、驚いたとか、
あるいは言葉にならない叫びをぶつけているのかもしれない。

「……ごめんね」

互いに伸ばす手は触れ合わず、すり抜けるだけ。

（なんて自分は無力なのだろう）

そう思いたくなかったから、今までここに来ることができなかつた。

目の前に、触れられる距離にいるのに何もできないのがもどかしい。
(いなくなつてまで、彼の気持ちを独占し続ける彼女が憎い)
(ひと時とはいえ、親友の思い人を独占した自分の心が痛い)
(自分がどんなに思いを寄せても、それ以上に思われている相手が
いるのが苦しい)

（親友の不幸にさえ、嫉妬してしまう自分の感情が悲しい）

「もう、終わりにしよう」

それは、悲痛な響きだった。

涙ながらに、二人は互いの肩を抱く。

溢れる感情、

触れる事のない身体、

届くことのない言葉。

それでも、伝わる思いがあつた。

「必ず、救い出してあげるから」

入り乱れた感情の中、それが一体誰に向けて放たれた言葉なのか自
分でもよくわからなかつた。それでも、その言葉に？はなかつた。
判別の付かない感情を胸に、黒衣をはためかせ鏡はゲートへと向か
つた。

淡い光に包まれ、視界がぼやける。

光のトンネルを抜けると不意に視界が開ける。ゲートを通過する数

秒の間は完全に沈黙していたセンサーに視認した情報が新たに書き加えられる。光点が示す位置情報と名称にはケルビムと表記されていた。

その視線の先には、白い神の化身がいた。
天を衝く巨大な塔を包み込むように、青い空に雲が流れる。大空に鐘の音が鳴り響き、エリアが重なると同時に明とその敵対者、両者の視線が交錯する。

視界が一瞬、白い光に包まる。

【MISSION START（任務開始）】

視覚エフェクトと同時にシステムのアナウンスが響き渡る。

「ガーディアンか。……立塞たちふさがるなら倒すまでだ」

腰に携えた一本の剣を抜きながら明は独白する。

「ガーディアンではないよ。まあ、『フロアマスター』である私、黒木智樹を倒すことがこのミッションを終わらせる条件である」と黒木智樹を倒すことがこのミッションを終わらせる条件であることを考えれば、似たようなものではあるが」

オープン回線越しに返答する声が響く。

声の主は正面をホバリングする白い天使。

「……悪い冗談だ。なぜ、あなたがこんな事をしているんだ。答えてくれ、黒木智樹」

怒り、憎しみ、不安、頭の中を駆け巡る負の感情を押し殺し、質問を投げかける。かつての師である彼を殺したくはない、間違いであつて欲しいと願つていた。

「いい殺氣だ。返答次第では私を殺すと言う強い意志が伝わってくる。それから、閉じ込めてはいないよ、女神がここにいるのは彼女自身の意思だ」

上空でケルビムは両手をおおげさに広げ、操縦者である黒木が演説するかのように話す。即座に自分自身のデータバンクにある情報と彼のデータを照会してみるが、目の前にいる彼は紛れも無く本物の黒木智樹だった。

「どうかな、事実がどうあれ盗人が自分が盗みましたなんていうねずっと

訳ないだろ。あんたは彼女を女神として崇めて司祭様にでもなつたつもりなのか」

黒木の陶酔するような口調に、その狂氣染みた発言に、彼とのまともな対話を断念した。ここにいるのは、かつて自分自身が師として敬意を払っていた相手ではない。自分にそう言い聞かせて。

「そうだ、ここでは私は司祭であり神なのだよ。それが『支配者』の力、全てを司る神のなせる業よ」

「確かにアビリティはそれ一つで驚異的な力を發揮する。しかし、それだけで神氣取りとは笑わせてくれる。黒木、いや、お前は『GENESIS』の道化だよ」

そう、ここにいるのはかつて自分が師として仰いだ人物ではないのだ。ただ単に『GENESIS』という巨大なシステムに踊らされているだけの哀れなピエロ。

「いいだろ？ その身を持つて理解するがいい、神に喧嘩を売った愚かさを」

「箱庭の神が、偉そうにほざくな。お前はただ水月を監禁してい る狂人だよ」

敬意は敵意へと、憎悪が怒りへと変わり感情が昂ぶつてくる。

「違うな、女神は自らの意思でここにいる。これは、神の思し召 しなのだ」

「狂信者が、何を言つても無駄なようだな」

「これは、もはや対話ではなかつた。

「もとより問答するつもりはない。ここに踏み込んだ以上、私が自ら殺すまでだ」

「それが本性というのなら、あなたを越えてみせる。今日、ここで」

明の胸にもう迷いはなかつた。何が原因で狂つてしまつたのかは 定かではないが少なくとも今の彼は、自分の標的であり目的そのものなのだ。

もう明にためらいはなかつた。

目の前にいるのは、紛れも無い敵だから。

「さあ、始めよう。そして、全てを捧げよう。女神のために！」

四翼の天使が大剣を振り下ろすと、塔を囲むように巨大な炎の円陣が現れる。相手の動作に合わせて、天空の塔に配置された無数の大窯から燃え立つ赤々とした炎。宙に浮かぶ巨大な闘技場のようになつた、フィールドから音が聞こえる。

聞いたことのあるリズム。

そう、この合唱は、ベートーヴェン作曲の第九交響曲。

異国の歌をBGMにケルビムとフェアリーはフィールドの中央部で刃を交える。

重なる剣戟の音に合わせ、夜空に舞い散る火花が赤と黒の空間に光を明滅させる。繰り返される旋律と歡喜の声に合わせ、中空で幾度と無く剣戟を結ぶ。吹き抜けの塔の頂上で切り結ぶ度に両者は、円を描くように徐々に間合いを詰め、鍔迫り合いで出方を伺う。

「神への祈りは済ませましたか？ 司祭たる私に刃向かつたその愚かさを、自身の破滅を以つて知るがいい」

「戯言をほざくな！ お前なんかに構つていて暇はないんだ」

ケルビムは、単調な鍔迫り合いに痺れを切らしたのか、大剣で力任せにフェアリーを弾き飛ばす。

力で劣るフェアリーは為されるまま後方へ押し返される。追撃を仕掛けたべくケルビムが前方へ加速する。大上段に構えられた大剣で羽虫を叩き潰すが如く振り下ろすのは白い神の化身。

フェアリーは、右手のミスリルソードで攻撃を受け流しつつ、逆の手に持つたミスリルソードで薙ぎ払う。天使の胸部に深々と刻まれる、傷の刻印。

明は自身を鼓舞させ、更なる連続攻撃を仕掛けるべく機体を加速させる。

「これで、片付けてやるよ」

水の中に入るときのような空気の壁を抜ける感覺に、機体の速度が音速を超えたことを知覚する。視界に映る未来は繰り返される剣戟、

切り結ぶたびに飛び散る火花、一瞬に輝き消えていく姿は、未來の自身の生か死か。

い描く。

『Attract tempest』（引き寄せる暴風雨）

鎧迫り合いから、互いが離れる瞬間に合わせショットアンカーを放つフェアリー。

その言葉が引き金になり、フェアリーは登録された動作を完璧に再現する。

事前に登録した動きを再現するアシストプログラム『ARM（Auto Response Move 自動対応行動）』を利用した簡易コンボ。

そして、この瞬間からは、全ては高速に自動に処理される。

フェアリーの手首から放たれた鋼鉄のアンカーが互いの距離をゼロにした直後、薙ぎ払うようにミスリルソードがケルビムの装甲を切り裂く。

さらに傷跡を抉るかのように両手に持った剣を交互に袈裟懸けと逆袈裟に振り下ろす。

崩れ落ちるよしに、よろける機械の天使を突き飛ばすようにクロスさせた一本の剣を切り上げる。後に倒れるように大きくのけぞる相手に、右足のひざ蹴りのめり込ませ、左足で駆け上がるようナマーソルトを決める。

弧を描くように、宙返りしつつ中空で反転し剣を収める。

傷付きぼろぼろになつたケルビムに、止めどばかりにプラズマライフルを浴びせ、ひび割れたボディに止めどばかりにリニアライフルを放つ。

自動で再現された動きは、ここで終了する。最後に放たれた弾丸が天使の胸部装甲を貫通、空中でケルビムのAAが爆発し無数のパーティがとなつて四散する。

動きこそオートで再現されるが、感覚としては肉体の限界を超えて

の九連続攻撃。

現実の世界においては「ぐぐぐく」普通の人間である明にとっては、それなりに負担でありサイバースペース上の空でフェアリーが、呼気を荒げ胸を上下させるように動かす。

AAに呼吸器官などは存在しないが、現実の自分が激しく動いたような錯覚がサイバースペース上で動きとして再現されていた。暗闇を照らすように、赤々と燃え上がる炎に囲まれて、フェアリーは中空でホバリングする。

周囲を覆っていた、爆発によって生じた黒雲が風によつて流れいく。

歓喜が全身を突き抜け、全身に広がる心地よい疲労感。

「これで、終わつたのか」

BGMとして流れるケルビムを讃える歌詞の第九の合唱でさえも、今は自分自身の勝利を讃えるかのように聞こえる。塔を囲むように燃え上がる炎を見据えつつ、二丁の拳銃をホルスターに収める。水平線には燃えるような太陽が見える。そのまましさに、一瞬だが明は視界を失う。白い光に包まれた直後に六体のケルビムに包囲される。悪い夢でもみているかのように明は震える声でつぶやく。

「馬鹿な！ 確かに倒したはず、ちっ！」

幾重にも重なつてぼやける天使が大剣を振りかぶりフェアリーに迫る。敵の接近を見落としていた自分に舌打ちしつつ、腰部に収めた二丁の銃を取り出し間合いを確認する。

「君は愚かだなあ、神に刃向かうなんてさあっ！」

即座に両手にリニアライフルとプラズマライフルを構え正面とその右にいるケルビムに攻撃する。右の一体を仕留めるが、もう一体は仕留め損ね左と背後と正面の三方向からの攻撃が迫る。

急上昇し包囲を逃れるが、追いすがる五体のケルビム。

「邪魔を……するなあっ！」

左右に迫ってきた一体に弾丸とプラズマの火球をしこたま打ち込み沈黙させる。

「ああ、全力で抗つてくれたまえ。^{みに}醜く、見苦しく、のた打ち回れ！」あはははは

狂人染みた声で黒木が叫ぶ。二対一になつたとはいえ、現状はまだ不利であつた。

牽制の射撃を続けつつ虚空を翔けて敵を自身と直線状に配置するよう位に移動する。目前に迫る巨大な雲海の中に飛び込み避難する。位置情報はレーダーで解かってしまつかもしれないが、近接戦闘がメインのエンジェルシリーズが相手ならば田くらまし程度には十分だつた。しかし、そういうた経験が彼の勘を鈍らせる結果となる。

一瞬の安堵^{あんど}、反転して攻撃をしようとして逆に背後を敵に見せることなる。雲海の先に新たに三体のケルビムの反応を検知した時は、もう遅い。

「さあ、^{だんまつま}断末魔の悲鳴を上げろ。ヒステリックな赤子のように、泣き、叫ぶがいい」

「……死ぬのか、今度も何もできないまで」

自分自身が踏み出した一歩、越えてしまつた境界線。それが勇氣であつたのか、それとも無謀であつたのか。降り掛かる目の前の現実は後悔する時間すら『えてくれない。幾重もの刃がフェアリーを捉える。

刹那、ぼやけた明の視界は無数の剣で多い刃くされた。

「明、鏡、大丈夫だよね」

涙を拭いて水月が独白する。彼らの勝利を裏付けるプラスの材料など何もない、ただ信じて待つだけだった。緑の丘に風が吹き、白いロングスカートがはためく。無力であることが、こんなに悔しいとは思つたことがなかつた。

そして、自身の持つアビリティ『^{シンパシー}共感』を嫌悪した。

自分が相手の考えを知つてしまつことがこんなにも辛いことだと理解した。

「……鏡も同じ気持ちだつたんだ」

涙ながらに抱擁^{ほうよう}を交わしたあの時、言葉は聞こえなくても、相手の思考を読み取る『共感^{シンパシー}』の所為で鏡の考えは通じてきた。友情と恋愛、愛情と憎しみ、優越感と嫉妬、複雑な感情が入り乱れ、それでも助けるという強い意志が伝わってきた。

「でも、同じ人を好きになつてお互いに嫉妬^{しつと}するなんて、本当に似たもの同士だよ」

どんなに相手に想われても答えることができない立場、どんなに相手を想つても答えてもらえない立場、この二つにどんな違いがあるのだろうか。

幼少の頃に見た、王子様がお姫様を救い出すというストーリー。当時の彼女は、安易な考えでお姫様に憧れもしたが、実際になつてみればこれほど嫌なものはないだろう。

助けるということが成立するためには、自身の生存が条件である以上どんな目にあつっていても自殺することもできないし、いつになつたら助かるのかも解からない。

自分自身を捕まえている相手の気分次第でどうにでも変わってしまう立場や状況。仮に王子が、自分を捕まえている相手を首尾よく倒すことができたとしても相打ちでは意味がないし、その前に王子が死んでしまつても意味がないのだ。

とてもではないが、こんな状況は手放しで喜べるものではなかつた。

いや、それでもハッピーエンドが約束されている物語の中でなら、自分自身の立場に少しばかり醉うことができたのかもしれない。だが、彼女は自分の親友の気持ちを知つて理解してしまった。

そんな状況で、彼女の前で愛を誓うことなどができるわけもなく。親友の愛している人間を目の前で奪うことなんて、できるわけがない。それも、こんなつり橋効果のような方法でならなお更のこと。

しかし、現実に明は自分を助けに来ているし、助けられてしまえばその先の展開はもう決まつているだろう。

その未来を彼女の心が望むと望まざるに関らず。

そして、時間はもう余り残されていない、選択も限られている。そもそも親友と恋愛を天秤に掛けるという選択ができない以上最初から答えなど出るはずもない。

終わりの見えない思考の迷路の中、今の彼女にできる」とは祈ることだけだった。胸に掛けられた、彼とおそろいの銀の十字架。信仰がある訳ではなく、彼がつけていたものをなんとなく選んだ。そんな些細なことで喜べた、昔の自分が懐かしい。

「無力であることが、こんなに悔しいなんて、思わなかつたよ」首から提げた十字架を食い込むほどに強く握り、水月は仲間の無事を祈る。

緑の丘から見上げる塔の頂いたたきは、分厚い雲に包まれていた。

【REINFORCEMENT（援軍）】

ビジュアルエフェクトのカットインが挿入された直後に、フェアリーの目の前にウィザードのAAが現れる。

「『Red shield』（赤い盾）」

AAの出現と同時に鏡が声高に叫ぶ。

ウィザードのロープを構成する複数の赤い剣が、彼女の声に応えるかのように瞬時にその形を変えていく。出来上がった円形の大盾を構え、眼前に迫っていたケルビムの白刃を受け止める。激しく火花を散らし、金属と金属が激しくぶつかる音が響く。

「……か、鏡か」

「はあ、はあつ。間に、合つた。よかつた」

聞こえたのは親しい女性の声。

ぼやけた視界の中、呆けるように明がつぶやく。
そんな彼を叱責じっせきするように鏡が叫ぶ。

「明。何をしている、早く反撃を！」

「助かつた、礼は後でする」

そして、即座に平静を取り戻した明は左右から迫る一体のケルビムを仕留めるべく右手に携えたミスリルソードを薙ぎ払い、対面の一

体には左手に構えたリニアライフルをしごたま打ち込む。

「解放、《Crimson Lotus》（深紅の蓮）」

即座に援護に回った鏡が、凛とした声で言い放つ。

赤い盾は声に応えるように分離し、解き放たれたように赤い剣が空を駆ける。何十もの剣が、雲の先にいた三対目のケルビムを包囲して串刺しにした。風に舞う花弁は赤き剣、恐ろしくも美しい深紅の花が天使の体を突き抜け咲き誇る。

「こいつらは複体。構わずセンサーに表示されている本体を仕留めて、明」

「わかった、援護してくれ。鏡」

「もう一匹忍び込んでいたネズミはあなたでしたか。私自身の手で殺せないのが少々残念ですが、幕引きの時間です」

雲海から新たに出現した六対のケルビムから声が発せられる。

フェアリーとウイザードの正面に三体のケルビムがそれぞれ配置され、それら全てが完全に一致した動作で赤々と燃え立つ剣を構える。同時にコントロールできる数は、六体が上限なのだろうか。六体を越えての攻撃は今のところない。黒木の駆るケルビムと、複体が五体。この距離ではセンサーが役に立たないので最終的には何体倒せばすむのか検討もつかない。

あるいは、制限などないのかもしねりないが。

「なら、皆殺しにするまでだ」

アビリティによって加速され、雷光と見紛うばかりの速度で正面にいたケルビムに切りかかるフェアリー。難ぎ払うように構えられたミスリルブレイドの刃が敵を捉える。

しかし、その刃がつきたてられる瞬間にビジュアルエフェクトが視界に映る。

【TIME UP】

「くくく。招かれざる密には、『退場願おうか』

視界の端に表示されていた三分のカウントダウンの消失から僅かに遅れて、機械音声によるアナウンスが無慈悲に響く。同時に明の位

相がずれ、剣での攻撃はケルビムの胴体をすり抜けて空を切る。

「……馬鹿な、システムに干渉したのか？」

一瞬の忘我の後に、明の口からそんな言葉が漏れる。基本的に、仮想空間上で行われる戦闘は時間無制限でのサバイバルマッチだった。それ以外の勝敗の決定条件を明は見たことが無かつた。

「言つたはずですよ、ここでは私が神であると。あははははは」
残響のよう^{ざんきょう}に響く黒木の嘲笑^{ちようしおう}の中、二人の視界に新たな文字が浮かび上がる。

【REPARATION（強制送還）】

「ぐそくぐそく、畜生。こんなところで、水月、水月イイイツ！」

自身を構成するポリゴンが空中に霧散していく中で明は叫び、手を伸ばす。彼女がどこにいるかもわからない、届かない叫びだと理解もしていた。それでも、見えない何かに抗いたかった。こんなところで終わってしまうのを認めたくなかった。そして、何より追い続けてきたものを絶対に諦めたくなかつた。

システムの音声が響くと徐々に視界が黒く埋め尽くされ、そこで彼の意識は途絶えた。

1 - 2 Agaric (後書き)

まだまだ、続きます。というか、自分でイラストつけられるレベルになりたいです。追記、ラノベの表紙っぽい絵を描いてみた。きちんと仕上げたらあげるかもしません。（9月8日最終更新）

1・3 Opt(前書き)

そのとを選んだ道は正しかったのか。過去は変えられないかもしれないけれど、それでも前に進むしかないから。

「気付いてくれない君が、悪いんだよ」

「……くそつ。最悪の寝覚めだ」

薄暗い『電腦技術研究所』のデスクでうつむいていた顔を上げる明。胸に付けた銀の十字架を食い込むほどに強く握り、痛みでこれが現実であると再認識する。仮想空間に意識を没入させている間は、本体である肉体は眠っているような状態になる。ちょうど、夢から覚めた状態とでも言うべきだろうか、現実に意識が引き戻されてもしばらくは妙な浮遊感^{ふゆうかん}が付きまとつ。

「バッドモーニング、明。メシの時間にはまだ早いぜ」

おごつてもらえるからだろうか、いつにもまして陽気な声で話す三島平治。笑顔を通り越してニヤニヤとした表情を浮かべ放つて置いたらもみ手でもしだしそうな雰囲気だ。

「はあ、平治か。頭を冷やしてくるから少し待つていひ」

ふらふらする体を引きずるように動かし、洗面所まで辿り着く。眼にまぶしいくらいに明るいライトに映し出された顔は、ずいぶんと対照的だった。

鏡に映る自分の顔は、驚くほどにやつれていた。当然と言えばそうだろう、ただでさえ命懸けの仮想の探索と言う仕事に加えて、個人的な問題まで絡んできたのだ。心身に負担が掛からないわけもない。自動で流れる水の前に手を重ねて水を貯め、顔にぶつける。

「水月、待つていろよ。絶対に助けてやるからな」

それは、何度も繰り返してきた言葉であり、誓いでも決意でもない、おそらく、暗示と言う表現が一番近いだろう。水を掛けたくらいで疲れは取れない、しかし、眼光にだけは光が取り戻される。

したた 滴る水を振り払い、明はその場を後にした。

「ラーメン屋か、悪くないな」

並んで歩く明の提案を受けて、平治が答えた。

「数回しか使ってないが、味は保障する。しかし、おじりともううのに偉そうだな」

昼休み、ラボ研究所から歓樂街リルフォートへの道すがら、明と平治は昼食のプランが到着目前で決まったようだ。いしてたま石置の道沿いはどこか西洋めいた外食店や家具店、ブティックなどが立ち並び、都市全体が赤や茶色のレンガ造りや木造であり、一定のコンセプトに沿つたデザインで構成されている。

しかし、外見こそはレトロに作られているが中身は軽量素材や合成金属で作られており、その頑丈さはトラックが突っ込んでも平氣と言つ代物だ。

「俺の方が偉いから当然だろ、何を血迷つていいんだ」

「はあ、血迷つてるのは、今だけにしろよ。任務で死んでも、お前の家族の面倒を見る気はないぞ」

「ま、俺が死んでも合成栄養食があれば生きていけるだろ」「死にはしないだろうが、あれは不味いぞ」

ブロックタイプやゼリータイプの合成栄養食は、確かに栄養価などの問題はクリアしているが、味の方は進んで食べたいと言つようなものではないのが現実だった。

「俺は、案外いけたぞ。訓練期間中に食べてみたが、あれは人類を救う救世主だ」

「まあ、安い、安定供給可能、栄養価が高くバランスもいい理想的な食材ではあるよ。個人的には、質の悪いサプリメントや固形栄養食と同類だと思うが

「現実的な問題として、食糧難の解答はあれしかないだろ。實際、最下層の人間はあれで食いつないでいるんだから」

「ま、俺たちにはあまり縁のない話だよ。命賭けの仕事の報酬で金だけはあるしな」

「俺は、スラムとブルジョアの綱渡りだけどな。社長令嬢とくついたはずが、会社が倒産して転落人生だからな」

「そういうや、そうだつたな。着いたぜ平治。メニューは第一視点で確認してくれ、注文は俺の方でまとめてする」

第二視点は、通話機能等と同じ拡張現実の一種で、現実に対しても、種のフィルターを掛けてみることができるといったものだ。基本的には、飛び出す絵本の世界に入り込んだような状態になる。

「なんだ、この街 자체のデザインコンセプトを完璧に否定した外観は！ 時代を逆行し過ぎてているだろ。おこりが嫌なあてつけか、あてつけなのか？」

「まあ、落ち着け。確かに『デザインは、廃墟みたいだが中身はむしろ新しい。メニューも不安ならお前が選べ』

歓楽街の外れの一角に、その店はあつた。薄汚れたのれんをくぐり、先に入つた明が平治を手招きする。

「お前と同じのでいいよ。調子に乗ると、すじいのが出できそうだ」恐る恐る、といった様子で平治が後から入店する。

「馬鹿、店の見た目はあれだが味は本当にいいんだよ。入り口は、確かに幽霊屋敷のようだが、中はハイテクだ。それと、外見に関しては店長の趣味らしい」

「イヤミな趣味だな。と、とにかく、行くとしますか」

「第二視点は席についてから起動しろよ。広告に埋め尽くされるから」

「お、おう、わかった」

動搖を隠せない様子で平治が応えた。

白い調理服を着た初老の店長のいるカウンターの前をすり抜け、二人は奥の一人掛けの席に座る。そこで二人は拡張現実を起動してメニューを確認する。平治は、目の前に飛び込んでくる広告を含めた情報量の多さに驚きを隠せない。

「しかし、人口増加でスペースの有効利用が叫ばれる現代でも、この情報量は異常だろ」

「座るまで起動するなって言つた意味が解かっただろ。まあ、広告がありえないくらい入つているのさえ気にしなければ、メニュー 자체は商品映像を立体視できるレビュー やコメントが併記されるから見やすしよ。店長さん、じつせり電研の出身者りしこし二人の視界に映るのは、室内を旧時代のネオン広告のように流れて動き回る広告の群れとテーブル上にあるメニューから立体的に投影された商品の数々だつた。

「おかげで、外と中とのギャップが楽しめたよ。確かにどれも美味そうだ」

「俺と同じのでいいんだつたな、じゃあ、とんこつラーメンを一つ

と
網膜に投影されるメニューの端にある数量選択のボタンで一つを選び、会計を事前に済ませて第二視点を停止させる。すると視界には「ぐ普通の木造の料理店といった景色が広がつていた。

「さびれた外観に対してハイテク過ぎるぞ。下手な高級店より進んでいる」

「普通の高級店は、PITTを使った技術なんて毛嫌いする連中もいるからな。客にも運営側にもさ」

そういうながら明はテーブルの端に置かれた二つのコップに水を注ぎ、その内の一つを平治に渡す。

「おつと悪いな。で、今日のヤマで何があつたのか？」

真剣な表情で、平治が明に問う。

「はあ、水月の手掛けりが目の前で逃げて行つた」

「……そいつは、辛いな。お前は、そのためにここに入つたんだからな」

事情をよく知つてゐるからだらう、平治は苦々しげに言葉を紡ぐ。

「お前だつて、俺が心配で電研に付いてきたんだろ。付き合わせて悪かつたな」

「だから俺は、家族のために電研に……まあ、そういう要素もあるよ

穏やかな表情で見つめる明に田を伏せがちに平治がうなづく。

実際、半年前の明は自分が思う以上に思いつめていた。平治の場合は、生活のためと言う理由も確かにあったが、友人が無茶をしないように隣で様子を見てみたいという理由もあった。

「まあ、水月がすぐに殺されることはないとと思う。準備ができ次第、殺されない限りは何度でもケルビムに再戦を挑むつもりだ」

「俺も……」

一緒にと詰つ前に明が言葉を重ねる。

「無理するな。それに、鏡もいるから」

「そうか。鏡もいるのか。あいつも難儀だよな」

平治は、左手の薬指にはめられた指輪型のP-I-Tを眺めながら嘆息たんそくするように言つ。

「難しい性格ではあるが、今は心強い仲間だよ」

「まあ、色々と同情するよ。しかし、修羅場だな」

呆れるような、同情するような顔で平治が苦笑いを浮かべる。

「戦場だからな。と、来たみたいだ」

「へい、お待ち」

店主の威勢のいい声と共に、二人の前にどんぶりが置かれる。輝くスープと細めの麺、ほのかに甘く鼻腔を刺激する香料の香り、熱々の湯気と伝わる熱。それら全てが彼らの食欲を刺激する。

「普通に上手そうだな、明」

「味は食つてから言うものだろ。まあ、喰つてみな」

「そうだな。頂きます、と」

「頂きます」

二人は手を合わせ、目の前の料理にはしを運ぶ。

恐る恐るといったようすで食べる平治の姿は、ずるずると音を立てるようになり、かき込むように変わり、惜しむようにこじのある麺をゆっくりと味わいながらかじり、最後にはスープの一滴も残らない。

「めひやくひや美味しいぞ、どうしてくれる

思わず、立ち上がりそうな勢いで平治が絶賛する。よほど感動したのか、口元を拭うことすら忘れているようだ。

「又、来ればいいんじゃないのか。ま、気に入ってくれたなら何よりだ」

少し遅れて食べ終えた明が、口元を紙ナプキンで拭いながら答える。「むしろ、こんな美味しいものを今まで一人で食べていたお前を糾弾したいね」

「俺だつて最近知ったんだよ。まだ、数回しか来たことないし」

「これからは毎日……は、無理だとしても通うことにするよ。それで、帰るとするか」

毎日通り、と言いかけて自分の財布事情を思い出した平治は内容を修正する。そんな彼の姿に明は、笑顔を浮かべる。

「そうだな。まだ、終つてない」

店を出るときにはもう、明の顔から笑顔は消えていた。

「助かりましたよ、明さん。報酬は弾みますよ」

「敵の敵は味方。それに、目の前で死なれちゃ寝覚めも悪いだろ」正面の敵へ牽制をリニアライフルでしつつ、黒いソルジャーのいるビルの陰に潜り込むフェアリー。眼前の敵は牛の頭にコウモリの羽を持つ、いわゆる悪魔を模した黒いAAのデーモン。正面に見える現状は一対一と有利だが、伏兵がそこら中にいる現実を鑑みれば絶望的な戦力差だ。

すでに五体ほど片付けたが、それでも数の優位は動かない。

「やれやれ、情報屋の情報が間違っていたからといって、仲間の報復に来るとは律儀なものです」

「いや、あんたの情報は正しかったよ。多分、俺と鏡が暴れたから結果的にはその報復だろ。責任の一端はこちらにある、だから、報酬は無しでいい」

「まったく、あなたも律儀ですねえ。まあ、そこが気に入っているのですが」

「正面から突破する、援護してくれ」

「やれやれ。戦闘は本職ではないのですが、仕方ありませんね」

ビル影から空に向かって飛び出すフェアリーに一時火線が集中するが、その後には、明とヘイフオンの射撃によつて撃墜されていく。もとより、空を飛ぶ相手に銃火器で迎撃するのでは最初から分が悪いのだ。互いの命中精度の差は、単純に腕だけでなくとも歴然だつた。

しかし、その優位性が認められながらも、海賊連中がフライトユーツトを嫌うのは火力と機動性を両立させるには装甲を、機動性と装甲を選べば火力が失われるという選択に迫られるからであった。それはプレイヤーの思考にもよるだろうが、彼らにしてみれば命懸けの戦いで装甲が薄いといつのは狂氣の沙汰なのだろう。

「大した腕だよ。あんたも」

「そちらが相手の位置情報を送つてくれましたので、そこに撃ち込んだだけですよ」

「それをその通りに実行できるのが実力だよ。」そちらは上空から敵を掃討する。引き続き援護を頼む、ヘイフオン

「了解しました。明さんも御武運を」

「あんたもな」

通信を切り、戦闘に集中する。眼下にはヘッジホッグが五体とソルジャー・タイプが四体、正面にデーモンが三体。十一対一という戦力比は数字の上では絶望的な現実だった。

しかし、そんな状況でも明の思考はひどく冷静だった。幾千回も切り結び、打ち倒し、敵を破壊してきたという自尊心が、幾万と繰り返してきた動作が彼を突き動かし、生き残らせる。

アビリティにより加速していく機体と対応するべく早くなる自身の反応速度。

「もつと早く、もつと正確に」

それは、地獄のような訓練を続け呪詛のように自身に言い聞かせてきた言葉。

そして、それは小遣いを稼ぐよつた気楽でここにいる海賊連中との明確な意識の違いである。眼下のソルジャーに対しリニアライフルの射撃を仕掛けるモーションと同時に、新体操にも似たアクロバティックな制動で火線を外す。

放された弾丸は正確にソルジャーを撃ち抜いてその数を減らしていく。

左右からはヘッジホッグの多弾頭ミサイルが迫るがこれは正面のデーモンに突っ込むことで回避する。

三体のデーモンは矢のよづな陣形で、一体が先行して一体が追い掛ける布陣だ。

先頭のデーモンが槍の上部に斧を付けた武器、ハルバードを手に迫るが眼前で半身を逸らして唐竹割の一撃を回避。逆に懷に潜り込み、右の手でミスリルソードを抜刀し切り捨てる。

「次は、どいつだ」

背後ではミサイル同士が誘爆し、後方の視界を奪う。

真二つに切り捨てられたデーモンの金属塊にショットアンカーを左右の腕から打ち込み、さらに迫る一体のデーモンに投げつける。ヘイフオンの援護だろうか、明のレーダー上ではヘッジホッグが一体消える。

敵からの援護射撃はない、眼前に迫る一体のデーモンを巻き込むからだ。接敵までの間に銃を収めミスリルソードを引き抜く。投げつけた鉄塊に相手が気を取られている虚を付き一体の間をすれ違い様に鉄塊ごとまとめて切断する。

二人が六体の敵を減らすのに要した時間は、僅かに十秒程度。

「でたらめな、はは
「ば、化け物め」

通信が駄々漏れになつてゐるために聞こえた声は、おそらく本音だろづ。

だが、目の前で起きていることは、少なくとも明にとつては当然の現実だった。電研の人間がチームではなく単独で行動しているその

意味は、馬鹿げた訓練の量に裏打ちされた実力と人海戦術による効率を重視するためだつた。

反応速度、射撃の精度、回避技術、どれ一つとっても海賊連中に負ることなどありえない水準だつた。おそらく、一対一であれば半死人の状態でも負けないだろう。

「お前らから見れば、俺ですら化け物なのかもしれん。だが、俺くらいの実力の人間はいくらでもいるさ」

地上を見下ろし、目視でヘッジホッグを捉え加速する。

絶え間なしに打ち込まれる弾丸の軌跡さえ、肉眼で見えているかのような感覚だつた。加速した意識下の中では、敵の攻撃はあたかも水面に生じた波紋のように映る。

自身を追尾するように放たれるガトリングガンの弾丸も、複数に分離して襲い掛かってくる多弾頭ミサイルも、その波紋さえ見えていれば回避することは容易だつた。

砲身から放たれる初撃を回避した時点で、自身を追従するその軌道が機体に当たることなどありえないことだと理解できたのはいつの頃だつたか。

戦場に入り乱れる波紋を迂回し潜り抜け、ビルの真横にいたヘッジホッグに肉薄しミスリルブレイドの刃を頭上から付き立て撃破する。レーダー上で反応が一つ消え、その後にさらにソルジャーの反応が一つ消える。

「味方ながらに恐ろしい実力ですよ。あなたは」

オープン回線越しにヘイフオンの声が聞こえる。敵はかなり戦力を減らしているので、話ができる程度には余裕ができたのだろう。

「地上戦で三体仕留めたそちらの実力も、似たようなものだろう。あとは、ソルジャーが一体とヘッジホッグが三体だ。とつとと終わらせるとしよう」

「つと、危ない。おいたが過ぎるソルジャーは、私が倒すとしますよ」

狙撃でも受けたのか、そんなことをつぶやくヘイフオン。

「援護は必要か？」

「個人的な事情で恐縮ですが、煩わしいハリネズミの相手をお願いしますよ」

「俺の依頼人様は、毎度毎度無茶な注文をしてくれる」

「私は、あなたを買つているのですよ。いろんな意味でね」

「言ってくれるな、依頼人様。なら、その期待に応えるとしようじゃないか」

黒いソルジャーが、地を這うように姿勢を低くしてブーストダッシュでビルの間を蛇のように蛇行して火花を散らしながら駆け抜ける。そして、時折、透過迷彩を起動しては、それを消すといったことを繰り返し、敵の攻撃をことごとく回避して肉薄する。

レーダー上で表示されていても、視界に全く映らなくなる透過迷彩を使いこれをやられると、下手なプレイヤーはレーダーと有視界の二つをみてしまうために動きが激しく乱れてしまう。

「あなたが悪いのですよ。それでは、さようなら」

動搖して乱れた敵の射線を搔い潜り、右腕に持ったサバイバルナイフを振りかぶる。

静かに、そして、しなやかにサバイバルナイフを突き立てるヘイフオン。僅か数秒で行われた一連の動作は美しくすらある。

倒れ伏すソルジャーを横目に、中空でフェアリーが敵に向かい加速する。自身の不利を悟ったのか、三体のヘッジホッグは密集し、その火力を膨大なものとする。

しかし、無数に見える火線にも、通り抜ける程度の穴はいくらでも存在した。

いくら火力が豊富なヘッジホッグだろうが、自身と相手の相手の間を三体程度の火力で埋め尽くす事などできるわけがなかった。左右に高速で移動し、射線を広域にすればその全てをカバーすることなど不可能な話だ。

とはいって、弾丸自体が弾幕だんまくの役割も兼ねるのでこちらの射撃武器はそこまで有効に機能しない。確実に仕留めるのなら接近して切断す

るのがベストだった。

前進と迂回を繰り返し、徐々に三体のヘッジホッグへの間合いを詰めていく。弾丸の間隔が狭くなるにつれて回避できる場所の選択が難しくなるが、不可能と言うほどの難易度でもない。

敵に対して渦を巻くように移動し、敵の一体が自身の間合いに入つた瞬間に最高速までフェアリーを加速させ下降する軌道で肉薄する。まずは一体が、反応する暇すらなく引き抜かれた銀色の剣によって切断される。

等速で動きこちらの速度を相手に設定させ、安全であると勘違いさせることが、その虚を付いた攻撃である。三体のヘッジホッグが構成する三角形のフォーメーションの一端から直線状にいるもう一体に向け直進して返す手でこれを切り伏せる。

最後の一体に対して急旋回するが、動搖した相手は滅茶苦茶に攻撃をしてくるために、地上すれすれの位置から上空へと退避する。

「くるな、くるな、くるな、くるなあああ」

「死にたくないなら、最初からこんなこと……」

その先の声は、激しい爆音に飲み込まれる。

地上と上空に闇雲に放たれた何十もの銃火、砲撃、ミサイルが市街地を無作為に破壊していく。倒壊するビルディング、吹き飛ぶ窓ガラス、削り取られまき散らされる道路。

爆撃染みた攻撃で、そこについた何もかもを吹き飛ばしていく。

「……はあ、はあ、死にやがったか」

脳内麻薬の過剰分泌か、興奮気味に生き残った海賊が言つ。

そのようすはハイになつてているというよりは、むしろ、息も絶え絶えといった方が的確かもしだれない。巻き上がる土煙、所々から登る黒煙。

そこには廃墟といつよりも、荒野といった方が近い有様のフィールドが広がる。

「逆効果だつたな、そちらの攻撃は」

スマートを突き破り、剣を振り上げるフェアリー。

奇しくも敵が仕掛けた攻撃より生じた煙幕で奇襲が成功する。そして、振り下ろされた剣が鋼の機体を両断すると同時にビジュアルエフェクトが視界に表示される。

【THE END（戦闘終了）】

撃ち抜かれ、あるいは分断されバラバラになつた金属片が、ポリゴンとなって中空に霧散していく。意識の無いただの情報が、虚空へと溶け融合する。

「戦闘終了ですね」

「そうだな。とりあえず、援軍が来ないうちに撤退するか」

「そうですね。では、あなたが知りたいであろう情報を渡しますので、ひとまずはそれで解散するとしましょうか。過不足があれば、いずれお渡ししますよ」

「了解した」

「それでは『Assignment』（譲渡）

『Are you get these data ?』（これら的情報を受け取りますか？）

視界にシステムの選択画面が映し出され、それに対する選択を迫られるが、もちろんYESと応える。

「確かに受け取った。それと、個人的な感情だが、お前のことは疑いたくないとだけは言つておくよ」

「それでは、こちらも今はまだあなたと敵対するつもりは無い。とにかくだけは言つておきましょう。『Return』（^{リターン}帰還）」

「それはこちらも願つたり叶つたりさ。いずれ、又、会おう。『Return』（^{リターン}帰還）」

そして、二人は現実へと回帰するのであった。

「やれやれ、午後の間探し回つても収穫なしか

愚痴りながら拡張現実を介して認証を済ませ、自宅の扉を開ける明。あれからすぐにでも再戦したいという気持ちではあったが、鏡を含め連戦でベストコンディションとはとても言える状態ではなかつた

こともあり、対策もせずに安易に勝てる相手ではないと考え、通常の業務をしながら情報収集に努めていた。

そして、最後に回していたSCS511の座標では、先日やられた仲間にに対する報復とでも言うべき状況が展開されていた。ヘイフオンによれば、その時点で既に自分以外の情報屋が何人か糾弾きゅうとうだんされ殺されていたらしい。

また、鏡と明の件が無かつたとしても、パスコードなしでの場所にある変化と言えば、情報にすがり付いて群がる海賊自身であり、状況を勘違いして勝手に殺し合いになつていただろうというのが、ヘイフオンの言葉だ。結局、今日の収穫としては味方の情報屋に裏切り者はいなかつたという事実が確認できたことくらいだった。靴くつを脱いで手を洗い自室へと向かう。明が扉を開けると、そこにはベッドの上に乱れた着衣で寝そべる女性の姿があった。

「おかえりなさい、旦那様。なんてね」

不法侵入であるにも係わらず、少しも悪びれもせずに冗談を語つのは鏡。

明がここにくるまでは眠っていたのか髪は少しほね、ベッドの足元には黒いコードが放り出されている。

「なんでここに鏡がいるんだ？ 住所は教えてないし、セキュリティだってちゃんと機能しているはず」

自室への突然の来訪者に驚きを隠せないが、その相手が知り合いであつたのでわずかに安堵をしている明。

「釣れないわね。大家に自分は新城明の妻だつて言つて、あなたの詳細な情報を教えたならパスコードを貰えたわ。親切ね、彼女」

「どこまで教えたのかは聞かないで置いてやる、……怖いからな。とりあえず、目に毒なそのポーズを止めてくれ

「いけずね。恥ずかしい思いをした立場がないじゃない」

からかうように大きく胸元の開いたワイシャツ姿で話す鏡。少し汗ばみ湿つた長い黒髪はどこか誘つているような怪しい輝きを放つ。

「自分で恥ずかしいと自覚しているところだけは褒めてやろう。不

法侵入も、……まあ許してやるわ。だが、事情だけは説明してもらおうぞ

「そうね、まずはシャワーを借りるわね。話はそれから」

「もはや依頼ですらないのか。ふん、勝手に使え」

明がはき捨てるように言い放つのを尻目に、鏡はバスルームへと消えていく。

「紳士過ぎるのは、悪徳よ」

通り過ぎる際に小さくそんな言葉が聞こえた気がしたが、疲れた明の耳にはおぼろげに響くだけだった。

「明の馬鹿、甲斐性なし」
かいしょう

薄つすらと明るいバスルームには流れる水の音と鏡の声が小さく響く。鏡面に映る自分の姿に向かって、鏡は話しかけていた。

そこに映っていたのは、しつとりと水に濡れる長い黒髪、すらりと伸びた手足、ふくよかなバスト、くびれたウエスト、控えめなヒップ。

そして、泣き出しそうな笑顔だった。

最後かも知れないと思って、やつてみたが自分にはこういったことが向いていないことが改めてわかつただけだった。笑いたくなる。友人を裏切る行為だとは理解しているが、死地に赴く前のかさやかな願いだった。

悩んで、迷い、抗つて、やつと踏み切った決断のつもりだったがそんな彼女の思惑など明が知る由もない。しかし、同時に安堵していられる自分もいた。彼自身が、そんな黒い欲望に身を任せないのを知った上で彼を誘惑したのだから。もとより、簡単に誘惑に負けてしまうような人間なら好きになつていなかつた。それが、嬉しくもあり同時に切なくもあつた。親友を裏切らないで済んだという安心感と、ここまでしても振り向いてくれない彼の態度が少し悲しくもあつた。

「……大好きだよ」

小さく発せられたその言葉が届くことはなく、狭い個室の中で反響

して、やがては水の音の中に飲み込まれていく。

「愛しているのに」「元の」

その言葉を口にすることもない、開いた口を空気が通り過ぎただけだった。

頬を伝う透明なしづくは、ただ流れしていく。

髪についたシャンプーの泡を流しつくすと、彼女は水を止める。

「はは、似合わないことなんてするものじゃないね」

壁に掛けあつたタオルを手に、顔と身体を拭きその場を後にするのだった。

一時間後、リビングにて。

「それで、話してくれるわけだな」

「せつかちね。甲斐性なしなのに」

「不法侵入を不問にして、シャワーまで貸してやって何が不満だ」
スルーしているのか、そもそも気にしていないのか甲斐性なしの部分には触れない明。

「えっと、君の態度かな」

ふうふ、と頬を膨らませ鏡がそっぽを向く鏡。揺れる髪、横から見える白いうなじが薄つすらと赤い。そんなことを言つている場合ではないのは理解しているが、感情と理性は別物だった。

「……まあ、飲め。紅茶だが、温まるぞ」

そういつて、白いティーカップに注がれたミルクティーを差し出す明。カップは来客用に用意していたもので、自分のものは黒いマグカップに注がれていた。

「……もつ、温まっているよ」

文句を言いながらも、差し出された紅茶に口を付ける鏡。
風呂上りだからか、彼女の顔はほんのりと上気していた。

「落ち着いたか」

「ほどほどに」

「なら、本題に入るとしよう。まず、どうやってここを突き止めた

？」

「それは、以前君に渡したアメに発信機を……」

「つて、おおい。もし、俺が食べちまつたらどうするつもりだつたんだ」

内容の突拍子のなさから、動搖して思わず突つ込みを入れる明。普段はクールぶつているが、戦闘以外の突然の振りにはめっぽう弱い彼であった。

「袋の方だから問題ないよ。それに君の性格を考えると舐めないだろうから、どっちに仕込んでも問題なかつたろうけど」

「まあ、実際に机の上に置いてあるが、ナノマシンタイプを体に吸収して全身を発信機にされるのはぞつとしないんだが」

「技術屋相手にそんなことやらないよ。ばれるし」

くつろいだ様子でティーカップに口を付け、ミルクティーを飲む鏡。「ばれなきやいいのか。はあ、次だ」

「私も、次だ」

顔をうつすらと赤くして、いそいそとマグカップを差し出す鏡。どうやらお変わりを「所望らしい。そんな様子に機嫌を良くした明の声はどこか楽しげであった。

「気に入つてもらえて何よりだ。少し待つていろ、注いでくる」席を立ちキッチンへと向かい冷えたカップをお湯で洗い、サーバーに再度火を付ける。次にマグカップ自体を暖めるためにポットのお湯を注ぎ、熱を巡らせてからお湯を捨てる。適温になつたところで火を止めて、サーバーから紅茶をティーカップへと注いでいく。

「はやく、しゆう」

「すぐにできますから、待つていてくださいませ。お嬢様」

冗談めいた口調で明が言つと、お嬢様と呼ばれまんざらでもない気分なのか鏡がおとなしくなる。そんな様子を楽しみながら、明は作業を再開する。ほのかな香りが人を惑わすブランデーを、透き通るような純白のミルクを、濃い目の黒みがかつた紅茶へと垂らしていく。混ぜ合わせると、三つの色が一つに溶け合っていく。

混沌としたその渦が、自身の迷いと重なるが、その感情を打ち消すかのようにスプーンで一色に染め上げていく。

「お待ちどう様です。お嬢様」

くすくすと笑いながら出来上がったオリジナルブレンドの紅茶を差し出す明。味にはそこそこ自信があつたので、おかわりの依頼は彼の自尊心を大いにくすぐつていた。

「君には似合わないよ、それ」

「そうだな。本当に似合わない」

二人そろって、笑いあう。

「いつの間にこんなスキルを身につけたの？」

「スキルってほど大層なものじゃないよ。趣味が高じたつてところかな」

自身のマグカップにも追加の紅茶を注ぎながら明が返答する。

「まあ、いいわ。おいしいものも飲めたことだし、続きを話すとしますか」

「ああ、本題に入るとしようか。なぜ、俺の部屋にいたのか？」

「夜這い。^{よばよい} というのは、半分冗談として。君が一人で無茶しないか、心配だったから」

「残りの半分は優しさだよな？ 某風邪薬みたいに。それに心配しているのは、こっちだって同じだよ。俺以上に無茶していたのはそちらだし、むしろ、ここに来てくれたのは好都合だった」

「心配してくれるんだ。それから、君はもう少し自分の発言に注意するべきだと思う」

少し赤くなつた顔を隠すように、紅茶をする鏡。

（残りの半分が本気だ、と私が答えたらいづつもりなのだろう？）

鏡は内心を言つてしまいたい衝動に駆られるが、臆病な理性がそれを邪魔する。

「夜這いに来たつて言うのに、好都合なんて答えて済まないな。どうにも、注意が足りないな」

「ふふ。その方が、君らしいよ」

呆れるような笑顔で鏡がいう。

また、失敗したと明も苦笑する。

「さて、謎を解消していくとするか」

「敵の能力に関して、お互に思うところを話しておきましょう。

といつても、互いに考えていることはそう遠くないと思うのだけど」

「そうだな。『フロアマスター』と黒木が言っていたことを考えるとあのフィールド_{けんない}圈内の設定をある程度自由に変更できる能力といつたどこが妥当だな」

ある程度自由に変更できると言つのはアキラの推測でしかないのだが、システムを完全に掌握しているのであればそもそも戦闘などせずにこちらのデータを抹消すればいい話だ。わざわざ本人が出向いてきたのは単にサディストか狂人という可能性もあるが、そもそもできないと考えるのが妥当な線だろう。

「その範囲で勝敗の条件を一般的な時間無制限のサバイバル戦から、時間制に変更したと考えられるわね。あと、私たちの出現位置に関しては、相手が操作できるランダムといった感じでしょうね」

「出現位置がばらばらなら、追加の人員を雇う意味はなさそうだな。数が多ければいいと言うものではないが」

「そうね、合流するまでに複体に阻まれることになるでしょうし半端な強さの人間では死ぬだけだね」

「複体の方は『支配者_{ドミネーター}』の能力か。無制限に出てくるように思えたが、同時に出てくるのは本体を含めて六体までだったな」

「それ以上出て来ない、という確証はないけど使ってこないとすることは出来ないと考へてもおかしくは無いわね。希望的観測でしかなければ」

「だが、俺たちがやつていることだつて結局は希望的観測なんだ。今更、偶然や憶測が一つ増えたって大して変わらないぞ」

「小さな偶然でもたくさん集まればそれは十分奇跡といえるや。さて、ブリーフィングはこんなところかな」

「ああ。決戦は明日。今日は、こんなとじゆうじよつ」

「そうね。では、私は君の部屋を借りることにする。お休み」

「どうやら鏡は泊まっていくつもりらしい。明日、作戦行動と共にすることを考えれば効率的ではあるが、あまりにも無防備な態度ではある。

「はあ、わかつたよ。俺はリビングのソファで寝るから勝手にしろ」「そうして、夜は更けていくのであった。

外部の騒動から時間が経ち一段落した今、水月は考えていた。

仮想空間上では、腐敗や成長という概念が存在しないために汚れることは無いのだが、毎日同じ服は女の子としてはいかがなものかと。

「これはこれで、すごく可愛いんだけどね……」

月明かりとガス灯のぼんやりとした明りに受ける洋館のテラスには、白いドレスの少女と一人の黒服の男がいた。

少女こと水月は例によつて、木製のラウンドテーブルでゆつたりと紅茶を口に運ぶ。

「どうなされた、我が女神よ」

「ちょっとね。それから、私はあなたに崇拜されたいとは思つていよい。できれば、水月って呼んで欲しいんだけど。だめかな?」

「望むとあらば、答えましょ。水月様」

スースイ姿で恭しく礼をしながら黒木が言う。

「水月様つていうのも何か違うんだけど。まあ、いいか」

男こと、黒木智樹がこういう人物であることは、大分前から理解していたのでそれをたしなめることは諦めていた。表面上は、狂っている人物にしか見えないが、アビリティに『共感』^{シンパシー}によって内面がある程度理解できる彼女には、今の彼をただの狂人と断定することができないでいた。

「なんで、私を殺さなかつたの?」

「神を殺すことなど、誰にできましょ。うか」

水月が、彼の統括するエリアに侵入したあの日。

彼の目には、本当に神が舞い降りたように映っていたのだ。

そのとき既に半狂人であり理性と狂気の狭間で揺れ動いていた彼であつたが、彼女の前では幾分理性的でいることができていた。そういう意味でなら、彼女が彼にとつての女神であるというのは間違つていなかつた。

「今日浸入してきた入たちは、どうなつたの？」

少し大きくなつた声で水月が質問する。彼女にとつて、他のことなど大した意味を持つていなかつた。

「撃退しておきましたが、又、来るかもしません。そのときは、どんな手を使ってでもあなたをお守りいたします。我が女神よ、自身が原因でここに彼らが来ているとは考えもしないで黒木が言う。そして、そんな彼に死ねなどと水月が言うことができるわけも無い。先程言つて、もう彼女のことを女神と呼んでいる彼にどこまで理性が期待できるのだろうか。

それでも、ときたまやつてくる海賊連中から守つてもらつていると、いう側面もあるのだ。そして、ここに閉じ込められてこそいるが、彼らに捕まることや殺されることに比べれば、現状は破格の待遇だつた。

「できるなら、彼らとは殺し合わないで」

結局、水月の口から出てきたのはそんな言葉だつた。

行動を共にしたテロリストと人質が犯人と結託するという心理に近いのかもしれない。いつそ、彼が乱暴に扱ってくれれば恨むこともできたのだろうが、そんな気持ちは沸いてこなかつた。

「可能な限り努力はします。しかし、手加減してどうにかできる相手ではないとだけ、言つておきます」

自身を神と言いながら、限界があると吐露している彼は、結局は人間なのだろう。

「結局、あなたは何を望んでいるの？」

それは、水月の心にふと沸いた疑問であつた。

「愛ある死でしょうか？」

それだけ言つと黒木はその場から消え去るのだった。

これは自分の過去の夢だ。

そうであると明がはつきりと解かるのは水月が彼の隣にいたからだ。夕暮れの校舎、制服姿の寝ぼけた彼を振り起こす声が聞こえる。

「そろそろ、起きてよ。もう、放課後だよ」

学校指定の紺ブレザーと白ニットスカート姿の水月が明を振り動かす。

「そんな時間か。どうせ起こすなりもつ少し早くして欲しかったんだが」

「ふふ。寝顔がすぐ可愛かったので、ずっと観察させてもらいました」

照れるように笑う水月は小動物を思わせる。明としては、自分の寝顔なんかよりも彼女のじぐわー一つ一つの方が余程可愛らしこと/or思つていた。

「なんにせよ、起こしてくれてありがとう。帰るとするか」

「本当に仲がいいな、君たちは」

同じく学校指定のブレザー姿の少女、神代鏡だ。

退屈そう後ろに机に腰掛けたが、明が起きたのを確認すると机の上に横になっていた黒いカバンを持ち上げる。別段、彼女は視力が悪い訳ではないのだが、掛けているとなんとなく知的に見えるという自論からこのときは眼鏡を掛けていた。

「なんだ鏡もいたのか。律儀に待つていいのはいいが、それだと親切なんだか不親切なんだかわからんぞ」

寝起きの頭を動かしながら伸びをする明。

「なに、新種の生物を観察する課題があつてね。親切心とは関係なく、観察しなくてはならなかつたのだよ」

机から降りて、大げさに言う彼女はどこか楽しげであった。

「水月に遠慮なんかしないで、起せいばよかつたのに。友達思いの奴だな」

多少毒が効いた発言ではあつたが、彼女なりの「冗談であると理解しているので明としては特に気にはならなかつた。

「そういうたき遣いだつたとしても、言わぬが花と言つものだよ」

「それもそうか。行こうぜ」

「ああ。行くとしよう」

そういうて鏡と明は教室を後にする。

「もう、私を置いて行かないでよ」

そして、最後に取り残された水月が白いミニスカートを揺らし追い掛けるというのがいつもの流れだつた。

「今日は平治がセツトじやないんだな」
ぽんやり歩きつつ明が言った。

「君ではあるまいし、いつも一緒にいる訳で無いよ。何でも、結婚するという話らしい。しかも、相手は社長令嬢とのことだ」

これに答えたのは鏡。

「平治君、もてもてだね」

そして、最後に様子をうかがいながら言葉を選ぶのが水月だつた。水月を真ん中に、左右にそれぞれ鏡、明という並びで季節はずれの桜並木を歩く三人。季節になればなかなか見ごたえのある景色なのだが、校門から校舎までの距離がやたら長いので学生からはあまり人気がない場所でもあつた。

「相変わらずトゲがある言い方だな、鏡」

「なあに、ただの愛憎表現だ。好きなように受け取ってくれたまえ」

「鏡は本当に、素直じやないんだから」

苦笑しながら水月がいう。鏡は素直じやないというよりは、単に天邪鬼なのかもしれないが純粋な彼女にはそう映つていた。

「愛情ではなく、愛憎っていうあたりが実に鏡らしいよ」

「人間の感情は、愛だけではできていないよ。かわいさ余つて憎さが百倍などという格言ができてしまつていいだ」

「鏡は、難しく考えすぎているよ。私は、好きなら好きでいいと思

うよ

姉が妹に教えるかのような口調で、水月が鏡に答える。

「逆に、水月は単純すぎると思つた。少しばかり見習つてみたらどうだ」

「そんなこと言われても、難しいことはわからないよ」

「明も、あんまりいじめてやるな。かわいそうじゃないか」

「いじめの元凶がそれをいいますか！ で、何で俺を待つてたんだ？」

「何、ガーディアンの討伐をしようと思つてね。当然、参加してくれるな？」

「ガーディアン討伐か。腕が鳴るな」

早々と進路を『電腦技術研究所』のに決めて暇を持て余していた十一月、明としてはこの提案は渡りに船であった。

「緊張する分を差し引いても、格下相手のミッションだ。腕など鳴るわけが無いだろう」

そういう鏡の声も楽しげだ。

三人が通うのは、最新技術を試験的に利用した実験校の宗光学園だった。ここは、仮想における仕官学校的な役割を果たしている電研に対しても多くの人材を輩出している学校であった。そんな学校に通う彼らとしては、ガーディアン討伐ミッションはちょっとした冒険のつもりであった。セーフティがあるエリアでならば、ゲームとしての『GENESIS』ならば、彼らは既に軍人と大差ない水準に達していた。

もっとも、仮想の軍隊は、現実の軍隊とは異なり寄せ集めの人材が形式的に構成している組織なので、こうした学生やゲームのヘビーユーザーなどに対して実力の逆転現象がしばしば起きていた。仮想の治安維持が目的としているが、実働部隊以外は大した戦力では無く、仕事をしているという事実のみが重要なのであった。

「……吊り橋効果」

ぼそりと、水月が何かつぶやくが小さすぎて聞き取れない。

「やつぱり、命懸けは嫌か？ 無理強いはしないぞ、水月」
「違う、違うよ。わ、私も参加するよ！」

慌てた様子で話す彼女の姿も、いつものことかと受け流す一人。水月は頭が悪い訳ではないのだが、行動が論理的というよりは直感的であるためにいわゆる天然であると認識されていた。

「よし、全員参加だな。決戦は、明日だ」

興奮を隠しきれない様子なのは、明。

「ただの思い出作りよ。決戦なんて大したものではないわ」
落ち着いた様子、でも顔が笑っているのは、鏡。

「みんなが無事に作戦が成功しますように」

不安を抱えながらも、それ以上の期待を抱いているのが水月。三者三様といった様子で意見を述べ、並木を抜けそれぞれの家路を用指すのであった。

「手紙か」

寝ている間にカバンの中に入れられたのであらう手紙を光に透かす。表にも裏にも、名前は書いていなかつた。内容は、よく言えば少し詩的な愛の言葉と呼び出しのメッセージ。かなり意地悪く解釈すれば痛い文章と果たし状。とりあえず、後者の方であると思つことで心が少し軽くなつた。

「明日、放課後、待つ、校舎裏で、か」

ポエムを解読して、事実だけ読み取るとそんな内容だつた。愛の告白だと考へると胃が痛くなるが、一昔前の不良漫画にあるような呼び出しだと思うとかなり落ち着いた。今時、こんな古風なやり方をしてくる人間は一体どんな姿をしているのだらうと思いを巡らせてみるが答えは出ない。

夢の中のぼやけた思考は、次の断片へと意識を映す。

上の空、という表現が適切な顔で明は授業を受けていた。

一体どこの誰が、何の目的で、あんなものを渡してきたのか。答

えの出ない思考の迷宮で永遠と時間だけが過ぎていく。実際には、答えが解かっていてもそれを認めたくないからこそ別の答えを探しているのかもしれないが、手紙を出してきそうな人物に心当たりは無かった。

気が付けば、放課後。

約束の時間が迫っている。

ふらふらとした足取りで、目的地を目指す。

その日一日、そんな調子の彼を仲間は大いに不振がっていた。それでだませたのかは解からないが水月と鏡にはガーディアン討伐が気になつて浮ついていると説明してあつた。

「P.I.T全盛の時代に手紙なんて酔狂なことをするやつが、この学園にいたとは……」

手紙の内容としては告白などを期待したいところはあるが、明には自分自身とその状況を結びつけることが出来なかつた。そもそも、相手がわからない。何かの罰ゲームに巻き込まれただけという可能性もある。

「何にせよ、確認しないと事実はわからないか」

意味のない自分自身の推論を捨て、腑抜けた顔をたたいて気合を入れる。

そうして辿り着いた目的地である、校舎裏。

そこにいたのは、鏡だつた。

「まさか、鏡だつたのか？」

「なんのこと？ 私はここに用があつただけなのだけど」

落ち着いているとも、照れ隠しとも取れるような言動だつた。

「用事、つて俺が関つてくる用事じやないのか？」

(鏡ではない？)

「私は、掃除当番だつたからごみを燃やしに来たのだけど。むしろ、君が私に用があつたりするわけではないよね？」

校舎裏は、木々が豊かで確かにきれいな場所でもあつたが、その一角には焼却炉しようきやくろがあり人気が無い場所でもある。そして、鏡の言動

が誘導ではないとするのなら。

「ここにいるのはただの偶然だよ。色々とあってね」

緊張が解けて疲れが噴出した明は、手近な木に寄りかかる。

「なら、色々ついでにサボリに付き合つてくれると嬉しい」

そういうて、鏡が木に寄りかかる明に近付く。しかし、踏み出した一步は石にぶつかって明に向かい倒れることになる鏡。明の声を鏡の唇がふさぐ事となり、彼女の体は明にぶつかり事なきを得る。しばしの沈黙の後、二人は離れるが意図せず向き合つことになり。声も無く、呆然と見つめあう短い時間。

彼女の黒く澄んだ瞳に、引き込まれそうになる。

「……すまんな。だが、君にとつて幸運な偶然だ」

「……おづ、そうだな」

鏡の悪戯っぽい笑顔の後に、思いきり笑われた。

ぱうっとした明の耳に駆け出すような足音が聞こえる。呆けた意識の中で、何かを追うように走り出す鏡の後ろ姿を見送った。そして、結局その日は手紙の主と明がそこで会つことは無かつた。

よじれるように場面が切り替わる。

大切な何かをすつ飛ばしているのかもしないが、夢などと言つものに整合性を求めることが自体がナンセンスと言つものだらう。今思えば、彼らにとつて因縁の場所ともいえる国内ブロックのうち511でそれは起きていた。戦闘の傷跡で、更地になりつつある市街地で交戦をする四体のAA。

そこにいる明は意識を切り替えて、決戦に臨んでいた。

三対一という状況ではあるが、相手は決して弱くは無い。

明の正確な射撃を見切つているとでも言つよつた動きで全て回避し、三人がかりの近接戦闘ですら確実に勝てるという保証は無く。プレッシャーを感じていてそれを差し引いても厳しい戦いだった。

そして、油断すれば死が待つという現実は学生の身である彼らには少々荷が重かった。

A.I.が操作するガーディアン、アークエンジニアは良くも悪くも機械的な動きをしていました。それは先読みがしやすい反面、こちらが操作を誤れば、正確な攻撃で的確に破壊されることを意味していたからだ。

「水月はそのまま支援を頼む、しばらくは俺と鏡が引き付ける」オープントレーニング回線ごとに指示を飛ばす明と鏡は、フェアリーとウイザードで挟み撃ちにする形でアークエンジニアと近接戦闘を重ねる。同士討ちを避けるために距離を置いて隙をうかがうのは水月が駆る白いウインディーネ。

ウイザードが剣と電気を武器として扱うAAであるように、ウインディーネは水を自身の剣や盾として扱う機体だ。AAの基本的なデザインは、水で作られた巫女みことでもいったところだろうか。どこか和服を思わせるひらひらした装束しようそくに、幾重もの水のヴェールのような武装を纏う姿は、踊り子かわいといった方が近いかもしれない。

踊るような華麗かわいな動きで翻弄ほんろうしつつ、時に盾を作り攻撃を防ぎ、剣や槍を以つて攻撃をする水月。

三角形のフォーメーションを基本とした三人の連携は決して悪くはない。途切れない攻撃が繰り出されてはいるが、それらはことごとくいなされ避けられていた。

「事前情報よりも、かなり強いようだな。どうする、明隊長」こういう余裕が無いときは、鏡の軽口が精神を安定させてくれる。いらだつていた思考を冷ましあえて大きな声で返答する明。

「隊長は止める鏡。そうだな十秒後に時間差攻撃でも仕掛けてみるか。カウントダウンをセットしてくれ。タイミングをずらして俺が仕留める」

「了解したよ、明」「了解した」

視界の脇に投射されるカウントダウンの数字が時を刻んでいく。そもそも、一体が両サイドから攻撃して、残る一人が常に背後を取る布陣であるにも拘らず相手が未だに破壊されていないという現状

がイレギュラーなのだ。時が経つにつれ、戦いの興奮は次第に薄れていき、逆に死の恐怖が頭をよぎる。

早く敵を倒して、終わらせたいという焦りが生まれていた。

カウントがゼロになり、両サイドから薙ぎ払われる水の槍と大剣。二人掛かりの必殺の攻撃を畠返りするようにかわしたアークエンジエルを叩き伏せるようにフェアリーが剣を振りかぶる。

上下逆さまに向き合うフェアリーとアークエンジェル。

飛び掛るよう切り付ける一閃は、ひらりと身を交わされる。即座に反撃へと転じた天使の突きを、もう一本の剣でいなすフェアリー。

しかし、「いなした腕」と突きから蹴りへの連続技で吹き飛ばされる。真横に吹き飛ばされた直後に、ミカエルが跳躍。

弓を引くように剣を構えたアークエンジェルが、眼前に迫る。

直後の死を予感し、明の体が硬直する。

機械であるAIからは殺気が感じられないが、それでも恐怖に身がすくむ。

（死ぬ、こんなところで）

明の目前に迫る銀の大剣。

それは、断頭台の刃のように無慈悲に迫る。

「そんなこと、させない『Blue javelin』（青い投槍）」

ARMによつて高速かつ自動化された動きが彼女の意思を反映して再現される。無意識に動いた水月の体が槍を投げ、アークエンジエルの背後から突き抜ける。そして、直後に響く戦闘終了を告げるシステムアナウンスの機械音声。

【THE END（戦闘終了）】

そして、視界がぐにゃりと歪む。

「……明の馬鹿」

小さくて明には聞き取れなかつた声を最後に彼女は消えた。そうしている間に水月の位相が変わり仮想の奥へと取り込まれた。もつと

も、そのときはそんなものが存在しているとは明にも鏡にも理解は出来なかつたのだが。

取り残された二人が何かを叫んでいるが、言葉としての意味を成さない。

視界が崩れるようにぼやけていく。

そう、これは夢の終わり。

そうして、明の意識は現実へと引き戻された。

「……鏡か。懐かしい夢をみたよ。俺たちの新しい始まりの日だ」

「あの日は、日常が終わった日でしょ」

「失つたものも多いけど、同時に得たものもあるだろ」

「そんなもの……」

ないと言い掛けで、鏡が口^ヒもる。自分自身の本当の気持ちに気付いたのは、あの日があつたからなのだ。そういうた意味でなら、何も無かつたとは言い切れなかつた。

「俺は、何も無い日常つてやつが本当に大切なだと理解したよ。当たり前に繰り返すと思っていたことが、次の瞬間にはなくなつてしまふかもしぬいものなんだと痛感させられた」

「そうね」

一瞬、自分の考えを読まれたのかと思つたが、見当違ひの返答に鏡は安堵する。

「さて、行くとしようか。俺は、そこのソファから入るとする。鏡も好きなところから勝手に入れ」

朝日を背に明が覚悟を決める。

気合を入れるために顔を一、三回ほど自分で叩き、ソファに座る。

戦闘は毎回命懸けではあるが、実戦でここまで相手と実力が伯仲したのは始めてのことだつた。積み重ねてきた自信、改めて実感した恐怖、相手に打ち勝ちたいという興奮、そして、プレッシャーから来る緊張といった様々なものを胸に彼は仮想へと突入する。

『Access』のコマンドを思考デバイス経由で転送し明は決戦

の地へと向かつた。

「こうして見ると眠つてゐるよつにしか見えないのね」

鏡の黒く澄んだ瞳が明を見つめる。

ソファに座り、意識を仮想に沈めた彼は死んだように動かない。そもそも、この状態を現代の医学において植物人間とすべきか生きていると定義するのかは不明だ。動かない明の唇を彼女のしなやかな指がなぞる。

「これくらいなら、許されるよね」

それは死を賭す代償としては安過ぎるものであり、しかし、彼女にとつては至高とも言える宝物だった。

静かに彼女は明の唇に顔を近づけさせていく。

ゆっくり、彼女のとつては永劫とも思える時間を掛けて、互いの距離が縮まっていく。

「気付いてくれない君が、悪いんだよ」

鏡の震える唇が、閉じられた唇に重なる。

触れるような、ささやかな、それでも彼女にとつては大きな意味を持つたキス。

息が熱い、胸が苦しい、心が痛かつた。

しかし、それ以上の喜びが鏡の感情を埋め尽くす。

静寂が訪れるが、彼女の心臓はうるさいくらいに鼓動している。

「……あなた一人だけには、しないから。『Access』（接続）

鏡は、大型のソファに座る明の隣に腰掛け意識を仮想へと没入させる。

決意を胸に、最後かもしれない戦いへと向かつた。

1 - 3 Opt (後書き)

まだだ、まだ終わらじよ。 (9月8日最終更新。)

1 - 4 Start (前書き)

やつとたゞり着いた答え。でも、これは終わりではない。きっと新しい始まりなんだ。

「今日くらいは、認めてあげる」

「『めんね、鏡。でも、嬉しいから』

04 Start

明の視界が一瞬、白い光に包まれる。

【MISSION START（任務開始）】

視覚エフェクトと同時にシステムのアナウンスが響き渡る。開始地点は、前回とは異なり石畳の床。視界を埋め尽くすのは、無数の白い石柱とキューブ状の石。それらが紡ぎだすのは視界の果てまで連なる螺旋の階段。そして、それ自身が巨大な塔の内部であった。レーダーの反応によれば黒木はこの塔の頂上にいる。

「登つてこい、つてか。本当に神様気取りだな」
垂直に加速し、塔を一直線に上昇していくフェアリー。

視線の先には、出現しつつある三体のケルビム。モザイクのようにぼやけていたAAの輪郭が徐々に形となつていく。ヒット判定が出るするタイミングを見抜き、プラズマライフルとリニアライフルをしこたま撃ち込んでいく。しかし、こんな程度で終わってくれる敵ではなかつた。細い塔の内部でさらなる増援が五体出現する。

「出し惜しみはしない。何体でも、何度でも、撃墜してやるよ！」
脇の下に隠された二本のサブarmeを展開して、四本の腕に一本の剣と一丁の銃を構え文字通り阿修羅の如く敵に向かう。

背面部のブースターをさらに吹かして、上昇速度を上げていくフェアリー。

人間の反応速度の限界ともいいくべき速さで戦う彼は、鬼神あるいは、羅刹らせつとでも言うべきだろうか。右から左から次々と出現する増援を、切り捨て、打ち付け、叩き伏せ、撃ち抜き、破壊し葬り去る。後方から迫る敵も何体かいたが全て背面撃ちでこれを撃破する。ポ

ツプアップの瞬間と初動のモーションさえ視認できれば、この程度のことは不可能な芸当ではなかつた。

フェアリーを駆り明は日の前に守り手がそもそも存在しないかのようにただ一直線に進んでいく。一分と立たない間に撃墜した数はもう何十体になるだろうか。

「お前が、本体がああつ！」

正面にいた複体を唐竹割に叩き切り、その先にいるケルビムを日指す。

もう何体破壊したのかも覚えていなかつた。

視界の先には頂上が見え、終わりが見えなかつた戦いも一段落を迎える。塔の側面にあつた空洞を抜けると狭く薄暗い視界が一気に開け、神の座とも言つべき場所に辿り着く。塔の頂上に向かい迂回してそこへと降り立つ。

そこにいたのは、探し求めていた敵。

白い神の化身、あるいは仮想でならば本当に神なのかもしれない。

「歓迎しますよ。あなたこそが、私の求めていた神の心を奪う敵いいつ！」

「ちつ」

（予想したタイミングよりも早い！）

こちらの動きに合わせ、奇襲される形で接敵する。

耳障りな金切り声を上げて、ケルビムが踊り掛かる。

鎧迫り合いになる形でフェアリーの持つ一本の剣とケルビムの持つ大剣が交差すると中空で火花を散らして白煙を上げる。ギリギリと音を立てる剣」と円形のフィールドの内側に押し込まれるフェアリー。

「ど、けええええっ」

弾き飛ばすように切り払うが、受け止める大剣の重心を完璧にコントロールして身を翻すケルビムに攻撃の衝撃を完全に殺される。正面に二丁の銃で追い討ちするが、その時には既にこちらの真横にいたケルビムがフェアリーをフィールドの内側へと蹴り飛ばす。

「くそつ」

フェアリーは、剣を地面に突き立て勢いを殺す。大地に爪跡を残し、その場に踏みとどまりつつも一丁の銃で射撃を続けるフェアリー。時に交わし、時に弾丸を弾きケルビムが高速で迫る。

塔の頂上にある円形闘技場のような場所で両者は殺し合つ。

「さあ、さあ、さあ。私の掌の上で、踊り狂つて死ぬがいい」自身に迫る弾丸を叩き落し、切り払い、交わして素通りするかのように気軽さで近付くケルビム。連射性能に乏しいライフルタイプの武装が裏目に出た形だが、そもそもこれだけハイレベルの相手と戦うのであれば、武装の相性など大した意味を成さないだろう。

「つたく、強さも狂つてやがるのかよ。ふざけているのは、脳味噌だけにしておけ」

そんなことは、誰よりも自分自身がよく解かつっていた。それでも、やりきれない思いが明の思考にちらつく。

「神を侮辱した罪、その身で受けるがいい。今度は時間切れなどで逃がしたりはしませんよ、確実にあなたを殺します」

半狂人の黒木の妄言をただ聞いているのもいらだつだけなので、オーブン回線越しに話しかける明。あまり期待はしていないが、上手くいけば相手の注意を逸らすことくらいはできるかもしれない。あるいは、正気に戻すことができるのかもと考えてしまう。

一瞬で縮まる距離を刹那にするべく、機体を相手に向けて加速させる明。明確な策があるわけでは無く自身の力を信じて突進する。

刹那に肉薄した両者は、互いに剣を振る。

巨大な石柱に囲まれた円形フィールドの中央でぶつかり合つ両者。
半身に構え、左で突き出した一本目の剣を打ち落とさせ、返す手首で首を狙う。大地を蹴つて左に飛んだケルビムの頭部を掠める斬撃。敵の回避運動中に右の剣を突き出すが、これも剣で弾かれる。

しかし、突き出した右腕部から伸びたショットアンカーが敵の装甲を捕らえる。

だが、引き寄せる瞬間のワイヤーの硬直時にこれも切断される。

(そう、この瞬間を待っていた)

攻防の中で、明は相手の行動が確実に読めるタイミングをうかがっていた。引き寄せられてできる大きな隙を嫌うのであれば、力が釣り合つ瞬間に合わせ確實にそれを阻止しようとする。そして、その瞬間だけは先読みができる。勝利を確信してサブアームに携えたりニアライフルとプラズマライフルを解き放つ。

ワイヤーの切断と同時にこちらの首をはねる軌道で迫る大剣を、バックステップでかわして離れる瞬間から同時に火を噴く一つの銃口。

「天使という偶像が神を名乗るな。碎けろ」

ガンスマートと砂塵で視界が白く染まる。

弾丸が放たれる瞬間は、互いに肉薄していた。意識レベルで反応ができていたとしてもAAの動きは仮想の中では実体を持つと言つ制約を受けるために実質的には不可避の攻撃である。

「破壊までのタイムラグ、あるいは生存か」

勝利に酔いたいが、しかし、フィールドやシステムに対して介入できる相手であるのならば戦闘終了時のビジュアルエフェクトが発生しない可能性も考慮して様子を見なければならない。

白煙が揺らぎ、霧散していく。

次の瞬間に何体ものケルビムが自身を通過したかのような錯覚に陥る。

(なんだ、この殺氣は)

反射的に突き出した一本の剣。

白煙を突き抜けて振り下ろされる剣。

派手な衝突音を鳴らし、吹き飛ばされるフェアリー。スマートが消えたフィールドの中央では、赤々と燃え立つ剣を手にケルビムが剣術で言うところの残心を取り構えなおす。

「神は死なないのだよ。偶像だと叫ぶのなら、私を破壊してくれたまえ。あはは、あは、あははははは」

狂笑を上げ、黒木の駆るケルビムがゆっくりと上昇する。薄っすらと白煙を上げるその姿はつい先ほど造りだされたかのようにさえ映

る。

光を背に見下ろす神と、その影から反逆する被造物。

それは、キャンバスに描かれた一枚の絵画を思わせる光景であった。

「いいよ、絶望的だな。鏡と合流する前に殺されそうだ」

現状に対して明の考えた可能性は、そもそも自分が相手にしていたのが最初から複体であつたというもの。そうでないのならば、超人的な反応速度で全て防いだといったところだろうか。

乱れた体勢を立て直し、ケルビムを見上げる。

「鏡？　ああ、もう一人の方なら私の人形たちと遊んでいますよ。どうしてなかなか奮戦しておられる」

先程から複体が出現しないのは、おそらく彼女が引き受けているのだろう。

とはいって、複体を任意の地点に出現させることができるのであれば、どんなタイミングでこちらに増援として現れるのかはわからない。不意のポップアップを警戒しないわけにはいかなかつた。

「さあ、足掻いてください。醜くもがき、この私にその命を実感させるのです」

「まるで、あんたが死にたいみたいだな黒木智樹」

「願わくは、私に誇り高き死を、愛のある世界を与えてくれたまえ。この戦いは、神に捧げられる聖なるものなのだよ」

「言われなくとも、くれてやるよ。黒木いいつ！」

口を動かしつつ、武装や機体の設定を変えていく。

二丁の拳銃をホルスターに收め、リニアライフルをオートからマニュアルのリボルバータイプに変更する。この設定では、単純な操作を自分で行わなければならないが、瞬間的な連射速度はオートモードの比ではない。

サブアームを収納して意識を全面の敵のみに集中する。一本の剣を掲げ天上のケルビムへと向かう。敵に近付くにつれて視界が徐々に

ぶれ遠近間を失っていく。

「蜃氣楼か。さつきは、そもそも攻撃した場所にいなかつたってと

「こか」

「『ご答へ』、私にここまでさせた相手は本当に久しぶりですよ」

トリックを一瞬で看破されたと黒木は話す。そして、明の目には幾重にも重なり合った虚像が歪んで見えていた。

有視界による戦闘を諦め、即座に対物センサーを起動。

ケルビムが正面にいることがわかるが、その情報だけでは遠近感を失つて高速接近している現状では致命的である。ケルビムの次の行動を防御ないし回避運動へと誘導するべく左の剣を投擲。

半瞬後に右の剣を投げ飛ばす。

空に響き渡る、金属同士の衝突音。投げつけられた剣を弾き攻撃後の隙に迫るケルビム。このタイミングで自身の本体よりも前に幻影を配置する意味はない。

幻影を配置して攻撃タイミングをずらすことはできるだろうが、残された射撃武器によるろくに狙いもしない射撃であつても、まぐれ当たりをさせる可能性をわざわざ作ることなどしないだらう。

つまり、今このときの明の正面にいるケルビムは本体である可能性が高い。

直後の死を確信して脱力する明。

だが、それは諦めでも絶望でもなく希望への挑戦だった。

「俺は、諦めが悪いんだよッ！」

『Double strike』（二重攻撃）

発言する時間すら惜しい、一瞬の思考と同時に肉体は的確に動きを再現する。瞬時にホルスターからリニアライフルを取り出し、撃鉄(げきてつ)を起こし引き金を引くと同時にさらに撃鉄を起こし銃撃を重ねる。響く銃声は一つ、しかし、放たれた弾丸は二発。居合いで鞘からの抜刀の方が単に刀を振るつよりも早いのと同じ要領で、構えからモーションを起こす方が全体としての速度は上昇する。

神速の攻撃がついに敵を捉える。発射音と同時に着弾音が打ち鳴ら

され、大きく剣を振りかぶったケルビムが爆発したかのように吹き飛ぶ。着弾の白煙に視界が白く染まる。

そして、静寂の中で耳に響く音が聞こえた。

（無力な私は、せめて祈りを捧げよう。この演奏に乗せて）
水月はテラスに脇に置いてあつた大型の黒いグランドピアノを弾いていた。演奏している間は全てを忘れることが出来る彼女であつたが逃避であるとは考えていなかつた。

自身のすぐ隣で起きている現実はどう足搔いても変えられないものでしかなく、黒木が作った空間で響くこの楽器であれば、自分自身の存在を外部に認知させることが出来るかもしれないと考えた。

ピアノに走らせる指は、踊るように鍵盤を叩く。

彼女にブランクはあつたが思考と行動が直結したこの空間では間違いなど起こりようが無かつた。文字通り思つた通りに体が動くのだから。

「私は、ここにいます」

風に乗つて、時に軽快なリズムが、時に切ないメロディが響く。陽光が照らす緑の陽だまりで水月は演奏を続ける。目を瞑つても指は正確に鍵盤を打鍵する。すぐ近くに来ているのだろう、彼女には手に取るようく感じられる彼らの鼓動に息づかい。

もう彼らが戦闘を始めて何分になるだろうか。

今回は、確実に決着が付くのだろう。

どちらから死ぬことによつて。

中度半端な決着などありえないのだ。

ならば、せめて戦いに祈りを捧げこの曲を贈ろう。そんな感情がミズキを突き動かしてゐた。そう、これはこれから現れる死者に対するレクイエムだつた。

どちらが死ぬにしても、死者を送ることが間違つてゐるとは思わなかつた。あるいは、彼女のとつてこれは感情の前払いなのかもしない。

黒木が死んだとしたら、それはつまり仲間との再会を意味していた。喜びの中で彼を労わる事など出来ないだろ？ 明たちが死んでしまった場合は、悲しみで何もする「」ことが出来なくなっていることは容易に想像できた。

だから、彼女は演奏する。

生者ではなく死者のために。

「お願いだから、諦めないで」

耳に響く懐かしい音楽。

確かに水月が奏でていたタイトルの無い曲。

「ここにいたんだな。すぐに助けるから、あと少しだけ待っていてくれ」

明は小さくつぶやくと、武器を構え再度臨戦態勢を取る。

「馬鹿な、この私が直撃だと。ありえない、ありえない、ありえない……」

どさりと地面に落下したケルビムの胸部には、深々と貫かれた跡が見える。戦闘中の機体へのダメージは精神へとファイードバックするはずだが、それ以上に自分が被弾したことシヨックなのか、放心するようありえないといい続ける黒木。

その周りでは、燃え立つように上がる白煙。そして、全身を赤く灼熱させたケルビムが取つた次の行動は闘技場の大地に剣を振り下ろすことだった。

音を立て崩れ落ちる天上の大地。

突然の奇行に明は相手の意図を見失う。

（逃走？ 誇り高い死といった黒木が？）

僅かな迷いが後方に出現した一体のケルビムの攻撃への対処を遅らせる。空中から降るように落下してきた一本の剣を手に何とか斬撃を防ぐが、そこからの蹴りに対し無防備になる。

叩き落される形で、本体に追いつがる。距離が離れた一体には、プラズマライフルを浴びせこれを擊破する。落ちるように加速する眼

前には、新たに五体のケルビムが顕現し、その輪郭を明瞭にしていく。こちらにケルビムが出現したのは、鏡が死んでしまった可能性を意味しているが、彼女の生死に関しては、信じるしかない。どの道、今は眼前の敵に集中するしかないのだ。

目指す相手は、紛い物の天使達の先にいる。

(時間稼ぎではないとするなら、逃走不能な場所での包囲網の形成

左右を石柱やレンガに囲まれたこの場所でならば、瞬間的な逃走は不可能に近い。

下へ下へと降下するケルビムの本体を追うべく、フェアリーはその速度を上げていく。いつ反転し攻勢を仕掛けてくるか、しかし、近付かないことには倒すことはできないという状況への葛藤はあった。それでも、死の恐怖を押し殺し地面へ激突すれば確実に死ぬであろう速度へと明は加速していく。五体の敵を素通りし目指す敵へ、あるいは、罠へと自ら踏み込む。

初動の違いか、縮まらない互いの距離を保ちつつ明は一丁の銃を構えドッキングさせて一つの武器へと再構築する。熱によって揺らぐ視界を補正プログラムで修正、照準をオートで合わせつつ、複数の項目を瞬間に再確認する。

充填率が上昇するにつれて、背面で羽のように広がる。スターの燃焼が大きな蝶の羽ように広がる。

反応炉、出力上昇

充填率88%

視界に投射されるマークーがケルビムの本体へと重なる。伏せ撃ちの姿勢のまま降下するフェアリーの背後からは、追従するかのように五体の敵が続く。

照準固定

充填率98%

砲身が熱を帯び、大気が揺れる。視界の隅では、アルファベットと無数の数式で構成された文字列が認証されたものから続々と過ぎ去

つていく。

エネルギー還流完了

『All readiness』（充足）

充填率108%

僅か一秒足らずの時間で、無数の文字列と記号が頭の中を駆け巡り、認識される毎に処理されていく。

戦いの中で高揚する明の精神を表すかのように、フュアリーの翼の輝きが落下する動きに合わせ羽ばたくかのように燃え盛る。そうしている間にも、一刻と石畳の床が近付いてくる。こちらの狙いに気が付いたのか、ケルビムがその身を反転させフュアリーへと迫る。

赤く燃える剣を振りかぶり、右へ左へと狙いを外す。

充填率118%

電気を帯びたリニアレールガンの砲身加熱が徐々に過熱し、オーバードライブとエラーメッセージが視界に表示されるが無視して充填率をさらに増加させていく。

（一発だけでいい。今度こそ確實に仕留める）
両手に構えた銃を左手に持ち替え、右手には剣を構える。
オートに任せていた照準にマニュアルで補正を掛け、マークーを再度重ねる。

充填率128%

触れる程の距離にまで相手を引き付ける。

（まだ、もう少し）

充填率138%

砲身が熱を帯び、その熱が空気を伝わる。

振るう剣の内側にケルビムが潜り込み、右腕に向けて刃が迫る。（ぎりぎりまで引き付ける）

突き出した右腕に熱を帯びた刃が突き立てられ、装甲が切り裂かると内側から燃えるような痛みが走るが構わず引き金を引く。（今だ！）

ゼロ距離まで密接した銃口を中心に、中空に薄く光の輪が重なる。

直後、光の矢が塔の中を駆け抜ける。

すさまじい衝撃波が、空気を裂き、音を越えて突き抜ける。

ケルビムが防ぐ動作に移る間も無く、音速を優に超えた弾丸がその肉体を貫通する。

光を思わせる速度の弾丸が通過した直後に、止まっていた時が動き出したかのように崩れ行くケルビムの機体。視界に映し出される光景は破壊と創造を体現するかのようなある種の美しさすら垣間見える。

中空に光が迸り、目の前で神の偶像が破壊されていく。

「……これで私も行ける、愛のある世界へ」

システムに死亡したと見做されたケルビムのヒット判定が消えた斬撃が機体を通り過ぎた直後に、ビジュアルエフェクトが表示される。

【THE END（戦闘終了）】

衝撃で吹き飛ぶよりも先に相手が死亡したという、その事実を再認識するがために強引に制動を掛け後方に向き直る。その視線の先では透過した天使の肉体がフェアリーの後方で無数のポリゴンとなって霧散していく。

視界をさえぎるものが消えると青い空が覗く。そこには、このまま死んでもいいと思わせるような美しい景色が広がっていた。雲間から差し込む光は、神の啓示か死に行くものに対する祝福か。

目に映るのは、分厚い雲の隙間から申し込む光。レンブラント光線、あるいは、天使の梯子とも言われる自然現象が見上げる空に広がる。

その眩しさに、明は思わず手を伸ばす。

（ここで死んだら、行き先は天国か地獄か……）

落ちていく意識の中、機体は地面へと近付いていく。戦闘は終わっていても、肉体の延長であるAAが地面に叩きつけられれば、待つているのは死だ。敵を引き付け過ぎたことが完全に裏目に出てしま

まっていた。

「全く最後の最後で詰めが甘いんだね、君は」
塔の下部にある扉を大剣で破壊して、傷だらけのウィザードが現れる。鏡のウィザードが迎え撃つかのようにフニアリーに対し剣を向ける。

「『MAGIC circle』（魔方円）」

口頭で発せられた発動キーにあわせ、ぼろぼろの剣が空を駆け、フニアリーに迫る。

（裏切り？）

一瞬、そんな言葉が明の脳裏に浮かぶがほやけた意識では機体の駆動すらままならない。何も出来ないのならせめて彼女を信じることにした。明の眼前には、複数の剣を基点に浮かべられた淡い光で作られた星を象った魔法陣が浮かぶ。

そして、そこで彼の意識は完全に途切れた。

AAが方陣に包まれると急激に減速し空中に静止する。

「ふう。……お前が死んだら、何にもならないだろうが」
明を受け止めそういう鏡の声はどこか優しさに満ちていた。

「起きたんだね。明」

「ん、鏡か。起こしてくれればよかつたのに」

「何、君に恩を売つておくのもいいと思ってね」

塔の横手にある草原に二人はいた。そして、ここが入り口であると、
『神の（ド）眼』を持つ鏡にはわかっていた。

目を覚ましたばかりで、まだろんた明の頬を風がなでる。

吹き抜ける風が頬をなで、上を見ると鏡の顔が見えた。

「鏡がいるってことは、夢かそれとも死んじまつたか
大の字に横たわる明を見下ろし鏡が笑顔で答える。

「君は、死んでいると肯定して欲しいのかい？ それとも、これまでしてきたことが全て夢であつたと言つて欲しいのかい？ 生きて
いるよ。私も君も」

「そうか、ならいい」

つられて明の顔にも笑顔が浮かぶ。

「それと、介抱してやっていた身としては礼の一つも欲しいところではあるよ」

「俺に恩を売りたいんじゃなかつたのか？」

「礼儀作法と恩義に対する報酬は別問題だよ」「肩をすくめるようにして鏡がいう。

「それもそうか。ありがとう、助かつた」

立ち上がり、礼をして明が答える。

「ふふ、では行くとしようか。バスコードを起動してくれ」

「目の前まで来ていたか。準備がいいことで」

この空間を支配していた黒木を倒したことで、その支配権はデータを自動統合で引き継いだ明のものとなっていた。鏡が足踏みしていたのは、明が起きないことには前に進めなかつたためだつた。

「私の手柄だ。忘れないでくれたまえ」

バスコードを起動すると何も無かつた空間に光り輝くゲートが出現する。

ゲートの開閉は、明がコントロールできるので鏡が一緒に通ることも可能となつていて。ぼやけた光の扉をくぐり、二人はついに目的の場所へと向かうのであつた。

光の中を抜けるとそこには、穏やかな草原の風景が広がつていた。朝日に照らされた木々、古風な洋館。木漏れ日を反射する小さないなテラス。そこに佇み、ピアノを丁度演奏し終えた純白のドレス姿の少女。明と鏡の二人は、その美しさに一瞬自分自身が絵画の世界に入り込んだかのような錯覚を受ける。

「……水月」

彼女が目の前にいると言つ事實を現實のものとするために小さく言葉を紡ぐ。駆け出したい、叫びたい、手を取つて抱き締めたい。様々な感情が入り乱れて、結局出でたのは彼女の名前だった。

「やつと、辿り着いた、ここまで」

既に再会を済ませた鏡は、明と違いあくまでも冷静だつたがそれでも感慨深いものがあり目尻には涙が浮かんでいた。一人に遅れて水月が気付く。

「明、それに、鏡も。……夢じやないんだね」

目元をこすり、目を凝らす水月の姿。くりくりとした彼女の瞳が二人を見つめる。

「現実だよ、これは」

「だそうだぞ、水月」

一步一歩踏みしめるように進む二人。その姿を見ると、堪えきれなくなつたようすに椅子から立ち上がり、水月は一人の下へと駆け出す。「来て、くれたんだ」

涙ながらに走り出すミズキだが、動きづらい服装で慌てて駆け出したためか、草原で盛大に転んでしまう。

「「水月！」」

明と鏡の声が重なる。

「痛いよ、でも、でも、嬉しくて」

膝を付きその場に座り込む水月。目尻に浮かんだ涙は、痛みの所為ではないとわかっているがそれでも目の前の一人には見せたくないて目をこする。そんなようすが微笑ましく思える一人は水月に近付き手を差し伸べる。

「急がなくても、私は逃げたりしないから」

「そそっかしいな、水月は」

笑みを浮かべ水月を待つ二人。照れた笑い声を上げて体を起こす水月。そして、差し出された二つの手を取り、彼女は明と鏡の首に手を回して一人を抱き寄せる。驚き戸惑うが明と鏡は一人で水月を支えてやる。

どちらかだけを選んだわけでも、どちらも選ばない訳ではない。

二人とも一緒にいることを選んだ。

それが彼女のした選択だった。

「ありがとう。私の大好きな一人」

そんな彼女の言葉に明と鏡は顔を見合わせ、答えた。

「どう致しまして、かな」

「当然のことをしたまでよ」

「やっぱり、鏡は素直じやないよ。ふふ」

並んで立つ二人を強く抱き寄せて、微笑を浮かべる水月。
どうしようもなく嬉しくて、嬉し涙だというのは解かっている。
それでも、泣いている顔を見せたくはなかった。

「ねえ、明」

肩越しに語りかけるように水月が話す。

「なんだ、水月」

穏やかな声で答える明。

「これは、お礼だから」

唇と唇が触れ合う、両手で強く引き寄せられる。

「なつ」

突然の行動に驚いた様子の鏡からは、間抜けな声。
当事者の明は唇をふさがれて声が出ない。

「それと、宣戦布告かな」

いたずらっぽい笑みを浮かべて水月が言つ。

自分が知らない間に何が起きているかはわからなかつたが、直感的にこれが一番正しい対処法だと水月は思つた。愛している、なんて言わせないで逆にこちらがお礼だといつてしまえばそれまでの話なのだ。そうすれば、自分を助けるという目的とその対象を愛しているという行動原理が否定されるのだ。少なくとも、助けた時点で結ばれるという選択は無くなる。

つまり、三人の関係はあの日の時点にリセットされる。そして、恋敵の存在を知つてしまつた以上、正々堂々と戦いたいというのが彼女の本心だった。

呆ける一人に水月は微笑みながら、言葉を放つ。

「明、設定の変更をお願い。戻つて、安心したいから」

「ああ、わかった」

一瞬の間を置いて反応した明が即座に設定を変更する。

水月は眼に見えない楔からも、捕われていた関係からも解き放された。

「これを使うのも久しぶりだよ。『Return』（リターン）」

すぐに拡張現実を起動させ、コマンドをシステムに送りつける水月。

「ふふ、先に待っているよ。一人とも」

位相がずれ半透明になりながらミズキが言い、ポリゴンとなつて霧散する。初めから最後まで彼女に振り回される形となつた二人は、しばし見つめ合い大きな声で笑い合つた。

「敵わないな、水月の奴には」

「私の悩みもあんな簡単に解消してくれちゃつて」

この半年で成長したと思っていた彼らだが、まんまと出し抜かれた形だった。

「俺たちも、帰るとするか」

「そうね、夢が覚めないうちに。現実にしましょう」

「これが夢なら、覚めないことを願いたいがな。『Return』

（帰還）

「それから、君に大事な話がある。詳細は、リアルで話すとしよう。

『Return』（帰還）」

砂時計の砂が流れるように少しずつ、しかし、確実に風景が視界の中で解けてゆく。

すぐには振り向いて様子を確認するが、草原もその姿を消していく。崩れ行く草原に、一陣の風が吹く。砂漠を通り抜ける、砂のように何もかもが崩れしていく。

風景も自分自身でさえも、全てに平等に破滅が訪れる。あるいは、破壊ではなく創造なのかもしれないが。

そして、それは水月にとつては長い夢の終わりだった。

白い服を着た少女は、窓から射す光を目に感じる。

短く整えられていた黒髪は、すっかり長髪になつていて、見下ろす先にみえるのは、少しでも力を入れられればすぐにでも折れてしまいそうな細い腕。半年前とは大分変わってしまっていたが、それが今の水月の姿であった。震えるように手を動かし眠い目をこすり、這うように周囲を見渡す。ぼんやりと映る視界に浮かんでくるのは、簡素な部屋でそこにある全てが無機質だった。

白いベッドから起きよつとするが、止めた。彼女の枕元には黄色いひまわりが飾られている。暖かく穏やかな時がゆっくりと流れいくように思えた。だから、今はこの幸せな時間がもう少し続いて欲しいと思つ。目を閉じると、布団のぬくもりに意識をうずめていく。

夢見心地。

はつきりとは、していない意識だつた。だけどそんなに悪い気分ではなかつた。ぼんやりとした視界に、バスケットに詰まれた赤いリンゴが見える。

きつと見舞いの品の一つだらつ。

「……アップルケーキ、食べたいな」

久しぶりに発せられた言葉は、自分がしゃべつたのか、思ったことなのかいまいち判別が付かなかつた。そして、半年もの間、何も食べていなかつた彼女はいたく空腹であるといつのは事実ではあつた。とはいへ、それはあくまで感覚的な問題であり点滴などの処理により栄養は与えられてはいた。

きしむような体を起こし彼女は大好きな友人たちを待つことにした。そう、時間はいくらでも取れるのだ。そして、ここは病院だ。多少の無理はすぐに治してもらえるだらうという打算が彼女の行動を後押ししていた。

なにより夢のような時間はこれで終わりではなく、これから始まるのだから。

それは、現実と虚構^{きょくこう}の狭間に明がみる夢だつた。

そこでは、いつものように水月が現れる。

だが、その先はいつも繰り返される夢とは違っていた。

彼女が微笑んで、自分に手を振っている。

自分を呼ぶ声が聞こえる。

そこでその夢は、終わり田が覚める。

寝起きだからか、意識がいまいちと判然としているらしい。明は、寝ぼけた意識を振りほどくように軽くストレッチして深呼吸をする。変な場所で意識を没入させていたためか、体中がきしむような感じがしていた。なぜ、こんなに硬くなっているかと言うと、実は鏡が抱きついていたために必要以上に負荷が掛かっていたからなのだが、夢を見て少し出遅れた明にはそんなことを知る由も無い。

「あいたたた、体が石のようだ」

鏡がいないところを見ると彼女は先に行つたのである。この部屋にはかすかな残り香を残すのみである。何も言わないでいなくなってしまう辺りは、むしろ彼女らしいとさえ思う明だった。

「鏡は、先に行つたみたいだな。俺も病院に行くとするか」

当たり前だが、返答は無い。どちらかといえばこれは自分自身への確認だった。そして、手早く身支度を済ませ彼は病院へと向かった。

「寝ているのかい。水月」

白いベッドに眠る親しい友人に、鏡が声を掛けるが反応はない。

女神を思わせる美しい髪、同性から見ても嫉妬してしまう調つた顔つきに思わず見とれてしまう。ベッドの脇に置いてあるパイプ椅子から立ち上がり彼女の頬をなでる。柔らかな頬は雪のように白く染み一つ無かった。

「ふふ、くすぐつたいよ、鏡」

「起きていたのか。全く、人が悪い」

「一人を驚かせようと思つて」

目を閉じたままで、水月が答える。

そんな彼女をばつが悪そうな様子でみつめる鏡が口を開く。

「色々と言つて置きたい事があつてね。喋らないでいいから、聞い

て欲しい」

そんな鏡にうなずき、先を促す。

「あの日のことは、偶然ではあった。でも、嬉しかった」
自嘲めいた声で話す鏡。

それをあくまで落ち着いたようすで聞き入る水月。

「だけど、事情を説明する前にいなくなってしまった水月も悪い。
少なくともあの時点では君たちの恋愛を応援するつもりだった」

一呼吸おいて続きを話す鏡。

静寂がどこか耳に優しい。

「そして、今度は懺悔だ。出し抜くつもりで明にキスをしてしま
つた。君に謝つても仕方の無いことかもしれないが、すまなかつた」
しゅんとする鏡を笑顔で見守る水月。

そんな情けない顔を手で叩き気合を入れ直す鏡。

「最後に、水月。あなたの宣戦布告、受けて立つ」
しばしの沈黙。

そして、水月は笑顔で答える。

「受けて立つよ。鏡」

その声は、大きくて無くても決意の込められた確かなものだった。
だから、鏡も答えるように強く言い放つ。

「あの日の続きを始めましょう」

「そうだね。あーあ、鏡が男の子だった良かつたのにな。私だつ
たら、こんななかっこいい人を放つておかないよ」

「ありがとう。水月こそ、男の子だった良かつたのに……」

「それはライバルが減つて嬉しいってことかな。ふふ」

そして、二人は涙ながらに笑顔を浮かべて抱き合つた。

それは、友達との友情の回復の証^{あかし}でもあり、恋敵との戦いに対する決意の涙でもあった。

それから数分後、病室に向かった明の前には黒いスーツ姿の鏡が
いた。扉の横に寄りかかり下を向く彼女の目元は、光の加減が少し

赤く見える。

「なんだ、見舞いの品もないのか。君は」

「それだけ急いできたと受け取って欲しいところだ」

いつものように憎まれ口を叩く一人であったが、その様子は穏やかだった。

「彼女は起きているよ。でも、医者にみせないといけないから手短に済ませるんだね」

「本格的な再会は、後日か。そのときは見舞いの品を持つてくるわ」

「いや、すぐにでも出来るさ。私たちは、繋がっているのだから」「そういうて、胸に付けた十字架型のP.I.Tを握る鏡。

「そうだったな。積もる話は、そっちでだな」

「そういうことだ。彼女にあまり喋らせるなよ」

「わかったよ。それから、まだ言つてなかつたな」

「なんだい。……明」

彼女の小さな決意は、明に気付かれることは無かつた。

しかし、

「ありがとう。お前がいなければ、ここまでくることはできなかつたよ」

その言葉が全てを帳消しにした。

「なに、当然のこととしたまでさ」

彼に必要とされているという事実を再確認できた。それは、彼女にとっては何にもまして喜ばしいことだった。

だから、今はこれでもいいと思つ鏡であつた。

「行つてこい」

そういう彼女の言葉がどこかそつなく聞こえるのは、自分が泣いているのを気付かれたくなつたからだ。そして、こんな時だけは彼が鈍感であると言つことに少し感謝する鏡であつた。

「嬉しいときにも、涙は出るものなんだね」

窓から差し込む朝日が、彼女をあたたかく照らしていた。

「久しぶりのかな、水月」

「おはよっ、だよ。明」

病室での二度目の再会に、水月は笑顔で応じる。

「それもそうか。おはよっ、水月」

「二人の顔を見て、それですごく安心した」

あごの筋肉が衰弱しているためか、短い言葉を選んで話す水月。長くは喋れないというのは彼女の体力的な事情もあるのだろう。

「俺もさ、水月」

「ありがとう、明。これだけは言つておきたかったよ」

拭うことなく涙を流して水月が話す。

強い意志のこもった言葉に、明はただ耳を傾ける。

「はは、ここにくるまでにいろんなことを話そつと思つていたんだけどな。水月の顔を見たらそんなの全部吹っ飛んじゃったよ。なんというか、俺も安心したらひとつ疲れた」

「起きているうちに、呼んでくれないかな」

そういう彼女の視線は、ナースコールのボタンを示している。呼んで欲しいと言つのは、快復したという事実を医者に見せたいからなのだろう。

そして、今の状態では体力的に限界なのだろう。

「わかった。積もる話は、明日の朝に仮想でな」

無邪気な笑みを浮かべ、明は呆けた顔の水月に微笑む。何のことだと、戸惑う彼女に自身の胸に付いた十字架を掲げ次に彼女の胸に付いたP.I.Tを指差す。その意図を理解した彼女も笑顔を返して答える。

そして、明はナースコールのボタンを押す。

そのあとこのとを水月はあまり覚えていなかった。

事情に関しては、職業のこともあります説明できるようなものではなく。ただ単に奇跡が起きたとしか話せないこともあるし、何より仮想での再会が楽しみで病院関係者の話は上の空だったからだ。

仮想の草原で二人は向き合っていた。超えるべき相手であり憎むべき敵であった男の空間であつたが邪魔が入らずに落ち着ける場所としては一番理想的だつた。

「いい場所ですよね、ここは」

小高い丘から見下ろすように風景を眺めて水月は話す。服装はどういう意図があるのか捕われていたときと同じ白い服を着ていた。

「先生を、いや、黒木師を憎んだりはしていないんだな」

グレーのスース姿の明が隣に座つて答える。

丘を吹き抜ける風が心地よい。

「半年も一緒にいれば、愛着も沸くというものです。それに仮初めとはいって、私を愛してくれた人がいた場所ですから」

「一方的な愛でも、そんな風に受け取れるんだな。あいつは、黒木智樹は狂っていたんじゃないのか？」

「私の前では、そうでもなかつたんですよ。多分ですけど、彼は私を通して別の人間を見ていたんだと思います。発言に整合性がないと思つていましたが、彼の言う愛というのはどうやら彼女の妹さんのようでした。ときどき、拡張現実の機能を使って[写真]をみたりしていましたし」

「統合されたデータに[写真]があつたが、なるほど、少し水月に似ていたよ」

「女神などと私のことを言つていましたが、死んだ人間が生き返つたように思つっていたからなんでしょうね。そして、同時に強く愛していたからこそ絶対に手放したくない存在だったのでしょうか」

「あの日を境に、愛つて名前なのかな。この子の[写真]の更新が止まつている。現実を認めたくなかったんだろうな、黒木師は」

確かに可哀想だとは思うが、それでも水月のように憎まないでいることは明にはできなかつた。愛しい存在を知つてるのであればこそ、彼はそれを他人から奪うべきではなかつたと明は思った。しかし、直接の被害者である水月が恨まないと言うのなら、明もそれを

納得することにした。

「私には、相手が考えている。本当のことがわかりますから」「冗談めかして彼女は言つ。しかし、その発言が彼女の持つアビリティによつて裏付けられている事実であるとは明は知らなかつた。だから、冗談めかして明も答える。

「愛しているよ、水月」

「ふふ、それは？ですね」

そんな言葉に対し短く断言する水月。

「はは、その通り」

わかりきつた反応におどけてみせる明だつた。

それから数日後。

普通に喋れる程度には快復した水月がいた。全身がどんと無く白く、服も白いといつのはいまでは見慣れた姿である。そして、そこにあるのは病室のベッドで身を起こし、明たちとの会話に興じる姿だつた。

「それで、これからどうするんだ。電研の方ならいつでも歓迎だ」「進学するのも少し考えたけど、やつぱり鏡に差をつけられたくないから私も電研コースかな」

「何の差だかわからんが、あれからお前たち妙に仲がいいよな。一体何があつたんだ？」

「女の秘密に突っ込んでくるのは、野暮（のば）といつものだよ君」

「玲^{（れい）}」の皮を向きながら、椅子に座ったスース姿の鏡が代わりに答える。そういうわれてしまつと男の身である彼としては黙るしかなかつた。女はざるいなどとは、口が裂けてもいえない小心者の明だつた。

「ふふ、そんな君には玲^{（れい）}」をあげよう

皮を向き終えた玲^{（れい）}をそのまま押し付けられる明。食べるつもりも無いのに皮だけ向くのは迷惑なことこの上ないのと思うが、鏡に食べる気はさらさらないようなのでそのまま食べることにした。

「美味しいな、これ」

立つたまま、しょりしょりとリングゴをむさぼる明を放置して女二人は会話に興じる。

「水月なら、あのへっぽこな男なんてすぐに追い抜けるよ。それに、心配しなくても訓練があるからなんとかなるよ」

「本当に、素直じゃないなあ。鏡は」

「そういう性分なんだ。わかつてくれる人がわかつてくれればそれでいいんだよ」

「はは。お互い、先は長そうだね」

そこには一人して苦笑する女性陣がいた。仕事帰りに立ち寄った明と鏡であつたが配属が違うために途中で合流してここに集まつた。「さつきから気になつていたんだけど。明が持つていてるその大きな袋は何?」

ちょこんと首をかしげてながら疑問を口にする水月。

「そういえば、ここに来る前から持つていたな。一体何なんだ、それは」

リンゴを食べ終えた明が、頭をかきながら勿体もつたいを付けるようにして答える。

「……その、なんだ、見舞いの花束だよ」

袋から大きな花束を取り出して明が抱える。これは水月のお礼に対する明なりのささやかな意趣返しのつもりであつた。

そして、照れた笑みを浮かべながら明は水月に花束をかける。仕方ないなと水月の隣に座る鏡が花束を抱え彼女の前に差し出す。胸の前に差し出された花束を前に香りを楽しみ微笑を浮かべる。

「いい香り。それに、すごくきれい」

明も水月も花の名前などに詳しいわけではなかつた。だが、純粹にきれいであると思えばそれでいいのだらう。花束は病院の近くにあつたフラワーショップで適当に見繕つみつくるてもらつたものだ。

「喜んでもらえて、なによりだ」

素直に喜ばれてしまい、少しづつきらめく明が言う。何がそんな

に嬉しいのかと尋ねたかったが、その理由はおそらく三本のバラだらう。明がフラワーショップの店員に長い間再会を果たせなかつた女性に送る花といったら赤、青、白の三本を中心に花束を渡されたのであつた。彼は、そんなことなど知らないであらうが、その花言葉は、『真実の愛』、『奇跡』、『純潔』だつた。

当の本人にその認識はないが、これは完全にプロポーズであった。

「嬉しいよ、本当に嬉しいよ、明」

もちろん、彼にそんな気が無いのはわかつていたが、嬉しいものは嬉しいのだ。

「今日くらいは、認めてあげる」

立ち上がり、すたすたと病室の外へと歩き出す鏡。

「ごめんね、鏡。でも、嬉しいから」

追求しようとする明に対して、鏡は急に用事を思い出したといふかにもわざといらじり？で黙り込むと病室をあとにした。

「明」

「何だい、水月」

花束をベッドの隣にある花瓶に活けながら明が答える。

「大好き」

「ああ、俺も大好きだよ」

これはまだ恋にはなつていないのである。互いが互いを意識するといつ段階にはまだ少し早いのだから。ねこがじやれているような可愛らしい恋だったが、もどかしさも含めて水月には大切なものだつた。

だから、水月はこの素敵な時間が現実のものであると強く思つ。なぜなら、夢にしておくにはもつたいないほどに世界は美しく色付いているのだから。

1 - 4 Start (後書き)

とつあえず、だいたい小説一本分終了。やはり、第5（6）話からさりすのには無理があつた気がします。一応、この段階で一段落します。楽しんでいただけたなら幸いです。あと感想とかもらえると超喜びます。一応表記を統一したり誤字修正しました。（9月8日[再修正]

2 - 1 Demonstration (前書き)

これは再現でありデモンストレーションなのだろう。その戦いの意味が何たるかを知らしめるための。

「……どうしてこうなった？」

2 - 1 Demonstration

05 Demonstration

夜空と呼ぶには明るくなつた空を白い光が照らし出していく。白一色に染まつていた視界が徐々に輪郭を持ち始める。太陽が作り出す、光の輪から対称の位置には向かい合う機械の天使と黒い金属で造られたドラゴンがいた。

否、正確には A A (avatars agent 意識体代理人) と呼ばれる仮想における一種の戦闘ツールを利用した戦闘が繰り広げられていた。

朝日を背景に、夜の闇が白んでいく。

雲の塊かたまりが視界の端へと流れていくのを合図に両者は肉薄する。

攻撃の軌跡だけが線となつて視界に映る圧倒的な速さの攻防、それでいて互いに致命的な一発を決してもらわない高度な読み合い。一秒毎に十数発の攻撃が空を切り、弾かれ、いなされていく。

まるで、演舞や武道の型をみているかのような鮮やかな戦闘。

しかし、間断なしに続いていた攻防は、黒き竜が後退しながら火球あさを撒き散らすことで一度中断される。

そして、視界が一瞬赤く埋め尽くされた直後、十二翼の天使、ミカエルを模した A A がついに機械の竜の体を捕らえ、銀色に輝く剣を手に切りかかる。黒い竜はその翼をはためかせ後退し、赤々とした炎を吐き出し天使を迎撃する。

間断なしに続く炎の弾丸を軽々とよけつつ、天使がドラゴンに近付いていく。息も付かせぬ攻防が数秒間に渡り、炎がついに天使を捕らえたかに見えた。

しかし、それは天使が自ら深紅の炎に突入したと言つた方が近いだろう。炎を突きぬけ、白銀の天使が剣を振り上げる。その赤を写した白銀しろがねの装甲には、ドラゴンの牙が向かう。牙を向く黒竜と剣を手

にした天使が交錯する。

そして、僅かに先に攻撃を受けたドラゴンはAAの心臓部である「ユニット」に直撃を受けたのか無数の黒い破片となつて砕け散る。これで決まったかに思えたが、飛び散った破片は意思を持っているかのように天使を取り囲み、その欠片は球体状に圧縮されるかのように中央にいるミカエルへと降り注ぐ。

対するミカエルは、剣を高速で振り回し、自身も舞い踊るかのような動きで包围網を突破する。無傷の天使が剣を構えなおし、破片の群れから距離を取る。散らばった黒い欠片は雲のような状態で一箇所に集まり、その姿は黒い天使のようだった。

聖書の中でも様々な形へと姿を変える不定形な存在の悪魔、サタン。聖書をモチーフにした絵画ではミカエルに踏みつけられるサタンがドラゴンとして描かれているものもある。また、サタン自身は高貴な天使であつたが、それゆえに自身こそが神であると思い込み、その傲慢さから追放され悪魔となつた等と諸説ある。

ただ、いずれの話でも共通しているのは、天使、ドラゴン、悪魔などのいずれの姿であつたとしても神に対して仇^{あだ}なす存在として描かれていることだろう。結局のところ、正義の証明とは敵となる存在を作り、それを打ち倒すことしか示すことができないという事実の証左なかもしれないが。

黒い大剣を手にサタンがミカエルに迫る。それはまるで、神に反逆する神話の再現のようであった。『GENESIS』というゲームがAA同士による新たな神話の構築を望んでいふとするのであれば、もしかしたらあつたかもしれない無数の神話の可能性が提示されることとなるだろ^う。

そして、それこそまさに新しい（ジエ）世界の（シ）創生といえるだろ^う。

刃と刃が火花を散らし、両者は向かい合い激突する瞬間に画面が切り替わる。

三つ以上の勢力が交戦する際のエフェクトであるが、この場合『生き残れ』とでも訳した方がいいのだろうか。

そこでもまた画面が暗転しこう続く。

『Ask for your challenge』

「あなたの挑戦をお待ちしております」とでも言つたところであろうか。画面が黒く染まりここでデモムービーは終了する。

時は、午前九時。

場所は電腦技術研究所の、新城大地の研究室にて。グレーのスーツ姿の青年、新城明は、父である新城大地と対面していた。

「と言つわけで、これに参加しる。我が息子よ」

「仕事中にいきなり拉致ひきよつて、ムービー見せて次に言ことつ発言はつげんがそれか。親父」

「ふむ、これでは少々味氣みけいがないか。では、最後まで『鑑賞かんじょうありがとう』ございました、作者の続編にご期待……」

「ああもう、まともじゃない奴に対し、まともな応対を期待した俺が馬鹿ばかだつたよ！　もういいから話を続けてくれ」

「ふふ。よく解かつてゐるではないか、馬鹿息子よ」

不敵に微笑ほほえみ、眼鏡を中指で吊り上げる大地。光の加減で白く輝いて見えるレンズがなにやら悪役染みた雰囲気を醸かもし出す。

「つたぐ。俺が馬鹿ばかだつてところには、きちんと反応するんだな」「さて、先日は困難なミッションを成功させたようだな。まずは、

『苦労。見事な手際てつきだな、新城明中尉』

事務用のデスク越しに白衣を着た大地が少々大きさに言葉を並べる。

「毎度ながら回りくどいな。本題は何だ、親父殿」

呆れるような声で明が答える。罰則ばつそくでもくらうのかとタ力をくくつていた彼であつたが、どうやら違うようである。

「親父ではない、新城大佐と呼べ。とりあえず、さつき見せたものに電研の任務として参加しな。AIが主催する、ゲームとしての『GENESIS』だ」

「仕事ならば拒否するつもりも無いが、何の冗談だ？ その大佐だとか中尉というのは」

「これは、冗談ではない。もともと電研という組織は、神国陸軍の下部組織だ。詳細については書面を確認しろ」

「そういうて、父である新城大地が紙の書面を明に渡す。

「本当に冗談ではないみたいだな。内容や事情は書面に書いてあるのか？」

「そこには、フリー・ランスの傭兵^{よつべい}が正式に軍属になつた旨^{むね}の契約^{けいやく}しか書かれておらんよ。事情はこれから口頭で説明する。回答は保障しないが、即時質問は認めよう」

「了解、とでも言っておけばいいのか」

両手を挙げて降参^{ひきさん}だとでも言つよう応える明。聞き返すだけ無駄だと、納得したのか諦めたのか、言わればすぐにでも敬礼でも何でもするといったようだ。

「そういうことだ。まず、階級に関してだが電研では少尉が一番下の階級だ。そして、私がトップダウンの形で全権を握っている。階級が上がる」とに面倒な仕事が増えて給料が上がるという話だ。今はそれだけ理解しろ」

「ここまで了解した」

姿勢を正し思考した後に明がうなずく。

「では、現在仮想空間で起きている状況を説明しよう。米帝国が独自のアルゴリズムによって旧来の通信網を完全に掌握している現在、各国は秘匿性の高い通信網を独自に手に入れたがっている。そして、仮想がその役割を果たす訳だ」

「それで、ここまで不便な通信網を国家レベルで欲しがるものなのか？」

仮にも上官である人間の話を遮るのは^{さわぎ}は褒められた行為ではないが、即時の質問を認められているのなら、その場で問題を解消しろと言うことなのだろう。そう考えて明は質問をしながら会話を進める。

「不便に感じるのは、お前が奥まで辿り着けていないからだ。よ

りセキュリティレベルの高い階層のフロアに進むにつれて通信や情報のやり取りは逆に自由度が高くなっていく。そして、フロアマスターのツールコードを手に入れることにより、それを独占して利用することが可能になる「

仮想空間上では、個人情報や電子マネーなどを含む『パーソナルデータ』、通行許可証にあたるバスコードや情報系の各種プログラムを含む『ツールコード』、主にAA同士の戦闘などで役に立つ『アビリティ』の三種類に大別されている。

派手で目立ちやすいAAの戦闘に目を奪われがちだが、仮想空間を使用する本来の目的が通信網の確保であることを考えれば、その優先度はツールコードが一番高いのは当然の帰結と言えた。

「つまり、仮想の中で国取りゲームが起きているって理解で間違いないのか？」

「大意は外れていない。帝国の支配からの脱却は、所属する多くの国が望むところであり我々電研は本国である神国の先兵と言つわけだ。そして、この情報は正式に軍属になつたものにしか与えられない。階級かいきゅうを取得していないものには口外しないように」

「状況は理解したが、具体的には何をすればいいんだ？」

「つづむき、短く思案した後で明が疑問を口にする。

「理解が早くて助かる。まあ、白の旅団の元幹部である黒木を撃破したお前に関しては大尉かいきゅうになつてもおかしくないのだが現状は中尉だ。やることと言えば、少尉の者に対する連絡係と上からの作戦命令に従つて行動するだけだ」

「今聞きたくない事実を聞かされた気がするが、要するに今までの仕事に加えて連絡係の仕事が増えた訳だな。ここまで了解した。それで、白の旅団は過去の最大ギルドだろ。解散して消えたんじやないのか？」

わざとらしく呆れた後に、さも大げさに大地が言つ。役者染みた動作がくせになっているためなのか、あるいは、単に息子を馬鹿にしたいだけなのかは不明だつた。

「明中尉、少し考えればわかることだらう。彼らは、いなくなつ

たのではなく単に奥の階層へと進んだのだよ。これは、彼らの敵対勢力であつた黒の旅団に関しても同様のことが言える。君はその片方に対して喧嘩けんかを売つてしまつた訳だ。まあ、注意しり」

「いきなり、気が重くなつた。あんな強さのやつが『ひるごこち』ギルドから狙われるとかお先真つ暗だな」

「全員が全員同様の強さという訳ではないから安心しろ。それと白の教団、あるいは、黒の旅団、それ以外の国家や組織に属する部隊からの勧誘かんゆうがあるかもしけないが全て断るよ。そして、これは最初の命令だ」

大地が静かに強く言い切るその声は、人の上に立つ人間のそれであつた。

「了解しました、大佐」

そんな雰囲気に気圧されたのか、思わず敬礼して返答してしまう明に大地は苦笑する。

「そりそり、言い忘れていたが口調に関してはそこまでこだわる必要は無い。階級も作戦行動以外では形式的な側面が強いからな」

形式上、電研は陸軍の下部組織であるために、こちらに幅はばを利かせようとする輩そちも存在する。そういうた連中から口だしえられないようにするための措置そちとしてか階級が最初から将校扱いとなつていた。とはいって、知識の無い人間が仮想で指揮しきを執ることになつても被害が増えるだけなのでこの方がお互いのためになるといえる。

「てーと、親父殿でいいのか？」

「まあ、身内だけのときはそれでいいが外部のものがいるときはきちんと呼べ。それと、フロアマスターを入手した以上、当面はそのエリアの死守と自身の生存が目下のお前の行動だ。理由はわかるな？」

急にフランクになつた息子を見て苦笑しつつ大地が答える。

「俺自身が、戦争の一部として狙われる側に組み込まれてしまつたということだろ」

「そういうことだ。そして、最後にもう一つ

「これ以上憂鬱な情報を増やしてくれるな、親父」

「パンドラの箱よろしく、最後に残っているのは希望であると相場が決まっているだろうが。そろそろいいだろう、入りたまえ、天

宮水月少尉、神代鏡少尉」

「はい」

と、少し高めの心地よいソプラノボイスが聞こえる。

「は」

と、凛とした声が響く二人の女性が大地の後ろのある扉から入室する。

「彼女たちは、今日付けでお前の部下になる。両手に花だ、良かつたではないか」

「待て、待て、待て。とりあえず、前から違う部署にいても同じ電研に所属していた鏡はともかくとして、何で水月までここにいるんだ？」

「この三人の中では彼女が最初に入隊条件を満たしたわけだ、何も問題は無いだろ。もとより、提携校である宗光学院にいたのだから電研に席はある。それにお前としても知り合いの方が相手ならば管理が楽でいいだろ」

手続き的な問題さえクリアしているのであれば、彼女は貴重な戦力であった。現実の肉体が病み上がりといつても、イメージを理想的な形で再現する仮想空間での行動に支障はないだろうし、水月自身がそれを望んでいるのであれば止める理由はない。

何よりも彼女は言い出したら聞かないのは友人である明と鏡が一番よく知っていた。

「はあ、自分よりも年上の部下よりはましか。それについては、了解しました。しかし、彼女達をわざわざ外で待機させなくてもよかつたのではないか大佐殿」

明としては、せめてもの反撃のつもりだったがそんなことを大地は意にも介さない。

「お前の慌てふためく顔が見たくてわざわざ待つていてもらつた訳だ。面白い顔を楽しませてもらつたよ、ははは。それから彼女たちにはもう事情は説明してあるから追つての説明は不要だ」

「いきなり、信用が無いな。上官なのに下士官よりも説明が後回しかよ」

「そうそう、これ以降は座学ざがくもあるから調査や作戦のスケジュースケジュールは半日単位のものが多くなる。もつとも状況次第でいくらでも変化するが」

「えらくアバウトだな」

「それはそうだろう。作戦は必ず時間通りに終わる保障なんてなく、途中退出も認められず、最悪の場合は死ぬこともありえるのだから」

「当然のことか。理解した」

「まあ、そういうことだ。そして、今更だが大佐である私がこんな説明をしているのは少しばかりの親心と、他の連中がたまたまみんな出払っているからというのと、ささやかな嫌がらせのためだ」

「いらない補足ほそくだつたな。ロートル親父おやじ」

「ふん。AAでの戦闘なんかは若い奴に任せておけばいいのだよ。話は終わりだ、今日はもう帰つていいぞ」

「それでは、失礼しました。大佐」

「本当に失礼だったよ、全く」

楽しげに笑い大地がはき捨てる。

「一言余計です、大佐殿」

「口の減らない中尉殿だな。まあ、頑張れよ馬鹿息子うなが」

用は済んだとばかりに手を振り退室を促す大地。毎度の事ながら、動作がわざとらしく明はからかわれているようで、それが少し不快だつた。

「あばよ、クソ親父」

苛立ちを隠そともせずに親指を下に付き立て、その場を立ち去る明。

「ふふ、失礼しました」

「はは。大佐、失礼しました。……全く、君といつ奴は」
明の後ろに追従する一人は、笑いをかみ殺して退室するのだった。

同日、午後。

電腦技術研究所の一室にて。

「そして、これが俺達に与えられた任務と第一回作戦会議だ」「明は、そういうて書面を提示する。

「案外いい部屋ね」

品定めするように部屋の中を見渡すのは、神代鏡。

「そうですね。三人で使う分にはかなり快適みたいです」

「こちらは単に新しいものに少し興奮したようすの天富水月。

「上官の話は傾聴しきや、お前ら一応は俺の部下だろうが。まあ、実際しようもない作戦会議だけだ」

「要点だけ話せばいいんだよ、君は」

立場としては下であるはずなのに、なぜか偉そうな鏡。形式だけとは言われても、それを盾に偉ぶりたい気持ちが明に無いわけでもなかつたが、気心の知れた相手同士なので変に氣を使わないでいいのは助かつてもいた。

「相変わらずだね、二人とも」

そんな様子を穏やかに見守る水月といった、ここしばらくは見ることができなかつた少々懐かしい光景が繰り広げられていた。

「とりあえず、俺に統率能力が無いのはわかつた。要点は、まあ俺達のチーム名を決めると言うのと、スリーマンセル、つまりは三対三のチーム戦で、各国の組織やギルドの連中が出場する『GENESIS』の大会に出場してこいのことだ」

「ゲームとしての『GENESIS』なら、実戦を何度も経験している私たちが今更やる必要はないのでは?」

「軍隊で下の人間に拒否権は存在しないし、理由を聞いても無駄だ。そもそも上官の俺からして何も知らないんだからな」

「使えない上官ね」

大げさに両手を胸の辺りで上に向け、はき捨てるように言つ鏡。

「ここでも彼女の口の悪さは相変わらずだつた。

「明は上官なんだから、一応は敬^{うやま}おうよ。鏡」

「それ、フォローになつてないからな、水月」

「なら、それに参加して優勝しろとかが作戦ではないのか？」

「それは、別にいいらしい。なんでも基本的には俺達みたいな新人が出るみたいだが、ベテランを出してくる国もあるから確実に優勝できるとは上も考えていないみたいだ」

「参加チームはどうなつているの？」

「米帝国、世界連合、EU共同体、東洋中華圏、神国皇族連、王國連、新ドイツ、共産主義連合国共同体、中東連合あたりが国や共同体として出場しているな。他には古参ギルドとして白の教団や、黒の旅団が出てくるらしいな」

「黒の旅団は犯罪組織じやないの？」

「俺達が、仮想でPKしても裁かれないのと同じで、仮想でのさばつている奴らを裁く法律は存在しない。ある以上彼らは犯罪組織ではないしテロリストとしても扱われない。実質的に同じことをやつていたとしても、だ」

明確な基準がないこそかもしけないが、仮想で行われる戦闘は正義に基づいたものではなくてはならないと明は考えていた。自分を騙す方便かもしれないが、例えば法律による死刑は、結局は法の名を借りた殺人ともいえる。それが肯定されるのは、法律という根拠、あるいは正義という意志がその背景にあるからだろう。

そして、快樂や欲得のために戦闘を行つ『海賊』連中と電研で働く人間の明確な差異は、その意識の違いにある。なぜなら、初めから海賊と自分たちの両者の間に大した差異などないのだから。

「結構な顔ぶれね。それでこそ潰しがいがあるというもののね」

「好戦的だな。まあ、血湧き肉踊るというのは否定しないが」

「こんなことを平然と言えるのは、これが実戦ではなくゲームとし

ての『GENESIS』だからだ。少しあ茶らかのように明がいう。

「物騒だなあ。普通に相手を倒すだけでしょ」

そういう水月の口調こそ穏やかであったが、倒すという断言は倒されるつもりはないということを示しているようにも聞こえた。

「そんなこといつつも、負けるつもりは無いんだな、水月」争いは好まないが、負けるつもりも無いといつことなのだろう。なんだかんだで似たもの同士な三人なのだった。

「ふふ、当然だね」

「接待ではないのだから、負けてやる必要性が無いだろう。君とて、同じ気持ちだろう」

「そうだな、特に神国皇族連には負けたくないな。おやうくあい

つも出てくるだろうし」

「うつ。できれば、当りたくない連中ではある」

自分の腕を軽く抱き締めて、そっぽを向く鏡。彼女や明、そして、三島平治の三人には神国皇族連と少なからぬ因縁があった。

「確か、明と鏡、それから平治君の三人で学院生時代に出場したんだよね？」

「ああ。なかなか個性的な奴らだったよ」

「いつも選民思想の塊がなんかなやり易かつたのだが……。思い出したくも無い」

「そういう言い方をされるとかえって気になるかも。でも、嫌なら無理に話さなくてよいよ。鏡」

「すまないな、水月。気を使わせてしまったようだ」

「はあ。とりあえず、俺たちのチーム名を決めるべ。各自適当に名前を思いついたらマルチボードに記載していけ」

少々強引に明は脱線した話題を修正する。しかし、少しごったことができるから彼が上官に選ばれたのかもしれない。世間では、それを貧乏くじと言つただが。

丁度三人の中間点にホログラムのような四角いボードが浮かび上

がる。拡張現実の機能である第一視点とP.I.T.による情報共有を利
用した、観測する人間の視点に応じた画像を提供するどの方向にも
対応したディスプレイ、^{マルチ}^{ポート}多視覚共有板だ。

思考デバイス越しに、三人が思い思いの意見をマルチボードに書き
込んでは消していく。

そこに書き込まれるのは、『明鏡止水』、『電研の三連星』、『

水月と愉快な仲間たち』、『STARGAZER』、『CYBER

ARTS LABORATORY』、『チーム電腦技術研究所』、

『神国電研』などなど方向性の無い意見が書き込まれていく。

「ブレインストーミングにしても、方向性くらいは決めた方がよ
かつたか？」といふが、この『水月と愉快な仲間たち』はありえな
いだろ」

「可愛いと思つんだけどどなー。だめかな、明？」

「いやいや。可愛い顔でお願いしてもだめだからな、水月」
「むう。君の、『チーム電腦技術研究所』も酷いと思つぞ」
少し拗ねたような声で鏡が明の意見に意義を唱える。

「所属がそのまま、わかりやすいじゃないか」

「じゃあじゃあ、私の明鏡止水つてチーム名もだめなの？ 明と
鏡との名前と私の水の字を使つているんだけど」

「この一つだけ異色なチーム名はそういう理由だったのか。単に
四字熟語がかっこいいとか言う、思春期特有の妄想の類かと思つて
いたぞ」

「私としては、止める、の字が余ることが気になるのだが」

「それは、おまけだよ。鏡」

「けつこうアバウトなのね」

やれやれといった様子で肩をすくめる鏡。

「鏡のだつて、単に横文字使つただけだろ」

「君の神国電研よりは、ましだと思うよ。株式会社じゅああるまい
し」

あくまでも自分のネーミングの方が上である、といふ認識は否定^{にんしき}

しない鏡。まし、とは言いつつも妙な自身で満ち溢れていた。

「じゃあじゃあ、私の電研の三連星はどうかな？」

「俺は、踏み台にされたくないからバスだ」

「そうね、名前の段階で白い奴に負けるのが決まっているし

「それなら、彗星にすればよかつたかな」

ちなみに、最終的にはそちらであっても白いのに負ける運命である。やはり、伊達じやないといふことだらうか。

「まあ、そつちの方向は著作権とか色々と敵が多いからやめとけ。とりあえず埒^らが明かないから決選投票としよう。決まらない場合は、票が入っていないものを消去して行って、これを繰り返す

「ふふ、望むところだ」

勝気な態度を崩さないのは鏡。

「ふふふ。なんか楽しいね」

そして、意味ありげな笑顔が少々怖いのは水月。

「なんだ、その無駄な自信は。一人、一票ずつ分散して入れるようだ。同じのに一つ入れるのは無効だ。一票ずつにすると決まらないだらうし、異論は無いな？」

「わかつたよ」

と水月。

「了解だ」

静かに首肯する鏡。

「じゃあ、始めるところづか」

そして、数分後。

「……どうしてこいつなった？」

両手で頭を抱え、首だけを動かし鏡に話しかける明。

「それは、君がネタで変なのに投票するからだらう……」

同じ心境なのか鏡も少し下を向いてうつむいている。

「直前に真っ向から否定されたものに対してそのまま投票するなどとは誰が予想できるだらうか、いや、できない。まさか、一回田で決まるとは」

「わざわざ反語にしなくても気持ちは理解できるさ。しかし、引き分け狙いなら自分の考えたものに入れるべきだつたな、君は」

「はは、もう過ぎたことや」

「しかし、これが国家代表チームの名前か」

呆れるような、諦めたような声で鏡がいう。

「ありえないことが平氣で起こる、これが事実は小説よりも奇なりといふやつか」

「ありえなくなる原因を作つた君がそれをいつとはね。全く笑えないよ」

「何はともあれ、決定だ」

しばしの沈黙の後で明が答えた。

「大勝利。やつたね」

明を恨みがましい目で見つめる鏡と、よほど嬉しいのか、はしゃぎまわつてブイサインする水月が対照的だつた。こゝしてチーム名は、『水月と愉快な仲間たち』に決定した。

同日、正午。草原には、風が吹き渡り薄い緑色の草がたなびいていた。

先日、フロアマスターである黒木智樹を倒すことによつて手に入れたこの場所は、外界から完全に隔離かくりされた場所であつた。そして、プライバシーが保護されるという側面以上に明はこの場所 자체がそれなりに気に入つていた。

ここが現実世界では失われた風景を再現したものか、あるいは、単に最初から作っていた空間だつたのかは定かではない。また、水月が彼のことを憎み切れない要因の一つとして、彼は狂つてしまつたが、乱暴なことはしなかつたという点があるだらう。

ただ、黒木が言つていた水月が自分の意思でここにいたと言うのは、単に選択肢が無かつたというだけの話だということがわかつてゐた。帰還させてもらえたが、結果的に保護してもらつて、その側面もあつたために嫌悪けんおの対象とはならなかつたらしい。

「…… 1 a」

教会の方から明の耳に声が届く。歌声のような心地よさがあるが、大きさが小さすぎてそれが何かも誰のものであるかも判別が付かなかつた。また、パスコードを水月と鏡には発行しているために彼女たちも自由に立ち入ることができる。リラックスするためにここに来ていた彼だつたが、同じ理由だろうか。

様子を見るために、教会の扉を開ける明。

薄暗い室内に、扉を中央に一列に配置された長椅子、その間にあら通路の先に佇む誰か。

明がゆっくりと歩みを進めると、薄暗い室内にはステンドガラスから光が降り注ぎ、白い服の少女を照らしていることがわかる。

「…… 水月？ いや、黒木愛か？」

一瞬、見間違えたが、以前水月がここで着ていたものと同じ服装をした少女。明の脳内に該当するのは彼女しか思いつかなかつた。

「はじめまして、新城明さん」

スカートを軽く持ち上げ、恭しく礼をして彼女は言つ。

「そして、ようこそ。この世界へ」

室内に反響する声は、どこか冷たく。教会と言つ日常とは切り離された空間の所為か、薄闇ひすやみの中で光を浴びる彼女の姿は、神や靈といつた存在のようにどこか神秘的だつた。

2 - 1 Demonstration (後書き)

先日、読んでいただいたないしアクセスしていただいた方には、申し訳なかつたかもしません。ここから読んでも理解はできなくはないと思っていましたが、やはり冒頭から読んだ方がきちんと盛り上がると思い再編いたしました。（8月18日再修正）

2 - 2 Elimination (前書き)

ここで起じるのは、戦争の縮図。不適格なものは排除され、選ばれた者達だけが力を示す権利を得る。予選、開戦。

「さあ、神聖なる戦場に不適格な者たちには退場を願いましょうか。この私が、直々に排除してあげますよ!」

06 Elimination

少女はお辞儀をしながら言葉を述べる。

「先日は、兄を倒してくださいありがとうございました」

「君から憎まれこそすれ、感謝されることではないよ。しかし、
彼は君が死んだから狂ったのではないのかい？」

違和感とでもいうべきか、何か異質なものを明は彼女から感じていた。あるいは、それは教会という特殊な空間が持つ靈的な何かなのかも知れないと明は感じていた。

「教団員として、殺人を犯し過ぎていたためか、原因は定かではありませんが兄は明確に狂っていました。半端に理性が残っていたために、自責の念から死にたいとも思っていたようです。それに、あなたになら兄を殺す理由もあった」

自身の肉親の話をしているのにも関わらず、その声には感情が全く感じられず、機械を思わせる冷たさだった。

「あいつが、黒木先生が、納得していたとでも言つつもりか」

「死にたかったというよりは、解放されたかったのでしょうか。負の連鎖から」

戦いに勝利し全てを奪い、あるいは、戦いに敗れ全てを奪われ、敵を殺して仲間を殺される。そういうた負の連鎖から生き延びた勝者は、いずれ自分自身の死という形で敗者となるまで繰り返される地獄。ある者は憎悪を、又、ある者は快樂を糧に、この戦いに挑み果てていく。

「それを断ち切るために白の教団に所属していたんじゃないのか？」自称ではあるが、彼らは司法組織であり、その目的は仮想での秩序の構築だろ？

自分と彼らは、電研が公的な組織で白の教団は私的な組織であるということぐらいしか違いは無かつた。バックに国家と言つ後ろ盾がない分、彼らは純粹に実力のみがその存在証明であり、それゆえにその強さには定評があつた。

「今となつては、真意は解かりません。ですが、彼が死にたがっていたのは事実です。疑問に思つのでしたら、水月さんに確認してもらつても構いませんよ」

自分の兄のことであるのに、どこか他人事のように話す彼女。彼が本当に守りたかったのは彼女だったのだろうかと疑問にさえ思える。

「それで、黒木愛が俺にどういった要件なんだ？」

「ですから、黒木智樹の代わりとしてお礼が言いたかつたというのと」

くすり、と彼女は笑つたようにみえたがその表情に相変わらず変化は無い。

「……明様。あなたには、これからお会いすることもあるかと思います。あいさつに参りました」

深く礼をして、顔を上げるとそこには表情の読めない顔がのぞく。ぞくりとするような少し冷たく、そして、怖いくらいに美しい笑顔を浮かべる。

「これから起ころるのは仮想空間上で起こつてゐる戦争の縮図。そして、あなたはそこで力を示さなければならない」

静かにつぶやくと彼女はくるりと反転しその姿がポリゴンとなつて霧散する。

「消えた、いや、『Return』^{リターン}（帰還）したのか？」

「やっぱりここにいたんだね、明」

しばし呆然としていた明に声が掛けられる。

「……水月か」

今度こそ、彼女の姿を認め落ち着きを取り戻す明。

「ふふ。明、なんか難しい顔しているよ」

「なんだそりゃ。どんな顔だよ」

苦笑しながら答える明。

「今みたいな顔だよ。考え事しているときとかは、明はいつもそんな顔だよ。でも今は笑顔になった」

指を口の前に立てて、おどけるように水月は話す。それから、苦笑いだけど、と付け加えるのも忘れなかつた。

「そうか。だけど、俺は黒木師を越えられたのかな」

「少なくとも黒木先生は、あのとき本気なつていたはずだよ。それに、多分だけど彼は明に感謝していたと思う」

明の脳裏に今さつき聞いた言葉が思い出される。

（ですが、彼が死にたがっていたのは事実です。疑問に思つのでしたら、水月さんに確認してもらつても構いませんよ）

「はあ。なんか、それをお前から聞いたら少し楽になつたよ」

「どういたしまして、かな」

「さて、英氣も養つたことだし大会に向けて気合を入れるとするか」

「そういうれば、大会の日程はいつなの？」

「あれ、言つてなかつたか。大会は明日だ」

「そうなんだ。明日つていうと、明後日の前の日のことで、て、ええええつ！」

このとき明は、久しく見ていなかつた水月が驚くと声の場面を叩撃することとなつたのだった。

「セキュリティエリア内での戦闘なんて、何時以来だか」

「君も私も長らく無法遲滞での戦闘に明け暮れていたからね。デスマッチでない戦闘なんてほのぼのとしたことは本当に久しぶりだ」「平和的な戦闘というのも、何か矛盾している気がするけどね」

とは、水月。

「しかし、なんだ、この格好は。改めて見てみるとデザインがこり過ぎて、この格好は。改めて見てみるとデザインがこ

漆黒の生地に金のボタン、肩に白いラインが入っているというと
いつところ以外は割と普通のスーツのように見えなくもない。そし
て、スーツというよりは軍服という表現の方が適切であり、実際に
この制服は先日から電腦技術研究所に正式に導入されたものだつた。

「私としては、男性はまだましなデザインだと思うが」

「そうかな、私は、女の子の制服もすごく可愛いらしくていいデ
ザインだと思うよ」

「いやいや、我々は仮にも神國の陸軍なのであり、可愛いらしさ
は求められないような気がするのだが」

「諦めろ、勧誘のポスターなんかもビジュアルが求められる時代
だ。しかし、なんだ、その一人とも似合つているぞ」

少し横を向き、頬をかきながら明がいう。その視線の先には電腦
技術研究所の新制服に身を包んだ一人の姿が見える。男性の物とは
対照的に女性の制服は純白のブレザータイプの服に黒いラインの入
つた丈の短いプリーツスカートだつた。正式に陸軍の傘下になつた
直後に導入されたらしく、そのデザインには新城大地大佐の趣味が
多分に反映されているというが、真偽の程は定かではない。

「……あ、ありがとう。君もなんだ、悪くない」

照れたように鏡は、そっぽを向きながら小さくつぶやく。

「ふふ。明だつてすごく格好いいよ。お嫁さんに欲しいくらい」
対して水月は少々意味ありげな笑みを浮かべて、社交辞令なのか
本気のかいまいち判別の付かない返答をする。

「俺は男だつて。もらわれるのなら嫁よめじゃなくて婿むこだらうが」

「じゃあ、明は私がもらつてあげるね」

そういうて、腕にしがみつく水月。明と鏡に救出されて以来、水
月は明により以上になつくなつていていた。あるいはそれは、ま
た、離れたくないという心理の表れなのかもしれなかつた。

「ちょ、止めなさいよ、二人とも」

「俺までカウントするな、鏡」

「もう、何が問題なの、鏡。仲間はずれが嫌なら、左側が空いて

いるよ」

すました笑顔で水月が反対側を示す。

「ば、馬鹿。そんなの、は、恥ずかしいじゃないの」

「ふふ、鏡は本当に可愛いなあ。昔よりもすごく可愛くなつたよ

「からかわないでよ、水月」

「まあ、そうかもしれないな。とりあえず、昔よりは取つ付きやすくはなつたな」

「き、君まで悪乗りするな。と、とにかく、会場まで行くぞ」

そういうことですと歩き始める鏡。

「もう。待つてよ、鏡」

一瞬、名残惜しそうな目をして水月が鏡を小走りに追いかける。そして、明はやれやれと溜め息をつき、二人の後に続くのであった。

午前11時30分、国内YCYブロック。

そこには林立する超高層ビルディング、遠目から見ればオブジェに見えるような球体や円錐を組み合わせたようなアーティスティックなデザインの建物。現実には物理的に建築できない透明なツリー上の建物などが立ち並ぶ。大会は、このブロック内のアリーナで行われることになっていた。

「やつと着いたか」

「ヴァーチャルとはいえ、広大すぎるのも考え方ね」

「はあ、はあ。AA化してない状態だとブロック単位の移動でもかなり掛かるんだね。車とか飛行機とかの有難みがよくわかつた気がするよう」

妙に艶めかしく息をらせながら水月がいつ。セキュリティエリアには観戦する民間人もそれなりにいるためにこの場でのAA化は禁止されている。といっても、AA化してはいけないことになつてはいるだけでAAになること自体は可能であるが、そうした場合テロと間違えられ本物の陸軍の一部やら民間のセキュリティ会社を敵に回すことになる。

「おいおい、仮想空間内部での運動なら現実的な肉体への負荷はそこまでないはずだろ。しつかりしろよ、水月」

「私には、どちらが仮想で現実なのかというのは曖昧だから。半年も仮想にいたらそこが現実味を帯びてきて、よく解からなくなつちやつた」

照れたように一人に微笑む水月。

「つたぐ。言つてくれれば、おんぶでもなんでもしてやつたのに」

「そこは、察してあげるべきだらう。この甲斐性なし」

「俺と一緒に付かなかつたお前が言つな、鏡」

「その手があつたんだね。盲点もうてんだつたよ」

ぽんと手を叩き水月がおどけてみせる。といつても、彼女の場合は素でやつている場合が非常に多いのだが。

「そうやつ、ここに一匹都合のいい男がいるんだから。好きに使えばいいんだよ、水月」

「あはは。じゃあ、私は色々とできるチャンスを逃しちやつただ。ちょっと残念」

「何を要求されたんだか多少は気になるが、聞かないでおいてやる。しかし、移動する際に^{トランスポーター}転送のアビリティは欲しいところだよな。AA化とポートエリアやゲートだけでも相当便利だが、瞬間移動には敵わないよな

「無いものねだりしても始まらないだらう。それに、かなり希少なアビリティらしいし持つている相手から奪つにしても難しいだろうね」

「それもそつか。じゃあ、アーナに向かうとするか。確か、チーム毎にポートエリアで待機するんだつたよな」

「……ねえ、少し迂回しない」

「そうだな、急に回り道がしたくなつた」

「二人ともどうしたの？ 颜色が悪いよ」

「いいから急いで、水月」

「いや、もう遅いみたいだ。諦めろ、鏡」

そういうて、こちらに気付いたそぶりの男に視線をくれる明。それを一瞥して、鏡は大きく溜め息をつくのだった。

「あ、あなたは鏡様ではありませんか。おお、あなたにお会いでさるとは、今日という素晴らしい日に感謝を」

純白のスーツ姿に、漆黒の長髪を後ろで縛り、ポニー・テールのようにまとめた男、こと御堂風雅はそう言つと鏡の前で大げさにひざまずく。

「…………うつ。あなたは神国皇族連の」

「あんたは確かに、神国皇族連の」

明と鏡の声が重なる。

「おお。そういうあなたは鏡様のおまけのどなたでしたっけ？」

「…………はあ、あなたの記憶の中での俺の立ち位置がどういうものか説明していただいてどうもありがとうございます。一応、再度名乗ると、新城明中尉だ。学院生時代の大会以来だな」

半ば呆れつつも、こういう面白いやつだと覚えていた自分も人のことは言えないなど明は少し内省していた。

「これは失礼、つい本音が出てしまいました。わたくし私御堂風雅は正直者として」

「本当に失礼だよ、あんた」

妙なデジヤブで少し頭が痛くなつてきた明は、頭を抱えうつむいた。

「お前は、新城明。ここで会つたが百年目、決着をつけるぞ」明がうつむいていると不意に大声で話し掛けられる。そこにいる御堂風雅と全く同じ格好をしているが、髪は少し赤茶けて短くスポーツティな形でまとめられていた。

「めんどうくさいのがきたな。確かに、あんたの弟だつたよな」頭をかきながら明は風雅に尋ねる。

「御堂雷雅、すいさん推参！ 前回は負けたが今回はお前を倒すからな、コテンパンにしてやるからな、覚えとけよ！ 新城明！」

「はいはい、忘れるまでは覚えといてやるよ」

まともに取り合ひのもめんどりであるが、かといって無視するとそれ以上にめんどくさくなるので明は適当に返答をする。

「はあ、君たち兄弟は似たもの同士なのだな。しかし、君たちがいふと言つことは彼女もいるのかい？」

本日、何度もになる溜め息をついて鏡が御堂兄弟に確認する。

「御前のことですか？ おられますよ、すぐそこに」

「新城明様、神代鏡様、久しゆうございました。それと、そここの可愛らしいお嬢様も御機嫌よう。お初お目に掛かります。当方、天正院縁と申します」

そういうて現れたのは、赤と白の模様の生地に金の刺繡を施された和服を纏つた少女。しかし、彼女の顔つきこそあどけないが、黒く長いストレートの髪と落ち着いた立ち振る舞いのせいいかむしろ大女の女性を思わせる艶やかさを持つていた。

「わ、わ、私は天宮水月と申します。よ、よろしくお願ひします」
彼女の持つ高貴な雰囲気に緊張してしまったのか、水月がどもりながら天正院に名乗る。実際に彼女の場合、貴族であり本物のお嬢様であつた訳であり初対面であればこついつた反応をしてしまうのも無理もないことなのかもしれない。

「あら、あなたが。新城様や神代様のお話と一緒に、主人からよくお聞きしております」

「はあ、主人ですか。天正院さん、すぐ若いのにもう結婚なされていいるんですね」

気の抜けた顔で水月が聞き返す。

「はい。三島平治様とは、懇意にお付き合いをさせていただいたております。天宮様も、夫のご学友の方だとお聞き及んでいます」

「なるほど、だからあいつはこの大会のメンバーから辞退したのか」

「なんだかんだで、争い」との嫌いな方ですから。私があなた方かという選択がしたくなかったのでしょうか」

「かもな。あいつは本当にいやつだからな」

「ええ。一度は没落^{ぼつらく}しかけた天正院家がこうして再興できたのも、全ては平治様のご助力があつてのことです。私は、本当にいい夫を持ちました」

ちなみに彼女と三島が違う苗字である理由は、元の家柄が良かつたために三島の性を受け入れたくないと言う両親の激しい抵抗を受けたためだ。旧家のしがらみとでもところであろうが、当の本人たちはそんなに気にしていないようである。

「いい人止まりで終わってしまうタイプだと思つていたが、まさか貴女とくつつくとは思いませんでしたよ」

いつものように少々トゲがある言い方をする鏡だが、当人には無自覚なようだつた。しかし、そんな発言など、どこ吹く風としている天正院。もつとも彼女の場合、鏡はこういう性格であるとうこともある程度理解した上での対応だつた。

「ふふ、思えば運命的な出会いでした。戦場で互いに死力をつくし、そして、結ばれることができたのかから」

「なんだかんだで、弱くはないからなあ平治も。俺には一度も勝つていなかつた」

「そうだな、一般的な水準から見れば三島は十分強いな」
そんな少し毒を含んだような一人の言い方も、妄想でトリップ仕掛けている彼女には意味がないようだつた。

「そう、私とあの方は運命の赤い糸で結ばれていますの」「つと、いけない。御前、そろそろ時間です」

そう言ってトリップ仕掛けた天正院の肩を叩く御堂兄。

「ふふ、楽しい時間とは過ぎるのが早いですね。それでは、皆さん大会でも互いの健闘を祈りましょう」

お辞儀をして軽く手を振りながら立ち去る天正院。

「新城明！ 僕が倒すまで負けるんじやねえぞ！」

こちらを指差し、強く言い放つたのは御堂雷雅。

「それでは、鏡様。決勝で会える事を信じております」

そうして最後に続くのは御堂風雅。どうやら彼には他の人間は見え

ていないらしい。

「ずいぶんと個性的な方達だね、明」

「あの兄弟、二人とも雅^{みやび}という文字を使っているが、雅とは程遠いな」

「名は体を表すというが、風と雷の部分しか合っていない。君もそう思つだらう?」

「嵐のような連中だったな。まあいい、あいつらの言うとおりそろそろ行かないと間に合わない。試合会場に向かうポートエリアに行くぞ」

数分後、一行は同ブロック内のポートエリアに辿り着く。

『The Book』の機能の一つである時計機能で時間を確認する。

現在の時刻は11時59分。そして、視界の片隅に見えるアナログのような外見の時計の針が動く。正午、つまりは予選の開始時刻になると三人は同時にポートエリアから強制的に転送される。

『Translation』（記号変換）

そのビジュアルエフェクトが彼らの視界に表示されると、半ば反射的に彼らは祈りを捧げるかのように目を瞑り思考する。

直後に自身の意識体^{アヴァタ}を構成する情報が上書きされていく。

青い妖精、フェアリー、赤い魔術師、ウイザード、水の巫女たる、ワインディーネの三体の姿がそこにあった。そして、三人の姿が、ただの人間のそれから力の顯現たるAAへと形を変えた直後、視界には輝く文字が表示された。

『Survival』

つい先日にも見た、あのビジュアルエフェクト。そう、三つ以上の勢力が交戦する際のエフェクトであり、『生き残れ』というのはつまり、文字通りサドンデスの戦闘が幕を開けたということだろう。こうして、予選^{オーブンコンバット}が開始されるのだった。

「さあ、開戦と行こうじゃないか」

「大会の本戦に参加したければ、力を示せと言つことか。なら、今日は君のサポートに回るとしようか」

「そうだね、私と鏡は遠距離武装があまりないから、生存と仲間の防衛に主眼を置いたほうがいいだろうね」

三人の視界に映るのは、古代ローマを思わせる芸術的な建築物、独特の様式で構築された教会や街並み。しかし、この美しい風景は数分後には無数の破壊者たちによって蹂躪じゆりんされることとなるだろう。どんなに美しくとも、ここは戦場なのだから。

「了解だ、俺は砲撃で数を減らす。水月と鏡はサポートに回ってくれ」

「了解した。君は早々に敵を蹴散らしてくれ」
「わかつたよ、明」

基本情報として、初期配置がと残存勢力の現状に関するデータがプレイヤーに行き渡つていた。自分自身の配置と対戦相手の配置は超大型の都市を舞台に中央に複数名と周辺部を囲むように時計の形に並ぶ。そして、明たち一行こと『水月と愉快な仲間たち』は、円形の都市で六時辺りの位置に配置されていた。

「まずは、偵察を兼ねて上空から位置情報を確認する。散らせるやつがいたらそのまま数を削る。鏡と水月は自衛と位置情報を元に迎撃を担当してくれ」

フェアリーのAAが閑静な住宅街から空へと飛び上がる。

大人数のジャミングが合算されてフィールドに適用されるのでレーダーは沈黙しているが有視界で同じ考えのフライトコニットが数名程度確認されたが有効射程からはやや遠い。そして、自身から東の方向、時計で言えば三時の位置に煌々（こうこう）と輝くヘッジホッグの砲身を明の視界が捕らえた。

「あのヘッジホッグ、やばいぞ」

俯瞰ふかんしてみえるヘッジホッグの背面部に装備された大型の荷電粒子砲はくがチャージに入つていた。その威力は絶大であるのだが、効果範囲とチャージ時間が恐ろしく長いことから実戦ではあまり使用され

ない武装でもあった。

「全員、予測射線域を離脱^{りだつ}。あいつの射線から離れるんだ」

即座にデータを一人に転送して、予測される射線域からの離脱を図る。仮にあのヘッジホッグが開始と同時にチャージを始めたのであれば、まだ数秒の猶予^{ゆうよ}がある。

「了解したわ、明中尉。それにしても、荷電粒子砲なんて普通の戦闘^{せんとう}じゃお目に掛かれない兵装を使つてくるのね」

「こういつた掃討戦^{そうとうせん}ならあれほど強い武器はないだろう。うつかり、近接戦闘に夢中になつていると横から一掃されるぞ」

「じゃあ、私と鏡は念のためシールドを展開しながら移動するね。それで、明は私たちの後方を警戒して」

大きな水球を自身の周りにいくつも生成しつつワインディングで移動を開始する。

「そうね、まずは数が減るのを待ちましょう

『Magic circle』（魔方円）

登録された動きを自動で再現するARM（Auto Response）モード（自動対応行動）を利用して瞬時にビットを開^くするウィザード。鏡の機体を囮^{くわい}のように複数の方陣が配置され虚空を漂う。その二人に追従するように低空をホバリングしつつ移動するフェアリー。

こうして準備しておけば、万一こちらに射線が重なったとしても、しばらくは堪えられるはずだった。眼下のところ三人はエンカウントを無視して東に向かう。予想される射撃の範囲が八時から十時の一帯、それと中央にいるチームは全員巻き込まれることになるだろう。最初からこちらを狙つていなければ当たることはないはずであるが、用心するに越したことはなかつた。

「大丈夫だよ、明。きっと、当たらぬから」

なぜか確信めいた発言をする水月。根拠なんてなかつたが、明と鏡は不思議と彼女の発言はその通りなのだろうと信じることができた。

「とりあえず、神の眼で確認したところ非難している間にエンカウントはしないで済みそうだ。データをリンクするから参考にして移動しながらもやることはいくらでもあった。しかし、戦闘が始まつてから時間は一分と経っていない。

「まあ、神聖なる戦場に不適格な者たちには退場を願いましょうか。この私が、直々に排除してあげますよ！」

会場一帯にオープン回線を通して嘲るような声が響く。

初期配置から割り出した操縦者は共産主義連合国共同体の一人、グリゴリー・ドゥヴァ。その直後にフィールド全体を貫くよう金色の光の奔流が進る。視界に映る荘厳な建造物が融解し蒸発していく。直後に現れるのは無数の蒸気となつて散つていく何十人の参加者と何もない荒野だった。

「開始一分で、四割近くのチームが戦線を離脱か。一体どこまでいなくなつた段階で予選終了なんだかな」

「君はそんなことも調べていらないのか。まあ、例年通りなら16チームまで減るまでじゃないのかな。それと、一人でも生き残つていればチームとして生存になるらしい」

「考えてみれば、私たち行き当たりばつたりだね」

「考えなくても行き当たりばつたりだな。参加表明したのは昨日だし」

建物の影に隠れながら敵の少ない方へと移動を繰り返す。こういうときは、アビリティの絶対的な優位性を再認識する。チームによつては、レーダーが完全に沈黙している間に先のヘッジホッグの攻撃で訳も分からずに消えることになつたはずだ。

「それにしても、鏡のアビリティは便利だね。何もしないで逃げてればそれだけで勝ち抜けるよ」

「そもそもいかないさ。また、さつきみたいな攻撃をされてはいけないから、射線に警戒しつつ比較的敵が少ないほうに移動しているだけだからね。すぐに戦闘になるさ」

「お、共有されたデータでそれらしき奴らがでてきたな」

「明、後方から敵性個体を確認した。射撃武器で即時迎撃して。水月は私と一緒に周辺を警戒しつつ明を援護」

「やつと、戦闘らしくなってきたな。行くぜ」

「上空にはなるべく飛ぶなよ。低空で仕留めり」

「了解。つて、リーダーに命令するな、鏡」

「適材適所ということさ、ふふ」

低空で加速しつつ、正面に見えるアークエンジエルに向かう。力ラーリングはメタリックシルバーとやや悪趣味なようだ。右腕でミスリルブレイドを抜剣、左手はホルスターに掛けて敵襲に備える。

「いや、尋常に勝負」

静かにつぶやいたその言葉が聞こえるはずもないが、剣を振りかざし敵性機体がわずかに宙へと浮かびこちらへと加速する。一瞬で間合いを詰め、交錯する直前に螺旋を描く軌道で体にひねりを入れる。自身が通過したわずかに横の地面には風穴が開く。

切り捨てたアークエンジエルとすれ違いざまに建築物の陰に隠れていた、これまたメタリックシルバーのソルジャータイプ二体にリニアライフルとプラズマライフルをそれぞれ打ち込む。反応する間も無く三体のAAが残骸となつて崩れ落ちる。

「今更だが、レーダーと別枠で相手の配置がわかっているつて相当するいな」

明は、破壊される直前まで透過迷彩^{ステルス}で風景と同化していたソルジャーの位置を神の眼の情報を共有することで即時に対応して迎撃して見せた。無論、わずかでもタイミングがずれれば自身が破壊されるために、知つていれば誰でもできるという芸当ではない。

「君の反応速度と射撃精度があつてこそだ。その能力だけなら君はトッププレイヤーにも引けを取らないと思うよ、私は」

「明、かつこいい」

普段のように冷静な鏡、久しぶりの戦闘でハイになつてているのかやけに上機嫌な水月の声がチーム回線内に響く。どうせ周辺に敵はないから問題はないが、のんきなものだと明は苦笑しつつ剣を納め

る。

戦況は刻一刻と変化して、現在は共産主義連合国共同体のチームの当りに戦力が集中しているようだ。残りの勢力はAIから伝えられる数字だけから判断すれば初期の四割程度だった。

しかし、一人だけで生存しているチームもあるだろうからチーム数だけならばおそらく半分程度の数が戦場に残っている。

本当の戦いはむしろこれからだろう。

これから戦闘プランを三人で立てつつ移動していると、不意に荒野となつたフィールド上に一体のAAが漂つてくる。エンペラーと呼ばれるAAが複数の敵に囲まれつつ逃げ延びているようにも映るがよく見ればそれが全く違うということが解かる。

「あははは、死んじゃえよ。お前らさ」

オープン回線越しに響く狂笑。声の主はエンペラー操縦者であるセルゲイ・ロマノフ。黄金に輝く機体を取り囲むように数十からなるレーザービット、ガトリングビットなどの遠隔射撃タイプの武装が見える。エンペラーを取り囲む敵は、攻撃を仕掛けようとした側から逆に撃墜されていく。

「あいつも共産主義連合国共同体だったよな。まったく、共産の連中はどういつもこんなに派手好きなのか？」

遠めに見える異常な光景に明の視線は釘付けになる。

「馬鹿、ぼうつとしているな！ 上から攻撃がくるぞ」

「大丈夫、私が守るから」

『Water Sprite』（水の精靈）

『Magic Circle』（魔方円）

回避運動するよりも早く、フェアリーを囲うように複数の水球が合わさり巨大な水の防御壁が展開される。さらに上掛けされるように鏡の電磁障壁^{でんじしようへき}が展開される。そして、二重に展開された防御壁が三人への攻撃を防いだ。

「助かった。ありがとう、水月、それから鏡も」

「どういたしまして、明」

「私はついでか。全く」

少し不機嫌そうな声で話す鏡。その感情は嫉妬だった。

「強いな。しかし、何か引っかかる」

正面からでも相手集団を潰せるという絶対的な自分自身の強さへの信頼もあるのかもしれないが、それにしても彼の行動パターンは、ただ単に数が多い方へとがむしゃらに突進を繰り返しているように映る。

「遠隔武装をパターンで展開、『オートレスポンスマーブシス

テム』を起動」

オープン回線越しにセルゲイの声が聞こえる。遠隔操作が可能な移動式砲台を複数空中に展開させると同時に彼の視界には幾重にも重なったウィンドウパネルが投影される。

「やつと、戦力比は一対百ってところか。まあ、『GENESIS』のイロハも知らないような連中は」退場願うとしようか

武装を展開したまま、敵対勢力の中へと無造作に突っ込むエンペラー。無謀とも思える特攻だが、敵性機体であるソルジャーの射線が彼を捉えた瞬間にそれは起こった。相手が彼を捕捉した瞬間にビットによって無力化したのだ。

武術でいうならば後の先とでも言つべき動きであるが、矢継ぎ早に二体、三体と進行方向にいるAAを次々と無力化していく姿は卓越した技術によるものと言うよりは、どこか予定調和のようにさえ見える。

しかも先制攻撃ではなく、相手が動くのを確認してから仕留めている。これは、お互いの技術や速度などの力量に余程の差が無ければできないことだった。

「あはははははは、あは、踊り狂つて死ねよ。カスどもが！」

数十個の遠隔武器を的確に操り、進行方向上に現れるAAを紙くずのように次々と撃破していく。エンペラーの名に恥じず、まさしく皇帝が行軍するが如く真っ直ぐに進んでいく。ストップウォッチが逆に進むかのように残存勢力の数字が刻一刻と減っていく。しか

し、そんなものを見るまでもなく眼の前で何十体ものAAががらくたとなつて散つてゐるのは明らかだつた。

そして、残存勢力が18となつたときにエンペラーのAAの前に、デモムービーでもみたあの純白の天使のAA、ミカエルが現れた。

「皇帝である俺の前に立塞がるのは誰であろうと、許さん。それが白の教団のリーダーであろうと、なんであろうと、ただ破壊するのみ！」

ミカエルは手を腰に携えた剣へと下ろし、わずかに腰を落とす。それは、居合いにおける抜刀術のように映つた。正面に留まつた相手をなぶり殺すつもりなのか、エンペラーは自身を中心とした方向にも対応できるように銃器を展開する。

「さあ、死ねよ。まがいもんの『教皇』様があつ！」

「ふん。周りが勝手に呼んでいるだけだ」

初めて口を開いたミカエルの操縦者は、確かに白の教団のリーダーであるアティド・ハレ。そして、その次の瞬間には無数の幻影、あるいは複体がエンペラーの周辺を取り囲む。

「幻影？ そんな程度の技なら、どの方向に対しても攻撃すればいいだけだろ。所詮は教皇なんていうのは名前だけな……」

「もう、終わっている」

セルゲイが言葉を言い切る前にミカエルのAAが横を通過しエンペラーのAAがばらばらに切り刻まれた。否、アティドが言うようにもう既に切り刻まれていた。

実際の攻撃からわずかに遅れて、斬撃の残像だけがエンペラーとのすれ違いざまに幾重にも重なり合つてからうじて明の日には見えていた。

「皇帝である、この俺が、馬鹿な……」

「ふん、AIの加護のあらんことを」

その場で剣を收め十字を切る動作をするミカエル。
廃墟^{はいきょ}と化した戦場に漂うように浮かぶその姿は、まさしく神の代行者と言えるほどに神々（こうこう）しく、見ているものが無条件に

引寄せられるような怪しい美しさを孕んでいた。

「おいおい、？だる。あのデモムービーの動きはただの合成じゃなかつたのか。ははは、震えが止まらない。けど、おかしいな、：

：あいつと戦いたい」

無意識に自分に向けた明の掌は小さく震えている。

そして、それから数秒後に見計らつたかのようなタイミングでフィールド全体に鐘の音が鳴り響く。残存勢力はちょうどビー6にまで減っていた。

【THE END（戦闘終了）】

そうして、波乱の内に予選が終了したのだった。

2 - 2 Elimination (後書き)

なんとか、更新までいきつけたぜ。ついでに黒木兄妹のやや曖昧な部分は後々明かされることになります。あと、一部表記修正・加筆します。それなりに見てる人がいてびっくり。お気に入り登録やら感想をもらえると喜びます。（8月1-8日再修正）

2 - 3 Arrive (前書き)

「はは。あなたなら追っかけますよ、あの高みへと」

07 Arrive

午後1時、アリーナ内部の控え室にて。

『水月と愉快な仲間たち』の面々は、どういった意図が働いたのか一つのソファに男女別に腰掛けて向かい合っていた。

「明、あのまま試合が続いたらミカエルに斬り掛かっていきそうだった」

「戦う者としては、無理もない話だろ？。あれが現在仮想内にいる最強と言われているプレイヤーなのだから、君がそうなるもの無理はない。私だってそうなのだから」

鏡も震えているのか、少しうつむいて右腕で左腕を抱きかかえる。その様子は、おびえていると言うよりは、抑えきれない衝動に無理やり蓋ふたをしていくように見えなくもなかつた。

「すまないな、二人とも。なんか、体が勝手に動き出しそうな勢いだつた」

「なんとなくだけど、今の明じゃあの人には勝てない気がする」

「やつてみなければわからない、と言いたいところだが実際に見て俺とはランクが違うとは感じたよ。ただ、死ぬことがないこの大会でなら一度腕試しをしてみたいとは思う」

下を向き、拳を強く握る明。その胸にあるのは、久しく味わっていなかつた感情、恐れでも憎悪でもないそれは、闘志とでも言ひべきか。黒木を越えたいと思っていたあの頃の感情が沸々（ふつふつ）と湧いてくるような気がしていた。

「なんにせよ、順当に勝ち進んでいけば合間見えることもあるだろう。私たちの正面の敵は、一回戦で当たる共産主義連合国共同体だらう。ミカエルの攻撃で退場してくれたかと思ったが、チームの誰

かが最後まで生きていたらしいな」

「生き残っていたのは、ウー・ヘイフォン。『商人』を兼ねてはいるが『傭兵』^{マーセナリー}だ。俺の知っている奴と同一人物なら、こいつはかなり強いよ」

「開始と同時に荷電粒子砲をぶつ放したやつは『護衛』^{マースナー}だっけ。こちらは、それなりに有名人だな。そちらの方は、私は聞いたことがないな」

「あれで、『護衛』^{エスコート}なのか。まあ、やつてることはほとんど『掃除屋』^{スイーパー}の部類だったが、攻撃的護衛といえなくもないな」

「ええと、つまり、相手チームは全員強いつてこと?」

「そうだな。エンペラーの奴はなんか得体がしれないし、というか、予選の半数以上のチームを葬ったのはこいつらだろうから。弱い訳はないだろうな」

「いきなりピンチだね」

「まあ、一回戦は一対一の戦闘が三回行われる形式みたいだから、一敗してもいい訳だし何とかなるだろ。というより、対戦カードは既に決まっているみたいだからじたばたしてもしょうがない」

「私がこのエンペラーだったな。面倒くさいが、ひとつと片付けるとしよう」

「私は誰が相手だっけ、明」

「水月は、ヘッジホッグの奴が対戦相手だな。正直、こいつには確実に勝つてもらいたいところだ」

「じゃあ、明がヘイフオンさんだね」

「まあ、負けず嫌いが俺の信条だからな。倒すよ、絶対に」

「新城だけに?」

「そういうぼけではないな」

「水月は適度に場を和ませたりしてくれるから、助かるよ。あははは」

控え室にあるソファに倒れこむようにしながら鏡が笑う。

「そうだな、癒されるというか一緒に居ると落ち着くな。まあ、

時間になつたらアリーナに転送されるらしいから、現実に帰還しない限りは好きにしてくれていいぞ」

そういうと、明も鏡のようにソファに背中を預けて天井を見上げる。仮想のものとはいえ感覚としては超高級な家具に座つているような状態なので戦闘後の疲れを癒すにはもつてこいの代物だった。

「みんなが寝るなら、私も寝るよう。このソファふかふかしててすごく気持ちいいし」

仲間はずれは嫌な水舟であつた。

【TRANSPORT（転送）】

ビジュアルエフェクトが表示され、仮想の肉体である意識体が強制的にアリーナの一角へと移動される。転送された先のフィールドは何もないグラウンド。事前に確認した情報では、戦闘開始はプレイヤー一人が記号変換した直後ということになつていた。

「しかし、こんなところであなたと刃を交えることになるとは、思ひませんでしたよ」

「こちらとしても予想外だよ、あんたが出場していくとしたら東洋中華圏だと思っていたからな」

明の視線の先には、細身のアジア系の女性が立つていた。普段の声色がどちらとも付かない声だったので、明はなんとなく男性だと思つていただが正面にいるのはどうみても美しい女性だった。

「上方で色々ありますね。今回は、『傭兵』として参戦させていただいております。私としては勝ち負けなどそんなに興味はありませんが、料金分は働かないといけませんので悪しからず」

肩口当たりで短めにまとめられたショートカットの黒髪。理知的な雰囲気を醸し出す金縁の眼鏡を掛けているその姿は、整い過ぎた容姿と相まってどこか機械を思わせる。そんな彼女は、あくまでも普段の態度を崩さずに淡々（たんたん）と話す。

どうやら、自分自身の正体を知られるところとは彼女にとつてそんなに重要なことではないらしい。

「それにしても、あんたは女性だったのか。知らなかつたよ」

「特に隠していたつもりはないのですが、そういえば一度も会つたことがありませんでしたね。ふふ、見つめ過ぎですよ、私に惚れましたか？」

挑発するように眼鏡を指で押し上げ、口元に薄く笑みを浮かべるヘイフオン。

「対戦相手を観察するのは当然だろ？まあ、実際のところあんたみたいな難しい人間の相手は、仕事だけにしたいところだ。たとえ、それがどんなに美人であつてもね」

「褒め言葉として受け取つておきましょう」

「さて、雑談はこれで終わりにしよう。一応、国家代表らしいからな。普段の関係は抜きにして本気で行かせてもらひつぞ、ヘイフオン」

一応というところを強調して、明が話す。実際、代表などといいつつも、同じ国内から多数のチームが登場している。

「ふふ、本当にあなたらしい。それでは、参りましょうか」

ヘイフオンの中性的な声が聞こえたのを最後に視界が暗転する。

『Translation』（記号変換）

ビジュアルエフェクトが発生すると同時に一人の体を構成する数式の文字列が書き換えられていく。脆弱な肉体は、破壊を訴える頑強な機械の体へとその形を変える。人類に新しく与えられた仮想という楽園で、最初に許された自由が破壊活動をする自由とはなんとも皮肉な話だった。

アリーナのフィールドは、モザイクが掛かつたようにぼやけた直後にその姿を夜の密林へと変えた。雨の降りしきる南国めいたジャングル。水を吸い湿つた地面の上で二体のAAが向かい合つ。

明が姿を変えた青い機械の妖精、フェアリーが光の羽を広げ密林に舞い降りる。左右の腕にミスリルソードを構える。その正面には黒いソルジャーのAAが右腕に対物狙撃用ライフル、左腕にはサバイバルナイフの武装を携える。

両者は、それぞれの得物を手に対面し、フィールドへのポップアップが完了した段階で見慣れたビジュアルエフェクトが視界に映る。

【MISSION START（任務開始）】

戦闘開始の表記が互いの視線の先に映り戦いの火薙^{ひぶた}が切られる事となる。

戦闘開始と同時に脚部にある車輪^{しゃりん}を利用してジャングルを高速で移動するヘイフォン。こういった遮蔽物^{しゃへいぶつ}が多いフィールドでは、フライユニットであるフェアリーよりも歩兵型のソルジャー方が戦闘を有利に運べる。そもそも、航空戦力の優位性は、相手に対しても一方的に攻撃できることだが、障害物が無数にあればそれは相手にも同じ条件を与えることになる。

ならば、今回は隠れる場所や敵の攻撃を防ぐ場所がいくらもある上に透過迷彩まで保持しているソルジャーにフィールドや機体のアドバンテージがあるといえる。この条件で相手を見失うのは得策ではないと明は判断し、一本のミスリルソードを構え地上すれすれの高度で相手を追跡^{ついせき}する。

先行するソルジャーは、抜き身の刃を下段に構え反転しつバツクダッショのような状態でフェアリーと向かい合いながら並走する。青く茂った木々の陰から加速して、低空で跳躍^{ちようやく}するフェアリー。

飛び掛るように切り付ける一閃は、ひらりと身を交わされる。半歩引く動きに合わせ、ナイフを引き寄せ攻撃へと繋げるソルジャー。

即座に反撃へと転じたソルジャーの刺突を、もう一本の剣でいなす。しかし、いなした腕ごと、突きからの回し蹴りで吹き飛ばされ、地面に転がされるフェアリー。地面^{えぐ}が抉れ、黒くにじつた水滴が激しく視界をふさぐ。

真横に吹き飛ばされた直後に、ソルジャーが対物狙撃銃を放つが、これは体を回転させることで何とか回避する。間近に放たれた弾丸に戦慄^{せんじつ}する明。

（こまま、終わるかよ！）

腕を引きナイフを構えたソルジャーが、内心で毒づく明の眼前に迫る。突進からの突きがくるよりも早く、フェアリーがショットアングラーを地面に打ち込む。のけぞった姿勢のまま強引に地面の方へと体を引き寄せ、寸でのところで攻撃を回避する。

「やりますね」

余裕のつもりなのか、オープン回線越しにヘイフォンの声が聞こえる。実際、彼女は余裕なのだろう。下手をすれば明は最初の攻防の時点でやられていたのだから。

「そうですね何か賭けませんか？ 私を倒せたら、黒木智樹について私が知っていることを教えてあげましょう。いかがです？」

「その賭け、受けとしよう。こちらが負けたら、そちらの言うことを何でも一つ聞くというのでどうだ？」

「ふふ、これで賭けは成立ですね。では、楽しむとしましょうか。この良き宴うたげを」

「ああ、存分に戦おう」

闘志を燃やしつつ、明は冷静に状況を分析する。単純な戦闘能力では、悔しいが相手の方が一枚上手だろう。先程のやりとりで、こちらの攻撃が見えていたかのように完璧に対処されたのは互いの格闘技術の差だろうか。

追う者と追われる者の関係をそのままに、戦闘は密林での追走劇へと戻る。フェアリーは加速、再加速、減速を交えつつ左右にジグザクに飛行する。対するソルジャーは、牽制射撃を続け、明の行動選択の余地を削いでいく。

フェイントからの斬撃も、移動から攻撃に転じる瞬間を的確に見抜かれその攻撃は虚しく空を切るに終わる。攻撃後の隙を突くようにヘイフォンは、再び先程のやり取りを実行する。

しかし、フェアリーは剣を振り下ろす勢いをそのままに前転、ソルジャーの突きからの回し蹴りはその上を通過する。フェアリーは両の手を突き出し、逆立ちするように両足でソルジャーを蹴り飛ばす勢いをそのままに宙へと跳躍ちよつやくし相手と上下逆さまに向かい合つ。

浮遊するわずかな糸余、フェアリーは剣を收めると次なる攻撃のために脱力する。

「一発入れましたね、攻撃を食らうのは久しぶりですよ」

「これで终わらせてもらつ」

『Double strike』（二重攻撃）

一瞬の思考と同時に肉体は的確に指定された動きを再現する。瞬時にホルスターからリニアライフルを取り出し、腰の位置で銃を固定、撃鉄を起こしハンマーが弾丸を叩くと同時にさらに銃撃を重ねる。仰向けになるように吹き飛ばされたソルジャーに止めとばかりに弾丸が放たれる。

「ふふ、それがあなたの技ですか」

ソルジャーは瞬時に軌道を読みサバイバルナイフで弾丸を受けるが、衝撃に耐え切れずその刀身は粉々に碎け散る。破片をまき散らせ、ソルジャーはバックダッシュをしながら対物狙撃銃でフェアリーを迎撃する。

しかし、ソルジャーの苦し紛れの攻撃は初動を読まれ回避される。対するフェアリーは一丁のリニアライフルで牽制射撃を続けつつ円を描くかのように移動しつつ互いに間合いを取り直す。

「これで终わりか、ヘイフォン」

「いいえ。本当のお楽しみは、これからですよ。明さん

「そうこなくては」

「ぞくぞくしますよ。ここまで本気になつたのは、ずいぶんと久しぶりです」

「そいつは光栄だな」

「それでは、『(ミ)擬態』(ク)解放

ヘイフォンがそう口にすると光に包まれるソルジャーの機体。ただ、勝ちに行くのなら今を狙うのがベストなのかもしれないが、それでも手を出そうとは思えない昂揚感が明を包んでいた。

「さて、鬼が出るか仏が出るか」

黒いフェアリーを思わせる細身のAA、その姿は悪魔、鬼、魔物、

その異形を形容する言葉にはどれも相応しくあり、また、異なる。むき出しの機械を思わせる全身とその背中には翼と言つこは小さい骨組みのような部品が見える。

「これが私の最も得意とするAAの形、ルシファーです」
漆黒の異形は、やや前傾したような姿勢で佇む。鉤爪のよだな両手、武装らしきものは手にしていないようにも見えるが、全身の至る所に鋭利な刃物を思わせる突起が突き出している。

「あんた、デビルのAAを使つていいのか？」

「ご明察。私が使用しているのは擬態のアビリティを持つAA、デビルです」

デビルは、他のAAに擬態するアビリティを持つが本体の基本スペックが低いために利用者はほとんどない。他のAAになれる利点も確かにあるのだが、使いたいAAが別にあるのなら最初からそちらを使うし、汎用性は高いが別の機体で武装を換装するなどしても結局同じことであるためだ。

「俺と同じで、不人気機体が好きなんだな」

「案外、我々は似たもの同士なのかも知れませんね」

そして、現在彼女が擬態しているルシファーのAAも不人気だった。近接戦闘特化型の割には装甲が薄く、戦闘スタイルも特殊であるためだ。

「では、再戦といこうか」

「ええ、宴を続けるとしましょうか」

フェアリーは右手にミスリルソード、左手にリニアライフルを構え必殺の間合いを探る。右に左に揺さぶりつつも間合いを取つていた両者だったが、ルシファーが先んじて前に飛び出す。

飛び出してきた相手にリニアライフルを放ち、弓を引くよにミスリルソードを振りかぶる。牽制からの突進攻撃をルシファーは、右腕部で弾丸を中空で叩き落し、その場で両腕を交差し体を低くする。次の瞬間、黒いAAはエメラルドグリーンの光に包まれる。両腕、両足、そして、背中から伸びる翼を思わせる十一本の光の刃で武装

した異形のAAが視界を失つた一瞬に合わせ加速する。

明の視界が戻ると、目の前に淡い緑色の光を纏つたAAがその身を刃として迫る。全身が剣でできているかのようなAAに、ミスリルソードを突き立て応戦する。

黒い異形は、仕込み刀のように肘から突き出る刃でフェアリーの『ライジングダビード 累進加速』も合わさり神速と化した突きを受け止める。

刃と刃が火花を散らす。フェアリーは、更なる追撃ついげきを仕掛けんとリニアライフルの射撃と連動して左腕部に装備されたショットアンカーを放つ。ヘイフオンは、肘を支点として回転蹴りで首を狙いつつアンカーを回避する。

明はこれをバックステップでかわしつつ、リニアライフルで迎撃する。ルシファーは全身の武器を使い、宙返りしながら苦もなく弾丸を打ち落とす。

そのまま間合いを取り直すと、どこか楽しむよつてヘイフオンが言う。

「あなたの力がその程度では、死んでしまった黒木智樹が浮かばれないですね」

「言われなくとも、わかっているぞ」

言つが早いが、ルシファーがフェアリーに踊りかかる。中距離射撃が有効でないと判断した明は、リニアライフルをホルスターに納めて、ミスリルソードを抜刀し敵を迎撃する。

光の刃と化した右腕と左足による攻撃を、一本の剣で受け止める。相手の体ごと弾き飛ばそうと力を込める。

すると、ルシファーはミスリルブレイドの刃を支点に回転し、後ろ向きにショットアンカーを飛ばしてくる。

「受けれますか」

『Dragon dance』（龍の舞）

挑発するようにヘイフオンが引き金となる言葉を紡ぎ、ルシファーが反転しフェアリーに向かい加速する。

（これは、俺の『Attract tempest』と同じタイプ

の……)

突き出した腕部から放たれるアンカーをミスリルブレイドで叩き落す。しかし、その刃がアンカーに引っかかり、そのまま強引に引き寄せられる。

左の掌から伸びる剣から廻^{アラウ}ようすに、一閃。

右の手を振り下ろす一撃目。

交差した両腕で、切り上げにさらに一閃。

跳ね上げられた右腕の剣が苗を舞い、右足の膝蹴り^{ひざげ}が腹部に突き刺さる。その衝撃で、突き出すように伸びた首に左足の前蹴り^{まへげ}が放たれる。錯覚として気絶してしまいそうな衝撃が脳にフィードバックするが何とか意識を保つ明。

「こんなところで、負けられるかよ！」

勢いをそのままに、駆け上がるようなく空中へ飛ぶ黒い天使。頭部を蹴られた衝撃で途切れそうになる意識を気合で立て直し、上を見上げる明。

直後に、両腕の掌から伸びる一本の光剣が投げ放たれる。その内の一本を左腕に持ったミスリルソードで叩き落し、もう一本が右腕に突き刺さる。フィードバック現象で攻撃を受けた部分に激痛が走るが、構わずルシファーに突進を仕掛ける。

中空に後退した動きに合わせ、左腕でミスリルソードを突き出し、二つのサブアームを展開して二丁のライフルをホルスターから抜き出し即座に放つクイックドロウ^{けんせい}で敵の動きを牽制する。

目前に迫るミスリルソードをすねから展開された刃で蹴り飛ばしこれを防ぐルシファー。吹き飛ばされる剣を無視して加速を続けるフェアリー。

「まだだ、今の俺にはこいつがある」

ぼろぼろになつた右腕と左腕で背面部に新たに装備された炎の剣を引き抜き、思い切り振り下ろす。アクロバティックな動きからの強引な制動が祟り、この攻撃に反応仕切れないようすのルシファー。

「くっ、これ程までに……」

赤く燃えたつ剣を手に踊りかかるフェアリー。

その斬撃は、再度両の手に出現した剣のガードを突き破り腕^{うで}と両断する。陽炎^{かげのへ}をただよわせフェアリーは喉元^{のどもと}に刃^{いん}を付き立てる。左右のサブームにはリニアライフルを構え、照準^{じょうじゅん}をコアコニットに向ける。

「これで、終わりだ」

「チヨックメイトみたいですね」

ルシファーは、降参^{こうさん}だとでも言つように両手をあげる。

「あんたとは、もう、戦いたく、ないな」

「はは。あなたなら辿り着けますよ、あの高みへと」

「つたく、俺のことをあまり見透かすなよ、ヘイフオン。だから、これで終わらせよう」

そういうて、明は弾丸を放ちヘイフオンに止めを刺す。呼吸を荒げるよう、明は途切れ途切れに言葉を紡ぐ。フェアリーの傷だらけでぼろぼろになつた姿が、僅か数秒の攻防の凄まじさを物語つくる。そして、高みとは先程の戦闘で見た白の教団のトップである、アティド・ハレを示してゐるのだろう。

【THE END（戦闘終了）】

ビジュアルエフェクトのカットインが挿入され、今更ながら自身の勝利を認識する。

（少なくともあんたと同じレベルにまでは、辿り着けたようだ）

拳^{こぶし}を握り、辺りを見渡す明。

そこには戦闘中の豪雨^{ひょうう}が？であるかのように晴れ渡り、空中から見渡す風景には虹^{にじ}が広がっていた。剣を背中にしまい、ホバリングしながら俯瞰^{ふかん}する風景は広大でどこまでも広がっていた。

「実力まで擬態^{きたい}してやがったな、あいつ」

ほんやりと一人毒づいていると、明はポリゴンとなつて霧散^{むさん}しエリアから強制的に転送されるのだった。

座標空間と呼ばれるフィールドで、鏡とセルゲイの両者は対峙^{たいじ}し

ていた。

その地形は、無数の線と透明なフロアパネルの床が組み合わされて構築されている人間味のない空間だった。無数の線は物体の運動を阻むことはないが、宇宙空間に線が引かれているような奇妙な感覚風景が両者の視界に映し出される。

「明の戦闘は終わったみたいだね」

仮想の任意の地点、任意の情報を全て知ることができる『神の眼』の力で明の戦闘終了を確認する鏡。彼女の操る真紅のウイザードの前には、全身の至るところを金色に装飾された煌びやかなエンペラ－のAAの姿があった。

「出来損ないの分際で、ずいぶんと余裕だな。このセルゲイ・ロマノフを前にして！」

怒りは感じないが、高圧的な性格ゆえに強い言葉を並べ立てるセルゲイ。激しい性格ゆえに誤解されやすいが、本当に怒つてはいいない。

「それは、‘私達’への嫉妬しつとなのかしら？ そういえば、あなたが使っているオートレスポンスマームシステムだって、私が昔使っていたものの劣化版じゃないの」

「あの魔女の紛い物が偉そうにほざくな！」

「ふふ、あなただけが憎しみを持つていたわけじゃがないのよ。当然、私だってあなたが憎かつた。与えられた地位に甘んじて、のうのうとしていたあなたが」

「互いに相手に好意を抱いていた事など一度もなかつたさ、昔話はこの辺でいいだろ？ ここは戦場、ならば意見を言えるのは勝者のみ」

「珍しく意見が合つわね、お礼にすぐに終わらせてあげる

「出来損ないが俺に勝つつもりか。笑わせる」

「つもりではなく、これから起きるただの現実よ」

鏡が最後にいった言葉は静かな怒氣を放っていた。そして、戦闘開始後からもしばらく続いていた会話はこれで終了した。

「ソードビット展開」

「ソードビット展開」
ウイザードを中心に幾重にも重なり合ひ魔方陣、そして、それの円周を囲むように展開されたルビーの輝きを放つ赤く透き通った刃。

「貪欲なる刃よ、汝が敵を喰らいくべせ！」

数十からなら輝く剣が彼女の号令に従つて、猛獸の群れの如くその敵に対し牙を向ける。彼女があえて声に出して行動を指定するは、対人戦闘時のブラフと自身の戦意高揚の意味を持つていた。当たり前のことだが、技名をわざわざ言つるのは相手に情報を与える以外の何物でもないからだ。

「この俺にそんな攻撃が通じるとでも思つてしるのか？」

エンペラーは、向かい来る剣を全て打ち落とす。

「いえ、これで終わりですから」

「戯言を」

エンペラーは自身を守るようにならに展開されているビットとは別に、さらに攻撃用に複数のビット兵器を展開する。数十からなる砲身が一斉に動く姿は、さながら王の命令に従つた兵士を思わせる。

「最期にいいものを見せてあげる」

叩き落され弾かれた剣がエンペラーを包囲するかのように展開されている。

「減らす口を」

エンペラーに再度向かう刃を順次、システムに自動で制御された無数の銃口が迎撃する。その間にウイザードは自身の装甲を兼ねるソードビットをさらりと展開する。

『Magus Circle』（魔方円）

ゆつたりとしたロープのようだった装甲は、上着のようになり、肩口にあるものを残すのみとなる。彼女の周囲を覆うかのように三重に連ねられた円形の電磁障壁でんじょうへきが展開される。その円の内の一つが彼女の正面にリングのように配置される。

ウイザードはリングをぐぐるように走り、自身の機体が重なった瞬間に加速する。勢いをそのままに背中にある大剣を引き抜く

「 ウィザード。弾丸が如き速さで放たれた攻撃をエンペラーは体を反らすことでかわす。」

普段、鏡は電磁障壁を用いて相手の攻撃を逸らし受け止める^そことに利用している。だが、これはその逆で物体の運動を加速させることに利用していた。

「 あつけないな、出来損ないはその程度なのか？」

「 私の攻撃がこれで終わりなんて誰が言つたの？」

くすりと笑い、鏡はエンペラーを包囲する剣の一振りにぶつかるかのようにそのまま加速を続ける。そして、ぶつかる直前に弾かれるように加速し、今度はエンペラーの真横から切り付ける。磁化した剣を中継地点として自身を強制的に移動させる。

「 また、かわしたね。さて、何時までもつかな」

「 ぐ、舐めるなあああ！」

銃口が高速で動き回るウィザードを自動で捕捉し、攻撃をするがコンピュータの予測移動地点にウィザードの姿はない。上下左右、前後に斜め、不規則に立体的な軌道で永遠と加速を続けるウィザードの姿は既にシステムで捕捉できる速度を完全に凌駕^{りょうが}していた。システムによって自動で放たれてしまう攻撃以外にも、手動で一部を制御して反撃を試みるセルゲイであつたが、システムに依存しきつた彼は純粹にそれを超える物には対処しきれない。

「 なんで私がそれを使うのを止めたか、理解出来たろう？ 結局のところ欠陥品なんだ、その戦闘スタイルは。相手の動きに対して自動で反応してしまがゆえに、簡単に誘導に引っかかってしまう」

「 ぐ、だが、俺はそれでも負けるわけにはいかんのだ。システムを高速化すれば、まだ対処は可能なはずだ」

セルゲイ本人は、回避を主体にアシストプログラムの改変を試みているが既にビット武装の三分の一は破壊されていた。そして、自身の剣を媒介^{ばいかい}に、ピンボールのように跳ね回るウィザードの姿は魔術師と言つよりも曲芸師という方が合っているだろう。

点から点への移動は直線的なものであるが、それを細分化し無数

に繰り返すことでその動きは曲線となり、螺旋を描き、循環する。

「もういいだろ。終わりにしよう、セルゲイ・ロマノフ」

「それでも、俺には皇帝としての矜持きよつけいがある。最後まで、戦いを

続ける

致命傷ちめいじやう

といえる攻撃こそ避けではいるが、既にエンペラーの姿はぼろぼろだった。その姿にもはや君主としての威厳いげんは感じられず、敗軍の将といったようすだ。

「ご立派。なら、取つて置きをくれてやろう」

高速で移動しつつ、ウィザードは大剣を左手に持ち、やや下段に構える。そして、緩慢な動きをした次の瞬間、数十の残像さんぞうがエンペラーに襲い掛かる。それは、あたかも予選の最後にミカエルが見せたあの攻撃のようでもあった。

「……やはり、そなたは天才だな。だからこそ、俺は目指し続けていた」

エンペラーの真横を通過した瞬間に、エンペラーは無数の斬撃に切り刻まれる。加速し過ぎた自分自身の機体を前面に展開した魔方陣が受け止める。そして、背中に剣を収めると同時に展開されたビットが自身に集まりロープとなつて再構築される。

「目指しているだけでは、永遠に辿り着くことはできないよ。理想とは、目指すものの先にあるのだから

「ふん。ならば、今度は俺自身の力でぶつかるとしよう」

つづくまる様に前のめりにエンペラーはよろける。無数の攻撃が突き抜けた衝撃が全身を駆け巡り、機体が弾ける。

「君のそういうところだけは評価しているよ。それに、君のことを憎んでいたが嫌いではなかつたからね」

【THE END（戦闘終了）】

彼女の言葉を最後に、エンペラーの姿が空間から消失する。

そして、自分にとつて本当に嫌いな相手であれば、顔も見たくなり言葉も交わしたくないと思うのが自然だろ。なればこそ、好意とこう感情の裏返しは憎悪ぞうおなどではなく、無関心なのだろう。

「彼の動きをトレースしたつもりだが、それでも再現率は半分以下といったところか。本当に化け物だな、教皇様は。果たして、誰があそこまで辿り着けるのだろうか」

鏡が、わざわざ予選での敗北を再現してまで屈辱くじょくを味合へいごせたかったのか、それとも彼に進むべき道を示したのかは定かではない。ただ、眞実さだがどうあれ問題点を指摘するという行為は、その後の変化きたいを期待するものであるといえるだろう。

現時点で、チーム『水月と愉快な仲間たち』の一勝が確定した。

2 - 3 Arrive (後書き)

暫定、終了。うーん、見てる人結構いるんですね。アクセス数それなりに増えてるみたいなんで。でも、お気に入りとかはまだ少ないんでよろしければどうぞ。加筆、誤字一部修正（8月18日）

2 - 4 Truth (前書き)

明かされていく真実。
過去に何があったのか。

時は、鏡の戦闘が終わる少し前に遡る。さかのぼる。

水月とグリゴリーの戦闘に選ばれたフィールドは古代の闘技場、アーナ。そこでは、水月の操るウインディーネとグリゴリーの操るヘッジホッグが対峙していた。

「こうして戦うのって本当に久しぶり。わくわくしてきます」
オープン回線越しに無邪気に話し掛ける水月。

本来であれば使用している言語が異なるために通じるわけがないのだが、仮想空間上では機械言語を介して即時翻訳がなされるのでどのような人間とでもかなりの部分で意思疎通いし そつうが可能だつた。

『バベルコード』と呼ばれるプログラミング言語を介して、自動翻訳がAIによつてなされるためにじぐじく自然に会話が成立する。仮想空間では、行動と意識がイコールであるがゆえに思考から記号変換される過程を逆に翻訳することで万能翻訳機としている。

もつとも使用され始めて初期の頃は精度の悪い翻訳機能しか持つていなかつた。しかし、仮想空間上に無数に存在するモルモットたちのデータを参照にその精度を徐々に確かなものへ進化させるに至つた。

「ブランクがあつても勝てると思つているのか？ この俺も舐められたものだ」

「ブランク？ 関係ありませんよ、そんなことは。それに今の私は、誰にも負けないと思います」

「ジョークにしては笑えないな。君が俺より強いとでもいうつもりかい」

「言葉を尽くしても無駄むだでしょう。結果が全てを示します」

「一分で終わらせよう。時間は有限だ」

「その意見には同意です。では、始めましょう」

両者は戦闘後、初めて武器を構える。

『Water Sprit』（水の精霊）

水月の思考と連動してワインディーネは、先端に装飾が施された儀式槍を構え水流を展開する。予選のときのように防御主体ではなく、攻撃にもすぐに移れるように展開されたそれは、彼女を守護し共に戦う精霊の様にも映る。

対するヘッジホッグは要塞が如く、全ての砲台をあらゆる方向に展開する。

標準装備されている『多重照準』（マルチロックオン）のアビリティとそれによる命中補正は、プレイヤーのレベルが一定水準以上であれば回避が困難になる。なぜなら、紙一重で回避を行つた場合には全て命中したものとみなされるからだ。

互いの戦闘準備が終わり、両者の視線が交錯する。

「それでは、演舞を始めましょう」

「お前が踊るのは、俺の掌の上だ」

オープン回線越しに言葉を放ち、戦いが始まる。

先手を打つたのは、強気な言葉を放ったグリゴリーの方だった。波のうねりのように、複数の砲台から弾幕が展開されていく。ミサイル、弾丸、光学兵器、チャフ、あらゆる種類の兵器がわずか数秒でアリーナを覆い尽くす。その鮮やかな手腕は、海賊連中には期待するべくもない力量差の表れでもある。

対する水月は、フィールドの表面に薄つすらと水を張りその上で爆発が散発的に起つる。

（安易で、愚直。優秀な戦術ではあるけれど手管は見えています）

その後も爆撃染みた攻撃は前に後ろに上空からも降り注ぐ。しかし、それでも水月の操るワインディーネは、一度たりとも被弾しない。防御の姿勢を取つてはいるが、それが防御するために使われた

」とはない。十秒、二十秒と攻撃を完璧に交わされ続け、やつと事態の異常さに気付いたのかグリゴリーの方にも焦りが見て取れる。別段高速移動しているわけでもない、しかし、ゆっくりとではあるが確実に水月の操るウインディーネがヘッジホッグに近付いてきているのだ。

「……ありえん。俺は悪夢でもみているのか？」

『GENESIS』におけるプレイヤーの強さとは、攻撃の正確さ、状況に対する反応速度、防御技術、回避技術、技術を使用する判断能力、そして、それら全てを同時にこなす並列処理ができるかどうかが重要になってくる。

ヘッジホッグは機体の火力とアビリティの補正があるために初心者にも使いやすい機体という認識が広まっているが、実際のところは武器が多過ぎるために完璧に使いこなすのは初心者には不可能だった。

これらは、全て同時に展開して初めて意味を持つからだ。
基本的な戦術としては、チャフを散布しつつ相手の動きを牽制、移動を制限して火力で問答無用に仕留める。そういうたたか撃撃パターンがセオリーであると言える。しかし、実際にはそれらを並列的に全て処理できる人間などほとんどいないのが現実である。

エンペラーを扱っていたセルゲイのように半自動化してしまえば、あるいは普通の人間にでも扱えるのかも知れないが、そんなことができる人間はグリゴリーなどを含めてほんの一握りである。

「左右からの誘導に上空からの牽制も含め、全て、全てこちらの思惑通りに動いているはずだぞ。なのに、なのに、なぜ当らん！」
切り忘れているのか、それとも、ただ単に付けっぱなしにしているのか、オープン回線にグリゴリーの声が響く。その声には怒りのようなものが見え隠れする。

「ふふ、一分までは、あと30秒もありますね」

弾丸の嵐を搔い潜り、ついにヘッジホッグの眼前に辿り着くウインディーネ。その声は、もはや彼にとってはただの少女のそれでは

なく悪魔のささやきだつた。少なくとも大会での死ぬと言うことは無いが、しかし、自分自身が追い詰められているという状況に久しくなつていなかつた彼の恐怖はどれほどのものだろうか。

『Aqua Lance』（水の突撃槍）

その言葉を発動キーとして、ワインディングの持つ儀式槍に周囲の水が巻き上げられる。

移動しながらも彼女の周囲を渦巻いていた水流の全てがそこを集まつていく。そして、巨大な槍は、武器であり盾ともなる。至近距離で回避しきれなくなつた弾を全て受け止めながら正面進んでいく。

肉薄されたヘッジホッグは、正面に装備されたの一門の大型砲身を放つ。それを水月は槍に集められた水流をヘッジホッグにぶつけることで無効化しつつ、飛び上がる。水の塊に包まれたヘッジホッグを飛び上がつたワインディングの儀式槍が捉える。その一撃は片側の砲身を潰し頭部を貫通する。

『Flash Freeze』（瞬間凍結）

水月の言葉を合図に、フィールドを薄つすらと覆つっていた水は一部を気化させ急速に失われた熱量で凍結する。出来上がつたのは水晶の原石のような粗い氷の彫像。別段周囲に潤沢な水源があるわけでもないので大した足止めにもならないが足止めとしては一瞬で十分だつた。そして、儀式槍が地面に突き刺さると同時に彼女はさらによく飛翔する。

壊れた砲身から誤爆しつつもなんとか状況を把握するグリゴリー。しかし、その間に行われるはずだつた弾頭の制御やチャフの散布は完全に空白となる。制御からあぶれた兵器が周囲に意味もなく撒き散らされる。

「……槍で棒高跳びだと」

相手を見失うが、それでも直後に意識を立て直す。グリゴリーは敵の位置をレーダーで確認すると、視点を別のカメラに切り替えウインディングを再度視界に捉える。そこには、反転し水の槍を構える水の巫女みこが投影される。

『Blue javelin』（青い投槍）

ARMによつて高速かつ自動化された動きが彼女の思考に従い再現される。大気を凝縮し高密度に圧縮された水の槍がその手に大きく掲げられる。上空で渦を巻き回転する水の槍を、ウインディーネはヘッジホッグに向けて思い切り振り下ろす。

矢の如き速さで放たれた水の刃は、氷を打ち砕きヘッジホッグの背面の砲身を貫通し突き抜ける。そして、彼女の着地直後に、アリーナに響く戦闘終了を告げるシステムアナウンスの機械音声。

【THE END（戦闘終了）】

「ふふ、本当に一分掛からなかつたな」

目の前で起きたことは、彼女自身が一番信じられなかつた。ただ、戦闘中に異常に冴えてくる自分自身の意識と、相手の思考を先読みしてそのわずかに先へ先へと移動していく。対戦相手であるグリゴリーは、それを自分の戦略の上で起こっているものと勘違いしていた。

だから、彼女のわずかに後ろや横で爆発が起こり、弾丸が通過した。射線が重ならない軌道であればその攻撃にアビリティの補正は掛からない。カス当りが直撃に変わるという程度のものではあるがそれでも一撃死がありうるこのゲームではかなり強力なアビリティだつた。

「……私はもう、誰にも負けたくないから」

そうつぶやいた彼女の心中は、氷のように冷え切つていた。

目の前のことなど水月にとってはどうでもいいことだつた。ただ、すぐに終わらせて少しでも長く彼と一緒にいたい。一時であつても離れたくない。そして、自分の弱さのせいで以前のようなことが起きるのも一度とごめんだつた。

砕け散つた氷と水滴がダイヤモンドダストとなり、彼女の勝利を彩るかのように輝き、無数の欠片となつて霧散した。

午後2時、アリーナ内部の控え室にて。

『水月と愉快な仲間たち』の面々が、再度二つのソファに男女別に腰掛け向かい合つていたところ、来客があった。

「一回戦突破、おめでとうございます。明さん」

恭しく礼をして、祝いの言葉を述べるヘイフォンだが、冷たい声色のせいかどこまで本気で言つてはいるのかいまいち判別が付かない。

「ついさっき倒したばかりの相手からそう言われるのは、妙な気分だな」

「古来より、戦いの勝者には最大限の賛美さんびを、敗者には服従ふくじゅうが約束されていますからね。至極当然のことですよ」

さも、それが常識じょうしきだとばかりに話すべイフォン。いつたいそれはどこの世界の、何時の時代の常識なのだと問いただしたくなる明だつたが、適当に流すことに決める。

「また、極端な話だな。それで賭けは俺の勝ちだな、ヘイフォン」

「ええ。これで私は明さんの愛の奴隸どれいですね」

その発言を聞き『水月と愉快な仲間たち』の一団は一瞬で凍り付き、そして、止まっていた時が動き出す。

「不潔ふけつな！ 君という奴は」

「明の馬鹿！ いつのまにそんなつらやましい関係に……。つて、あれ？」

一人は、身を乗り出して明に詰め寄る。

もちろん、明にそんな心当たりは無かつた。

「二人とも落ち着け、誤解というか、冗談なんだよな？ ヘイフォン。しかし、面と向かって話したことはほとんど無かつたが、あんたそういうキャラだつたんだな」

「ああ、どうでしょう？」

田をつむり、口元だけで笑うヘイフォン。ビツヤリ、完全に遊ばれているようである。

「頼むから、火に油を注がないでくれ。收拾しりぞが付かなくなる」

「少々惜しいですが、あなたがそう望むのでしたら」

名残惜なむりやきしそうに三人を見渡し、目で会話をすると明の隣に腰掛け

る。

……なぜか、やたらと体を密着させて。

「とりあえず、離れる。ヘイフオン」

「いけず、ですね。まあ、そんなところが氣に入っているのですが。関係はゆっくりと進めて行くとしましょう。ふふふ」

演技でもしているつもりなのか、かなり大げさにすくすくと引き下がるヘイフオン。

とりあえず、明には女性陣一人の視線が痛かったのでじりじりとソファの端っこまで移動しつつ口を開く明。

「それで、あの日の眞実を教えてくれるんだな。ヘイフオン」

「ウーで構いませんよ。まあ、お好きな方でお呼び下さい。それでは、黒木智樹、並びに黒木愛について、私が知っていることをお話しするとしましょう」

「なら、ウーちゃん。って、呼びますね」

「私はウーさんで」

「そういうところだけ反応いいな、お前ら。まあ、俺は付き合いも長いことだしウーと呼ばせてもらひよ」

「本当に面白い方達だ。では、話を始めましょう。まず、黒木智樹には黒木愛という妹がいたことはご存知ですね」

「ああ。それは、データで確認した」

「彼女がこの話のキーパーソンとなっていたようです。彼女は、皆さんと同じ学校の生徒でしたが病気がちのため、病院に入退院を繰り返すような形だったそうです。とはいえ、流石にあの黒木智樹の妹だけあって、成績は優秀だったそうです」

「そうか、続けてくれ」

少しうつむいて、明は話の続きを促す。

「学校も、今は仮想技術を使った遠隔地からの出席が認められていますから特に問題は無かつたようです。そして、昨年その彼女の容態が悪化したそうです」

「先生は、そんなこと一言も言つていなかつたな。いや、わざわ

ざ言つようことではないか」

「手の施しよが無い、その最後通告を受けて彼は彼女を仮想で生き永らえさせようと持てる全ての知識を動員したようです。黒木智樹は、もともと仮想空間の開発に関わっていた人間ですから」

「その発想が既に狂気であると、気付かなかつたのか」

胸の前で十字架を握り鏡が押し殺したような声でつぶやく。

「そして、彼の実験は成功を収めますが、彼は自らの行為を呪い狂気に取り付かれます」

「でも、実験は成功したんだよね？」

「そうです、水月さん。あくまで、客観的に見た場合は成功であるのですが、しかし、主観的に見た場合はおそらく自分自身の手で一番救いたかった人間を殺してしまったことになると思います」

感情のあまりこもつていらない彼女の声だからこそ、明にはそれが真実なのだと思えた。

「それは、俺が仮想で見た黒木愛と関係しているのか？」

「それが実験の成功例なんですよ。現代の技術を以つてしても不可能と言われている完全なAIとして生まれ変わった姿、それが今

の黒木愛」

「完全な自律思考を獲得かくとくしたとでもいうのかい？」

不可能だ、とでも言いたげな鏡。

「計算と記憶をコンピュータが、思考と判断の部分を人間が分業している擬似AIではあります。今では人間と見紛う程のものとなつた。それは、明さん自身が目にしているでしょう？」

確かに明としても違和感はあつたが、それが人間ではないという判断には至らなかつた。実際に自分自身が会話していてもなお、あれがただのAIであつたとは思えなかつた。そう思えるほどには彼女の会話は人間的だつた。

「今という言葉が散見しているが、作られた当初は不完全だつたということか？」

「当初は、機械的なプログラミング程度のものだつたようです。

特定の行動に対し特定の返答をするという旧世代の遺物。しかし、黒木愛のデータを取り込んだことにより成長の概念を獲得したAIは、仮想に存在する膨大なデータを参照に自己を修正し始めた

参照されるデータとは、こうやって会話している自分達やそこに存在する全ての人間の行動を指しているのだろう。より人間のする行動へと近付こうとするAIであるが、人間をベースに作られたAIはむしろ最初から人間そのものではないだろうか。

「バベルコードが急速に使いやすくなつたのと同じ、ということなの？」

子リスのように少し首を傾けて水月が質問をする。

「そもそもバベルコードの開発者は黒木智樹ですよ。といつても、こちらはあまり表の世界に出て来ない話ではあります。宗光学院へは新城大地氏の招聘で、教職は隠れ蓑となつていたそうで」

「つまりは、より人間に近い思考を獲得する以前の状態のAIを見て、妹を救うはずがむしろ自分自身で殺してしまつたと思い、狂つてしまつたとでもいうのか？」

「私が調べた情報と、私自身の推測が一部含まれていますが、概ねその通りかと」

「今、彼女はどうなつているんだ？」

「肉体は植物人間状態で安置され、現状は仮想で思考ルーチンのみの存在ですね。仮想に脳を複製し、その記憶を継承し、統合されたAIは判断経路を参照にする。そして、仮想においてAIと統合された彼女は神そのものと言えるでしょう」

「黒木先生が言つていた女神、つてそういうことなのかな。私を彼女と勘違いしていたみたいだけど」

「彼の真意の程は測りかねます。ですが、外れてもいないと思いますよ」

「どういふことだ？」

「そのままの意味ですよ。とはいっては仮想で神になるよりも、人として再会したかったのでしょうか」

「やうか。俺は先生の事情なんて考えもしなかつた」
うつむき、明が搾り出すような声で話す。

「自分の正義が、相手にとつても正しいかなんて誰にもわからないわ。それに知つたところでどうなるようなものでもないだろ。水月を助けるにはどの道、他の選択なんて無かった。説得せつとくできたかもしないなどと思うのはうぬぼれだよ」

「鏡、言い過ぎだよ」

「いや、鏡の言つ通りだ。知つたところで何も変わらなかつただろ

う

だが、といつて明は続ける。

「知つてしまつてからなら、何かできることがあるはずだ。せいぜい俺達にできることをしよう」

「前向きですね。さて、これで私から話せることは終わりです。またのじ利用をお待ちしております、明さん」

立ち上がり、扉へと向かうヘイフオン。

「ああ、その内また利用させてもらひ。そのときはよろしく頼む」外に出ようとするヘイフオンを見送り、手を振る三人。

去り際の彼女の顔はさわやかな営業スマイルだった。

「さて、彼女との関係を話してもらおうか」

「そうだね、是非とも丁寧ていねいに説明して欲しいね」

「え、さつきので終わりじゃないのか。というか、お前らが楽しめる情報は何もないと思うだ。女性だって知つたのは、さつきの戦闘開始直前だし」

「といって、この朴念仁ぱくねんじんがどうこうするところのせどの道ありえないか。はあ

「あははは」

溜め息を付く鏡と、乾いた笑いを浮かべる水月。

「朴念仁は鏡も同じだろ。愛想の欠片もない」

失礼な、とでも言つたげに明が鏡をにらみつけると、そんなことは

知らないとばかりに鏡は視線を横にそらす。

「確かに鏡はクールだね。うんうん」

そして、そんな両者のことなどどこ吹く風と明に同意する水月。
「だらだら。もう少し愛想が良ければもてるのに、もつたいない奴だよな」

「ぐ、もてない君が言つても説得力がないね。全く馬鹿らしい」
引きつった笑みを浮かべはき捨てるように鏡が言つ。

「それはお互い様だろうが、この天邪鬼あまのじやく」

「はあ、止めよう。互いの傷に塩を塗るだけだ。興奮してすまない」
ヒートアップしそうになつたところで、鏡が自重する。実際、不幸自慢など言つていて悲しくなつてくるだけだった。ソファに座りなおし、どつかりと寄りかかる鏡。

「青春していますね」

そこには、ウーが少し扉を開けて明たちを覗き見していた。

「ぶつ。な、なんでまだウーがそこにいるんだよ」

「いえ、何、面白そ……大きな声が聞こえましたので何事かと」

「本音が漏れているぞ。ウー」

せめてもの反撃なのか、明は恨みがましい視線をウーにぶつける。

「それは失礼。痴話喧嘩ちわげんかは程ほどに、くく」

彼女にとつては余程面白いのだろうか、笑いを殺しきれずにウーが堪えるように話す。

「痴話喧嘩ではないです、失礼な」

正面からは否定しにくいのか、目を合わせずに鏡が答える。

「そうです、夫婦喧嘩ふうふげんかです」

鏡の返答に合いの手を入れるように水月が応じる。その返答が思わずノリで答えてしまつたものなのか、本気でそう思つているのかは定かではない。

「馬鹿！ これ以上火に油を注ぐんじゃない、水月」

「そんなに私の腹筋をいじめないで下さい、あははははは」

その場でしゃがみこんで笑い出すウー。どうやら彼女は相當に笑い

上戻らし。だが、これはこれで反撃に成功したとも言えよつ。

そして、それから数分後。かなり本気で笑い転げていたウーがいつもの調子を取り戻して、再度ソファの同じ席に鎮座する。

「話せるようになったか」

「失礼しました。ありがとうございます」

「それで、本当にただ俺達のよつすを見にきた訳じゃあないよな」

「ここで『冗談』の一つも言いたいところですが、筋肉痛にはなりたくないのでも要件だけをお話しましょう」

右手でお腹を押さえつつ、もう片方の手を口元にあてて、こほん、と咳払いをしてウーが話しあ出す。どうやら彼女は相当な笑い上戻らしい。

「一回戦こと、決勝戦は残りのチームが一つになるまでのサバイバルマッチなのはA.Iからの連絡で知っていますね」

「ああ。そうみたいだな」

「黒の旅団が、米帝のチームとして参加しています。そして、白の教団のトップと並び立つとされる男がそちらから出場しています」

「米帝が本気なのはわかるが、それほどの男がなぜ別チームから参加しているんだ？」

「両者に何らかの合意や約定があったのかもしませんが、快樂主義者であるあの男がどこまでそれを守るのかはわかりません。そして、彼の操るサタンと直接対決になるようでしたら絶対に逃げてください」

「これはゲームとしての『GENESIS』だろう？ 危険がある訳でもないのに、なぜ私達が逃げる必要があるんだ、ウーさん」
「嗜虐趣味のあの男の前では、死ねない方が地獄ですよ。最低でも生きたままだるまにされる覚悟があるのでしたら止めはしませんが」「死はないんじゃなくて、死ねないんだね」

そういう水月の虚ろな瞳は、何を移しているのだろうか。明はむしろそちらの方に妙な不安に駆られる。

「加えて、それ以上にあの男の持つアビリティが問題です。『破戒』

ルールブレイク

のアビリティは、AIの支配から部分的にですが脱却するものです。一回戦で彼らとあたつたチームは、私と連絡を取り合っていたのですが、おそらく既に統合されたのだと思われます。

「そう、か。貴重な情報ありがとう、ウー」

「礼には及びませんよ。他には固有のアビリティとして『混沌』これは、デビルの擬態の強化版とも言いましょうか。複数のAAの武装や自身でイメージしたものをキメラ的に融合し使用することができます」

「デモムービーのドラゴンの形態を取つていたように、戦闘中に好きな勝手に形を変えることができるってことか」

「その通りです。そして、あのムービーのように教団トップ、アティード・ハレの操縦するミカエルと戦闘するものと思われますので極力あの一人には近付かないことをお勧めします。死にたくないのでしたら、ですが」

「ご忠告痛み入るよ、ウーさん」

「ありがとう、ウーちゃん」

「最後に『トランスポート』のアビリティです。上位のプレイヤーは基本的に全員持つているものと思われますので注意してください。といつても、彼らは戦闘中にあまり使用しないようですから記憶の隅すみに止める程度で」

以上です、と結ぶウー。

「まあ、すぐに降参するつもりは無いがな。どうせいすれは戦わなければならぬ相手なんだる。俺にしたつてウーにしたつて。なら、戦闘は間近で見ておきたい。それに命懸けはもう慣れてしまったよ別段、明たちが死の恐怖を克服した訳ではない。ただ単に感覚が麻痺まひしてしまつただけの話だった。

「本当に馬鹿ですね、あなたは。少なくとも一騎打ちになるような状況は避けてくださいね。それか、早々にやられて退場するか。お得意様は失いたくないものでして」

「素直じゃないのはみんな同じなんだね、ふふ」

「誰のことと言っているんだか、水月」
おどけるように笑う水月に呆れるように問い合わせる明、鏡はそっぽを向き、ウーは爽やかな営業スマイルを浮かべている。

「さあ、誰でしょう？」

そうして時は過ぎていく。

再び命を賭けた戦いの時が、刻一刻と迫っていた。

2 - 4 Truth (後書き)

とつあえず、設定資料更新しました。（8月27日更新）

2 - 5 ハート（前書き）

明には、自身に喰らひつゝ迫る龍の牙が酷く雑な動きに見えた。

「驕つたな、あんた」

ぞくりとするような殺氣と共に静かにつぶやいた明。

目の前に映るのは暗い闇。

視界には混沌こんとんとした炎とも煙とも似つかない何かが漂う。それは、この景色が光に満ちた生者の世界などではなく、死者さんけいのための世界なのだと思わせる。眼下には、地面と思われる場所が散見し赤黒いマグマのような濁流だくりゅうが川となつて流れる様子は、人体に張り巡らされた血管を連想させる。

戦闘に選ばれたフィールドは、地獄じじく。

それは、これから起きる不吉を象徴しているかのようだった。

『Survival』

エフェクトが視界に投射されると同時にフィールドに等間隔で配置されたハチームが闘争を求めて動き出す。ここまで勝ち残ったのは、『白の教団』、『黒の旅団』、『米帝』、『世界連合』、『王国連』、『神国皇族連』、『水月と愉快な仲間達』、『nameless』というチーム。

最後の『nameless』は、どこかのギルドの出身なのだろうか。明には聞いたことのないチーム名だった。

淡い光が眩く輝き、暗い空の闇を照らし出していく。

視界が白一色に染まっていく。

天が割れたという表現が近いのだろうか。

天をおあらう混沌が紅蓮くれんの炎によつて切り開かれ、そこには黒いドラゴンの姿が見えた。そして、竜の前に白い光が立塞がつた。狂笑と共に雪崩れ込んだ黒い竜、そして、直後に割り込んだ白い光に包まれた何かがフィールド上空で対峙する。

それは、美しく、神々しく、無条件に祟めたくなつてしまつような、

神の威光とも言うべき何かがそこにはあった。

「このフィールドにいる全員に告ぐ。死にたくないければ、すみやかにここから帰還^{リターン}しろ。」この場は私こと白の教団の『教皇』が引き継ぐ

カリスマめいた何かを持つた声がオープン回線越しにフィールド全体に響き渡ると金縛りが解けたかのような錯覚に陥る。一瞬だが、呆然としていたと、明は後になつてから自覚する。

一瞬の沈黙^{ちんもく}の直後に、王国連のチームが怒りと共にミカエルに襲い掛かる。そんな様子を見物したいのか、サタンの使い手は後方に下がり待機^{たいき}する。

「何様のつもりだ、てめえ」

「教皇と呼ばれていい気になつているようですね」

「俺達に命令していいのは、女王陛下だけなんだよ」

メイス、大剣、大盾と槍をそれぞれ携えた三体のアーケンジエルが連携^{れんけい}してミカエルに襲い掛かる。剣を中段に構えミカエルが応戦する。

「引き継ぐといった。リターンしないのならば、倒すだけだ」

叩き潰すように振り下ろされたメイス、これはギリギリで見切られ回避される、そして、大振りの隙をカバーするように盾の影からの槍による連突き、相手が防御に回った瞬間に合わせての大剣の横なぎ。しかし、これも当たらない。

とはいって、見事な連携だった。互いが互いの隙^{すき}を埋めるように、行動しつつ攻撃は決して途切れさせない。十秒程度の間に一体何発の攻撃が仕掛けられるだろうか。ついに教皇の操るミカエルから一瞬の硬直を奪うことに成功する。

「死ね、下郎が」

「我らの手に掛かつてくたばるがいい」

「陛下にその首を捧げよう」

三者は、それぞれの得物を手に躍り掛かる。

力ある言葉が紡がれると同時に白い光が瞬き、次の瞬間には王国連の三人はばらばらに碎け散つていた。

「信仰無き者は全て殺す、神は自らの民を選びたもう」

「教皇様は、優しいことで。ひひひ」

その間、しばし傍観者としてホバリングしていたサタンの使い手が、下品な笑い声と共に再度アティードの前に立塞がる。

「貴様の罪を浄化してやる。神の前にその血を捧げろ、ニクム・ツアラー」

白銀に煌めく長剣を突きつけ、声高に宣言するアティード。

「は、やつてみろや」

黒々とした雲間に雷鳴がとどろき、闇夜に幾重かの光が走る。激しい嵐の中を白と黒のA.A.がぶつかり合つ。あたかもデモムービーの再現のような戦闘が又、始まるのだった。

一方、明達こと水月と愉快な仲間達は神国皇族連と地上で向かい合つていた。神国皇族連のチームは、ロイヤルガードと呼ばれる人型のA.A.が三体、異なる武装のバリエーションでスリーマンセルを構成していた。

甲冑と和服が混ざつたようなゆつたりしたデザインのボディに、槍、斧、弓でそれぞれ武装している。木彫の仮面のようなフェイスマスクも、騎士というよりは武士という方が近いかもしない。ちなみに、槍を持っている機体から順番に御堂風雅、御堂雷雅、天正院縁という布陣である。

対する明達はウイザードとワインディーネを前面に、後方にはフェアリーという布陣を取つていた。中、近距離の武装が主体の二人が前衛となり、遠距離攻撃ができるフェアリーが後方支援に回るのは当然であるが、明としては女性一人に守られるのは今一格好が付かないところである。

「周囲のことはどうあれ、我々だけでも決着をつけたいところですが、それが本当でしたら一時的に協力することも惜しみません。そ

れにあなたは平治様の親友ですしね」

「平治様様だな。今度又、ラーメンをおいしくやらないとな」

「平治君、ずいぶん安いのね」

周囲への警戒をしつつ神代がおどける。

「別に直接何かをしたわけじゃがないしな。では、俺達の交戦目標は、黒の旅団だ。」

「委細^{いざいりようさい}了解しました。行きますよ、風雅、雷雅」

「御意^{ぎよい}」

「明、鏡。私達も行こう」

六人は中央の戦闘を避け、フィールドの西で戦う黒の旅団を目指す。組織内部のどの程度の強さの連中が参加しているのかは不明であるが、仮想の深部に辿り着ける実力であるといふことは、間違いないのだろう。

そうして、お気楽な試合は、あたかも死合いへとその姿を変える。しかし、それでも彼らは引き下がるという選択を良しとしなかつた。それは、この場が国家のパワーバランスを示す場でもあるといふことを理解しているからだった。

ここは、組織が自らの力を示す場^{じょう}であり、同時に威信^{いしん}を失う場でもあるのだ。強ければそれは威嚇力^{いかくりょく}となり、逆に弱者と認められれば相手に攻める理由を与えることとなる。しかし、相手に意図的に攻めさせ返討ちにする場合もあり一筋縄とはいかない問題ではあるのだった。

明達がそこに辿り着いたときには、黒の旅団チームのものと思われる一体分の残骸^{せんがい}だけがそこにあった。執拗なほど破壊されつくしたその残骸は、対戦者の怨念^{おんねん}染みたものを感じさせた。

「……今回の対戦は死罰なし、つまりは死ねないんだったよな？」

死なないのではなく、死ねない。

それは、生存している限りは苦痛を与えられ続けるということだった。セオリーであれば、相手の反撃の可能性を迅速に摘み取るため

に的確にコアユニットを破壊するが、中破から大破の間程度、ギリギリのラインで相手を生かしたまま行動不能にすることは不可能ではない。

「生きたまま火の中**あぶ**で焙られるような苦痛を味わったことでしょうね、悪趣味な」

「闘技者の風上にも置けんな。俺がぶつたおして、目を覚ませてやる！」

明の独りつぶやいた言葉に御堂兄弟が答える。そういう彼らの言葉には明確な怒氣が込められていた。

「どうやら、ノーマークだった『n a m e l e s s』の仕業らしいね。あくまでも位置関係から推測した情報でしかないが……強い、怨念のようなものを感じます。誰かの復讐なのでしょうか？」

表層とそこに込められた情動について、鏡と水月が異なった見解を述べる。事実を事実のまま汲み取る鏡と、起こったことに対しても由を考えてしまう水月の思考はそれぞれの性格ゆえの反応だろう。「その可能性は濃厚」といえるでしょう。とするなら、次に向かうのはあの一人が戦っているフィールドの中央部。我らも向かうとしますよう、風雅、雷雅

「「仰せのままに、我らが君」」

怒りという感情が先立ってしまっているのか、御堂兄弟が先行してそれを御するかのように天正院が続く。先走る彼らを見て、逆に冷静になつた明達は後方から支援するべく後ろに続くのであった。

白銀に輝く剣を手に銀翼の天使、ケルビムがドラゴンの姿となつたサタンに切りかかる。竜は黒い翼をはためかせて後方によけつつ、赤々とした炎を吐き出して天使を迎撃する。間断なしに続く炎の矢を軽々とよけつつ、天使がドラゴンに近付いていく。

「お前だけは、絶対に許さない」

オープソード越しに響き渡る女性の声。

「おいおい、お前さんがついたとき俺の部下にやつたことと俺がしたことに何の違いがあるって。ええ、おい、レナさんよ」いかにも相手を馬鹿にしたような態度でサタンの使い手、ニクムが答える。

「黙れえええっ！」

激昂と共に激しさを増していく剣舞。大きく橢円を描くような剣の軌道は、幾重にも重なりもつれドラゴンの装甲を削っていく。しかし、いかに動作が俊敏であっても大振りな攻撃には隙がある。黒き竜が吐き出す炎がついに天使を捕らえ、そして、深紅の炎に飲み込まれていくケルビム。

「炎の剣よ。我が叫びに応え、焼き払えええっ！」

叫びにも似た声が、炎の中から響き渡る。火炎に飲み込まれていた天使を中心に逆巻く炎の渦。そう、この剣の真価は自身の周囲の炎や熱を自在に操れることがある。

炎を突きぬけ、白銀の天使が剣を振り上げる。その赤を写した白银の騎士が、黒い天蓋てんがいを飛び交うドラゴンへと向かう。牙を向く黒竜と、剣を手にした天使が交錯じゅうさくする。

「死ね、死ね、死ねええっ！」

鬼気迫る掛け声と共に何十もの突きが止めどなく繰り出され、サタンの装甲に同じ数の風穴を開けていく。不定形な姿を持つサタンは、コアユニットの位置を自分自身で任意に設定できるために明確な急所が存在しない。強引に装甲を引き剥はがすか、まぐれ当たりを狙うしか倒す方法は存在しない。

「そうだ、それでいい。さあ、存分に殺し合おう」

ぼろぼろになつた姿のサタンが、弾けて戦闘開始直後と同じ姿で再構築される。しかし、それさえも見越していたのか再構築された頭部を即座に真二つに引き裂くケルビム。竜の頭頂部から腹部に掛けて上段から鋭い斬撃が走る。

「あなたの恋人と同じ姿になつちまつたなあ。ええ、おい」

フィードバック現象で頭部に激痛が襲おそつてゐるはずであるが、そん

なことはまるで感じさせずに一クラムがおどける。

「貴様あああああつ！」

殺氣と共に踊り掛かる、ケルビム。しかし、その動きを待つて、たとばかりに瞬時に肉体を再構築し、二つの首の竜が喰らいつく。混沌のアビリティは、擬態とは異なり、自信のイメージ次第で同時にどのようなものでも再現が可能だった。

もっとも、強烈な催眠術に掛かっているような状態の操作するシステムの都合、肉体を変化させ再度構築するのは自殺するに等しい。それゆえに、サタンが強力なユニットであるといわれながら使用するプレイヤーはほとんどいない。

「そうだ、もっと叫べ。醜くもがき、猛り、怒れ。そして、俺をぎりぎりまで追い詰めてみせろおおおおおつ！」

喰らいついた胴体を引きちぎり、その場で前方に回転して長大な尻尾^{しつぽ}で地面に向かつてケルビムを叩きつける。二つのドラゴンは、彼の言葉に答えるかのように大きく胸を張り咆哮^{ぼうこう}する。

「退屈^{えんじよ}そだな、アティド。どうだ、そろそろ再戦といくか？」

「遠慮^{えんりょ}しておこづ。私は復讐劇^{ふくしゅげき}に水を指すほど無粋^{ぶすい}ではない」

そつけなくアティドが答えるが、全くの嘘^{まなが}というわけでもなかつた。事実、一時戦闘を中断して彼女に相手を譲^{ゆず}つているのだから。もつとも、彼にしても当て馬にしているといつ側面がないというわけでもない。

辛うじて叩きつけられるのを免れたケルビムは、上空のサタンを見上げる。遊ばれたという事実が、レナをさらに怒らせる。

「……許さない、許さない、許さない。『支配者^{ペリネーター}』、我が意に答え、敵を討てえつ！」

彼女の支配化にある、一体のアークエンジェルが左右からサタンに迫る。

レナは、一人で三人分の登録を済ませ今回の戦いに参加していた。一人であっても、複数の参加はルール的にはなんら問題ない行為であるが、実際にやっている人間はほとんどない。当たり前だが、

複数人分の思考を同時にしなければAAの操作はできない。ルール的に可能であつても技術的には非常に困難だからだ。

「やつと、本気になつたか。そうだ、そうでなきや潰し甲斐がねえ」

見下ろし、急降下しながら機械の双頭竜が咆^ほえる。

天を仰^{あお}ぎ、地上から空へと舞い上^あがるのは三体の機械の天使。ハイレベルな操縦技術を要求される空中での高速近接戦闘だが、それが『GENESIS』というゲームの一番の華ともいえる。

「お前は、お前だけは絶対に許さない！」

「許すだあ？ 神にでもなつたつもりか、クソアマが。本当の戦

いつて奴をてめえの体に刻んでやる^{かねつ}」

そうして、両者の叫び共に戦闘が苛烈さを増していくのだった。

「辿り着いたな」

「戦闘中、みたいね」

空には三条の光が打ち上げられ、天には暗い闇^{ただす}が佇む。

三方から、三重の螺旋^{らざん}を描くように襲い掛かるレナのAA。嵐のような剣戟^{けんげき}がサタンを襲うが、先ほどのように削らせることがなく、爪や尻尾で往なし、交わす二クム。彼女の連携は王国連の三人のよう直線的なコンビネーションではなく、立体的な軌道であるにも関わらず背後からの攻撃さえも命中することはなかつた。

「一対一の決闘に水を差すつもりなら、止めておけ。俺の逆鱗^{げきりん}に触ることにある」

静かな殺氣と共に放たれた言葉は、ミカエルの持つ剣と同じく鋭利な刃のようだつた。中空に浮くミカエルが明達に向けた刃は、こちらの方が数の上での有利に立つてゐることとは無関係に全員に畏^い怖^ふを抱かせた。

「おもしれえ。じゃあ、てめえから片付けてやるよ」

一瞬であつても恐怖した自分自身が許せないのか、御堂雷雅の操るロイヤルガードが宙に浮かぶミカエルに踊りかかる。

「馬鹿、早まるな。縁様、雷雅の援護に入ります」

「もとより、いづれは刃を交える運命。勝ちに行きましょう」

まだ、ミカエルと雷雅の操るロイヤルガードの距離は離れているが、先行し過ぎれば援護もままならない。天正院、風雅が即座に雷雅のバックアップに回る。もともとある程度はそういう事態を想定していたのか、彼らの行動は迅速だった。

「いいだろう。神への祈りは届かないが、だんまつま断末魔だけは聞き届けよう」

三人を迎撃つべく剣を構えるアティド。その言葉には、おごりではない自身の力への絶対的な自身みなぎが漲っていた。アティドの怖い程に強い闘志のせいか神国皇族連の三人には、彼の背後に流れる雲が揺らめいて見える。

「御武運を祈ります、天正院さん」

「こちらは、俺達だけで何とかする。全力でぶつかってこい」

「君達の無様な姿はみたくないからな。だから、こちらはそちらが全力で戦えるように尽くすつもりだ」

六対一で戦闘するのが数の上では理想的であるが、つたない連携れんけいは相互に不利益であると両チームは判断し、一方のチームが戦闘し、残りが支援にあたることを選んだ。そして、明達の目の前にあつたのは、敵意でも闘志でもない。

明達が一番身近に感じていたもの。

純粹な殺意だつた。

「少し前の俺もあんな感じだつたのかな」

他人が命を賭して戦う姿みて、逆に冷静になつた思考は明にそんなことを思わせる。命懸けの戦闘を繰り返すことにより生まれる強固な仲間の絆は、逆に怨嗟えんさとなつて関わってきた人間達を束縛することとなる。

「そうだね、君と少し似ているかもしね」

当人が必死であればあるほど、周囲の人間からは痛ましくみえていた。

彼にとつて、水月を助けることがいつの間にか電研に入つた理由に成り代わり、いるかどうかもわからない犯人に怨念を燃やし続けた。その執念の炎を燃やし続けたためか、三島や神代から氣を使われていたことに明はなかなか気付けなかつた。

「冷静になつてみると、氣付かれない訳がないんだな。戦う理由が別にできた今ならわかる気がする」

守るべき仲間のため、国家のため、自身が生き延びるため。人によつて戦う理由は様々だつたが、共通しているのは誰も命を粗末にしようとは思つていないことだつた。仲間を助けることが自分の命を助けることに繋がり、助けてもらえるという意識がより強く人を生き永らえさせる。不合理ともいえる合理がそこにあつた。

「助けているものが近くにいると氣付けただけでも、大した進歩だ」

「その敏感さを別のところにも活かせばいいのに」

ぼそりとつぶやく水月だが、その言葉が二人に届かぬ内に前方で爆発が起こり、大音響がその声を焼き消した。

「つたく、アークエンジェルの装甲は頑丈だな。その方が、歯応えがあつてちょうどいいんだがなあああ！」

爆炎を吐き出した双頭竜が牙を剥き、威嚇するように咆哮を上げる。首の数に合わせたのか、四枚の大きな羽をはためかせるその姿は、機械というよりは一体の生きた怪物がそこに存在しているかのように思わせる。

対するケルビムと一体のアークエンジェルタイプは、炎の剣、槍と盾をそれぞれ構え三角形の頂点にそれぞれ位置するかのようにサタンを囲い込む。三体のAAを同時に操ることができるレナだつたが、精神的な疲労はその分大きくなる。

複数体のAAによる、高度な連携をすればするほどにその負荷は増加していく。そんな状態を反映するかのように、三体のAAは肩で息をするかのように体を揺らす。

「はあ、はあ。はああああっ！」

レナは、まだ負けたわけではないとばかりに気合を入れ直して、再度二クムへと攻撃を仕掛ける三体のAA。しかし、もはや完全に見切られているのか、彼女の攻撃は虚しく空を切るばかりであった。

「……何で、何であたらないのよ！」

それは、怒りというよりは悲痛な叫びだった。

攻撃 자체は、最初に小競り合いをしていた時と比べて単純に二倍。怒りを伴い激しさを増した攻撃 자체の速度も先程よりも遥かに加速している。

「見るに堪えた。そろそろ飽きたことだし、終わりにしようか」

二クムの軽い口調とは裏腹に、その言葉は確定された未来への死刑宣告だった。黒き竜の体が隆起し無数の棘となつて球体状に展開される。サタンの周囲を旋回していた三体のAAに逃げ場はなく、複雑に絡み合う棘がその肉体を破壊していく。

レナは声にならない悲鳴を上げるが、地獄はそれだけでは終わらない。一瞬の間に傷口を抉り強引に引き寄せ、その肉体を喰らいつき、火で焙る。生かさず殺さず、苦痛を与え続ける。

「なんだあ、泣き叫ぶこともできねえのか、あん。俺を殺しにきたんだろ？ この程度で死んでくれるなよなあ」

爪で裂き、蹴り上げ、ジャグリングでもするかのような気軽さでぼろぼろになつたレナの機体を弄ぶ。おそらく彼女はもう事切っているだろう。仮に統合されなかつたとしても、既に人間が受けられる限界を超えるダメージを負っていた。

（なんで平然とそんなことができる？）

その光景に對して明が抱いていたのは、恐怖ではなかつた。そして、彼の静かな怒りに応えるかのように肉体が稼動する。彼の意思は肉体を正確に敵の元へと運び、その腕は敵を倒すべく呼応する。

『Double strike』（二重攻撃）

クイックドロウの速射が宙に浮かぶサタンに向かい放たれる。第三者からの攻撃が予想外だったのか、サタンはレナの機体を取り落と

す。

「新手か、退屈しのぎにやちょっといい」
向けられた敵意はわずかなものであったが、それさえ戦慄せず
にはいられないほど濃密な不吉を孕んでいた。
(怖いな、だが、そんな状況を楽しんでいる自分もいる)
敵の方が自身よりも強いということは解かつていた。
だが、それでも不思議と負ける気がしない。
今の自分には、信じられる仲間がいるから、守るべきものがあるから、理由なら後からいくらでも付けられた。
銃をホルスターに収め、両手に振りなれたミスリルブレイドを握り、サブアームで炎の剣を引き抜く。眼前に迫る敵に向か、声をあげて挑みかかる。

「おおおおおおおおお！」

咆哮ぼうこうとは裏腹に思考は驚く程冷めていた。

あるいは、それは自身の死期を理解しているからなのかも知れなかつた。だから、俺は冷静に水月と鏡に冷静に指示を出したつゝの役目を自ら引き受けることにした。

そんな彼の行動に対しても返つて来た返答は短く。

「明の馬鹿」

ぴたりと息の合つた返答であった。そういうつとも、指示にはきちんと従つてくれるあたりは信頼関係があつてこそものだろ。一度でも被弾すれば死に直結するというリスクは、逆に明の脳を研ぎ澄ませ生き永らえさせていた。敵は文字通りの怪物であり、触れればたちどころに引き裂かれ先程のレナと同じ末路を辿ることになるだろう。

「その剣は、あいつのか。って、ことはあんたプロフェッサーを殺したのか？」

通常のケルビムが標準装備している剣とはデザインが異なる明の持つ、炎の剣を見てニクムがつぶやく。

「そうだ、俺が殺した」

「惜しい奴が死んだな。だが、そういうことならお前の方があの女よりはあんの方が楽しめそうだな」

「樂しませるつもりはない、終わらせむ」

「いいねえ、あんた。俺が直々に殺してやるよ、あははははは」
双頭の竜が天に向かつて雄叫びを上げながら、蒼の騎士へと牙を剥ぐ。

明の操るフェアリーは、いつの間にか増えた四本の鉤爪と双頭の猛攻を三本の剣を以つて縦と横の斬撃を同時にこなしつつ敵の攻撃を往なしていく。通常の人間型AAであればありえない拳動と彼の驚異的な反射神経が正面からの近接戦闘を可能にしていた。

脇を掠める竜の牙、鋼鉄すらも易々と切り裂くであろう鉤爪の間を抜け、肌を焼く灼熱の火炎を潜り抜け、何度も切り結んだのだろう。アンカーを打ち込み、曲芸の如き立体軌道で攻撃を交わしつつ、銃を放つ。

何度も撃ち貫き、切り裂いても手応えはない。

体感時間が無限に引き延ばされる死の舞を続け麻痺した感覚の中で、もうどれだけの時間剣を振るい、銃を放ったのか明は覚えてはいない。しかし、実際の戦闘時間は一分経つたかそこらだろう。

今はまだ、恐れよりも興奮が勝っていた。

だが、勝てないことを自覚していることは、必ずしも弱さではない。自分が弱者であると自覚することは、強者に對してに驕らないということでもある。

（今の俺にならできるはずだ）

明は、あの時その眼に焼きついた光景を自分なりにアレンジして再現する。

そう、予選においてセルゲイ・ロマノフの操るエンペラーを一蹴して見せた技、目の前にいる男に教皇と呼ばれていた、アティード・ハレが使用していたもの。

（いや、あいつがこの動作を技として認識しているかはわからな
いか）

どこかずれた思考。

そして、明はあえて、一本の剣を脇に収め炎の剣を振りかざし思考を脳裏に焼きついた一枚の画像へと集約していく。

「目の前をちょろちょろとうざいんだよ、蠅がああああっ！」
それは、一クム自身が強者であると自覚しているがゆえにできた間隙まきだつた。

自身が相手を一方的に蹂躪じゅうりんする側であると自覚している彼は、近付いてきた弱者を噛み碎くべく獰猛じうもうな牙を剥ぐ。

明には、自身に喰らいつこうと迫る竜の牙が酷く雑な動きに見えた。

「騎さしつたな、あんた」

ぞくりとするような殺氣と共に静かにつぶやいた明。

相手が弱者であると決め付けた思い上がりが、作り出した偶然の産物。

爪や炎による何十もの波状攻撃を交わし、耐え忍ぶことでやつと通り着いたチャンス。

歓喜に明の心が昂たがぶる。

だが、そんな興奮状態にある精神とは真逆に彼の肉体は冷静に、そして、完璧に動き完全な形で技を再現していく。

すれ違いざまに抜刀と同時に切つ先による一太刀、返す手で一発目が、

体が重なる瞬間にもう一度右手で切り裂き、

左手に渡された剣は背面から敵の首筋を田指し走る。

突き刺された切つ先を支点に円舞曲でも踊るかのように体位を強引に反転させサタンの背面と向かい合つ。回転した速度を乗せた剣を再度右腕に持ち替え袈裟懸けに振り下ろし、再度、剣を收める。

(ここまででは、完璧。あとは、これを可能な限り加速し続けて放ち続ける)

明が認識できたのは、この五連動作の繰り返しの初動と後半のみだった。間のつなぎの部分は目視したものなのか残像なのだが判別できなかつた。それでも間違つてはいないと明は確信していた。

意識の加速に合わせて高まる肉体の動きと精神の高揚。

『累進加速』^{（ライジングダムピード）}による無限の上昇感覚を味わいつつ、一太刀毎にアクセラレートしていく自身の思考速度。ほとんど反射的に剣を振るい、マグマの噴出^{（ふんしゅつ）}の如く激しい斬撃を重ねていく。無意識の内に口から出たのは、言葉にならない叫び。

「あああうううおおおああああ」

「あんた、最高だぜ。あひや、あひや、あは」

痛みなどまるで存在しないかのように、不気味に笑う一クム。明もそんなことは構い無しに、否、構っている余裕などないからこそ、ひたすらに攻撃を放ち続ける。そして、思考と直結しているがゆえに、こういった脳内麻薬^{（あいまい）}が過剰分泌^{（かじょうぶんびつ）}しているような興奮状態のときの音声は、曖昧なものとなる。

今明には、自身に見えている視界が仮想のものであるのか、ぼやけた思考が生み出した幻想なのか判別できなかつた。

加速していく程にシビアになつていいく斬撃のタイミングに、一瞬を無限に分割したような時がついには現実に戻る瞬間が訪れる。行きつけの駄賃^{（だちん）}とばかりに持ち替えた手で相手を思い切り弾き飛ばし、その反作用を利用し自身を加速させ間合いから離脱する。

数秒という時間に何十の剣戟^{（けんげき）}を重ねたのか、明はもう覚えていない。

（これで、必要な時間は稼いだはずだ）

明の後方では、ずたずたになつたサタンのAAが即座に再構築されていぐ。

『Magic Circle』（魔方円）

この間だけは、無防備になるというタイミングに水月のAA、ウィンディーネがサタンの真下からウィザードによつて打ち出される。ロケットのような勢いで強制的に加速されられたAAは高々と天空へと飛翔する。

そして、加速装置として使われたウィザードの装甲兼ねるソードビットは、完全に展開され無防備な本体が地面に構える。彼女の構え

る右手の先には円柱のように細く五重に連ねられたリング状の電磁障壁が展開されている。

『Water Sprit』（水の精靈）

空を飛ぶワインテイナーは、自身の周りにある水球の水をぶつけ、儀式槍をサタンに突き刺しちらに技を重ねる。

『Flash Freeze』（瞬間凍結）

突き刺さったままの武器を放棄して、即座にその場から離脱する水月。

「薙ぎ払え、我が剣」

突き出されたウィザードの手の先で展開された、五重の魔方陣の中央には、雷光を纏^{まと}い静止した剣が見える。電気の弾ける音に空気が震え、暗い闇を薄つすらと照らしている。

『Excalibur』（聖なる剣）

祈りの言葉と共に放たれた剣は、夜氣を裂き、音を置き去りにして天へと駆け上る。

「まさか、この俺が。クソったれ」

凍り付き身動きの取れないサタンにこれから起きる攻撃は避けようがなかつた。

だが、ニクムが本当に恐れているのは、本体を粉々にされることではなかつた。はき捨てられた言葉の直後に、ばらばらに碎け散つた破片の中にはコアユニットは存在せず、剣は黒い空に赤々と燃える太陽へと立ち上る。

そして、サタンのAAを貫通した剣は、太陽の光に隠されたコアユニットを完全に捉え破壊したのだつた。

「そこのがキ、お前の名前は？」

破壊されてから行動停止するまでのわずかな時間に話し掛ける一
クム。その言葉に明は短く思案し答えた。

「……新城明だ」

「貴様が死ぬまでは、覚えといてやる」

（どうやら俺は、自分が思う以上に厄介事に巻き込まれやすい体质

のようだな。はあ）

行動停止処置が為され、完全に沈黙するサタンのAA。

三対一、それでもなお手強い相手だつたと明は感じていた。

相手がこちらを適度な歯応えがある雑魚ざいけという程度の認識で挑んでくれていたことや相手の絶対に負けることはない、という油断をしていてくれたこと。水月や鏡が指示した通りに的確に動いてくれたこと、そして、最後は作戦が功を奏そうしただけだつた。

勝てたのは偶然が重なつただけに過ぎなかつた。

「君は、なかなか強いんだね」

宙に浮かぶミカエルのAAから声が聞こえる。

「偶然が重なつただけだ」

「偶然を重ねるのも実力の内さ。君自身の手で勝ち取つたものならば、それは誇つてもいいものだらう」

全てお見通しだとばかりに話すアティード。偶然が重なつたというのではなく、『重ねる』と言い直す辺り、明のことを過大評価しているのかもしれない。

「あんたの技、勝手に使わせてもらつた。すまんな」

「そんなことで咎めたりはしないさ。だが、あれを完全に再現できたのならAIの加護にあやかつたといつことか」

意味深な発言だつたが明にはそれが何を意味しているのか理解できなかつた。

「今度は、メインディッシュだけ取りやがつたな畜生」
相変わらず苛立ちを隠せない声で話すのは御堂雷雅。

「やはり、神代様は美しい」

心酔するかのような声で話すのは、御堂風雅。

「お疲れ様でした、お三方」

最後に聞こえた穏やかな声は、天正院縁。

神国皇族連の機体は一体どれだけの攻撃を受けたのか、細かく刻み込まれた傷が縦横に走つている。いや、傷を付けるだけですませられたということは、手心を加えられたということだろう。あれだけ

の傷を付けるなら、撃破する方が安易であることは想像に難くない。

「白の教団は、いつでも君を歓迎しよう。それでは、失礼する。

『Return』（帰還）

三人にはまるで興味がないのか、教皇は明に一方的に連絡先を送りつけると、もうこの場には用はないとばかりにリターンプロセスへと入り、ミカエルは直後にフィールドから姿を消したのだった。

「フィールドに残っているのは、私達だけみたいだけど最後に戦やるとする？」

神国皇族連に対して、挑発的な言葉で確認するのは鏡。

「現状の戦力での攻略は困難です。ここは、今回の立て手役者に手柄を譲るとします。構いませんね、風雅、雷雅」

「女性の誘いをお断りするのは気が引けますが、御前の意思を尊重します」

「うう、異論ねえよ」

ミカエルに遊ばれたというのがわかつているためか、口惜しそうに雷雅がいい、それを了承と受け取り天正院達は、リターンを始める。フィールドには明達三体のAAを残すのみとなり、直後に響く戦闘終了を告げるシステムアナウンスの機械音声。

【THE END（戦闘終了）】

『地獄』フィールドの暗澹とした雲は搔き分けられて、煌々とした光が勝者を祝福するかのように照らしていた。

勝者、『水月と愉快な仲間たち』。

草原に風が吹き、草がたなびく。

勝者となつた明は、強制的にプライベートエリアに転送されていた。

「また、お会いしましたね」

「黒木愛か？」

「半分は正解、半分は不正解」

「イエスでもノーでもない解答ができるんだな」

零と一以外の論理も内包したAIであると明は理解した。彼女と

の会話が自然に行えるのは、ただ単に似た事例を参照にしているだけではなかつた。

「擬似人格プログラムでもあり、人間でもあり、数式の羅列でもありそれらは全て私という情報体を構築する一面の真理ですから」

「それで、俺はあんたをなんて呼べばいい」

「愛ちゃんとでもお呼びください」

明はハンマーで叩かれるような衝撃を受けていた。てつめんび鉄面皮だと思つていた相手はどうやら、相当な不思議ちゃんらしい。

「その参照データは著しく不正確なのではないか？ あんた、白の教団なんかには神だと崇められる存在じゃなかつたか」

「黒木愛なら、そう望むというだけの話です。今私は、酷く人間くさいのです」

どうやら彼女の自律思考において、ベースとなつた人格である黒木愛の好みが多分に反映されているらしい。

「はあ。で、その愛ちゃんは俺を呼び出してどうするつもりなんだ？」

「勝者に祝福を与えるためです」

落ち着き、鈴の音のような透き通る声で話す彼女は明の目に神秘的に映る。しかし、それは彼女の一^{がい}部であり、先程のような一面も彼女は持ち合わせていた。

神であり人でもある、人であり神でもある。

思えば、古来の神話の多くは神に對して人格を与えているものばかりだ。人が生み出した神という概念は、どこままでいつても人間的な存在でしかないのだから、それは当然の帰結といえるのかもしれないが。

「賞品の授与、つてところか。まあ、観客がいないというのは堅苦しくなくていいな」

「そうですね。ですが、正直などころ貴方が優勝するとは思つていませんでした」

「はは、俺もそう思う。それで、女神様は俺に何をくれるんだい

？」

明に女神と言われ照れているのか、黒木愛は頬を赤く染めて、軽く目を伏せながら明の方をちらちらと見つめる。その仕種は、プログラムが機械的に再現しているというよりは、本物の人間がそこにいるようにしか映らなかつた。

「こちらのものを進呈いたします」

彼女が虚空に右手で線を描くとそこから物体が出現する。差し出された書状を明は、騎士の誓いを真似るかのように跪いて受け取る。紙を丸めた書簡のような物体は、実質的にはデータの塊で構成された『GENESIS』第一階層ゲートフリー・バスだつた。

「使い道の無い特殊兵装や電子マネーを予想はしていたが、案外実用的な賞品だな」

「仮想空間中に散らばつていますから、頑張つて集めて下さいね」

「スタンプラリーのよつたな氣楽さで言ってくれるな。ガーディアントとの戦闘が必至なら一個集めるたびに命懸けになるんだが」

「私がシステムの一部である以上は、そのようにしか言えません」

「まあ、当たりませんよと書いて売る宝くじはないか」

「そういうことです。それに、誰に対しても等しい存在であるがゆえに、『白の教団』は『私』を神格化している訳ですしね」

「まあ、君は仮想といつ世界においては秩序を司る存在だからな。君のする全てはシステムによって完全にコントロールされた神の博愛とも取れるか」

「でもそれは、受け取り方次第なのですけどね。等しいということは、そこにある不平等を是正しないということでもありますから」

「結局は『インの表と裏なんだよな。一見正しいことをしている白の教団もその実態はエゴの押し付けだ。取り締まられる側の黒の旅団は、むしろ正しくシステムの法則を利用しているだけの存在であつて悪ではない』

これがただの感情論ならば、黒の旅団を断罪することは正しいことになるが、それは私刑を認めることであり、レナのような復讐者

ふくしゅうしゃ

を肯定することになる。しかし、仮想の法は初めから明白だ。

勝者は全てを手に入れ、敗者は全てを失う。

今回の大会のようなケースや特定のエリアを除き、仮想において適用される大原則。

ゆえに、殺されたくないなら、殺したくないのなら、そもそも利用しなければいいのだが、P.I.Tさえ持つていれば誰もが無料でできるという安易さが落とし穴となっている。

そして、そこでは殺人が肯定され、略奪が許されている。どんなに正義や理想を振りかざしても、^{みな}欲望に負ける人間は後を絶たない。まして、それが犯罪であると見做されないのであればなさらだ。

「そうかもしませんね。それでも、認めたくないと思つてしまふのはA.Iとしてはいけないことなのでしょうか？ おかしいですね、人間としての私はもう死んでいるのに」

「自分で思い、考えるあなたは人間だ。そして、その事実に対しうどういった判断を下し、どんな結論に至るとしてもそれは間違いじゃない」

「あなたはとても優しくて、卑怯です」

彼女はそつと微笑み、涙を流す。

「そうかもしれない。でも、俺の言葉は死者への憐憫ではないつもりだ」

「死とは、何なのでしょうか。ここではそれが、酷く曖昧です」これがただのゲームであれば死ぬ訳がない、だが、ここで殺されたのであれば全てを失う。

今の彼女は、人の生殺与奪を全て握っているとさえ言える。その彼女自身さえ、生きているのか死んでいるのかはっきりとはしていない。

A.Iとして生きているのか、人間としての生の延長なのか、そもそも植物人間状態の自分が見ていく夢なのかもしれない、真実がどうであれ、他人からどう言われたとしてもそれが本当であると確認

する術^{すべ}を彼女は持つていないのでから。

そんな彼女の質問に、明は短くこう答えた。

「答えは、あなたの中にある」

それは、どんな答えを与えるよりも、確かにものだと明は思う。デカルトは『我思う、ゆえに我あり』という言葉を残した。彼は意識の内容は疑い得てもその存在は疑い得ないとした。そして、意識が生きる者の特権であれば、死者には思考する』とはできない道理だ。

「本当に、あなたは、ずるい人です」

ゆっくりと呼吸に合せて愛は言葉を紡ぐ。

それがどんな存在であったとしても彼女は確かにここに生きている。そして、その状態をどう定義するかは誰かに言われるものではなく、彼女自身が決める』ことだった。

「だから、あなたの好きなようにするべきだ」

突き放すような言葉は、絶対の真実よりもよほど優しかった。

なぜなら、今の彼女は願うとおりの自分になれるのだから。「それでは、私のことを愛と呼んでください」

少々意表を突かれたが、明は笑い答える。

「それが君の出した答えなんだな。愛」

「だって、その方が楽しいじゃないですか。明さん」

「そうだな。さて、俺はそろそろ戻るとするよ。控え室まで転送してくれるかい?」

「お安い御用です。それでは、また会の時まで」

「ありがとう、愛」

転送され始めた明に愛は、さらに言葉を掛ける。

「さよなら、明さん。ふふ、そういえば私の趣味は手紙を書くことだつたんですよ」

明の口がわずかに開く。

愛は何も言わずに微笑む。

草原に風が吹く。

一人の言葉は、

ただ電子の海へと消えていった。

同時刻、選手控え室にして。

水月が駄々（だだ）をこねていた。

「明一人だけ表彰されるなんて、ずるい」

「チームリーダーとして登録されている人物が行くのだから仕方ないだろう。だが、我々としては協力した分はしっかりと返してもらうとしたようじゃないか」

邪悪な笑みを浮かべて、鏡が笑う。

「しかし、私の忠告は全く意味がなかつたようですね」

一人お茶を飲みながらマイペースにしているのは、ウー。

「確かに忠告は意味がなかつたかもしませんが、情報はかなり役立ちました。まさか完全にコアコニットを分離しているとは予想外でしたが」

「でも、鏡はAAとコアコニットの位置情報が異なるって事は気付いてたんでしょ」

「それでも、やぶを突いて蛇を出したくはないよ。正直、私はウーさんの意見に賛成だったからね。教皇とあの男の戦闘を放置して、機を見て介入するのがいいと思っていた」

全てのAAに標準装備されているレーダー機能のみであれば、からくりに気付かずに最終的には破壊されていたことだろう。レーダー機能は平面図での相手の位置を示すだけのものであり、その座標に確かにサタンは存在していたのだ。

鏡は、アビリティ『神の眼』をもつて早々にトリック見破つていた。明も戦闘直前にそのことに自力で気が付いていた。

「漁夫の利という奴ですね。まあ、最初から戦わずに降参するといつのもの安全策としてはありますですが、そんな選択をする明さんではありませんね」

「そうですね、それに命懸けの戦いだから戦闘は避けようという

のは本当に今更過ぎますね。死罰が怖いのならそもそもこんな仕事をやつていませんし」

「思えば学生時代から、結構無茶ばかりしていたものね。私達」

「我々の実力を考えればガーディアンとの戦闘ぐらい不可能ではないという戦力分析だったのだが、あいつは例外的な強さだった」

明、水月、鏡の三人で卒業記念ということで決行されたガーディアンの討伐作戦は、辛くも成功したが結果的に水月は仮想に捕われる事となつた。その後の記憶の方が強烈過ぎるために色あせてしまつてゐるが、作戦はすぐに終了し思い出となるだけのはずだった。

「ふむ、それは希少種という奴かと思われます。じく一部の敵がそのような存在として出現するようです」

「情報屋の本領発揮、ですか。確かに、ガーディアンの強さは均質ではありませんね」

「そんなことどうでもいいから、ガールズトークしようよ。今は、男の子いないし」

「それもそうですね、水月さん。これ以上は有料ですし」
そこは商人らしく、ちゃっかりしているウー。

「それは陰口になるではないか」

普段は毒舌なのに、本人がいなときは妙に気を使う鏡。

「まあまあ。こういうときじゃないと話せないし」

しかし、そんなことはどこ吹く風とマイペースな水月。

「そうですね、私も加わって四角関係が形成されつつあるこの状況をどうすべきか考えないといけませんし」

「ハーレムだね、鏡」

「ふん。最終的にどうするか決めるのはあいつだ」

実は、既に五角関係になりつつあることを彼女達は知らない。

「それではまず、彼は巨乳派なんでしょうか、貧乳派なんでしょうか？　お二人に確認したいです」

「難しい問題だね。今度、家探しでもしようか？」

あごに手を掛け、考え込むような表情で水月が答える。

「ぶつ。いきなり、何を言い出すんですか」一人とも

飲んでいたアールグレイ風の紅茶を吹き出しけながら、鏡が突っ込む。とはいえ、以前に犯罪同然のやり方で明の家に侵入した彼女が言えるようなことではなかつた。

「まあ、いずれにしても彼の好みを後で変えてしまえばいいことです。色仕掛けでもなんでもして適当にたらしこみましょう」

「当たつて碎ける、だね」

「いや、くだけたら終わりだろつ」

軽く頭を抱える鏡。

「ですが、私が思うに彼は押しに弱いと思いますので、悪くはない戦術かと」

「言われて見ればそうかも」

ウーに言われて思い返すように水月が思案する。

「考えてみれば、あの朴念仁^{ぱくねんじん}相手ならストレート過^かれるくらいの方が丁度いいか」

そういうえば、自分も正面から攻めたことはなかつたと思う鏡。色仕掛けのようなことはしてみたが、自分自身のキャラクターではなく。返つてありのままの自分で攻める方が正解だつたのかもしれないと思いつつ直す。

「まあ、あなた方とは末の長いお付き合いになりそうですし、楽しみながら行かせてもらいましょう」

そんなことを話していると、ソファの近くの空間が歪み出す。

三者に走る一瞬の緊張、しかし、それが見知った人の輪郭を持ち始める^{あんど}ると安堵する。

何かが転送されてくる兆候^{ひょうこう}が現れた後、明の姿が出現しだす。

「これでガールズトークは終了だね」

鏡とウーに笑いかけて水月がいう。

「そう、だな」

少し安心したような、残念そうな表情で鏡が話す。

「酒池肉林の始まりですね」

どこまでが本気なのか、爽やかな営業スマイルを浮かべてそんなことをいうウー。

「いつの間にか仲良くなつたようだな、三人とも」
かしましい様子の三人を見て、明が少し微笑む。

「ううん。四人だよ」

水月が笑つてそういうと、全員が笑顔になる。

仮想という戦場が、殺伐とした、何かを奪うだけの地獄であつても、そこで生まれる絆も確かに存在するのだと、そこにある笑顔の花を見て明はそう思うのだった。

2 - 5 ハート（後書き）

一応、完結です。前書きに上げたところなど、明が少しがつこくなっています。あと、一部修正しました。（8月31日）

3 1 1 Return (前書き)

「という訳だ、新城明、三島平治、神代鏡、天宮水月の4人には、宗光学院に教育実習生として赴任ふにんしてもらひ」

3 1 1 Return

某日、時は午前九時。

場所は電腦技術研究所、新城大地の研究室にて。

電研の新制服姿の男性が一人。

いつかのよう、新城明と新城大地が向き合っていた。

「という訳だ、新城明、三島平治、神代鏡、天富水月の4人には、宗光学院に教育実習生として赴任してもらひつ」

「まだ、説明してないのに『という訳だ』で通じると思つてingのか？」

「いや、任務だし。今言つた通りのことだから説明要らないかな、と」

「頭痛くなつてきた」

軽い目眩めまいを覚え、頭を抱える明。

「知恵熱か？ ふむ、お前には少々難しそうな説明だつたようだ」

眼鏡に手を掛け、足を組み替えつつ、いやらしく笑う新城大地。そのいかにも小ばかにされているような態度が明には気に食わない。

「だから、説明してねえよ！」

そもそも、こうやつて怒るからかわれていることを考えれば、それは完全に大地の思う壺だった。

「落ち着け。そもそも、お前が通つていた頃もこいつた活動はやつていたぞ。まあ、黒木智樹に指導してもらつていれば新人教師の印象が薄くなるのもわからんでもないが」

「もういい。そちらが話したいようにしてくれ」

軽くそっぽを向くようにして、明は言つ。

感情が隠しきれていな様子は、公としての自分ではなく完全に、ありのままの姿をさらけ出した明だった。案外、そんな明の自然な

姿を見たいがために大地は明をからかっているのかかもしれない。

「ふむ。といつても、先に述べたように教育実習生として学生の様子を見ることを主題としているが、お前達の休暇きゅうかという側面もあるのが今回の任務だ。慣れるまではそれなりに大変だろうが、事故でもない限りは安全だ。気楽に過ごしてこい」

宗光学院生の様子を見ることが任務なのは、卒業生そつぎゅうせいがそのまま電研で働くことになるので、その下調べの意味を兼ねかねてしているのだろう。任務としての重要度はそれほど高くはないが、だからと言つてないがしろに出来るものでもない。

また、新人である明達に仕事が来たのは、年が近い方が学生と教師の関係は構築しやすく、内偵として動くにはやりやすいという側面もある。

「休暇なんか別にいらないが。週に一日は休みをもらつてているし「部下の管理も仕事のうちだ。そして、今回の任務をビビつ捉えるかは、お前達次第だ」

部下の管理といわれては、引き下がるしかない明。彼は管理される側であると同時に管理する側でもあるのだ。彼が平氣だといっても、彼の部下である神代鏡、天宮水月までもが平氣であるかはわからないのだ。

「いや、任務だつたな。了解しました、大佐」

「それでいい。適度に緊張し、適度に休め。それが自身や仲間と共に生きることに繋がる」

思わず敬礼してしまった明に軽く微笑み、敬礼で答える大地。彼もまた、人の親であつた。

「それでは、失礼しました」

「健闘を祈る」

そして、今回の任務が始まるのだった。

3 1 1 Return (後書き)

もしかしたら、そのうちベルゲームのようになにか分岐するかもしだせん。

てか、この作品はゲームシナリオとして書いてたものを小説用に直したものですから。まあ、メインの話を完結させた後でIFとしてやる可能性があるだけですがね。（9月6日一部修正）

3 1 2 Return (前書き)

「私と付き合ってください」

田を輝かせつゝ田百合が質問する。

「」遠慮させでもらいます。といつより、それは質問ではない

3 1 2 Return

3 1 2 Return

新城明の場合。

宗光学院。

電腦技術研究所と提携している国立の学校であり、専門教育に特化した教育機関である。

新城明、神代鏡、天宮水月の三人はここに教育実習生として赴任することになる。

無論、一時的な赴任はあるのだが、それぞれが講義を行うことになっていた。全員、服装は電顕の新制服の着用が義務付けられており、近く配属されることになる電研の宣伝という側面もあった。

「今日からじばりく、ここで講義を行うことになった新城明だ。若輩者ではあるが、全力をつくしたいと思つてよろしく頼む。といつても、つい最近までは自分自身がここ的学生だったのでそんなに堅苦しくしないで構わない、気楽にいじり。質問があれば、挙手してくれ」

一気にまくし立てるように明は話したが、最後の気楽にこうと、いつ部分だけは伝わったのか、生徒達はそれに挙手をして質問を始める。

「はい、先生は何の科目を受け持つんですか？」

「A Aでの実技や座学なんかを担当する。同時に赴任してきた三島平治、神代鏡、天宮水月も細部は違つが似たような部分を担当することになっている」

「一股を掛けているんですか？」

連続して質問をしてくる女子生徒。

名前は、姫川百合だったか。

ウエーブの掛かったロングの茶髪がなかなか印象的な学生だ。

「ノーコメントで」

とりあえず、さらりと流す。

「そもそも恋仲ですか？」

案外ねばるようだ。

「それもノーコメントで」

華麗にスルーパスする明。

「好きな料理はなんですか？」

これは、別な生徒。

普通な質問をしてきたのは姫川のお隣、白百合真菜。

なんとなく、お嬢様然とした雰囲気の生徒だった。整った身だしなみに、切り揃えられた黒髪はどこか育ちのよさを感じさせる。

「ラーメンだ。特にとんこつが好きだな」

「実技担当ということは、強いんですね？」

やはり男子生徒の興味はそういう部分が大きいのだろうか、質問に性別がある程度関っているように明は感じた。少し感心して事前に渡されていた生徒のプロフィールをARで確認しつつ話を聞く。（こいつの名前は、四葉剣三か。確かにかなり成績がいい生徒だったな）

「まあ、そこそこは。多分、学生よりは強い」

「曖昧ですね」

ポーズなのか、長めの髪をかき上げそれとも普通にずれているからなのか眼鏡の位置を直しつつ口を開く四葉。

「そちらの実力を完全に把握している訳ではないからな」

「巨乳派ですか、貧乳派ですか？」

再び姫川。

いわゆる、彼女はパパラッチといつやつなのだろうか。

「どちらもいける」

たまにはこういったふざけた質問にも答えてやる明。女教師相手ならば普通にセクハラな気がするが、年齢は一つしか離れてはいな

いとはいえ相手は子どもだ。

「眼鏡はかけますか？」

と今度は眼鏡の白百合が再度質問していく。

彼女は、割とおとなしそうな印象だったがそれでもなにようだ。

「視力はいい方だ」

無難に回答する。

「B-Lはいける方ですか？」

さらにもう一つ質問していく。

「いけない方だ」

（お前は一体何が目的だ……）

「神代先生のスリーサイズは？」

小生意気な感じの短髪の男子は、三井猛。活発な奴は固まっているのか、四葉の隣だ。

（というか、俺を経由してまで知りたい情報なのか）

「死にたくないければ自分で聞け」

かなりへこんだ様子の三井を放置して続きを移る。

「受けですか？ 攻めですか？」

どうやら、おとなしいという印象は勘違いだったようだ。マシンガンのように質問していく白百合。

「そもそも質問が意味不明だ」

「新城先生の趣味はなんですか？」

助け舟のつもりなのか、四葉がまともな質問をしてくる。

「読書。質問をそろそろ打ち切るぞ、本当にしたい質問にしぼれよ」

「神代先生と天富先生はどういうスタイルが好きですか？」

これは三井。

案外こいつもこりない。

「どちらも敵には回したくないバトルスタイルではあるな」

「あ、逃げた」

と姫川。

「大人の処世術だ」

「攻略するならどちらが楽ですか？」

とは、三井。本当にこりない奴である。

「又、意味深な。危険球は投げたくないのノーコメントで。次で最後だ」

パパラッチ姫川の小さく舌打ちする音が聞こえる。

(あぶね)

「私と付き合つてください」

田を輝かせつつ白百合が質問する。

「遠慮させてもらいます。というより、それは質問ではない」

「じゃあ、決闘してもらえますか？」

これは四葉だった。

彼は明達と同じ人種なのかも知れない。

「疑問系にすればいいという問題でもないよ。まあ、実技演習なら付き合つてやる。放課後にでも待つていろ。そろそろ、講義を開始する」

「はーい」

割と和やかな雰囲気で授業が開始される。

「A Aでの戦闘に関する技術について、説明する。といっても、俺の場合は体で覚えた口なので実技部分が多くなる。説明も下手だと思うが、そこは諦めろ」

「しゃー。実技だ」

三井が大げさに喜ぶ。

しかし、彼らは知らないのであった。

これから起ころるであろう地獄を。

「まあ、軽く流すつもりでやるが、希望者は四葉のように俺に挑んできても構わん。俺自身、先生に指名されて何度も戦闘訓練をしてきたからな。とりあえず、今日は座学だ。いいな」

「はい、新城先生」

クラスで声が重なる。

くすぐつたいような気もするが、悪くはないと思ひ明。

「まずは、仮想空間での戦闘で最優先されるのは、相手の破壊でも、任務の完遂でもない。自身の生存である。ゆえに、俺は基本的な戦闘技術についてレクチャーする」

教壇に手をつき、クラスを見渡す。

(俺は、值踏みされているのか？ 最初ぐらいはみんな真剣だな)

「A Aでの戦闘は、基本的に一種類の武器を使用することで行われる。一つ目は近接武器、二つ目が遠距離武装だ。そして、遠距離武装の最大の利点は一方的に相手を制圧できることにあるが、戦闘において近接武器が未だに使われていることには理由がある

疑問に思ったのか、考え込むような生徒がちらほらみえる。

「それは遠距離武装の命中精度の悪さだ。これは、使用される兵器の性能が低いということではなく、直進しかしない弾丸が立体的な軌道で、なおかつ高速で動き回るA Aを捕捉できないことに起因する」

一定以上の距離を保つてさえいれば、相手が発射モーションに入つた直後に始動しても回避がほぼ確実に成功する。これはA Aが初速からかなりの速度を発揮できることと、一方的に攻撃できる間合いで、両者の距離が相当程度離れているなどの理由がある。

「ゆえに、相手に確実に命中させるためにはかなり近付かないといけない、というメリットとは矛盾した状況が発生する。これが、我々が戦闘の際には一定程度の距離を保ちつつ円を描くように移動しつつ戦闘する理由だ」

フィールドによつては、円の形が途切れたりすることや、橢円を

描く場合、あるいは八の字を描く場合もあるが基本となるのは円だ。

「ゆえに、相手の動きに反応さえできれば射撃武器はほぼ当らなり。また、索敵の範囲を最大レベルである⁵に設定しておけば弾丸が認識できた直後に回避に移ることで回避が可能だ。無論、相手のジャミングによる相殺があるので理論どおりには行かないが」

索敵、ジャミングは対応関係にあり、合計五段階に割り振ることで設定する。自身を中心とした円状の範囲にレベルに応じて拡大する。しかし、ジャミングに対して索敵は優先されるので一定程度の視界、レベルゼロであっても有視界のみは常に確保される。

これは、ゲームとしての『GENESIS』の名残なのだろうといわれている。おそらく、互いにジャミングを高レベルに設定して共に視界が完全になくなり、両者が盲目状態で戦闘するという状況をなくすための処置ではないかといわれている。

「しかし、機体の運動のみで完全に回避することは困難な場合もある。そこで登場するのが近接武器だ。刀剣によるバリィ、盾による防御が比較的容易だ。これ以外にも弾丸による相殺、チャフによる妨害などが有効な対処手段といえる」

「えーと、剣で防ぐ方が弾丸による相殺より難しいのではないか？」

勉強に関しては自身がないのか、おどおどしながら三井が質問する。

「いい質問だ。これは簡単な話だが、剣や盾で防ぐのは重要な部分だけをカバーすればいいから、自分は相手の攻撃を受けるだけだ。逆に弾丸は相手の攻撃に対してもある程度は正確に命中させなければ意味がなく能動的な動作が必要となる。どちらが簡単かは、わかるだろう？」

納得したのか、してないのかよくわからない表情で三井が引き下がる。

「まあ、言われても理解しにくいだろうから演習のときにでも実演してやる。見て理解しろ。その方が手っ取り早い。捕捉となるが、弾幕での相殺も有効だが、無駄弾が多く弾丸の再装填までの時間が掛かること、ときたま抜けてくる攻撃に対処しにくくなることがあるのでベストな選択とは言いにくい」

とはいって、どの対処の方法もかなりの訓練が必要であることは言うまでもない。

又、弾丸の再装填さいそうてんについてではゲームのシステムがオートで行つた
に一定以上の速度に変化する事はない。

「ベストな選択ではないのでしたら、ベストな選択はなんなので
しょうか?」

これは、四葉だった。

真面目まじめそうな性格が質問からもにじみ出ている。

「答えなど状況に応じていくらでも変わると言つてしまえばそう
だが、これは些いさか無責任な解答だな。強いて言つならば、相手より
先に制圧して、そもそも攻撃させないことだな」

啞然あぜんとした顔で四葉が引き下がる。

それができれば苦労はしないとでも言いたげだ。

終業のチャイムが鳴り響く。

こつして、明の初めての授業はつつがなく終了した。

3.1.2 Return (後書き)

以降、しばらくこんな感じの更新が続きます。
座学、実習、その他もろもろが進んでいきます。（9月6日一部修正）

3.1.3 Return (前書き)

再び講義。

じせいかへ、いろんな感じですね。

3 1 3 Return

神代鏡の場合。

「神代鏡だ。本日より、授業を受け持つことになつた。以上だ」電研の制服に身を包んだ彼女の姿は、新制服のお披露ひろう日と同時に宣伝の効果も兼ねていた。

「質問タイムとかはないんですか?」

お調子者の学生こと三井が声をあげる。

「ない。しかし、質問は認めよ!」

「じゃあ、先生のスリーサイズは?」

「どうやら、明の忠告は無駄に終わつたようだ。

「ほお。いい度胸だ。今死ぬか、後で死ぬか選ばしてやる!。どちらがいい?」

殺氣だけで相手が殺せるような強烈な念を相手にぶつける鏡。顔は笑っているが、その声は強烈な殺意に満ちていた。

「……あとで死ぬ方でお願いします」

足元にあつたカバンからスタンガンのようなものを出そうとしたいた鏡の姿をみて、学生はそれ以上危険なことはしようとしなかつた。三井は、お調子者ではあつても自殺志願者ではないようだった。た。

「放課後に演習室にこい。戦いの何たるかを体に刻んでやる」

「……死なない程度にお願いします」

「それはお前次第だ。保障しかねる」

「ひいいいいいいつ。てか、そこは約束してくださいよ」

悲鳴が教室に響き渡るがそんなことはどう吹く風と、授業を開始する鏡。

「さて、馬鹿は放つて置いて授業を開始しよう。仮想における物体の運動とその操作に関して説明する。いいな」

「は、はい」

「イエス、サー」

「りょ、了解しました」

「お願ひします」

その迫力にびびってしまったのか、一部のクラスのメンバーは変な解答を返すが、やはりそんなことなど全く気にしない鏡。

「一般的に複数の対象を並列して処理することは困難だ。遠距離武装、特に遠隔操作系の武装が好まれないのは、その扱いの難しさ故といえる。これは、右の手で円を、左の手で三角形を同時に描こうとするときれいに描けないことからも解かるだろ?」

「操作する対象が多くなるだけ、その操作は煩雜はんざを極めることになる。ならばその問題点を解決する策がどういったものか、わかるものはいるか?」

「はい」

優等生然とした態度で四葉が、その場で挙手きょしゅして答える。

「言つてみる」

「アシストプログラムを起動し、対象の処理をグループ化して自己の処理する情報量を減らすこと。訓練による習熟などが考えられます」

「悪くはない。だが、プログラムによる固定的な動作では対処法が画一的になってしまふ欠点がある。訓練による習熟については、確かにそれで操作する対象をある程度は増やすことが可能になるだろ?が、限度がある。それも大した上昇も見込めないだろ?」

「テストでは、それで正解だったと思うのですけど。何がおかしいんですか?」

姫川が合いの手を入れる。

「私の話の途中だ、できるべく遮るな。それに、悪くはないと言つていて。だが、根本的に自己の処理する情報量を減らすこと。こ

れが、一番の早道だ。複数の対象を操作するのが難しいなら单一の対象にしてしまえばいい。それだけのことだ

「それって、矛盾していませんか？ 複数の対象を操作するのに

单一の対象にするつて」

絶望の淵から復活した三井が聞く。

「そうだな、少々説明が足りなかつたな。ふむ、お前達は普段文章を読む際にどうやってそれをこなしているか説明できるか？」

「えつと、文字を追つて、それを黙読して、頭の中で文を復唱しているというところでしょうか？」

「概ね正解だ。一文字一文字を認識し、単語化し、それらの組み合わせを読み取ることでこれが文章となるわけだ。では、本を早く読むにはどうしたらいいと思つ？」

「文字を早く追えばいいのでしょうか」

「斜め読みをする

と三井。

「単語を拾い読みする」

次いで、姫川が続く。

「根本的な勘違いをしているな。もつと効率的なやり方があるだろう。ページ毎の文章を一枚の絵として認識すればすればいい。そうすれば、君達が認識するべきものは何百もの文字ではなく、たった一枚の絵に変わる。ページ」と「何十秒と掛かっていた時間は、一秒かそこらに短縮される」

「要するに、速読のメカニズムの応用ですか」

無駄に眼鏡を押し上げ、静かに答える四葉。

「なかなか察しがいい人もいるみたいね。複数の対象を同時に操作使用とするのではなく、一枚の絵が切り替わつているようなイメージで操作をすれば、結果的には同じ効果が得られるというわけ。どちらが簡単なのかは言つまでもないでしょう」

右手と左手で別のことをすると意識するよりは、現実の自分がどう動いているかをイメージする方が簡単なのは言つまでもない。無

論、実際にそれだけで何とかなるほど楽なものではないのだが、イメージという思考が直接的に結果として働く仮想空間ではそれで十分だった。

「すげえ、一年以上聞いてきてわざぱりだつた座学が一時間で理解できたぞ。あのクソ教師どんだけほんこつなんだよ」

「あの無能は、まだいたのか。って、一年しか経つてないか」

「無能って、教師的にはまずい台詞な気がしますが、……」

さりげなく白百合が突っ込む。

「事実だろう。どうせ運動に対し、適切な物理エネルギーが伝わるようルーチン化した運動をどうたらとか意味不明な内容を永遠と続けていたんだろう」

「まあ、その通りなんだけどさ」

おじけるように三井が言つ。

「とりあえず、ポンコツが誰を指しているか伏せておけば問題ない。ここまで質問があるものはいるか？」

「スリーサイズをお願いします」

さりげなく、質問する三井。

「ここまでくるといつそ清々しい。

「カップがFで上から96……、しまった、条件反射的に回答してしまつた」

鏡が顔を真っ赤にして口を覆つが、既に遅い。

一部の男子生徒たちが大いに盛り上がり、女子生徒たちは可愛いなどとはやし立てる。

「そうか、男子諸君は死にたいらしいな。四葉以外全員で、放課後に演習室にこい。まとめて相手をしてやる」

どす黒い殺氣をみなぎらせ、不気味に目を輝かせて鏡が不敵に笑う。

その笑顔は本来、笑うという行為が攻撃的な行為であることを強く感じさせた。女子生徒たちは自分達が対象から外れたことに安堵している。

「ちよ、なんで四葉以外なんすか！不公平だ」

恐怖に一瞬たじろぐが、一方的な言い方に至る所から不平不満が噴出する。

「ただ単に先約があるならそちらを優先させた方がいいと思つただけだ。新城先生と決闘するのだつ？」

「はい」

静かに四葉が答える。

「とりあえず、私の方に来てもあちらに行つても同じ結果になるだろう。不満があるものは、あちらに行つても構わないぞ。ただし、そちらの方が楽だとは思わないことだ」

「それは、一体どういうことですか？」

ふと、疑問を口にする四葉。

「演習室のレコードは全て学生時代のあいつものだからな。同じ水準を要求されるとは言わないが、かなりハードなものになるだろう」

沈黙する教室。

「あれって、デフォルトで設定されていてるスコアじゃなかつたんだ。全部同じ名前だつたから気になつた」

呆けたように姫川が口を開く。

「どうやら、とんでもない人に喧嘩けんかを売つてしまつたようだ」

武者震いむしゃぶるなのか、軽く体を震わせる四葉。

明本人はそれほど自覚していないが、学生時代から彼はそれなりに有名な人物だつた。電腦技術研究所の所長でもある、新城大地の息子であることや、実技の実力がトップだつたこともあり他の学年まで名前が知れていった。

「まあ、せいぜい瞬殺されないよつて注意しり。トラウマになる

から

『強いて言つならば、相手より先に制圧して、そもそも攻撃させないことだな』という明の発言が、彼の中で急に現実味を帯びてくる。

「さて、そろそろ時間のようだ。理解しにくかった部分は実践で理解してもらひことにする」

そのタイミングを見計らつたかのよひに、終業のチャイムが鳴り響く。

「それでは、放課後に会おひ。男子諸君」

死刑宣告にも等しいその言葉は、教室に絶叫をもたらしたのだつた。

3.1.3 Return (後書き)

ついあえず、先日に続いて更新。（9月6日一部修正）

3 1 4 Return (前書き)

座学パート3。

今回少しあやっこ内容かもしません。

3 1 4 Return

天宮水月の場合。

「本日より、皆さんに一部の科目を教えることになりました、天宮水月です。私自身、宗光学院を卒業して間もないのに、教える事以上に皆さんから教えられることが多いと思います。初めての事ばかりですから、わからないと思つたらどんどん質問してくださいね」
無難ないさつを済ませる水月。神代の前例があるので、若干おとなしくなっているがそこは若い学生。質問していいとなれば行動が早かつた。

「天宮先生、神代先生、新城先生の三人は、電腦技術研究所のポスターになつていましたがどのようなご関係で?」

これはパバラツチ姫川からの質問。

「学院生時代からの友達ですね。あのポスター、鏡と明の二人はすごく格好良く映つていたから取りなおして欲しかったなあ」と平治君も友達だよ、と慌てて付け足す水月。

「……無難な解答ですね」

ぼそりとつぶやく白百合。

しかし、その言葉は笑顔の水月には全く届いていない。

「それでは、最近になつていきなり電研に新制服が導入された経緯について何かご存知でしょうか?」

「単純に宗光学院生のためのPR目的、それとあとは新城大佐の趣味らしいね。男子の制服については、適当に流してデザインして。女子の制服は、その何倍もの時間をかけて打ち合わせして作成したらしいよ」

これ、言つていいのかな。と完全に言い切つたあとに言い出す水

月。

そんな彼女の様子にしばしクラス全体が呆然とする。

「ふふ、新城大佐とは話が合いそうです。」

誰もが沈黙する中、百合だけが目を輝かせて答える。

「ほんと、格好良さと可愛さが上手く融合しているよね。それに、私としても服を選ぶ必要がなくなつてすごく助かっているのです。」

「特に女性は助かりそうですね。ええとそれでは次の質問に移ります。お聞きしたところによると新城先生と神代先生はかなり強いらしいですが、天宮先生と三島先生も同じくらい強いのでしょうか？」

戦闘での実力が彼らと同じか、それ以上のものであれば割と死活問題なので、姫川は三角関係などのスキャンダルより実利を選んだ。

「うーんと。私は一人に助けられたばかりだし、平治君は最近会つてないからよく解からないかな。でも、学院生時代に明、鏡、平治君の三人は、大会に参加したりしてから同じくらいの強さなんじゃないのかな」

姫川は教師を選択するタイプである演習系の授業は、天宮先生にしておけば平気であると確信して足元で小さくガツツポーズをした。三人が同じ程度、そして、助けられたという発言からそこまで推測したのは悪くなかったが、その選択が正しいのは定かではない。

「ところで、天宮先生はどのような講義を担当しているのでしょうか？」

四葉が、根が真面目過ぎるのか本氣で興味があるような様子で講義について質問する。

「そうだった、講義しなくちゃいけないんだ。忘れていたよ、ありがとうね」

手を軽く叩き、水月が満面の笑みで感謝すると、四葉がたじろぐ。

そして、クラスの中で彼女の印象が固まり始める。

「どうやらこの人は、天然という奴なのではなかろうか、と。」

「それでは、仮想空間における現象の発生に関して説明します。」

多少難しいかもしだれませんが頑張つて理解してください。いきますよ！」

そういうて、生徒達に微笑みかける水月。

「が、頑張ります」

「はい」

そんな様子に生徒達は少々緊張きんちょうして応じた。しかし、鏡のときには比べれば穏やかだったのは言つまでもない。

「まず、前提となる基本的な知識として、仮想空間は現実を模倣したものではありますが、イコールではないということは皆さん知っていますね」

「ふああ、そりや、あんな訳のわからない建築物やら、フィールドなんて現実にないしな」

今起きたというような顔で、三井が相槌あいづちを打つ。

「うんうん」

内容が想像していたものよりは簡単で安心したのか、にわかに活気付く教室内。

「それは、もちろんその通りなのですが私が言いたいのは、仮想空間は現実の世界とは異なるロジックで構成されているという点ですね。世界が構成される要素から、物理法則に至るまで全てが違うといつてもいいのかもしれません」

淀よどみのない澄んだ水月の声は、それだけで注意をひきつける。活気付いた教室は、水を打つたように和いでゆく。

「これは、地球複数個分あるといわれる仮想空間すべてに対しても分子レベルで再現することが困難とされるからです。例えば、意識体は内蔵などの器官を保有していますが、そこで再現される肺は呼吸を必要としません。空気がいらないなら、そもそも外見だけ再現すればいいのではないか、という話になりますが、そういうわけにもいかない理由があります」

わかりますか、と繋つなげ教室を見渡す水月。

真っ先に挙手したのは、四葉だつた。

「四葉君でしたね、どうぞ」

「はい。それは、人間が本来あるべき姿をイメージしやすく、また、感覚の誤認をなくすためと言われています」

「正解です。四葉君は賢いですねえ。そもそもが、人間の脳に作用してこれが本物の肉体であると勘違いさせることで操作する意識体には都合がよいといわれています。しかし、この感覚はどこまでいつても錯覚でしかなく、AAに姿を変えても問題は発生しません」「そもそも、呼吸も食事も排泄^{はいせつ}も仮想においては全て不要であり、これが第一の現実であるという感覚を促すための材料以上の存在にはなりえない」

「話を少し戻します。異なるロジックで構成されている、と言いましたが。それではどのよつの論理で構成されているか、といいますと。かなりいい加減なルールで構成されています。例えば物質の落下は、現実において物体はA地点からB地点において無数の点を通過し、重力に引かれ、空気による摩擦を受け、地面に衝突し、衝撃を地面に伝え、均衡が取れた状態になることで停止します」

まくし立てた内容を同時に背面にあるホワイトボードに投影しながら、教壇にペンを落としてみせる水月。ちなみに、ここに投影されている内容はP-I-T経由でダウンロードが可能であり板書しているから、少し待ってくださいなどという言い訳は通用しない。

「しかし、仮想においては忠実にこれを再現する必要性は全くなく。人間が信じてしまう程度に偽装^{きあう}できればそれでいいのです。つまり、何か物体が落下したように見えて、最終的にそれが停止すればいいということです」

「それは、結局どういうことなんでしょうか?」

さっぱりわからない、という表情で三井が質問する。

「早い話が魔法^{まほう}に近いんです。特定の物体に対して、一定の働きかけをすることで、結果を引き出す。仮想で走るうとする我々の意志が、意識体を走らせるということかな」

「そして、そこには複雑な筋肉の運動や空気の摩擦などの障害は

存在せず、結果として動いているように見える現象が発生している。

ということでしょうが天富先生」

捕捉するよつて四葉がつぶやく。

「そういうことです。そして、これがA Aでの戦闘ではより顕著に現れますね。例えば、銃で相手を攻撃したとすると、物体が移動するであろう時間だけ選択の余地がありますが、攻撃が発生した時点で相手へのダメージが先に決定してしまいます」

つまり、向けられた銃口、放たれた弾丸は、途中で回避や相殺とう選択がされない限り、着弾というエフェクトを発生させ、破壊という効果を發揮する。その過程にある、地点間の移動は視覚上に再現されるものでしかなく、現象ではない。

「そして、ほとんどの現象は特定の経過を経る事で結果を引き出すのであって、厳密に計算され現実を模倣^{もはつ}したものではありません。これが現実と仮想の違いです。難しい話でしたけど、理解できましたか？」 須さん

「はい、すばく賢くなつた気分です。先生」とは、三井。

「それこそ錯覚^{さっかく}だらうが、三井」

さりげなく毒を放つ、白百合。

彼女は特定の対象以外には、かなり厳しい性格のようだ。

「皆さん、講義をきちんと静かに聞いていて偉いです。私なんて、ほとんど学校にいませんでしたから尊敬してしまいます」

これは、どう突つ込むべきなのかとクラスが短い沈黙に包まれると、その静寂^{せいじやく}を破るように終業のチャイムが響くのであった。

点数増えるのは、うれしいですね。しかし、その分減った時の衝撃もすさまじいのですが。

新規にお気に入り登録してくれた方ありがとうございます、そして、さようなら。増えた分だけ減つたのでかなりショックです。ゲームシナリオ（ぶつちやけエロゲシナリオ）を想定して書いていたので、序盤の煮え切らない展開が好みが分かれた原因なのかなあ。とりあえず、分歧するまで主人公の立ち位置が不明確なのは仕様ですね。まあ、意図的に中立の立場にしているんですけど。

それと今後は、こんな感じの更新を続けることにしておこうかと思います。頻度が上がる代わりにその量は以前より減りますがご了承ください。

ああ、キャラをもっと魅力的に書ける文章能力が欲しい。（9月6日一部修正）

3 1 5 Return (前書き)

「待たせたな諸君、真打ちの登場だ。主役は最後に帰還するのだ」

3 1 5 Return

三島平治の場合。

「初回から来られないなんて、あいつらしいとこうかなんというか」

「我々の中では、彼が一番教師に向いている人材だと思うのだが」「平治君、優しいもんね」

時は、正午。

学生食堂にて、昼食を取る明、鏡、水月の姿があった。

「あいつが担当していた中東エリアで、何かトラブルがあつたらしいな。それが片付き次第こちらにくるそうだ」

「人事異動なら、適当に引き継いで置けばいいものを」

カップに注がれた有機紅茶を飲みつつ、鏡がいう。

「辛いところをいきなり新人には任せられない、なんて平治君らしいよね」

「損な性格だよ、あいつは」

「彼が受け持っていた講義はどうしたんだい？」

「休暇中の本物の教師を引っ張ってきたそうだ。まあ、外界とはかなり無縁な学校だからな代えもあまりいないのだろう」

「私達が教えているぐらいだし、適当に卒業生引っ張ってくれればいいんじゃないの？」

「一応、電研の任務という扱いでの赴任ふにんだし、機密保持みたいな側面があるんじゃないのか？ 例によつて、俺は何も聞いていないが」

「相変わらず使えない奴だな、君は」「ほっとけ」

「それはそうと、私は一人が演習している間どうすればいいの？」
「暇なら、見学している振りしながら生徒の様子を観察でもして
いろ」

「教職に夢中で本来の任務を忘れないようにな、水月」

苦笑しながら明と鏡が言つ。

「うう、いじめられた。酷いよ一人とも」

うつむき軽く涙目になる、水月。

「明、君は鬼だな」

「さりげなく責任を俺だけに押し付けようとするな。鏡」

「私だけ、のけ者なんて酷いよ」

「つて、そつちかよ。といつても、俺は生徒に決闘申し込まれた
だけだしな。本来、今日は演習なんてないし」

「私も売り言葉に買い言葉で、つい男子全員と演習すると言つて
しまった」

さらに言つながらば、鏡の発言で明の方にも何人か勝手に送り込んでしまった訳だが、そこは伏せておく。

「まあいいや。一人の言つよつに適当に見学してることにするよ

「そうだな、好きな方を見ているとい」

とりあえず、普通に戻った水月みて安心する明。

「それは、一択なの？」

と、水月。

「馬鹿、それは違うだろ！ 水月」

思わず突っ込みを入れる鏡の顔は少し赤い。

「冗談だよ、鏡。ほんと、鏡は可愛いなあ
鏡を抱き寄せ、頭をなでる水月。

「やめろ、馬鹿」

と、口では抵抗するが、本気で振りほどこうとはしない鏡。

そんな様子を明は、どうしたものかと悩ましげな表情で眺めるので
あった。

「全力でいかせてもらいますよ、新城先生」

「決闘ということならば、加減はしない。こちらも全力で迎え撃つ」

放課後、演習室から仮想に没入した明と四葉の一人が向かい合つていた。

転送されたエリアは、アリーナ。

黒木と幾度となく演習を繰り返した明にとつては、少し懐かしい場所への帰還だつた。

「それでは、参ります」

「来い、四葉」

『Translation』（記号変換）

祈るようすに思考し、『GENESIS』を起動する。仮想空間上での肉体である一人の意識体は、その意思を反映し情報を上書きしていく。薄い透明な壁を抜けるような感覚の直後に、肉体は強靭な兵器AAへと姿を変える。

明にとつては、見慣れたビジュアルエフェクトと共にシステムアナウンスが響く。

【DUE】（決闘）

「戦闘開始だ。いざ、尋常に」

「勝負！」

一人の声が重なりオープン回線上で響き渡る。

一人で戦闘するのにはいさか広大すぎるアリーナのグラウンドに、淡い光の羽を広げた青い機械の妖精、フェアリーと漆黒のロードを纏つた黒い魔法使い、メイジがそれぞれの得物を手に対峙した瞬間に明は始動する。

『Double strike』（二重攻撃）

得意の速射を開始と同時にお見舞いする明、これで仕留められた過去のクラスメイトは開始一秒で決着という最高に不名誉な記録を手に入れ、一度と明とは戦闘しなかつた。

「これで終わってくれるなよ」

着弾を示す轟音と白煙。

メイジは、左手に盾を持ちフェアリーの攻撃を防いでいた。メイジは盾に隠れるように半身になり、右手にはミスリルブレイドを構えて、弓を引くように掲げる。

「神代先生から話を聞いていなければ、瞬殺でしたよ」そして、半身の体勢を維持したまま突進してくるメイジに明は、喜びすら感じる。

(それなりにいい人材がいるんだな)

たとえ、事前に話を聞いていたからといって、反応できなければ攻撃は防げない。圧倒的な速度で放たれた弾丸を防いだのは、彼の実力があつてこそ芸当だ。

胸部装甲、おそらくはその先にあるコアユニットを破壊するために放たれたすさまじい速さの突きをわずかに身を反らすことでの回避するフェアリー。細身の機体は、装甲が薄いが回避には適している。盾という死角から懷に潜り込むフェアリーは、右手に剣を、もう片方の手にリニアライフルを構えて、斬りつけ弾丸を放つ。

剣を盾でパリイして、脇からロープを突き抜ける。仕留められなかつたが、そのまま終わらせるつもりのない明は、腰を落とし脚払いで相手の体勢を崩しに掛かる。前のめりに倒れる相手の顔面にブースターを吹かし、ひざをめり込ませる。

手を付き、逆立ちするようにさうにあごに蹴りを打ち込み、そのまま空中に離脱する。

間合いが離れると、メイジの武装がこつ然と消える。メイジの持つアビリティ『倉庫』^{アーカイバ}の効果を利用した、戦闘中の武装変更。四葉はリニアライフルを両手に構え、レーザービームで構成されたロープが彼の前で蜂の群れのように展開される。

「一斉攻撃での即時制圧か。だが、残念だつたな」

銃口が淡く輝き攻撃が放たれる刹那、明はリニアライフルとスマライフルを両手に構え正確にレーザービームを打ち抜いていく。その攻撃は、彼の言葉を体現するかのようであり、四葉が一瞬見と

れてしまつ程に鮮やかだつた。

「……嘘」

そうつぶやいた四葉が我に返つたのは、中空から炎の剣を持つて襲い掛かるフェアリーの姿に戦慄したからであつた。恐怖から反射的に放たれた数十の弾丸は、実体のない蜃気楼を突き抜けるばかりであり、直後に襲い掛かる本体がメイジの身体を両断した。

【THE END（戦闘終了）】

白熱した勝負を見ることができて興奮しているのか、アリーナには割れんばかりの歓声がこだまする。なぜか演習に参加することになつた十名程度の生徒の面倒を見ることはできぬになかつたので、明は見学といふ名目で観戦させていた。

「……負けました」

「だが、いい勝負だつた」

ポリゴンが霧散する一瞬、二人はそんな言葉を交わした。

明は、そんな光景にどこか懐かしさを覚えるのだった。

それから数分後、演習室に駆け込む男の姿があつた。

「待たせたな諸君、真打ちの登場だ。主役は最後に帰還するのだ」息を切らせながら現れたのは、高速で引継ぎを終わらせた三島平治。

しかし、そこでは明が演習を終わらせて刀、縛りをしようとしているところであった。

3 1 5 Return (後書き)

とつあえず、ここまででReturnは終了のつもりです。
ついでだから、一、二章も微調整しました。
ま、例によって内容にはあまり変化がないですが。

3 2 1 Opposition(前書き)

「そういえば、聞いていなかつたが、なぜ俺に決闘を申し込んだんだ？」

「私は先生という強敵を倒して、英雄えいゆうになりたかつたんですよ。先生は、子供の戯言だと思いますか？」

3 2 1 Opposition

3 2 1 Opposition

早朝、教室にて。

新城明と四葉剣二が机越しに向き合っていた。

明の方といえば、自身が仮とはいえた教職なので職務のついでになんとなく、四葉の方は芯から真面目だったようで、誰よりも早く学校に来ていた。正直に暇を潰していたとは、言いづらかったので、とりあえず、明は教師ぶつてみることにした。

「そういえば、聞いていなかつたが、なぜ俺に決闘を申し込んだんだ？」

「私は先生という強敵を倒して、英雄になりましたよ。

先生は、子供の戯言だと思いますか？」

「それが勝利への欲求であるとするなら、なんらおかしくはないだろう。闘争心なくして勝つことはできないし、そういう意意識がないやつは生き残れない」

勝ちたいと願うこと自体は自然なことであるし、四葉の実技演習の成績が優秀なことを考慮すれば手近なところに対戦相手がいなくなってしまったとも考えられた。だとすれば、戦う相手に飢えていて今回の決闘を申し込んだとしても不思議ではなかつた。

「どうなんでしょう。私はただ、勝つて勝者になりたいと思つていただけですから」

「間違つても戦闘狂バトルマニアにだけはなるなよ。早死にすることになる」

「強者に対して勝ちたいと言つ気持ちはありますが、私は戦闘そのものに快楽を求めてはいませんから。きっと、大丈夫だと思います」

「必要であるのならば、戦闘から逃げることも覚えるよつこ。実戦になれば、次の機会など存在しないのだからな」

「肝に銘じておきますよ」

「それと英雄になりたいなら、誰よりも臆病者になるといい。無

様でも生き残り続ければ、自然に英雄になれる」

彼の言う英雄というものが、撃墜王や千人殺しが英雄だというのならば、電研で仕事をするうちに一年もしないでなれるだろう。それが映画や物語で描かれるような、人を導く存在や救世主のようなものでない限りは。

「そういうものなんですか」

「そんなものだ」

尤も自分が臆病者であつたかといわれるど、無謀なことばかりやつていたようにも思え少し内省してしまう明だつた。そして、思い出すと恥ずかしくなり照れているのを隠すかのように頭をかいて視線を左にそらす。

「よし、決めました。実技は、新城先生を選ばせて頂きます」

「とと、ずいぶんと急な話題転換だな。しかし、俺でいいのか？ 実技を教えるなら平治の方が上手いし、ビジュアルで選ぶなら鏡や水月もいるだろう。それに先に言つておくが、俺のやり方はスペルタ方式だ」

「身体に覚えこませる。いいじゃないですか、解かりやすくて。それに恋愛する気がないのにビジュアルで選んだりしませんよ」

「それもそうか。了解した、期待に応えられるよう努力しよう」

そうして、早朝という時間は過ぎていった。

同日、演習室にて。

明を含め、四人の教員と十六人の生徒が集合していた。

「さて、本日は選択した実習生と一緒に授業を受けてもらうことになる。なるべく希望に沿えるようにはしたが、あぶれたものはこちらで相談して勝手に振り分けた。提示された情報を確認した後、担当の教員と合流しろ」

教室前方にいる明が整列した生徒達に指示をする。

名目上は生徒達の学習が主眼となつてゐるが、これは明達の部下に対する統率訓練の側面も併せ持つカリキュラムだった。各教員が

五名のチームを編成し演習の成績を相互に競い合うという形式となつてゐるが、これは実戦を想定した訓練だった。

電研では、単機での哨戒任務なども行われてゐるが、民間のセキユリティ会社では一人から成るツーマンセルや五人程度のパーティを編成して仕事にあたるのが一般的だ。そもそも相手の殲滅を主目的としない以上効率ではなく生存が最優先されるのは自明だ。

「分かれたか。俺の班は、四葉、赤木、白百合、桜井か。今日は、よろしくたのむ」

「よろしくお願ひします」

四人の声が重なる。

四葉と赤木の二人が男子、白百合と桜井は女子の計四人。チームワークはそれなりに期待できそうである。

「演習とはいうが、実際のところはゲーム版『GENESIS』で戦闘を繰り返すだけだ。硬くならないでもらつて構わない」

「具体的には何を訓練するのでしょうか？」

自身の希望が通つたことが嬉しいのか、少し明るい顔の四葉が質問する。

「多対多の状況を想定した訓練だ。これから四人は、それぞれ役割を分担し相互に助け合いながらミッションのクリアを目指してくれ。細部については、今からデータを転送するのでそちらを確認しろ」

PITT経由で四人にデータを転送する。

「なるほど」

静かにうなずく四葉。

「……これは、なんとも
絶句氣味に話す赤木。」

「……面白い」

薄つすらと笑みを浮かべる白百合。

「無理無理、100対4とか絶対無理！」

初めから諦めモードの桜井。

「ちなみにCPSの設定は最強にしているが、なにか問題はあるのか？」

「特にありません」

冷静な様子で四葉と白百合の声が重なる。

「はあ、多数決で覆らないなら諦めるか

「……うう、頑張ります」

何かの悟りでも啓いたのか、残りの一人の意見も同じ方向に収束していく。

「それでは作戦を開始する。各員の健闘を祈る」

明の声を合図にミッションがスタートするのだった。

3 2 1 Opposition(後書き)

非常に個人的な事情で申し訳ないですが、いろいろありまして更新が遅れました。すいません。

そして、一章のあとがきで点数くれと書いてみたら一点がつきました。善意なのか悪意なのか測りかねるところですが、依頼に応えてくれたのは素直にうれしいですね。まだ見ぬ誰かよ、ここでありがとうと言つておきます。まあ、その評価だと続きを読んでくれていふとは思いませんが。感謝の言葉をここに。

3 2 2 Opposition (前書き)

四人が、それは空けてはいけないパンドラの箱だと理解するのに時間が掛からなかつた。

3 2 2 Opposition

3 2 2 Opposition

「まあ、予想通りだが。負けたな」

「そりやあ、負けますよお」

桜井が明の意見に同意する。

「70体辺りから急に敵が強くなつた気がします。もっと精進せ

ねば」

とは、四葉。

「……次は、負けない」

決意表明か何かのつもりなのか、一人つぶやく白百合。

「てか、四葉と白百合に関してはこれ以上強くならなくてもいいと思うんだがな」

二人が好成績なのは周知のことだが、一緒にチームを組んでみて、改めて自分との実力差を思い知らされたのか赤木がぼやく。

「私が不甲斐なかつたから」

「落ち着け四葉、個人技で全てがどうにかなるなら集団に属する意味はない。早い話わざと負けさせるためにあのミッションをやらせた訳だが」

「ひどい」

反射的に口を出したのは桜井。

「新城先生は鬼畜です。……でも、それがいい」

何故か頬を赤らめる白百合。

(白百合、お前は一体何を思つている)

軽く寒気を感じた明だが、気にせず話を進める。

「各人の問題点の洗い出し、連携の必要性を説明するために今回のミッションを選択した。なぜ、お前達が負けたのかといえば、單純に連携が全く取れていらないからだ。個人技に依存してごり押しで

勝ち進もうとした結果がこれだ

ARで戦闘データを参照にしながら、反省会を進めていく明。

「適度に広がって各個撃破といえば聞こえはいいが、実際のところ前たちはただ単にばらばらに戦闘していただけだ。まあ、個人技でも極めればあの程度の敵を無力化することは不可能ではないのは確かだが、限度がある」

数的優位というのは、それだけで一つの暴力となる。個別の戦闘では、不可避の状況や連戦に次ぐ連戦で体力的な限界で敗れることもあるだろう。いくら技を磨いて強くなつても、一人でできることは必ずと限界があるのだ。

「事前に打ち合わせがなかつたことも考えれば、善戦したと言えなくもない。しかし、俺は君達の戦力で十分に無効化できる程度の相手だと思って今回のカードを組み、君達は83体のAAを撃破した段階で制圧された」

一呼吸の空白の後、続ける明。

「これは、相手が段階的に戦術を変えるようにしていた事にも原因がある。先程、四葉が指摘したように70体目辺りから、複数体で隊列を組み、Aの隙をBが、Bの隙をCが補填するようなパターンで攻めるようにしていたからだ」

そして、CPUの操作するAAの途切れ攻撃に対し、即時反応して対処する限界が83体目だったということもである。一人撃破され、二人目、後はなし崩しに全滅に至った。

「攻撃による相手の制圧は少數に対しても有効だが、数で押されると全てを撃破し攻撃を防ぐことは不可能だ。これは実際に体験してもらつた通りだから、理解してもらえたと思つ」

内省しているのか、静かに耳を傾ける四人。

「全員が前衛攻撃型か後方支援型の動きになつてしまつて現状は、攻守のバランスが悪いのは言うまでもない話だ。最低限一人は、防御特化型に回り全体の隙をカバーする必要があるだろう」

厳密な役割分担というわけではないが、前衛攻撃型、防御特化型、

後方支援型、汎用型^{マルチフル}などのAAの基本装備に照らした分類が存在する。

近接武器で攻め立てるエンジェルシリーズは、前衛攻撃型と言われ。武器というよりは盾として多く使用されるソードビットを使用するワイザードは防御特化型に分類され。射撃武器をメインアームとするヘッジホッグは、後方支援型。攻守なしし近接と遠距離をバランスよくこなすタイプ、あるいは前述した以外のタイプは汎用型に該当すると言われている。

しかし、装備のバリエーションや戦い方次第でこんな分類などいくらでも変わってしまうので大した意味を持つものではないが、役割分担することは作業の効率化に繋がり、それは即ち戦力の増強に繋がる。

「このメンバーだと汎用型のメイジを使う四葉か、ワイザードを使用している白百合が防御特化型に転向可能だな。単純な撃墜数を考えれば、白百合が防御に回るのが適任だが、近接武器主体のAAでのスコアなら四葉が適任かな」

汎用機であるがゆえに、防御しながら武装を変更して援護射撃も可能だという考慮すれば彼が一番適任だろう。

「四葉君が攻撃できなくなるのは、戦力的に厳しいと思つですがあのと前置いて、遠慮がちに意見する桜井。

「無論、攻撃にも参加してもらう。戦況を見極めて指示を下し、必要に応じて支援砲撃や防御を行つてもうことになる。そもそも手数が足りないのから役割分担をするのに、それで手数が減つてしまつては意味がないからな」

「解かりました、やつて見せます」

「それでいい。桜井と白百合の二人は、ワイザードとアーケンジエルで前衛を担当、赤木はソルジャーで後方支援を担当しろ。それと形式的なものではあるが四葉が指揮官役となつてこのパーティをまとめろ」

シンプルな役割分担だが、個人技に依存したやり方より効率は格

段に上昇する。

個人での打ち漏らしの減少、不意に飛んでくる流れ弾の防御、状況を見極めての配置変換、前衛の露払いなど利点を挙げればきりがない。即興そつきようの高度な連携は期待できないにしても、それでも十分過ぎる効果が期待できるだろう。

「ところで、戦略的な問題点はわかりましたが、個人個人の戦術的な課題に関してはどのような問題があるのでしょうか？」

笑い出したいのこらえつつ、明は口を開く。

「ふふふふ、良くぞ聞いてくれた。そちらから、聞かれない限り絶対に話してはいけないと神代や三島に言明されていてな。まず、全員動きが遅いな。相手が出現してから一秒以内に発射モーションに入るか回避運動を開始しないと話にならない」

いきなり様子が変化した明に一同、そろって絶句する。

「赤木、お前の射撃は精度が悪すぎる。最低九割は当てられるようになる。三割も外していたら当てる前に殺される。白百合は、強引に前に出過ぎているな、装甲も兼ねてているビットを当てにしているのはいいが、だとするなら四体程度は同時に捌けるようにならないと実戦では使い物にならない」

一気にまくし立てられ、啞然あせんとする四人を尻目にさらに続く講釈。しゃべり

「桜井は反応速度が遅すぎるな。あの程度の相手なら、防御を使うまでもなく全て立体軌道で回避しろ。それから四葉は、武装の変更が丁寧ていねいすぎる。アクション起こしている最中に次の武装を用意して間断なく攻撃が続くようにしな。必要に応じて使い分けるのではなく、攻撃し続ける」

四人が、それは空けてはいけないパンドラの箱だと理解するのに時間は掛からなかった。

3 2 2 Opposition（後書き）

戦闘の描写は、後ほど。ロボの戦闘が見たいんだよ、退屈な脳内設定ばかりみせてんじゃねえという方には、申し訳ない。でも、一章、二章は戦闘ばっかだつたし、配分つて難しいですね。カスタマイズとかの描写もやりたいし、恋愛のパートなんかも完全に無視するわけにはいきませんしね。

3.2.3 Opposition (前書き)

「では、征くといひつか」

「仰せのままに、マイローデ」

朝日を背にして進むマクトにニクムが追従するのだった。

3 2 3 Opposition

3 2 3 Opposition

とある古城の一室にて。

黒のロングコートを着た銀髪の大男と白いワイシャツにジーンズを着たブラウンヘアの小柄な青年が向き合っていた。

「米帝は、仮想の完全掌握を目標としているようだね」

「何せ実質的には犯罪ギルドである我々にまで声が掛かるくらいだ。そうだろう、皇帝陛下」

ウェーブが掛かった銀のロングヘアをなびかせて、ニクム・ツアラーが青年に話しかける。

「陛下はやめてくれ、ニクム」

白いワイシャツを着た青年こと、マクト・ロートシルトが窓際でワインを片手に呆れたような声で苦笑いする。

「あなたは俺の王だ。それに相応しい呼び方がある」

「ああ、好きに呼べと言つたのはこちらだったな。首尾は？」

一転、真剣な表情で問つマクト。

「既に複数の国が統括するエリアを制圧、人材の供給を絶つべく俺の部下が動いている」

「面白いことになつてきたな。ゲーム自体の進行はどこまで行つている？」

「あと数階層といつどこまで着ている。最後に、あのクソ野郎を見つけ出して始末するだけという段階だ」

「問題は、彼がどの程度実権を握っているかどうかだね。AIも含めた全てのコントロールを奪われたらこちらに勝ち目はない」

「だが、『GENESIS』を利用した戦闘なら勝ち目は十分にあるはずだ。来るべき決戦のための『黒の旅団』というギルドだろ

う

「終末は、まだ先だよ。『白の教団』という障害もある、すぐに結果は出ないだろう」

「俺は、何年も待つてきた。あいつらに復讐^{ふくしゅう}するためだけに生きてきた。あんたもそうなんだろう?」

「なればこそ、焦つてはいけないんだークム。年単位で費やした時間を絶対に無駄にしたくはないからね。完璧に完全に叩き潰して、あいつが創ったこの世界ごと吹き飛ばしてやる」

マクトの冷静さの奥には、抑え切れない狂気の炎が見え隠れしていた。

「ぐぐ、米帝もとんだ怪物を腹の中に入れちまつたな。我々を御し切れるつもりなのかね」

「自分達が戦う前の当て馬くらいに考えているのだろう? 今頃は、漁夫の利を得ようと精々一枚舌三枚舌のピエロを演じているころだろ? うそ」

「最後には現実の武力がものをいうと信じているんだろうが、そちらも既にこちらが掌握しつつあるといつのにな」

基本的には裏金の流通経路としての機能を持つ仮想は、広いエリアを統括すればするだけ莫大な利益を手に入れることができ。そして、仮想を利用し不正に手を染める企業の実態を掴むことも容易い。幾億もの篡奪^{さんだつ}行為で稼いだ膨大^{ぼうだい}な不正マネーを背景に『黒の旅団』は米帝の軍需産業を少しずつ、しかし、確実に侵食していった。

「蛇の道は蛇^{じや}というが、我々を利用するつもりが我々に食われることになるとは考えてもいなかつたのだろうね。とはいって、完全に管理された社会などいはずれは崩壊する運命だったのかもしれないが」「人が創ったアルゴリズムが人を管理する。まったく、ペットに飼われる主人ほど滑稽な存在はないだろうに。あはははははは」

「飼われていることに気が付きさえしなければ、案外幸せなものさ。飼育されているブタが、自分の境遇を不幸だと思つては思わないね。そんなものは、人間側からの勝手な想像の押し付けに過ぎないんだから」

「実際、野生で生きているよりも楽に生活ができる」とは間違ひではないしな」

「それに、飼育されている状態と言つのは彼らにとっては適切に進化した結果なのかも知れないしね。野生で増えるよりも人間に飼育されている現状の方がはるかに効率よく種族を繁栄させているのだから」

「案外、家畜にそれでいるのは飼育を義務付けられた人間の方なのがもしかないな。卵と鶏、あるいは、ウロボロスのような話だ」

「風が吹けば桶屋おけやが儲かる、我々も行為を別の側面から見てそれを肯定しただけの集団さ。ここで行われる戦闘は正しい権利であり、手に入れたものは自分のもの。倫理なんて不明確なものではなく、
事実を受け入れただけだ」

略奪りやくだつも殺人も仮想では肯定されうるものであり、感情や倫理で行動を否定する『白の教団』の方が異物であるという論理。ルールや戒律があるから悪と断じられる行為も、仮想においては否定される材料がないのだから現実のルールを持ち込む方がおかしいと言つ話だ。

「まあ、正しいのか間違つてているのかなんて、本人が決めればいいことだ。俺は、目的さえ達成できればあとはどうでもいい」

「君は、そうだったね」

クスリと笑い、窓辺にグラスを置く。

「では、征くとしようか」

「仰せのままに、マイロード」

朝日を背に進むマクトに一クムが追従するのだった。

3 2 3 Opposition(後書き)

別キャラにフォーカスしてみた。まあ、伏線みたいなものです。
てか、この作品そんなんだけなんんですけど。比較的ぬるいのだと、
黒木愛がAIとか。細かいやつ言い出すときりがないんですけどね。
……まあ、だから設定資料集でセルフネタバレやっているわけです
が。

3 2 4 Opposition（前書き）

「対立していくるなら、正面から叩き潰せ」

「了解！」

四人の声がぴつたりと重なって響く。スバルタな訓練を共に乗り越えた影響か、奇妙な連帯感が生まれていた。

3 2 4 Opposition

3 2 4 Opposition

放課後、宗光学院にて。

夕日に照らされた教室で四葉剣三がA.Rを利用してメールチェックをしていた。

「了解しました、と」

ふう、と溜め息をつきながら四葉がP.I.T 経由のメールを閉じる。
(厄介なことになつた)

それが自身に与えられた仕事であるのならば、どのようなものであつても実行するという覚悟はしていたつもりであった。そもそも、そんな覚悟すらなしに来的には前線に立つことを要求される宗光学院に入学する人はほとんどいない。

最先端技術の仕事と言えば聞こえがいいが、やつて居ることはといえばゴロツキの掃除や傭兵紛いの仕事だ。報酬はそこらの一流企業などの比ではないが命懸けの仕事であることを考慮すれば高給取りというほどのものでもない。

彼のように学生の内から依頼を受けて仕事をすることは珍しいことではなく。金銭的に問題を抱える学生が宗光学院に入学した直後に雇われの用心棒をすることや自主的に民間人の護衛に就くことはよくある。宗光学院は教育機関ではあるが、電研では少しでも経験を積んだ優秀な人材が欲しいこともあり、黙認されている行為である。

訳の分からない『海賊』崩れの企業に頼るよりも宗光学院のネームバリューを持ち教育や訓練を受けている学生の方が信頼されていりし、実力的にも上の学生が多いのも事実だ。無論、民間企業全てが粗悪な訳ではないが、仕事の量に対し人材が不足しているのが現実だった。

「まあ、何とかならなくとも何とかするしかないのですが。仕方ない、私のポケットマネーを切り崩しても間に合わせるとしますか」

そういうて割り切ると演習室を目指す四葉だった。

「さて、我々の目下の目標は三島先生、神代先生、天宮先生のそれぞれが受け持つチームの打倒にある。対戦相手はまだ確定していないが、事前に対策を立てて置こうと思う」

現実に対し追加の視覚情報を付加するARの機能である、セカンドサイト越しにARを確認しつつ明が説明を始める。

「基本的な戦術や個人技に関してはこれまで仕込んできたことをやつてくれれば構わない。しかし、それだけで確実に勝てるとは言いい切れないでの敵の動きを想定した訓練を検討することにした」

そんな明のレクチャーを四葉、赤木、桜井、白百合の四人が傾聴する。ちなみに演習室は複数個があるので各自情報が流失しないようチーム毎に違う部屋を利用してのブリーフィングをする事になつていた。

「まずは三島先生の率いるチームだが、おそらく生存を優先とした隠蔽からの奇襲特化型の作戦を取つてくると思われる。透過迷彩スティルス^{スティルス}を利用した狙撃戦術、陽動から地雷源への誘導、待ち伏せからの十字砲火^{ロスマニア}が考えられる」

それぞれの戦術の画像を添付した資料をAR越しに表示しつつ、説明を進める。

「いざれにしても待ちに特化した作戦で自分から攻めてくる可能性は薄いだろう。そして、特定のポイントに踏み込まなければ脅威にはなりえない。個別での戦闘になれば、間違いなく勝てると断言できる。それだけの訓練をこなしてきた」

あれから、幾度となく繰り返してきた戦闘演習で彼らは、反応速度、回避技術、防御技術、射撃精度、全てが学生の水準を超えていた。同様の訓練をしていない限りは、遅れを取るとは明には思えな

かつた。

「基本的に、全滅するまで戦闘は行われることになつていて。例外となるのは、突発的な事故や相手が降参をしてきた場合、相手が戦闘エリアから離脱した場合だ。いかにして効率よく破壊するかについてはこれ以上教えることはない、相手の戦術についても連携を乱さなければ対処可能だと考えている」

一呼吸して、強く言い放つ。

「対立してくるなら、正面から叩き潰せ」

「「「ヤ了解！」」

四人の声がぴつたりと重なつて響く。スバルタな訓練を共に乗り越えた影響か、奇妙な連帯感が生まれていた。

「ふう、次に神代先生のチームについてだ。まあ、あいつが何をやつているのはあまり想像したくはないが、おそらく俺と同じような指導法を相当に苛烈かれつに実践しているのだろう」

ここ数日、彼女が指導する生徒たちは何かに憑依ひょういされたかのようであつた。訓練された獵犬のように彼女の指示に的確に応え、従順な犬のように服従する。気の毒な話だが、よく訓練された軍人と言うよりはそのような表現の方があつていた。

「個人技については、お前達と同等程度かそれ以上に訓練されているだろう。気を抜けば一瞬で破壊されることを覚悟しておけ。戦略プランについては、戦力を分散した各個撃破をしてくるかと思われる」

個別の四体、二体毎の連携、一体と三体の組み合わせなどのパターンが役割に応じて動くと言うスタンダートな戦略。しかし、フィールドを移動しつつ陣形や布陣を変更していくことを明は想定していた。

「深追いはするな、複合的な戦術で先行する機体が挟み撃ちにされることがあるだろう。常に一人はセットになるように心がけ、相互に仲間を支援しろ。先行してくる相手に対して数の優位で個別に撃破するように動け」

移動しながら攻守を切り替え、全員がゼネラリストとして機能するハイレベルな連携であるはずだが、幽鬼のような生徒達の様子をみていると完璧にこなしてくるだろう。パブロフの犬よろしく、身体に刻み込まれたのだと明は推察^{すいさつ}していた。

「さて、最後に天宮先生のチームについてだな。おそらく、こちらの攻撃を防御しつつ陣形を変更、相手の一部を包囲して撃破するというような作戦で動いてくると考えられる。個別での戦闘に持ち込めれば負けることは無いと思われるが、連携重視で動いてくるだろ?」「うう」

「つまり、いかにして連携を崩すかが重要になつてくる。ということですか?」

四葉が軽く笑みを浮かべ質問をはさむ。

「その通りだ、四葉。役割を固定化した連携訓練で、その技術だけは高いだろうが個別の技術までは完成されていない。防御主体の連携は、個人の能力の低さを隠すためのやかしでしかない」

「戦略さえ突破できれば、なし崩しに勝てそうだ」

期待に満ちた目で強気に断言する赤木。

「仕掛けてくる瞬間を逆に狙い撃ちにして仕留める。というところでしょうか?」「うう」と、不敵に微笑む白百合。

「そんなところだ。まともにやり合つても防御主体で動かれれば長期戦は必至。その場合、先に隙を作るのは攻め手の側であるからだ。なら逆に攻めを陽動として相手に攻撃させそこをカウンターする」

「そうは言いますが、全て新城先生の想像ですよね? 情報が相互に秘匿されていますし」

おつかなびつくりしつつ手を上げて、桜井が質問する。クラスの内部で情報統制がしかれている訳ではないが、勝負の前に進んで自分の情報を提供する輩はいなかつた。教師の性格が反映されているのか偽の情報を流す作戦をしているチームもない。

「なんだかんだであいつらとは付き合いが長い、大きくは外れない」と思うぞ。それにあくまでも留意しておく程度に知っておけばいいことだ。当れば儲け物、外れてもそれが実戦では当然のことだ

「相手の情報が筒抜けになつていてることなんて、例外もいいところですからね」

とは、四葉。

「だが、何かに特化することはそれだけで武器になる。それは、あいつらもよく知っているはずだ。なら、下手に何でもできるよう仕込んだりはしない。自身が一番得意な方向で特化するように訓練しているはずだ。わかっていても対処できるかは、お前達次第だ」

「違ひないです」

四葉が小さく答え、他の三人は首肯する。

「あとは、本番で結果を出すのみだ。あえて、命令をせてもううぞ」

拳を心臓に当てて一息して明は声を張り上げる。

「必ず勝て」

「了解！」

再度、四人の声がぴつたりと重なつて響くのだった。

3 2 4 Opposition（後書き）

……一休ためしに口ボ描いてみた。超疲れた。全部描くのは無理だと思った。きちんと仕上げることができたら設定資料の方にもで載せたいと考えてますがいつになるやら。キャラも下書きくらいはしてみたが、文章書いてるだけで清書するまで手が回らない。

3 2 5 Opposition(前書き)

「敵が攻撃する瞬間が最大の好機だ、赤木。今だ」

四葉がここで逆転のカードを切る。

吹き荒れる風、重力、熱や磁気による乱れを全てアシストプログラムで演算しつくした赤木のソルジャーがビルの屋上から敵に照準^{レディクル}を重ねる。

3 2 5 Opposition

3 2 5 Opposition

演習室にて、列になつた講義用テーブル越しに明と平治が対面していた。

「一回戦の相手は、平治のチームか」

「男女別になつたな。今回は、俺のチームが勝たせてもううぞ」

「生憎と俺のチームは強いぞ」

済ました顔で断言する明。

「攻めるだけが能ではないさ。個人技も一つの強さだが、チームでの戦闘であるならそれなりの戦い方がある」

そんな挑発するような言動もどこ吹く風と受け流す平治。

「はあ、どうやらお互い相手の戦闘方式は予想通りみたいだな」

「万全の対策はしてある。お前と同じ実力の学生が四人いない限り負けないはずさ」

元チームメイトだけあって、互いの行動パターンや性格は熟知していた。そして、おそらく行つてくるであろう戦術や戦略、訓練方式には検討がついていた。

「それは、こちらも同じだよ。だが、今の俺と同じとは言えないが昔の俺と同じくらいには鍛えてやつたつもりぞ」

「それでも、勝つのは俺のチームだ」

「結果は、学生達が示してくれるさ。そうだね、平治?」

「できれば、俺達も参加したかったな」

残念そうに語る平治。

「俺達が学生を全滅させてもなんにもならないだろ」

「いい経験じゃないか。とはいって、俺達はもう見守ることしかできないか」

「そういうことだ。静かに試合を観戦しようじゃないか」

対面する一人は静かに思考し、視界を仮想へと移すのだった。

「透過迷彩か。座標は割れているが罠でしょうか」「かといって放置もできないでしょ」

ツーマンセルの形を取つた四葉と白百合のコンビが先行する。戦闘フィールドに選ばれた曇り空の『廃墟』にて一体のAAが地上付近を並走する。近代的なビルディングが乱立する『摩天楼』のフィールドが爆撃を受けたような状態のフィールドである。

「敵はソルジャーが三体、ヘッジホッグが一体。スタンダートな構成ですね」

「そうね、誰かが先行して仕留めないと」

「君の技術に期待しよう」

「そこは、男であるあなたが進んで行く所ではないの?」

「レディファーストで」

「口の減らない奴。……背中、任せるわよ」

「粗いを外す程、射撃は下手ではないつもりです」

チーム用の秘匿回線を利用してつつ加速するメイジとウイザードの二体。目標は、廃墟に潜むソルジャー一體。遮へい物も多く、到達までに時間を掛けているために既に地雷原と化していることだろう。だが、相手が待ちの戦術を選択する以上時間を掛ければ掛けるほど状況は彼らに不利に働くとわかっている。自ら積極的に攻めないと言う選択肢は存在しなかつた。

「接敵まで十秒弱、援護して」

「了解しました。一部を建物に当てますので、煙に乗じて仕掛けしてください」

『倉庫』からカチューシャと呼ばれる多連発ロケット砲を取り出し、メイジが援護射撃の構えするべく構える。

「仕掛けるわ」

その声を合図に爆撃染みたミサイルの雨がソルジャーの近辺に降り注ぐ。援護射撃に合せてウイザードは大剣を引き抜き、敵に向か

い加速する。攻撃がないのは、自身の位置を特定されることを恐れているのか、防御に専念しているのかは定かではない。

予想通り地雷原だった、ソルジャーの周辺部が爆撃を受けて派手に爆発する。火炎の中を一直線にウイザードがロープをはためかせながら剣を振りかぶりソルジャーに斬りかかる。目標に到達する直前、白百合の視界に映つたのは三方向からの火線、獲物を仕留めるべく眼前で煌めく銃口のフラッシュマズル。

（やはり、こいつは囮。^{おどり}それでも）

そのまま加速して相打ち覚悟で仕留める選択は、今の彼女にはなかつた。どんな状況でも自身が生存するべく思考するように何度も教えられたからだ。その先にあるのは実戦を想定した思考、自身が死んでもゲームのスコアを上げる方向で考えるのは愚か者だった。

彼女は即座に思考を切り替えてロープを自身の前面に展開、コアユニットを守るべく大剣で守りを固める。ギリギリで間に合つた防御は、四人がかりの攻撃にさらされるが火線の大半は彼女の眼前を通り過ぎる。

（ふう。あのまま突っ込んでいたら死んでいましたね）

「座標特定。素晴らしい戦果です白百合さん」

メイジが展開した数十ものビットの砲火が駆り立てるようにひし形状に展開した左右の二体に向かう。回避するべく二体は散らばるが、回避した直後の位置に向かい一條の光が走り抜けて行く。

見えざる砲台と化した赤木のソルジャーからの狙撃に右の一体が被弾する。直撃だけは避けたのか、ダメージはあるものの射程から抜けるべく移動を続ける。しかし、破損部からの炎上やスパークで可視化された機体を桜井のアーケンジエルが両断する。

敵の陣形は、ひし形は逆三角形となり前衛の二人が戦力を集中しつつ、砲台であるメイジとソルジャーは両翼に展開する。不可視の相手と切り合うのは分が悪いかと思ったが、桜井が相手をしている間にウイザードのソードビットが敵を包囲して問答無用でこれを撃破。

味方もろとも撃破することを避け、この間の援護はなかつた。しかし、それは次なる攻撃への布石でしかなく、四人たちに向かい多弾頭ミサイル、ガトリングガンの火線が降り注ぎその場で釘付けにされる。

ヘッジホッグからの攻撃で前衛の二人は、盾で攻撃を防ぐが身動きが取れない。この時点では彼女達の側面に移動していたソルジャーによる射撃でアークエンジェルが撃破される。しかし、敵の攻撃を搔い潜りつつ武装を開いていたメイジのビットと二丁拳銃による一斉射撃で蜂の巣にされる。不運なことに一直線状に並んでしまったメイジとウイザードは次の攻撃を交わすことはできなかつた。

ヘッジホッグの切り札ともいえる、荷電粒子砲による敵の掃討。フィールドに存在する障害を融解させながら光の奔流^{ほんりゅう}が薄闇を照らしていく。何重にも盾を開いてこれを何とか防ごうとする白百合だが、一枚、一枚と盾が光に融けていく。瞬時に盾を取り出したメイジがその後ろに並ぶ。

「敵が攻撃する瞬間が最大の好機だ、赤木。今だ」
四葉がここで逆転のカードを切る。

吹き荒れる風、重力、熱や磁気による乱れを全てアシストプログラムで演算しつくした赤木のソルジャーがビルの屋上から敵に照準^{レディックル}を重ねる。

「俺達の勝利だ」

彼の思考に応え、ソルジャーがトリガーを引く。弾丸は音速を超えて敵へと向かい、その装甲を食い破り、コアユニットを粉々に破壊したのだった。

3 2 5 Opposition (後書き)

更新遅れてしません。なんか、風邪ひいてました。ぐは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8801t/>

ROG(real online game)

2011年10月7日20時27分発行